

今宿バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査

第 4 集

1 9 7 6

福岡県教育委員会

今宿バイパス第4集 正 誤 表

頁	行	誤	正
3	26	文化調	文化課
10	14	I区で	II区で
31	4	第103図19	第103図18
59	17	D流路	その流路
74	6	付図第1図	付図第3図
117	17	着物に	着実に
119	13	当村および	当村と
	15	約10cm。	約8cm。
	26	村左方半文	村左方半分
120	3	られる。即ち、	られる。その使用法に二通り が考えられる。即ち、
	4	上方に向けるか	削除
	24	脚	脚
122	22	根本	根元
124	20	種木	垂木
125	4	丸太の面その	丸太その
	13	柄を	柄を
	14	長方形であり、右端	長方形であり、左端において は断面37×23mm、長さ30mmで あり、右端
127	3	残存長661mm。	残存長611mm。
	10	杭	杭
	23~24	他の護岸へよく切れており、	削除
	25	しているか	しているが
130	18	建築部	建築物
	25	63mmの	60mmの
	31	向っている。	向って細くなっており、右端 では60×53mmとなっている。
132	18	らしきひの	らしきもの
133	32~33	① 脚	① ①の7本 脚
135	31	脚	脚
136	9	520mm	523mm
137	3	周より	周囲より
	29	いるる部分	いる部分
138	20	両端とはもに	両端ともに

なお、付図第7・8図の縮尺は15分の1である。

今宿バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

福岡市西区大字拾六町所在湧納遺跡の調査

第 4 集

1 9 7 6

福岡県教育委員会

序

湯納遺跡の発掘調査は、1971年から73年にかけて実施いたしました。ここによ
うやく遺構・資料編を出版することとなりました。

発掘調査にあたって九州歴史資料館々長鏡山猛先生はじめ湯納遺跡発掘調査指
導委員をおひきうけ頂いた16名の先生方にたいへんお世話になりました。

また、その第8次調査で発見された建築材については、愛知工業大学教授浅野
清先生はじめ、たくさんの先生方にご指導ご教示を頂きました。おかげをもちま
して貴重な成果を上げることが出来ました。

また一方では、この発掘調査の期間延長など快よく聞きいれてくださった九州
地方建設局の方々、連日の発掘調査にたずさわって頂いた地元の方々に深くお礼
申し上げます。

1976年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. この報告は、1969年・70年・71年度に福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託をうけて実施した一般国道202号線今宿バイパス路線内の埋蔵文化財「扇納遺跡」の調査記録のうちの遺構・資料篇である。

2. この報告書には九州大学農学部青峰重範先生の土壌分析の結果を第2—4—(2)に、九州大学農学部松本勲、林弘也先生の木材分析の結果を第3—4に、九州大学工学部山本輝雄先生の建築部材の調査結果を第3—3—bに掲載させて頂いた。その他の原稿の執筆は、次のとおりである。

第1	栗原和彦
第2—1・2・3・4・5	栗原和彦
第2—2—2	上野精志
第3—1	栗原和彦・上野精志
2	栗原和彦・馬田弘毅
3—a	栗原和彦
5・6	上野精志
第4	栗原和彦

3. 掲載写真のうち発掘調査中に撮影したものは、図版目次に示すとおりであるが遺物写真の撮影は次のとおりである。

土器類・青銅器・漆器	栗原和彦、阿南秀辰
石器類・縄文式土器類・玉類・銭貨	上野精志
建築部材	栗原和彦

4. 実測図の作成は、遺構図については、栗原和彦、柳田康雄、上野精志、馬田弘毅、桜井康治、渡辺和子、木多久守、尾形桂子、伊東登美子、中尾徹、井沢洋一、山本光子があつたが、遺物の実測図については、必要なものは、挿図目次に掲載したが、残りは次のとおりである。

土器類	栗原和彦、馬田弘毅、尾形桂子、伊東登美子、森和代
石器類	上野精志、井沢洋一、佐藤保雄
建築材	山本輝雄、栗原和彦、尾形桂子、伊東登美子、森和代、馬田弘毅

5. 製図については、挿図目次に上げたとおりである。

6. 本報告の編集は、主として栗原和彦・上野精志・木川雅樹が担当し、最終的に栗原が総括した。

本文目次

第1 序	説	1
1.	はじめに	1
2.	位置と環境	5
3.	地区劃の設定	9
4.	発掘調査の経過	9
第2	湯納遺跡の発掘調査	13
1.	はじめに	13
2.	居住地域の調査	13
(1)	遺構の検出状況	13
(2)	竪穴住居跡	15
(3)	竪立柱の建物遺構	18
(4)	井戸	29
(5)	土壇	29
(6)	溝遺構	37
3.	溝遺構の調査	56
4.	水田地域の調査	74
(1)	杭列の調査	74
(2)	湯納遺跡の土壇断面の形態	87
5.	井堰の調査	90
第3	出土遺物	94
1.	土製品	94
2.	木製品	105
3.	建築部材	117
4.	加工木材について	139
5.	石製品	141
6.	その他	156
第4	おわりに	158

図 版 目 次

		本文対照頁
図版 1	湯納遺跡全景 (アジア航測株式会社撮影)	13
図版 2	湯納遺跡全景 第1次調査終了時点	13
図版 3	湯納遺跡 第1次調査の状況	13
図版 4	(1) 十郎川の土堤から湯納遺跡を望む (上野精志撮影)	13
	(2) I区 第1次調査のトレンチ設定状況 (上野撮影)	13
図版 5	(1) II-F 遺構の状況 (栗原和彦撮影)	18
	(2) II-F 遺構の状況 (栗原撮影)	18
図版 6	(1) II-F C2 竪穴住居跡とB7建物 (栗原撮影)	15
	(2) II-F C3 竪穴住居跡 (栗原撮影)	15
図版 7	(上) II-F A1 欄列・B4・B5・B6・B7建物 (栗原撮影)	18
	(右) II-F A2・A3 欄列 (栗原撮影)	18
図版 8	(1) II-A D5 溝、土師器の出土状況 (上野撮影)	37
	(2) II-A D5 溝、土師器出土状況近接 (柳田康雄撮影)	37
図版 9	(1) II-A D5 溝検出状況 (柳田撮影)	37
	(2) II-A D5 溝出土遺物近接 (柳田撮影)	37
図版 10	(1) II-A D5 溝打欠きのある木材 (柳田撮影)	37
	(2) II-A D5 溝木製品の出上状況 (柳田撮影)	37
図版 11	(右) II-A D5 溝と溝右岸の南・北ピット (柳田撮影)	48
	(下) II-A 北ピットの状況	48
図版 12	(1) II-A 南ピットの検出状況 (柳田撮影)	48
	(2) II-A 南ピット近接、左下に竹籠 (柳田撮影)	48
図版 13	(上) I-Z 北半遺構の状況 (上野撮影)	37
	(下) I-Z D5 溝出土の合せ甗 (栗原撮影)	37
図版 14	(上) II区 第2次調査全景 (アジア航測撮影)	13
	(右) II区 第3次調査全景 (アジア航測撮影)	13
図版 15	(上) II-G・H・I 第2次調査全景 (栗原撮影)	13
	(右) II-H D9 溝の弥生式土器の出土状況 (栗原撮影)	50
図版 16	(上) II-G 遺構の検出状況 (栗原撮影)	50
	(右) II-H B9 建物 (栗原撮影)	18
図版 17	(1) II-F・I E6 土坑遺物の出土状況 (栗原撮影)	29

	(2)	II-F・I	E 6土壌とB 8建物 (栗原撮影)	29
図版 18	(上)	II-B・C・D・E	遺構の状況 (上野撮影)	13
	(右)	II-D・E・F	遺構の状況 (上野撮影)	13
図版 19	(1)	II-B・C	遺構の状況 (上野撮影)	13
	(2)	II-B	B 1建物 (上野撮影)	18
図版 20	(上)	II-B	E 3土壌全景 (上野撮影)	29
	(右)	III-U	第6次調査全景 (栗原撮影)	56
図版 21		I-X・Y・Z	第4次調査全景 (アジア航測撮影)	56
図版 22	(1)	I-X・Y・Z	第4次調査全景 (栗原撮影)	56
	(2)	I-Y・Z	D 2・D 5溝の状況 (栗原撮影)	56
図版 23	(右)	I-Y	D 1溝木質の出土状況 (栗原撮影)	56
	(下)	I-Y	D 1溝木製鋤の出土状況 (栗原撮影)	56
図版 24	(1)	I-Y	D 1溝より三本紙の出土状況 (上野撮影)	56
	(2)	I-Y	D 1溝より鋤の出土状況 (上野撮影)	56
図版 25	(1)	I-U・V・Y	D 1溝と杭列 (栗原撮影)	56
	(2)	I-Y	D 1溝内より発見された竹をさした遺構 (栗原撮影)	56
図版 26	(1)	I-X	D 2溝の検出状況 (栗原撮影)	56
	(2)	I-X	D 2溝の木質出土状況 (栗原撮影)	56
図版 27	(右)	I-X	D 2溝出土建築部材 (栗原撮影)	56
	(下)	I-X	D 2左岸出土木製平鋤 (栗原撮影)	56
図版 28	(上)	I-Y・Z	D 2・D 4・D 5・D 6溝の検出状況 (栗原撮影)	58
	(右)	I-Y	D 2溝木質の山土状況 (栗原撮影)	56
図版 29	(1)	I-Y	D 5溝の検出状況1 (栗原撮影)	56
	(2)	I-Y	D 5溝の検出状況2 (栗原撮影)	56
図版 30	(1)	I-Y	D 5溝の検出状況3 (栗原撮影)	56
	(2)	I-Y	D 5溝掘り上り状況、交差しているのはD 6溝 (栗原撮影)	56
図版 31	(右)	I-X・Y	XYトレンチ下層遺構 (栗原撮影)	72
	(下)	I-Y	H 1ドングリの貯蔵穴 (栗原撮影)	72
図版 32	(1)	I-R・S・T・U・V・W	第5次発掘調査全景 (アジア航測撮影)	74
	(2)	I-R・S・T・U・V・W	第5次発掘調査全景 (栗原撮影)	74
図版 33	(1)	I-U・V	杭列平面全景 (アジア航測撮影)	74
	(2)	I-U・V	杭列全景 (栗原撮影)	74
図版 34	(1)	I-U・V	杭列の状況 (栗原撮影)	74

	(2)	I-U・V	杭列近接(栗原撮影).....	74
図版 35	(上)	I-U・V	G5・G6・G7杭列(栗原撮影).....	74
	(右)	I-T	G9・G10杭列(上野撮影).....	74
図版 36	(1)	I-V	D1溝より槽の出土状況(栗原撮影).....	37
	(2)	I-T	E9土壌より木製鉄の出土状況(栗原撮影).....	29
図版 37	(上)	I区	土層調査の為のピットの状況(栗原撮影).....	74
	(右)	I区	土層の状況(栗原撮影).....	74
図版 38	(右)	I区	第4トレンチ発見の杭列(上野撮影).....	74
	(下)	I区	杭列と木製又鉄(上野撮影).....	74
図版 39	(1)	I区	第4トレンチ杭列断面(上野撮影).....	74
	(2)	I区	第4トレンチ杭列断面(上野撮影).....	74
図版 40	(1)	I区	建築部材の出土状況(栗原撮影).....	90, 117
	(2)	I区	建築部材の出土状況(栗原撮影).....	90, 117
図版 41	(1)	I区	建築部材の出土状況(栗原撮影).....	90, 117
	(2)	I区	建築部材近接(栗原撮影).....	90, 117
図版 42	(1)	I区	木製槽と106・102・270・089の建築部材出土状況(栗原撮影).....	90, 117
	(2)	I区	256・261・291の建築部材出土状況(馬山弘穂撮影).....	90, 117
図版 43	(上)	I区	014白と013梯子の出土状況(上野撮影).....	90, 117
	(右)	I区	壁材と思われる積物遺体(栗原撮影).....	90, 117
図版 44	(1)	I区	058・070・053建築部材と臼の出土状況(栗原撮影).....	90, 117
	(2)	I区	058建築部材の出土状況(栗原撮影).....	90, 117
図版 45	(上)	I区	建築部材とりあげ後の状況(栗原撮影).....	90, 117
	(右)	I区	建築部材山土層確認トレンチ(栗原撮影).....	90, 117
図版 46	(上段)	I区	西括張区での建築部材の出土状況(馬田撮影).....	90, 117
	(右)	I区	232・247・235・227などの建築部材(馬田撮影).....	90, 117
	(上)	I区	232・247建築部材の部分(馬田撮影).....	90, 117
図版 47	(上)	I区	293・294杭に固定された267材(栗原撮影).....	90, 117
	(右)	I区	293杭に固定された267材(栗原撮影).....	90, 117
図版 48		II区	出土の土器.....	13
図版 49		F1	井戸出土土器, E6土壌出土弥生式土器.....	13, 29
図版 50		E7	土壌出土土器.....	29
図版 51		E7	土壌出土土器, E8土壌出土弥生式土器.....	29
図版 52		D5	溝出土弥生式土器.....	37

図版 53	D 5 溝出土弥生式土器	37
図版 54	D 5 溝出土壺棺・甕棺・支脚, E 6 溝弥生式土器	37
図版 55	D 5 溝出土土師器その 1	37
図版 56	D 5 溝出土土師器その 2	37
図版 57	D 5 溝出土土師器その 3	37
図版 58	D 5 溝出土土師器その 4	37
図版 59	D 5 溝出土土師器その 5	37
図版 60	南・北ピット山土土師器, D 9 溝出土弥生式土器, E 3 土壇出土弥生式土器	37, 48
図版 61	D 7 溝出土弥生式土器, D 8 溝出土弥生式土器	37
図版 62	D 9 溝出土弥生式土器・D 11 溝出土弥生式土器	56
図版 63	D 11 溝出土弥生式土器・土師器・須恵器, D 5 溝出土弥生式土器	56
図版 64	D 11 溝出土土師器その 1	56
図版 65	D 11 溝出土土師器その 2	56
図版 66	Y 区 D 5 溝山土弥生式土器, D 5 溝山土土師器, D 2 溝山土弥生式土器	56
図版 67	D 2 溝山土土師器・須恵器, D 1 溝山土弥生式土器・土師器	56
図版 68	D 10 溝出土墨書土器, 第 5 次調査出土の弥生式土器	29, 56
図版 69	第 8 次調査出土土師器	90
図版 70	縄文式土器その 1	94
図版 71	縄文式土器その 2	94
図版 72	縄文式土器その 3	94
図版 73	弥生式土器片, ミニチュア土器	94
図版 74	青磁・白磁類	94
図版 75	4 号 (220) 臼とその部分と沖繩の民俗例 (藤井功・馬田撮影)	105
図版 76	建築部材その 1	117
図版 77	建築部材その 2	117
図版 78	建築部材細部その 1	117
図版 79	建築部材細部その 2	117
図版 80	建築部材細部その 3	117
図版 81	建築部材細部その 4	117
図版 82	木材断面顕微鏡写真その 1 (松本島・林弘也撮影)	139
図版 83	木材断面顕微鏡写真その 2 (松本・林鏡影)	139
図版 84	木材断面顕微鏡写真その 3 (松本・林鏡影)	139
図版 85	打製石器類	141

図版 86	打製石鏃	141
図版 87	くぼみ石・石皿	141
図版 88	砥石類	141
図版 89	砥石・敲石類	141
図版 90	石鏃その1	141
図版 91	(1) 石鏃その2	141
	(2) 半球形有孔滑石製品	141
図版 92	石鏃その3	141
図版 93	石匙・磨製石器類	141
図版 94	磨製石斧類	141
図版 95	石斧	141
図版 96	石釘	141
図版 97	(1) 滑石製模造品	141
	(2) 石鏃	141
図版 98	(1) 青銅製鏃先片	156
	(2) 玉類	156
	(3) 漆器片	105
	(4) 銭貨	156

挿 図 目 次

第1図	早良平野周辺遺跡分布図(伊東登美子作図)	6
第2図	湯納遺跡周辺地形図(九州地方建設局原図, 伊東製図)	7
第3図	湯納遺跡地区割図(九州地方建設局原図, 伊東製図)	折込み
第4図	Ⅱ-F Aライン十層断面実測図(伊東製図)	14
第5図	Ⅱ-F 竪穴住居跡位置図(伊東製図)	15
第6図	Ⅱ-E・F C1竪穴住居跡実測図(伊東製図)	折込み
第7図	Ⅱ-F C2竪穴住居跡・B7掘立柱建物実測図(伊東製図)	17
第8図	Ⅱ-F C3竪穴住居跡実測図(伊東製図)	18
第9図	B1・B2・B3・B4・B5・B7掘立柱建物位置図(伊東製図)	19
第10図	Ⅱ-B・C 柱穴掘方内出土弥生式土器実測図(森和代製図)	20
第11図	Ⅱ-H・I 柱穴掘方内山上弥生式土器実測図(森製図)	20
第12図	Ⅱ-B B1掘立柱建物実測図(伊東製図)	21
第13図	Ⅱ-F B5掘立柱建物実測図(伊東製図)	22
第14図	Ⅱ区 土師器・須恵器実測図(森製図)	22
第15図	B6・B8掘立柱建物とA1・A2・A3櫛列位置図(伊東製図)	23
第16図	Ⅱ-F・G・H・I 柱穴掘方内出土土器実測図(森製図)	24
第17図	Ⅱ-F B6掘立柱建物とA1櫛列平面図(伊東製図)	24
第18図	Ⅱ-B・C・F A2・A3櫛列部分図(伊東製図)	25
第19図	Ⅱ-F・G・H・I B8・B9掘立柱建物位置図(伊東製図)	26
第20図	Ⅱ-F F1井戸実測図(伊東製図)	27
第21図	Ⅱ-F F1井戸出土土器実測図(森製図)	27
第22図	I-Z Ⅱ-A・D E1・E2土壌平面図(伊東製図)	28
第23図	Ⅱ区 E3・E4・E5・E6・E7土壌位置図(伊東製図)	30
第24図	I-Z E1土壌実測図(伊東製図)	31
第25図	Ⅱ-B E3土壌実測図(伊東製図)	32
第26図	Ⅱ-B E3土壌出土弥生式土器実測図(森製図)	33
第27図	Ⅱ-G・H E6土壌出土弥生式土器実測図(森製図)	33
第28図	Ⅱ-F・I E7土壌実測図(伊東製図)	34
第29図	Ⅱ-F・I E7土壌出土土器実測図その1(森製図)	35
第30図	Ⅱ-F・I E7土壌出土土器実測図その2(森製図)	36

第31図	II-I	E 8	土壇出土弥生式土器実測図 (森製図)	37
第32図	II-A	D 5	溝平面図 (伊東製図)	38
第33図	II-A	D 5	溝出土弥生式土器実測図その1 (森製図)	39
第34図	II-A	D 5	溝出土弥生式土器実測図その2 (森製図)	40
第35図	II-A	D 5	溝出土弥生式土器実測図その3 (森製図)	41
第36図	II-A	D 5	溝出土弥生式土器実測図その4 (森製図)	42
第37図	II-A	D 5	溝出土壺・甕柄片実測図 (森製図)	42
第38図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その1 (伊東製図)	43
第39図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その2 (伊東製図)	44
第40図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その3 (伊東製図)	45
第41図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その4 (伊東製図)	46
第42図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その5 (伊東製図)	47
第43図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その6 (伊東製図)	48
第44図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その7 (伊東製図)	48
第45図	II-A	D 5	溝出土土師器実測図その8 (伊東製図)	49
第46図	II-A	D 5	溝出土支脚実測図 (森製図)	50
第47図	II-A	南・北ピット	出土土師器実測図 (伊東製図)	50
第48図	II区	D 6・D 7・D 8・D 9	溝土層断面実測図 (伊東製図)	51
第49図	II-B	D 6	溝出土弥生式土器実測図 (森製図)	52
第50図	II-F	D 7	溝出土弥生式土器実測図 (森製図)	53
第51図	II-H	D 8	溝出土弥生式土器実測図 (森製図)	54
第52図	II-H	D 9	溝出土弥生式土器実測図その1 (森製図)	55
第53図	II-H	D 9	溝出土弥生式土器実測図その2 (森製図)	56
第54図	III-U	D11	溝土層断面実測図 (伊東製図)	57
第55図	III-U	D11	溝出土弥生式土器実測図その1 (森製図)	58
第56図	III-U	D11	溝出土弥生式土器実測図その2 (森製図)	59
第57図	III-U	D11	溝出土土師器実測図その1 (伊東製図)	60
第58図	III-U	D11	溝出土土師器実測図その2 (伊東製図)	61
第59図	III-U	D11	溝出土土器実測図 (森製図)	62
第60図	D 1・D 2・D 3・D 4・D 5・D 5'		溝位置図 (伊東製図)	折込み
第61図	I-Y・Z	D 5	溝出土弥生式土器実測図 (森製図)	63
第62図	D 5		溝土層断面実測図 (伊東製図)	64
第63図	I-Y	D 5	溝出土土器実測図 (伊東製図)	65

第64図	D 3・D 4・D 5' 土層断面実測図 (伊東製図)	66
第65図	I—Y・Z D 3 溝出土弥生式土器実測図 (森製図)	67
第66図	I—Y・Z D 3 溝出土須恵器片実測図 (森製図)	67
第67図	D 2 溝土層断面実測図 (伊東製図)	68
第68図	I—Y D 2 溝出土弥生式土器実測図 (森製図)	69
第69図	I—Y D 2 溝出土土器実測図 (森製図)	70
第70図	I—Y D 2 溝出土土師器・須恵器実測図 (森製図)	70
第71図	I—Y D 1 溝土層断面実測図 (伊東製図)	71
第72図	I—Y D 1 溝出土弥生式土器実測図 (森製図)	71
第73図	I—Y D 1 溝上層出土土師器実測図 (森製図)	72
第74図	I—W D 10 溝出土須恵器実測図 (伊東製図)	72
第75図	I—T E 9 土壇出土弥生式土器実測図 (森製図)	73
第76図	I—X・Y H 1・H 2 XY トレンチ縄文時代ピット実測図 (伊東製図)	73
第77図	I—S~Z 弥生式土器実測図 (森製図)	74
第78図	I—S トレンチ土層断面実測図 (伊東製図)	折込み
第79図	I—U・V 杭列平面実測図 (中尾製図)	75
第80図	I—U・V 丸太実測図 (中尾実測・製図)	77
第81図	I—U・V 矢板・割材実測図その1 (中尾実測・製図)	78
第82図	I—U・V 矢板・割材実測図その2 (中尾実測・製図)	79
第83図	I 区 第4 トレンチ杭列平面実測図 (中尾製図)	81
第84図	I 区 第4 トレンチ出土矢板割材実測図 (中尾実測・製図)	82
第85図	I 区 第4 トレンチ丸太実測図その1 (中尾実測・製図)	83
第86図	I 区 第4 トレンチ丸太実測図その2 (中尾実測・製図)	84
第87図	I 区 2 t 北トレンチ土層断面実測図 (伊東製図)	85
第88図	I 区 東トレンチ出土土器実測図 (森製図)	86
第89図	I 区 第8次調査土層断面実測図 (伊東製図)	89
第90図	I 区 第8次調査出土弥生式土器実測図 (森製図)	90
第91図	I 区 第8次調査出土土師器実測図その1 (伊東製図)	91
第92図	I 区 第8次調査出土土師器実測図その2 (伊東製図)	92
第93図	縄文式土器実測図その1 (伊東製図)	95
第94図	縄文式土器実測図その2 (伊東製図)	96
第95図	縄文式土器実測図その3 (伊東製図)	97
第96図	弥生式土器片実測図 (森製図)	98

第97図	ミニチュア土器実測図(森製図)	99
第98図	投弾・紡錘車・土釜実測図(佐藤保雄実測・整図)	100
第99図	大型器台波片実測図(森製図)	101
第100図	青白磁類実測図その1(森製図)	101
第101図	青白磁類実測図その2(森製図)	102
第102図	II-F・I E 7土壌出土瓦片実測図(森製図)	103
第103図	瓦, 叩打文拓影(栗原作成)	104
第104図	木製農具その1(弓場紀知実測, 伊東製図)	106
第105図	木製農具その2(弓場実測, 伊東製図)	107
第106図	木製農具その3(弓場実測, 伊東製図)	108
第107図	木製農具その4(弓場実測, 伊東製図)	折込み
第108図	布巻具(弓場実測, 伊東製図)	109
第109図	木製巾・ヘア(弓場実測, 伊東製図)	109
第110図	木製日用品(弓場実測, 伊東製図)	110
第111図	木製櫛その1(弓場実測, 伊東製図)	折込み
第112図	木製櫛その2(弓場実測, 伊東製図)	111
第113図	竹籠(弓場実測, 伊東製図)	112
第114図	小型木製品(弓場実測, 伊東製図)	112
第115図	用途不明木製品(馬田実測, 伊東製図)	114
第116図	用途不明木製品(弓場実測, 伊東製図)	113
第117図	用途不明木製品(弓場実測, 伊東製図)	折込み
第118図	I区 220(4号)白実測図(馬田実測, 製図)	115
第119図	打製石器実測図(佐藤・井沢製図)	142
第120図	石鍬実測図(佐藤・井沢製図)	143
第121図	くぼみ石・石皿実測図(上野・佐藤・井沢製図)	144
第122図	砥石実測図(佐藤・井沢製図)	145
第123図	砥石・般石実測図(佐藤・井沢製図)	146
第124図	石鍬実測図その1(佐藤・井沢製図)	147
第125図	石鍬実測図その2(佐藤・井沢製図)	148
第126図	石鍬実測図その3(佐藤・井沢製図)	149
第127図	半球形有孔滑石製品実測図(佐藤・井沢製図)	150
第128図	石匙・磨製石器類実測図(佐藤・井沢製図)	151
第129図	磨製石斧類実測図(佐藤・井沢製図)	152

第130図	石斧実測図（佐藤・井沢製図）	153
第131図	石廂丁実測図（佐藤・井沢製図）	154
第132図	滑石製模造品・石鍋実測図（佐藤・井沢製図）	155
第133図	D2 ^o ・D5溝出土玉類実測図（伊東製図）	156

表 目 次

第1表	今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧	1
第2表	今宿バイパス発掘調査の実績一覧	2
第3表	第5次調査出土計測表	80
第4表	第7, 8次調査出土計測表	80
第5表	土層断面の形態	88
第6表	土壌の機械組成および粘土鉱物	88
第7表	日計測表	114

付 図

		本文対照頁
付図第1図	宮ノ前・湯納遺跡位置関係図（伊東登美子製図）	5
付図第2図	湯納遺跡遺構配置図（伊東製図）	13
付図第3図	湯納遺跡第Ⅰ区土層模式図（伊東製図）	56, 76
付図第4図	第5次調査Ⅱ区杭列断面図（中尾徹製図）	74
付図第5図	第7次調査第4トレンチ断面図（中尾製図）	86
付図第6図	湯納遺跡第8次調査出土建築部材出土状況図（伊東製図）	90, 117
付図第7図	建築部材実測図その1（尾形桂子製図）	117
付図第8図	建築部材実測図その2（尾形製図）	117

第 1 序 説

1. はじめに

(1) 今宿バイパスの建設計画とこれまでの発掘調査の経過

福岡市西区大字福重から、糸島郡前原町大字加布里までの間に今宿バイパスの路線建設計画が作成され、計画路線選定のための分布調査が九州地方建設局の依頼により福岡県教育委員会が実施したのは、1968年のことであった。

分布調査の結果をもとに九州地方建設局は、路線の選定を行ったが、なお、いくつかの処理しきれない問題が残った。このため建設局と県教委で協議を行い、1969年から建設局の委託により県教委が「路線決定の資料を得る」目的で発掘調査を実施することとなった。1969年・70年の予備調査の結果、若八幡古墳を残すことなど一部路線の変更はあったが、1970年に福岡市西区大字福重から西区大字今宿字青木までの路線が、さらに1971年に糸島郡前原町大字篠原までの路線が文化庁と建設省の協議により決定をみている。

今日までの今宿バイパス関係の発掘調査の報告は、第1表のとおりである。また発掘調査の進行状況は第2表のとおりである。

なお、1974年からは諸般の事情により発掘調査は今日まで休止している。

第 1 表 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧

No.	副 題	収録した遺跡	報告者	備 考
第1集	福岡市大字拾六町所在の遺跡群	新納遺跡 宮の前道跡E地点 高崎古墳群 大又遺跡	浜田 信也 浜井 仁夫 浜田 副島 邦弘	1969年調査 1970年報告 以後、本文では「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集」を「今宿1」と記す。
第2集	福岡市大字穂永・飯氏所在の遺跡	若八幡古墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡	柳田 康雄 ・浜田・副島 永井 昌文 ・柳田・副島 浜田	1970・71年調査 1971年報告 以後、本文では「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集」を「今宿2」と記す。
第3集	福岡市西区大字拾六町所在の遺跡	高崎古墳群 大又遺跡	栗原 和彦 上野 裕志 上野	1971年調査 1973年報告 以後、本文では「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集」を「今宿3」と記す。

第2章 今般バイパス架橋調査の概観一覽

番 号	造 址 名	所 在 地	調査所要区間		既 架 架 面 積				換 算 面 積	備 考		
			長さ	巾	面積	44年度	45年度	46年度			47年度	48年度
1	運物敷布地	福岡市西区大字拾六町	34	28	520	45			45	0	調査不要	
2	"	"	52	50	2,600	63			63	0	"	
3	送給道筋	"	280	40	11,200	168	1,200	4,612	5,950	0	架橋調査終了	
3'	"	"	30	20	600		450	(300)	450	0	"	
4	宮ノ前溝敷	"	110	40	4,400	400			400	0	消滅	
5	宮崎1,2号沢	"	36	15	540	160			160	0	架橋調査終了	
6	大又池	"	57	20	1,140	300	900		1,200	0	"	
6	萬崎3,4号沢	"	40	15	600	200	249		449	0	"	
7	須恵部敷布地	"	55	20	1,100	27			27	0	調査不要	
8	養生敷布地	"	33	39	1,287					0	消滅	
9	西八幡宮古墳	福岡市西区大字藤永	50	40	2,000	1,100			1,100	0	保存予定、調査不要	
10	岸場池	福岡市西区大字藤氏	70	70	4,900	290			290	2,000		
11	錦原池	"	70	50	3,500	550			550	2,000		
12	糸里池	福岡市大字藤氏～糸島郡福高町福高	3,000	40	12,000		136		136	1,500		
13	古野池	糸島郡福高町大字有田草	150	40	6,000		482		482	0	架橋調査終了	
14	七郎子池	糸島郡福高町大字福西	70	30	2,100		304	630	934	0	"	
15	運物敷布地	"	300	30	9,000			(1,000)	0	4,500		
16	古墳2基	糸島郡福高町	30	30	900					0	跡地変更、調査不要	
17	運物敷布地	"	100	30	3,000				0		"	
連1	"	"	40	30	1,200					1,000		
連2	"	福岡市西区合帯大塚	100	40	4,000				650	650	2,000	
連3	"	" 字草塚	30	40	1,200				500	500	0	架橋調査終了
	計				73,187	1,363	1,940	3,271	5,242	1,600	13,415	12,000

なお、本書の刊行までの関係者は次のとおりである。

発掘調査関係者

1971年

総括	福岡県教育委員会	教育長	吉久勝美	教育次長	森田 實
		教育次長	村上 智	文化課長	岩下光弘
		文化課々長補佐	菅 隆		
庶務会計		文化課庶務係長	姫野 博	文化課主事	中村一世
調査員		文化課々長技術補佐	渡辺正気	文化課調査係長	藤井 功
		文化課技師	栗原和彦	文化課技師	柳田康雄
		文化課技師	上野精志		
調査補助員		福岡大学生	桜井康治	桑田和義	
		慶応大学生	渡辺和子		

1972年

墓納遺跡発掘調査指導

考古学	九州歴史資料館	鏡山 猛	考古学	九州産業大学	森 貞次郎
考古学	福岡教育大学	波多野院三	考古学	九州大学	岡崎 敬
考古学	九州歴史資料館	渡辺 正気	考古学	別府大学	小田富士雄
建築学	九州大学	太田 静六	建築学	九州大学	土田 充義
地質学	西南学院大学	唐木田芳文	地質学	九州大学	鳥山 隆三
木材理学	九州大学	松本 勲	上履学	九州大学	青峰 重範
花粉分析	佐賀大学	西田 民雄	植物学	九州大学	細川 隆英
歴史学	九州大学	田村 圓澄	民俗学	県文化課	筑紫 豊

放射性炭素年代測定 九州大学 坂田 武彦

総括	福岡県教育委員会	教育長	森田 實	教育次長	西村 太郎
		文化課長	古川 善久	文化課々長補佐	菅 隆
		文化課々長技術補佐	藤井 功		
庶務会計		文化課庶務係長 (前任)	姫野 博		
調査員		文化課庶務係長	前田 栄一	文化課主事	師岡 満
		文化課調査係長	松岡 史	文化課技術主査	鶴久 嗣郎
		文化課技術主査	西谷 正	文化課技師	栗原 和彦
調査補助員		文化課技師	上野 精志		
			尾形柱子		
		明治大学生	井沢 洋一	山本 光子	

1973年

壱納遺跡発掘調査指導

考古学	九州歴史資料館	鏡山 猛	考古学	九州産業大学	森 貞次郎
考古学	福岡教育大学	波多野曉三	考古学	九州大学	岡崎 敬
考古学	九州歴史資料館	渡辺 正気	考古学	別府大学	小田富士雄
建築学	九州大学	太田 静六	建築学	九州大学	土田 充義
地質学	九州大学	鳥山 隆三	木材理学	九州大学	松木 易
土壌学	九州大学	青峰 重範	花粉分析	佐賀大学	西田 民雄
植物学	九州大学	細川 隆英	歴史学	九州大学	田村 圓澄
民俗学	県文化課	筑紫 豊	放射性炭素年代測定	九州大学	坂田 武彦

建築部材調査指導

建築史学	国文化財専門委員	浅野 清	建築史学	九州産業大学	野村 孝文
建築史学	奈良国立文化財研究所	沢村 仁	建築史学	奈良国立文化財研究所	細見 啓三
建築史学	九州大学	山本 輝雄			

植物遺体調査指導

植物学	大阪市立大学	粉川 昭平
-----	--------	-------

総 括 福岡県教育委員会

教育長	森田 實	教育次長	西村 太郎
文化課長	森 英俊	文化課々長補佐	今井 岩雄
文化課々長技術補佐	藤井 功	文化課参事補佐	川崎 隆夫

庶務会計

文化課庶務係長	前田 栄一	文化課事務主査	小川浩一郎
---------	-------	---------	-------

調 査 員

文化課主事	師岡 満		
文化課調査係長	松岡 史	文化課技術主査	鶴久 副郎
文化課技師	栗原 和彦	文化課技師	上野 精志
文化課技師	馬田 弘毅		

調査補助員

	尾形 桂子		伊東登美子
明治大学生	井沢 洋一	福岡教育大学生	中尾 徹
福岡大学生	佐藤 保雄		

1974年

総 括 福岡県教育委員会

教育長	森田 實	管理部長	西村 太郎
文化課長	藤井 功	文化課々長補佐	平井 元治
文化課々長参事補佐	川崎 隆夫		

庶務会計

文化課庶務係長	前田 英一	文化課主事	瀧 龍二
---------	-------	-------	------

整理調査員

文化課調査係長	松岡 史	文化課技師	栗原 和彦
文化課技師	上野 精志		

整理補助員

伊東登美子

福岡大学生

佐藤 保雄 森 和代

地元協力者 (1971年～1973年)

緒方左近	柴田六郎	緒方 徳	海津一位	西原義雄	嶋田三右衛門
原 エツ	海津シズエ	緒方チヨエ	清水文代	清水貞子	嶋田みち子
高宮ノブエ	高宮久子	原チヨノ	真鍋恵美子	西原春子	津和崎八重子
緒方君子	高木 衛	柴田シズ子	高原尚子	森みえ子	柴田ヤスノ
能美須賀子	真鍋利雄	能美八重子	石田義美	西原義雄	波平清喜
阿部染子	牟田房子	清水君江	石田宗次	ほか地元の方多数。	

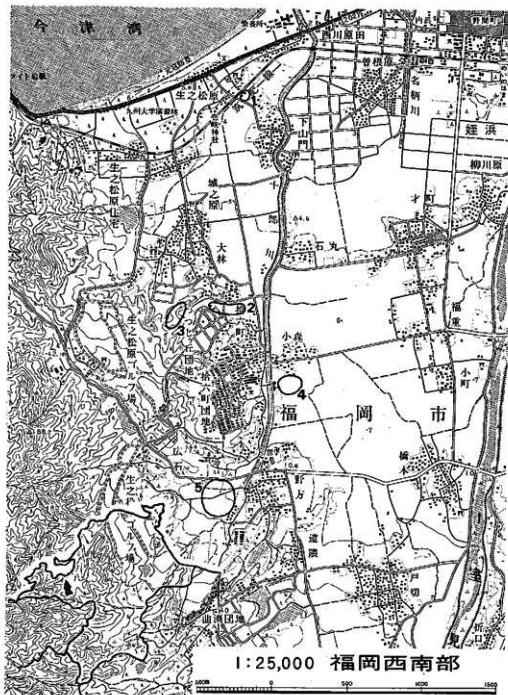
2. 位置と環境

1965年頃から、福岡市郊外の拾六町周辺にもひたひたと開発の波がおしよせ、埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査の数も相当数にのぼっている。このため、この地区の位置と環境についてはすでに記しつくされた感がある。

「福岡市有田古代遺跡発掘調査概報」, 「今宿1」, 「今宿3」, 「宮の前遺跡A～D地点」, 「宮の前遺跡F地点」, 「今山遺跡」, 「野方中原遺跡」, 「下山門遺跡」, 「牟多田遺跡」など枚挙にいとまがない。ために、ここでは湯納遺跡の周辺にかぎっていくつかの遺跡を紹介することと、拾六町での今宿バイパス関係の遺跡相互の位置などについて整理しておきたい。

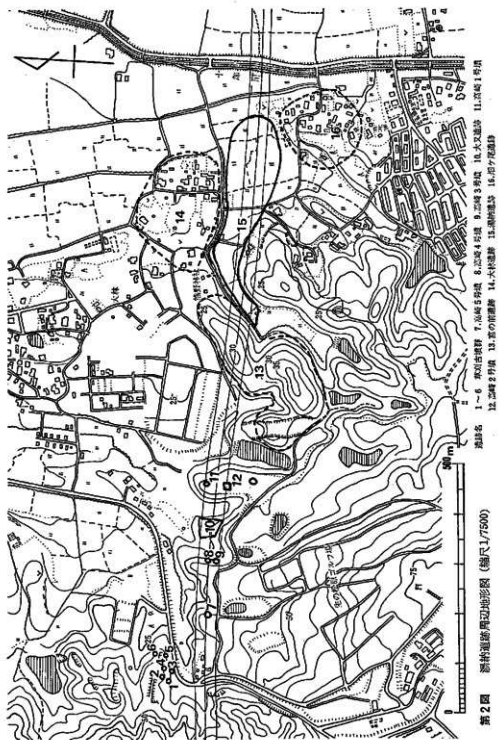
下山門遺跡 1972年に福岡市教育委員会により発掘調査がなされた。遺跡は、現在の生の松原海岸線から400mほど入った地点で標高3mほどの砂丘である。古墳時代から歴史時代にかけての土師器・須恵器類と伴に木製品の出土があった。なお、若干の弥生式土器の発見が報告されているが、同報告中に収録されている福岡市西区経浜新町発見の弥生中期の甕棺墓(標高1.5m)の資料や、西区石丸の遺跡から発見された銅戈などの資料から、弥生時代中期にはすでに今日の海岸線に近い状況にあったと思われる。このことは、宮の前、湯納、中原などより発見されている石鏝から彼らが漁撈にも依存していた事実が海岸線から4～5kmという内陸部の人達までがこのような漁撈を行っていたということになり、水田耕作の生産性の低さを物語っているように思える。

宮の前遺跡 1969～70年にかけて福岡市教育委員会の手によって発掘調査がなされた。湯納遺跡と谷をひとつはさんだ西側にあり、標高30m前後の長さ500m、幅80mほどの舌状丘陵上



第1圖 早良平野周辺遺跡分布圖

1. 下山門跡 2. 湯納遺跡 3. 宮の前遺跡 4. 半多田遺跡 5. 野方中原遺跡



の遺跡である。弥生～古墳時代移行期の墳墓と住居跡が調査されたが、そのうち、特にC地点1号大型石棺墓は、封土をもつなど原始古墳としてとらえられた。湯納遺跡が、宮の前遺跡とは隣接して存在し、丘陵下と丘陵上という立地関係の差異以外に、水田耕作と漁撈という生産活動に依存していたことは、同一族とは言えないまでも、きわめて密接な共同体的な関係にあったであろうことは下条信行氏の言のとおりである。

牟多田遺跡 1973年に福岡市教育委員会によって発掘調査された遺跡である。古墳時代の出土遺物に特に注目すべきものがあるが、興味あるのは、弥生式土器の古いものが少ないのに比較して夜臼式土器の出土量が多い点である。この事実は、湯納遺跡においてもあてはまる。湯納遺跡では、いわゆる板付I式土器が出土せず、夜臼式土器の壺と甕の破片のみである。このことは、両遺跡ともに夜臼式土器を伴った遺構の検出こそないが、夜臼式土器の単純遺跡の存在をこの地域で暗示しているかの感がある。

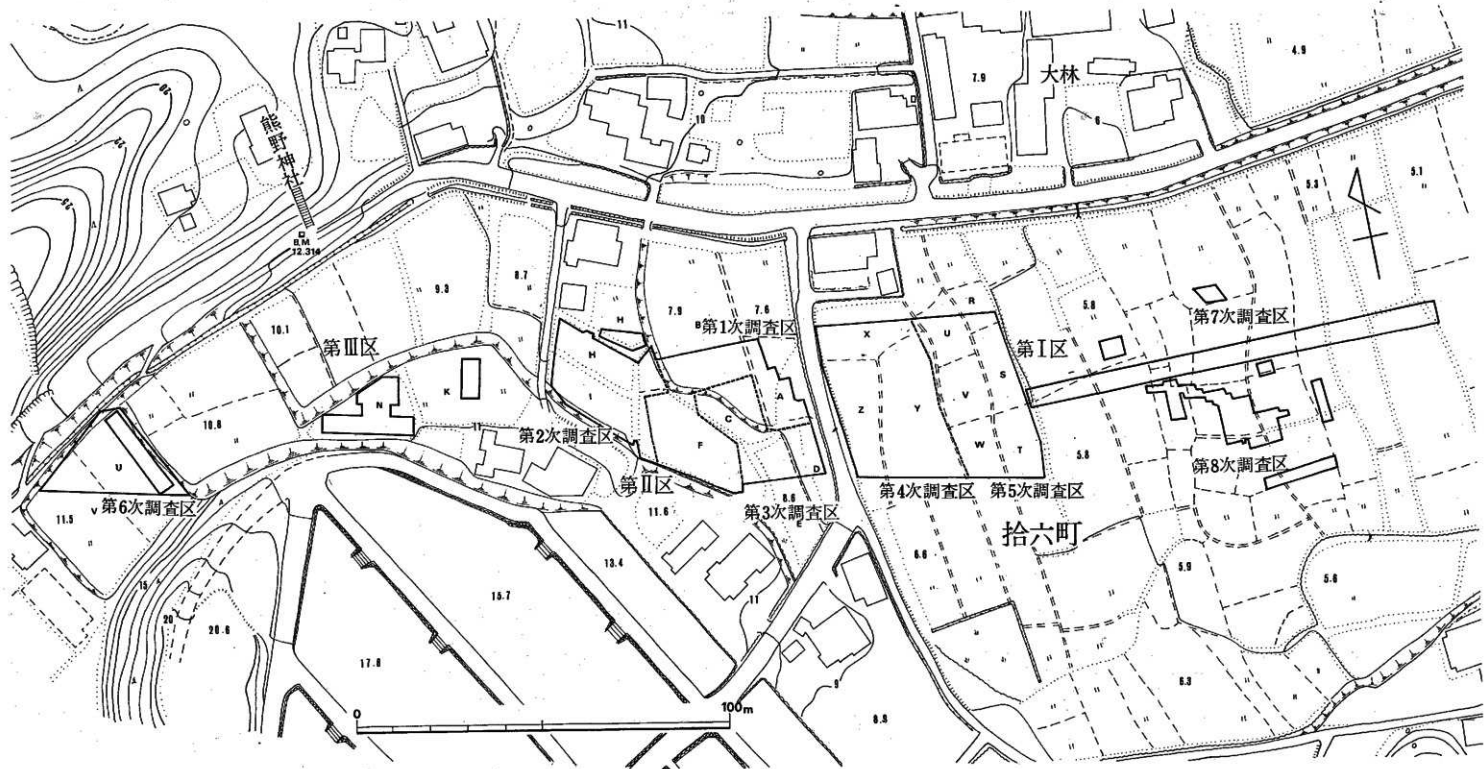
野方中原遺跡 1973年に調査された大遺跡で、弥生終末から古墳時代の集落群と墓地群である。湯納、宮の前遺跡をひとつの共同体的存在としてとらえるならば、同時に存在し、近接した共同体として興味深い。なかでも環溝のある居住地と、箱式石棺を主体とする墓地とのあり方は、湯納、宮の前遺跡における墓地、居住地とのあり方と異なり、原始古墳といったようなあり方ではなく、弥生時代のそれである。もちろん、地形的な制約や共同体内部での差異があるものと思われるが、特にこの点に興味がひかれる。

大林遺跡 現在、大林の集落がその上にあるため住居跡などの遺構の存在が想定されるが、表探による資料から判断するしかない。ここの遺物は弥生後期の破片を主に若干の中期の土器を含む。湯納遺跡とは、縄文時代では谷をはさんで存在したが、表探された遺物の時期には、宮の前遺跡を含めて同一の共同体的存在であったものであろう。

畑ヶ尾遺跡 土師器・弥生式土器などが散布する。なお、第2区畑ヶ尾遺跡南西側に墓石墓が存在する。

以上、湯納遺跡の周辺の遺跡について若干ふれてきたが、いずれも、弥生中期以後にその大きな展開がはじまる。

さらに、高崎2号墳にみられたような富裕な層が出現し、歴史時代には、早良平野唯一の寺院跡、城ノ原廃寺の建立がなされるようになるのである。



第3図 沿納連跡地区別図(縮尺1/1000)

3. 地区割りの設定

「今宿3」でふれたとおり、バイパス建設予定地は未買収地であった。このため、稲の収穫を終えた11月の後半から土地を借上げて、本調査を行うことになった。基本的な地区割は、69年度の調査後、買収の終わった時点を予想したものが設計されていたが、それを使用することが出来ず、新たに第3図のような地区割を設定した。

まず、大林の集落から畑ケ尾へ南北に通じる道の東側まで。この道から、この西側60mでバイパス建設予定路を南北に通じている小道まで。この小道以西、の3つの大地区を設定し、東側から第Ⅰ区、第Ⅱ区、第Ⅲ区と西へ順に呼ぶことにした。

つぎに、水田1枚ごとにアルファベットを付けることにし、Ⅱ区からⅢ区が26文字で収まるので、Ⅰ区では道から東へアルファベットを逆に付けることにし、中地区とした。さらに、検出される遺構と遺物の照合が的確にできるようにするため遺跡全体を磁北に従って1辺3mの方眼で切り、小地区とすることとした。小地区は南北をアルファベットで示し、東西を2ケタの数字で示すこととした。小地区の設定は、九州地方建設局がⅠ～Ⅴ区に設定していた基準中心杭を便宜上使用することにし、遺構実測図の原点もここに置くことにした。また、標高点は、九州地方建設局が熊野神社の参道脇に設定したBMI2.314mを原点として計り出すこととした。

4. 発掘調査の経過

1969年の調査結果は、「今宿1」に収録されている。すでにこの調査の時に粉納遺跡から青銅製の鋸先片や鉄製の鎌などが発見されて弥生時代の水田を東側の現水田の下に示唆していた。

「今宿3」において1971年度の発掘調査経過について記しているのですが、ここでは日誌をくりながら調査の大局を記すにとどめたい。

1971年

11月24日 現場で栗原、藤田、上野と遺跡の地区割設定について相談。25日 磁北に従って3m角の小地区を設定、発掘調査をⅠ区より開始。

12月2日 Ⅰ区Zの水田西端で溝状の遺構検出。3日 Ⅱ区A・Bの水田にトレンチを設定、遺構のあることを確認。15日 Ⅱ区Fにトレンチを入れ遺構確認。16日 Ⅱ区FでE6・E7を検出。A・B・Fの水田は、トレンチ掘りをやめて全面調査にする。18日 Fで棚列(A1・A2・A3)掘立柱(B6)の建物の1部分を検出。25日 71年の調査を一先中止

1972年

- 1月10日 作業開始。水汲み。14日 B6の獨立柱建物検出終了。18日 B3の獨立柱建物検出。柱穴のなかに弥生式土器を見つける。19日 Bの水田でD6を検出。この中より弥生中期の土器発見。22日 Aの水田でD2を下げ古式土師器群にあたる。また、I区ZのD2中より木製の合わせ轆を発見。25日 II×Aの古式土師器群の下から青銅製鍔片を見つける。D2の木器は伴出土器片より弥生後期とわかる。
- 2月1日 D5・D6の写真撮影。2日 II区AのD5の下層を掘り進む。5日 実測準備。杭・貫板の買入。10日 II区AのD5の西側のピットより竹籠出土。12日 Fの水田から実測開始。今年度の発掘範囲今日までと仮定し、県の文化財専門委員の方々に視察をおねがいすることにきめる。16日 II区FでC1・C2・C3の住居跡を見つける。10日 II区Aの実測準備。20日 現地説明会。22日 県文化財専門委員の先生方現地視察。意見交換。
- 3月6日 実測終了。15日 ためおし調査終了。24日 埋戻し終了。
- 5月8日 第2次調査開始。II区Fの残りとしG・H・Iの水田を掘る。15日 プレハブの移転。22日 H・Iの遺構検出開始。23日 F・Iの間の畦畔よりE7を検出。建物B8との切り合いがありE7が新しい。I区でE7を検出。24日 E7から、線軸片、「雲雷」銘の瓦など出土。30日 E7を検出。
- 6月1日 第3次調査開始。II区E・B・Cの残り・D・E・Fの残りの表土をめくる。2日 B9の竪立柱建物を検出。6日 D8の調査・弥生中期の上器が多い。10日 第2次調査、写真撮影。第3次調査、遺構検出。30日 A区Dの土師器群の復原作業開始。
- 7月3日 第2次調査、実測開始。第3次調査、遺構検出。14日 第一回遺跡発掘指導委員会を開催。17日 III区Uの表土はぎ(第6次調査)。18日 第3次調査の写真撮影。実測準備。第2次調査の実測は終了。29日 第3次調査、実測開始。
- 8月1日 第4次調査としてI区X・Y・Zの発掘開始。2日 Z区より枕列跡はじめる。第3次調査の実測開始。12日 第3次調査の実測は終了。18日 D5の検出は終了。19日 Z・Y地区でピットの検出。D3の溝が見つかる。23日 X・YでD2の追求、東南端部は、おそらくたれ流しと思われる。25日 アジア航路による写真撮影の準備。27日 ヘリコプターによる写真撮影。
- 9月2日 第4次調査D2・D5の掘り下げ。4日 D1より木製轆、D5より木製紡錘車など発見。5日 D1より木製品の出土が多くなる。7日 D1・D2の検出は終了、D2の端部より滑石製品、古式土師器とともに出土。11日 現場で、出土品を盗まれる。カベ新聞の作成をすることにする。12日 D1より木製容器出土。15日 第5次調査の表土はぎ。18日 第4次調査写真撮影。22日 第4次調査の溝の写真終了。26日 第4次調査X区より木製平鍔出土。建築部材300番出土。D1より、木製鋸出土。28日 D1・D2より木製容器など出土。
- 10月2日 遺構から除けぬ枕列などに、ポリエチレングリコール液を塗る。4日 第5次調査遺構検出。5日 木製の鋸。鋸D1から検出。12日 第二回遺跡発掘指導委員会。17日 木製轆、杵、D5より出土。28日 木のとりあげで手まとった第4次調査の実測開始。31日 第5次調査、D1の東側は、流砂の堆積が多く、土器類は新しいいろいろと混在している。

- 11月1日 D1の溝より木製製の出土。2日 西田先生、花粉分析の資料とりに来福。11日 達口の溝で、第4・5次調査不能、第3区Uの発掘。18日 第4次調査実測はほぼ終了。24日 指導委員会の指示に従って第5次調査区の東側へトレンチを設定。第7次調査とする。
- 12月6日 第6次トレンチより、土師器多数出土。7日 第4次調査、Y・X区砂層にトレンチを設定。8日 XYトレンチのビート層の下より縄文式土器を発見。地山面にドングリのピットを発見。砂層中にもドングリのピットがあった。X・Y区の畦畔部分は古い流路と判断された。13日 アジア航路写真撮影。19日 第3区Uの発掘土砂の崩壊多く本日で終ることとする。22日 第7次調査の継続、第6次調査の実測。23日 第4次、縄文トレンチの土層実測。25日 本年の作業終了。

1973年

- 1月5日 作業開始、器材点検。6日 第7次調査の継続。II区の埋めもどし開始。23日 第6次調査の埋めもどし。30日 第7次調査、旧十郎川西岸とおぼしき落込みをつかまえたのでトレンチの範囲をここまでとする。31日 第5次調査で矢板列発見。
- 2月3日 第5次調査区の杭列の写真撮影。10・11日 現地説明会。12日 第5次調査、写真撮影終了。16日 第5次調査、実測開始。27日 第3回湯納遺跡発掘調査指導委員会。
- 3月17日 今宿3報告書書写。19日 第5次調査実測はほぼ終了。26日 第7次調査実測開始。28日 小型ブルドーザーで埋め戻し開始。
- 4月7日 第7次調査で発見の杭列を北・南に追うべくトレンチを設定。9日 南トレンチで、臼、杵、棒子、建築部材、土師器にあたりトレンチを拡張。第8次調査とする。14日 第7次調査の実測はほぼ終了。18日 第8次調査の実測開始。20日 第4回湯納遺跡発掘調査指導委員会。27日 建築部材収納の準備打合せ。
- 5月1日 晒布30反で建築部材を保護するための雑巾を作る。3日 建築部材の出土編目確認のトレンチはほぼ発掘終了。4日 木材の部分撮影。7日 特別史跡太宰府発掘調査指導委員の先生方来訪。9日 実測はほぼ終了。30日 下部遺構の実測。31日 西トレンチの部材取り上げ、プレハブを資料館へ移築する打合せ。
- 6月2日 板付遺跡・南都山遺跡の調査団と合同で報告会を九州相互銀行で行う。4日 西トレンチ拡張部で新たに建築部材発見。5日 埋めもどし開始。16日 埋めもどし終了。18日 出土遺物、太宰府九州歴史資料館へ運搬開始。20日 運搬作業終了。22日 出土遺物の整理。25日 建築部材から荷ほどきし、遺物整理にかかる。
- なお、湯納遺跡の発掘調査のなかで、湯納遺跡発掘調査指導委員の先生方に果して真いた役割は多大なものであった。どこまで、頂いたご意見を実行できたか調査員として自信はないが、ここにご意見の概要を記しておく。

1972年2月22日 県文化財専門委員の先生方のうち、歴史、考古学会の先生方の現場視察と懇談。

1. 九州地方建設局と相談して可能なかぎり調査期間（最低1年程度の）をとりなさい。
2. 発掘調査期間の延長が可能であるならば考古学の専門家だけでなく、必要な自然科学部門の先生方

にもお願いして、総合的な調査体制をとりなさい。

3. 発掘調査の進行状況を定期的に報告しなさい。

1972年7月14日 第一回跡納遺跡発掘調査指導委員会

1. 現地視察
2. 発掘調査計画の説明と意見交換

先生方の意見

- この調査の主たる目的は水田遺構の検出にある。(1区に調査の主体を費やなくてはいけない。)
- 自然科学部門の先生方の都合に合わせて出来るだけご協力頂けるようにしなさい。

1972年10月12日 第二回跡納遺跡発掘調査指導委員会

1. 現地視察
2. 東トレンチ(第7次調査)の発掘結果の報告
3. 青峰、松本、坂田、西田指導委員の先生方から、土壌、木材、年代測定、花粉分析などの結果についての中間報告を頂く。
4. 意見交換

1972年2月27日 第三回跡納遺跡発掘調査指導委員会

1. 現地視察
2. 調査経過の報告と今後の調査計画の説明意見交換

先生方の意見

- 水田遺構があるのかないのか、今日までの結果では解らないから、十郎川の旧河床までトレンチを広い幅で設定しなさい。

1973年4月20日 第四回跡納遺跡発掘調査指導委員会

1. 現地視察
2. 建築部材(第8次調査)の検出経過についての報告、意見交換

先生方の意見

- 建築部材の出土範囲について、トレンチでよいから、広がりがあるのかないのか確認するように。
- 建築部材の下層遺構の検出を行うように
- 部材の保存については充分配慮するように

3. 課長謝辞

註1 九州大学考古学研究室編「有田遺跡」福岡市教育教育委員会(1968)、浜田信也編今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 福岡県教育委員会(1970)、栗原和彦・上野精志編「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第3集 福岡県教育委員会(1973)、下米信行・沢田田編「宮の前遺跡(A～D地点)」福岡県労働者住宅生活協同組合(1971)、高倉洋彰・横口謙也編「宮の前遺跡—福岡市拾六町宮の前F地点の調査」福岡市教育委員会(1971)、山崎純男編「下山門遺跡」福岡市教育委員会(1973)、島津義昭編「牟多田遺跡」福岡市教育委員会(1974)、柳田純孝編「野方中原遺跡調査概報」福岡市教育委員会(1974)

第2 湯納遺跡の発掘調査

1. はじめに

湯納遺跡という名前で今宿バイパス建設計画路線に沿って発掘調査された遺跡の地形は、十郎川の西、標高約5.1m～6.6mの第Ⅰ区、道を挟んで標高7.6m～10mの第Ⅱ区、標高8.7m～11.5mの第Ⅲ区からなることは、前項ですでに述べた。さらに、この西側の丘陵は、標高30m以上の宮の前遺跡にと連なる。(第2図、付図第1・2図参照)

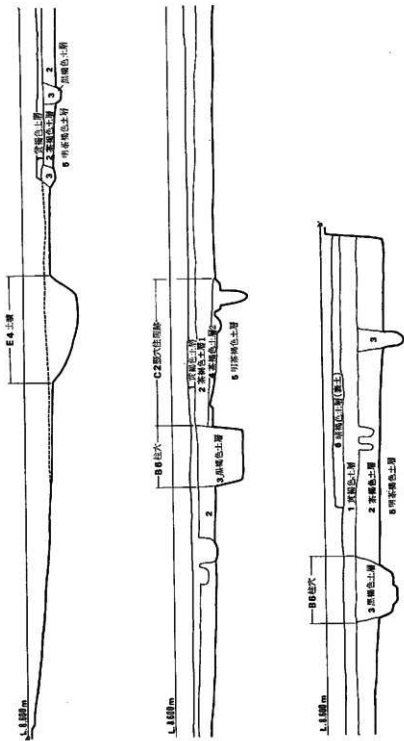
湯納遺跡の発掘調査は、Ⅰ区、Ⅱ区に力点を置いたがために、Ⅲ区については、1969年の予備調査によって知り得たK・N地区と今回、調査を実施したUの水田の遺構を調査し得たのにとどまった。が、Ⅲ区の南部分、Ⅱ区の大部分は、西・北を谷によって宮の前遺跡と分ち、南東側では、別の谷によって畑ヶ尾遺跡と分離し、西南方向より張り出す舌状丘陵の形となっている。従って、Ⅱ区の大部分の遺構は、Ⅲ区K・Nをも含めて、居住区の性格を示す掘立柱建物、柵列、井戸、土壌などからなっている。また、Ⅲ区Uで確かめ得た溝は、谷水をⅡ区AおよびⅠ区X・Y・Zの地区に流し、大林遺跡との間を切り離す形となっている。Ⅰ区U・Vで発見された杭列は弧状に湯納遺跡と大林遺跡との間の一番古い谷をふさぐ状況を示して、これ以東に水田が営まれた可能性を暗示した。後に述べる、歴史時代の溝以外の溝は、宮の前遺跡との間の谷からⅡ区A、Ⅰ区X・Y・Zにかけて十郎川めがけてまっすぐ東流していたのは縄文時代の流れであり、D1・D2・D5などの水源を、宮の前遺跡との間の谷にもつことが確実視出来るにもかかわらず西から南、西北から南東へと(ある時は、たれ流しの状況もあったが)人工的な流路を形成している。かくして、この流れは、畑ヶ尾遺跡との間の谷水と合流して、湯納遺跡の水田を養っていたと推定される。第8次調査で発見された建築部材も小規模な井堰として考えられ西南方向に貯水したとの想定もなし得よう。

以上のように、ごく大まかに湯納遺跡の概略を記したが、居住区、溝群、水田関係遺構、井堰の4区に大別出来る。以後の図中にアルファベットを冠して遺構を記したが、Aは柵列、Bは建物、Cは竅穴住居跡、Dは溝、Eは土壌、Fは井戸、Gは杭列、Hは貯蔵穴をさす。

2. 居住地域の調査

(1) 遺構の検出状況

遺構が最も密集しているのは、Ⅱ-F区を中心とした部分である。この部分の土層の状況は、表土(耕作土)の下は、黄褐色土(床土)に変わりその下は、弥生式土器を包含する茶褐色土



第4圖 II-F Aライン土層断面実測図 (縮尺1/40)

に変わる。竪穴住居跡や柱穴は、この上面から検出されている。第4図は、II-F区での東西方向の土層断面である。図中でも理解出来るように、西では、耕作土の直下が地山であった。このことは、F・I区に共通していて、B7建物の西側の妻の柱穴はすでに検出できなかった。

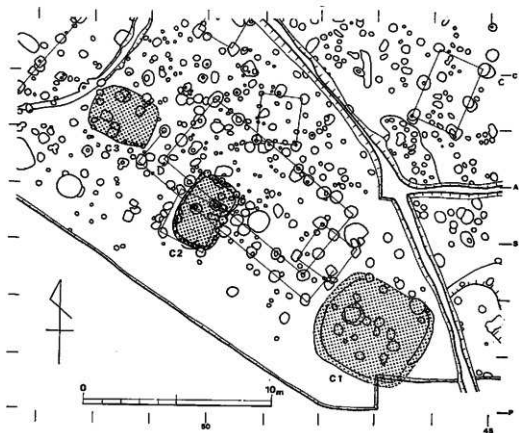
H・G区では北の谷側におりに従って床土が厚みを増し、さらに2～3層の土師器・須恵器などの破片を含む層があるが、B9建物以外は、地山面での遺構を記録したのにとどまった。

II-A・B区の水田とII-C・G区の水田との比高は約80cm近い差があったがII-F区で遺構の検出された弥生式土器片を含む茶褐色土層が、II-C・G区側で開田時にカットされたためにうすくなり地山自体の傾斜はゆるやかなものであった。

(2) 竪穴住居跡 (第5図・付図第1図)

湯納遺跡ではすでに1969年における調査の際に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての5棟の竪穴住居跡が検出されている。今回の調査においては新たに3棟の住居跡を検出した。

なお前回発掘調査した5棟の住居跡のうち4棟は完掘ではなく今回拡張して発掘調査を実施する予定であったが、今回の発掘調査は「水田」を主体としたためあえて調査を行っていない



第5図 II-F 竪穴住居跡位置図 (縮尺1/200)

いない。今回新たに検出された住居跡3棟をC1・C2・C3号竪穴住居跡と名付けたが、本来ならば湯納遺跡6号住居跡より出発すべきであったかと思われる。ここでは調査の時より使用しているものにしたがう。

C1・C2・C3号竪穴住居跡はII-F区で検出され、前回の1号竪穴住居跡から5号竪穴住居跡の位置より一段低いところに立地する。十郎川に面した低丘陵のさらに小さく入りくんだ谷間に直線上に並列していて、東方向に約80m離れて在り標高はほぼ8.8mである。いずれも後の削平を受けて残りが非常に悪い。

a. C1号竪穴住居跡 (第6図)

三つの住居跡のうち東方に位置し、床面と壁が部分的に存在しないところもあり、覆土は掘立遺構建築の際に整地を受けたらしく縄文式土器、弥生式土器を含む整地層からなる。約6.00m×5.40mのほぼ隅丸方形を呈し、床面積は約30m²であり北西から南東に長壁が沿う。壁は残存部分で2~5cmである。床面は硬く部分的に凹凸面もあるが平坦であり、北方が低いのは削平のためである。周溝が床面全体に巡っていたらしく上幅20~40cm、下幅10~25cm、深さ10cm程を呈している。炉跡が北東側の壁に近く在り、多量の炭化物和焼土塊を認める。床面内にはいくつかの柱穴が存在しており主柱穴と推定できるものに北東側壁近くの柱穴と、南東側壁近くの柱穴が考えられるが不確実である。

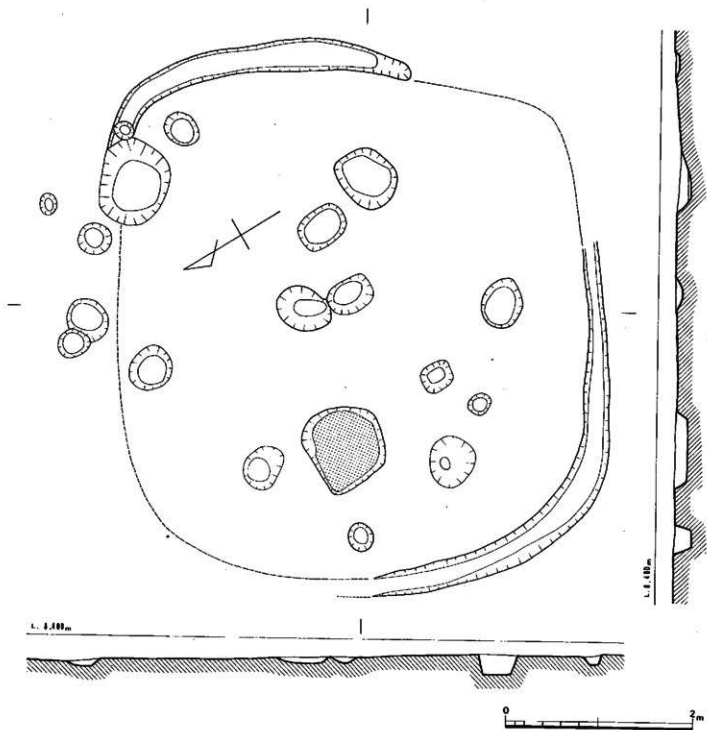
b. C2号竪穴住居跡 (第7図 図版6-11)

C1号竪穴住居跡より7m離れた北西方に位置する。覆土はC1号住居跡と同様であり、掘立て遺構と重複するため非常に残りが悪く壁は検出できない。3.90m×2.60mの隅丸長方形を呈し、床面積約10m²で長壁は北東~南西に沿っておりC1・C3号住居跡とは約90度異にしている。床面の状態は不明瞭で周溝が認められることより住居跡と推定される。周溝は現状で上幅10~40cm、下幅35~46cmで深さは約10cmである。この周溝内には合計23個の小ピットが存在するが、いわゆる壁柱穴と思われとくに南西壁は顕著である。小ピットは大きいもので径25cm、深さ15cm、小さいもので径8cm、深さ5cmを計る。床面の東方周溝近くに焼土と炭化物を包含する隅丸長方形のピットが存在するが本住居跡に付属するか否かは不明である。

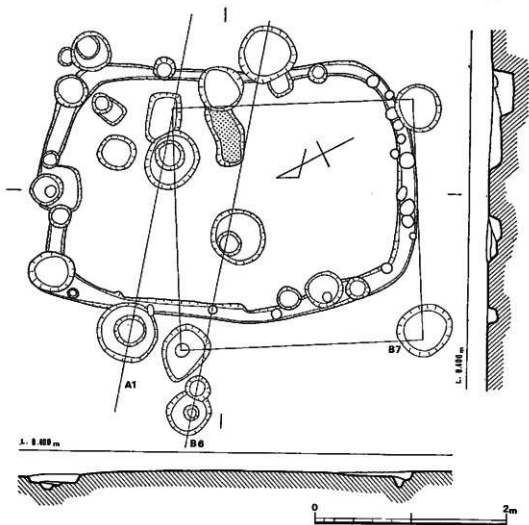
c. C3号竪穴住居跡 (第8図、図版6-12)

2号住居跡のさらに北西3m離れて存在する。C1・C2・C3号竪穴住居跡はほぼ一直線上に接近して位置している。若干の落差みが認められたので住居跡として取り扱う。

平面プランは3.6m×2.75mの隅丸長方形を呈し、C1号住居跡とほぼ同じく長壁は北東~南西に沿っている。床面の検出に困難を極め、軟くて平坦面がなく大きな凹凸面を有している。壁は5cmほど認められるのみである。周溝や主柱穴、炉跡と推定できる掘り込みは見当たらない。今回3棟の住居跡を確認したが、前述の通りいずれも後世の擾乱を受けて床面や周溝の検出が出来た程度で覆土中や床面上の出土遺物は混入しており本住居跡群に伴うものとはされ



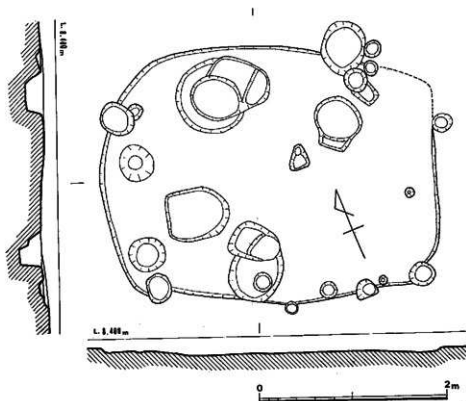
第 6 图 II-E·F C1 竖穴式住居跡实测图 (缩尺 1/40)



第7図 II-F C2 竪穴住居跡・B7 竪立柱建物実測図（縮尺1/40）

ない。ただC1号住居跡のピット内に第129図5の磨製石斧を見出した。また住居跡周辺の包含層下層には第94図、第95図の縄文式土器が出土している。

以上のように今回新たに竪穴住居跡3棟を検出して湧納遺跡の竪穴住居跡は計8棟となる。丘陵上の宮の前遺跡を加えれば十数棟の住居跡が存在したことになる。今回調査された住居跡群の時期については、ここでは平面での切り合い関係からII-Fでは最も古い遺構となるが、その時期については、弥生中期の土器片の出る穴より以前ということにとどめたい。住居跡の考察については解説書にてふれてみたい。



第8圖 II-F C3 竪穴住居跡実測図 (縮尺1/40)

(3) 掘立柱の建物遺構

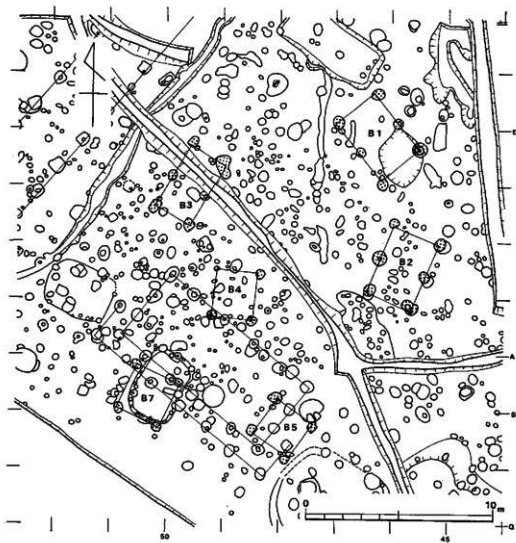
掘立柱の建物は、B1～B9まで9棟とA1～A3の3条の櫛列が検出されたが、建物遺構はこの他にI区に、柱根、礎板の発見されたものとII区Iの西南部の地山が削平された部分にも存在した可能性があり、若干増すものと思われる。(第22図)

この掘立柱の建物のうち、B3の東北隅の柱穴から第10図3(図版48-3)の菱形土器、B5の南東隅の柱穴から第10図2(図版48-2)の上器片が発見された。また、Iの水田で建物としてまとめられるところまでは出来なかったが、ピットの中より第11図1・2・3(図版48-4・5・7)の土器なども見つかって、弥生時代の建物との関係が予測される。

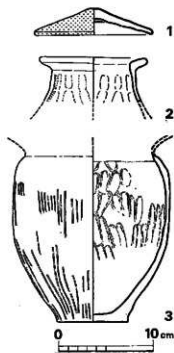
また、A3の櫛列の柱穴の西南より2つめから、第15図1(図版48-9)が見つかり、E7土壌によって切られているB8建物をE7土壌以前に置けること。F1井戸にB6建物の柱穴が切られていること。A3柱穴、E7土壌、F1井戸から出土している土器・瓦の比較から、10世紀頃の建物と推定されるものの2グループにわけられる。

弥生時代のものは、**B1・B2・B3・B4・B5・B7**の6棟であり、10世紀頃と推定されるものは、**B6・B8・B9**の3棟、**A1・A2・A3**の3柵となる。弥生時代の建物遺構（第9図）は、 1×2 間の建物3棟と 1×1 間の建物3棟である。これらの建物が同時に存在したかどうかは、明確につかめるような資料はないが、柱穴平面の計測値から**B1・B2**が近く、同時存在であった可能性が強い。

B1建物（第12図，図版19-2）の棟方向は $N-50^{\circ}-W$ を向いている。柱間寸法は梁行で2.6m，桁行で3.8mほどである。柱穴掘方の大きさは40cm前後の不正円形，深さは地山より60cm

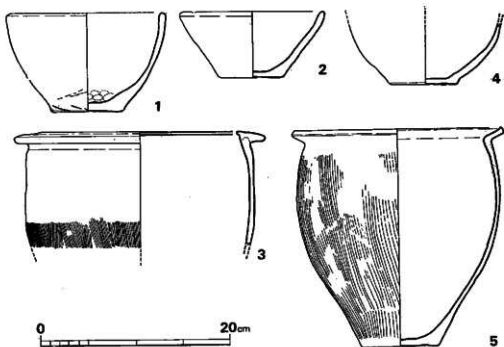


第9図 B1・B2・B3・B4・B5・B7掘立柱建物位置図（縮尺1/200）



第10図 II-B・C 柱穴範囲内出土赤生式土器実測図 (縮尺1/4)

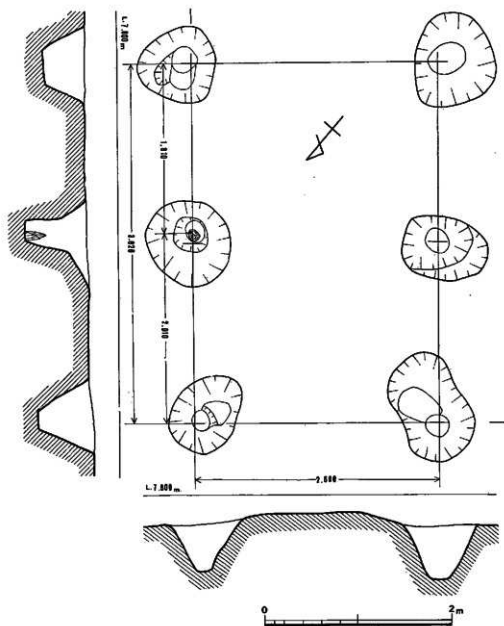
ほどのものが深いほうである。東側柱第2柱穴にチヤノキの柱根が残っていた。B2建物はB1建物の約2m南側で棟方向をN-22°-Eにとる建物である。柱間の寸法は、B1に近く梁行2.6m、桁行3.8mである。柱穴の番号もB1にはほぼ同様である。南西隅の柱穴に広葉樹の柱根が残っていた。B3建物は棟方向をN-32°-Eにとっている。梁行2.2m、桁行3.8mほどである。床土下の整地層上面から掘り込まれている。東北隅の柱穴から第10図3の上器が出土した。B4・B5・B7の1×1間の建物は、建物としてここにとり上げたが、建物である可能性の範囲にとどまるもので、建物であると断定出来るほどのものではない。B4建物は棟方向をN-6°-Eに傾けた建物で梁行2.2m、桁行2.5mほどの規模をもつ。北東隅の柱穴が小さいが目につくが、これは地山面での柱穴の形状であり、ほんらい60cmほどの穴であった可能性が高い。B5建物(第13図)は梁行2.3m、桁行2.3mほどの規模の平面をもつ。B7建物(第7図、図版6-1)は、棟の方向をN-27°-Eにとり、



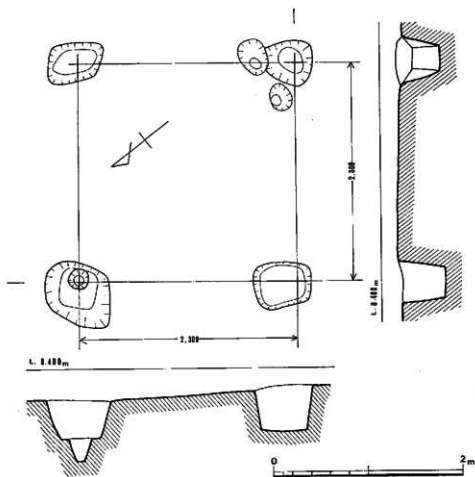
第11図 II-H・I 柱穴範囲内出土赤生式土器実測図 (縮尺1/4)

梁行2.4m、桁行2.6mほどの平面規模をもっている。一番高い位置で検出された遺構であるため、開田の折に地山が削平されたものと思われ柱穴は浅い。この建物の柱穴はB6建物の柱穴に切られ、C2竪穴住居跡を切っている。

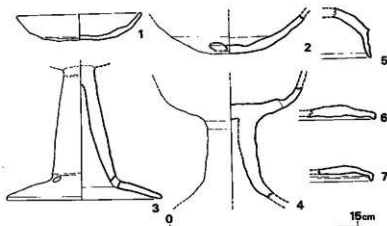
以上6棟の建物は、いずれも高床式の建物であり、一般的に倉庫と判断すべきものと思う



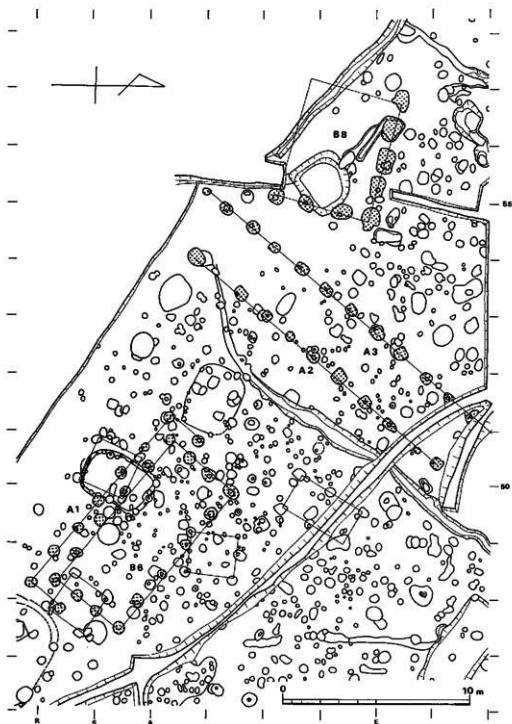
第12図 II-B B1 竪立柱建物実測図 (縮尺1/40)



第13图 II-F B5掘立柱建物実測图 (縮尺1/40)



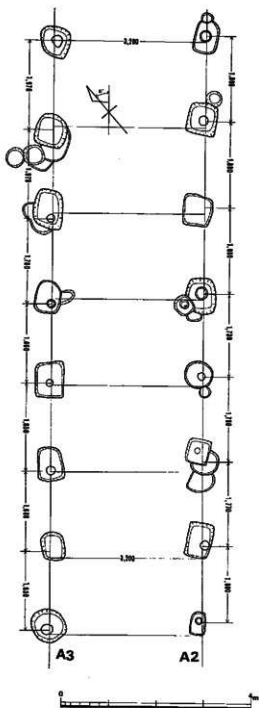
第14图 II区土師器・須惠器実測图 (縮尺1/3)



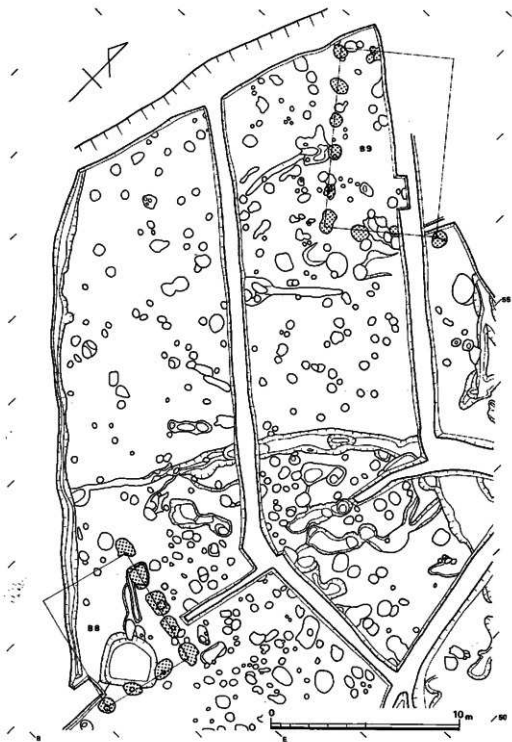
第15圖 B6・B8 獨立柱建物とA1・A2・A3 行列位置圖 (縮尺1/200)

H区で柱痕跡のある穴より出土しているが、遺構としてまとまったものはない。

10世紀頃のものとして推定した建物は、標高7.6mより高い位置で検出されている。B6建物(第15・16図, 図版7-上)は、3×5間で棟の方向をN-52°-Wにとっている。柱間寸法は、梁行方向1.4mでやや近似した計測値を示すが、桁行では1.8m~2.1mとばらつきがある。西南面の側柱の柱穴は、柱痕跡が比較的よく検出されたが、東北面の側柱列ともきちんと対応していない。興味深いのは、この建物とA1~A3までの櫓列との関係である。A1(第15・16図, 図版7-上)は、B6建物の棟方向と平行であり、西南面の側柱列とは0.8mの距離にある。また、B6建物の西南面をかこむように、B6建物の妻と約1mの間隔で東北側へ一間ずつ折り返していることである。B6建物とA1櫓列とは、これだけ密接に関連を持っているにもかかわらず、柱通りが直線でおおものはないので、A1櫓列はB6建物の西南側を意識した目かくし用の性格をもつものと考えられよう。さらにA2・A3(第18図, 図版7-下)の櫓列は、B6建物の北西8mのところにA2櫓列があり、そのA2櫓列から3.2mでA3櫓列がある。A2櫓列・A3櫓列はたがいに平行関係にあり、B6建物・A1櫓列とはほぼ直角関係にある。A2・A3の柱間の寸法は、1.6



第18図 II-B・C・F A2・A3櫓列部分図(縮尺1/80)

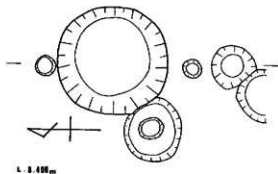


第19圖 II-F·G·H·I B8·B9 掘立柱建物位置圖 (縮尺1/200)

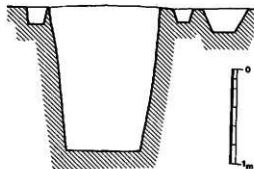
mから2.0mほどであるが、柱穴ど
うしが対応していないことは、B6
建物と似ているので、A2・A3欄
列は回廊のような建物に想定するこ
ともまったく不可能とは言えない。

以上のような関係から、B6建物
・A1～A3欄列は、同時に存在し
たものと考えた。

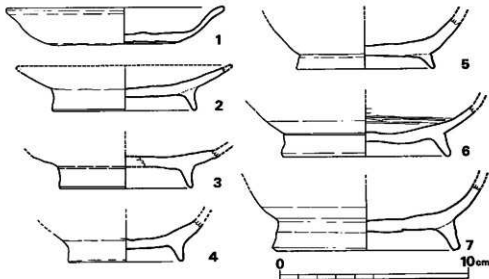
B8建物(第15図、図版17-1・
2)は、棟方向をN-75°-Wにとる
建物でE7土壌によって切られている。
柱穴の掘方は、9棟の建物のなか
では、最も大きく長径で1m前後
のものが多く、が、II-F区の場合
と同様、地山の削平が西南部でひど
く、西面の柱列は検出されていない。
しかし、この柱列をこの場所で
「くの字」に曲る欄列と理解するこ



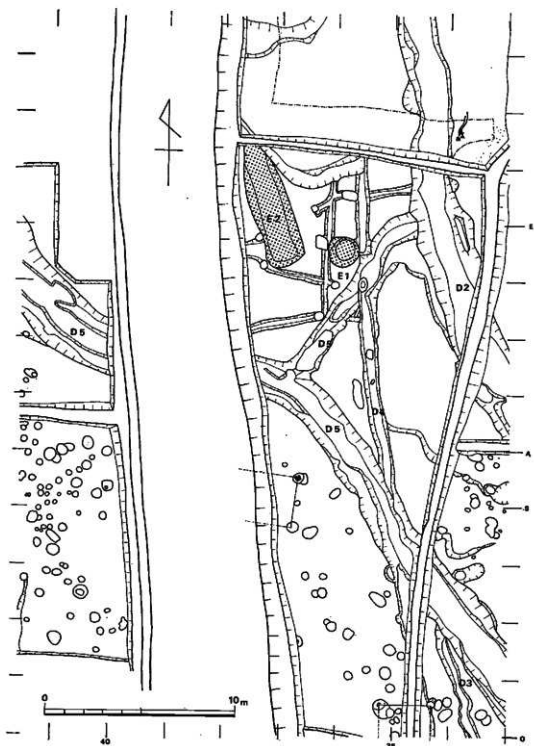
L 1.40m



第20図 II-F F1井戸実測図(縮尺1/40)



第21図 II-F F1井戸出土土器実測図(縮尺1/2)



第22圖 I-Z·II-A·D E1·E2土庫平面圖 (縮尺1/200)

とよりも、**B6・B9**建物が3×5間の建物として調査出来ている以上、これも3×4間、または、3×5間の建物と理解すべきであろう。柱間の寸法は、梁行が1.7mほど、桁行が1.8mほどである。

B9建物(第19図、図版16-下)は、**B8**建物の北約20mにある。棟の方向をN-38°-Wにとった3×5間の建物と考えた。柱間の寸法は、梁行方向で2.0m、桁行で1.9mほどである。

B8・B9建物の時期については、**B6**建物、**A1**～**A3**横列と同時に存在したかどうかはまったくわからないが、この場所では新しい一連の遺構であり水田として開田されるのはII-F・G・H・I区の床土の共通性からして同時であったものと考えられるので、同時期のものと想定しておきたい。

なお、掘立柱建物は、このほかはI-Z区に於て(第22図)東南隅で礎板のうえに柱根がすわって発見された柱穴や西側中央付近で礎板が見つかった柱穴があり、数が若干増えよう。

(4) 井戸(第19図)

II-F区で、**B6**建物柱穴を切って廻られた円形、素掘りのF1井戸である。地山面での径1.2mで深さ1.75mである。埋土は、一時に行なわれたものと見える。井戸の底で15cmほどの灰色土中から第21図、図版49-1～7の土器が出土した。

この層の上は、2層に区別されたが酸化鉄の付着による塗と思われ、遺物の包含もない。

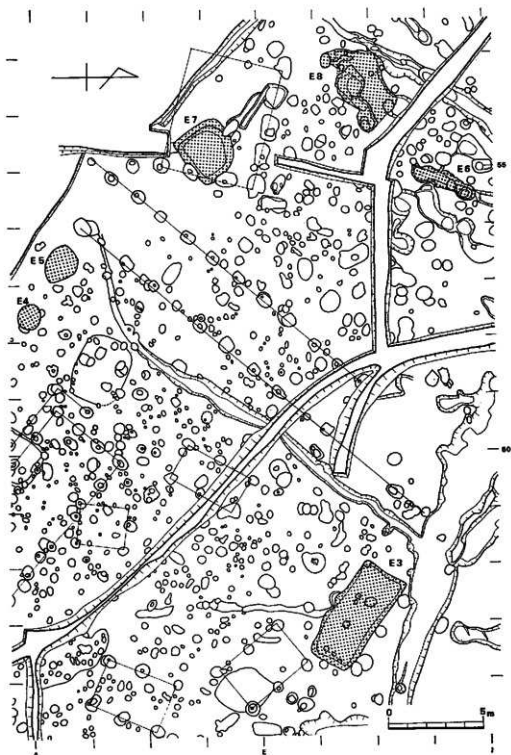
なお、図版49-7は、須恵器片を礎として利用したものである。

(5) 土壌

I区で、3ヵ所、II区で6ヵ所の掘り込みを土壌と呼ぶこととしたが、それぞれの性格、時期もいろいろである。**E1**土壌(第22・24図)は平面円形で径1.8m、深さ50cmほどの大きさのものである。なかからは、1合ほどの量のどんぐりが見つかるが、長径1cm以下のこまかいものでその時期などについては不明である。

E2土壌(第22図)は、長方形をしていて、長辺6.0m以上、短辺2.0m、深さ0.4mほどで長軸方向をN-20°-Wにとる。遺構面での形状が遺構どうしの切り合いなどでかなり変形しているのに比較して底面での形状は整っている。出土遺物は植物遺体があったが、土器などは見つからない。

E3土壌(第25図、図版20-上)は、**E2**土壌と形状が類似している。長辺5.6m、短辺2.6m、深さ0.3mほどで、長軸の方向をN-56°-Wにとっている。**E3**土壌の北東側の3つの穴が**E3**土壌の上屋をかけていたのではないかと思われるが、反対側では対応しそうな穴は見つからない。中より第26図の弥生式土器が出土している。

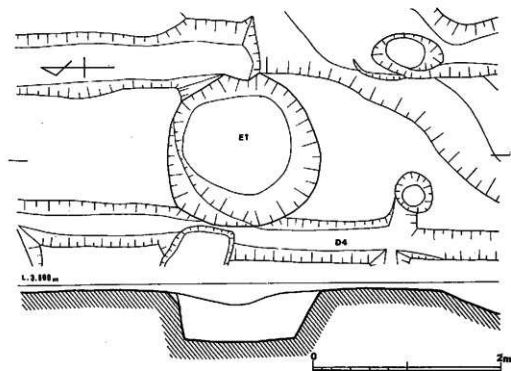


第23圖 II区 E3・E4・E5・E6・E7土墳位置圖(縮尺1/200)

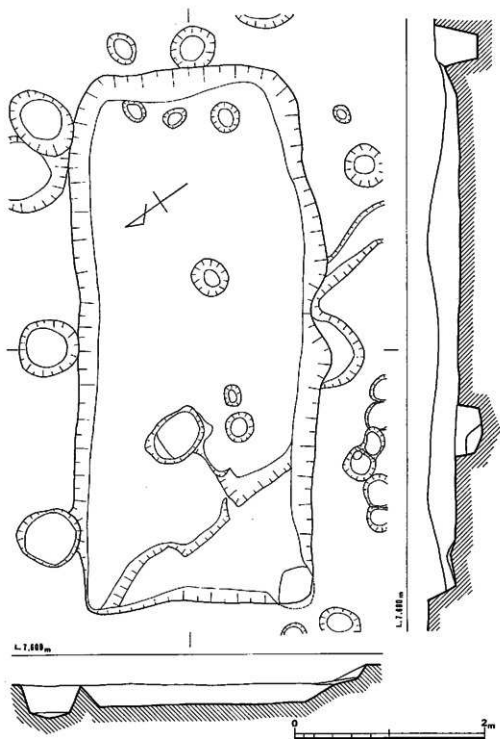
E4土壌、E5土壌(第23図)は埋土が暗青灰色粘土で共通している。この部分も地山が削られていたためE4土壌で深さ35cm、E5土壌で深さ15cmほどが残っていた。平面形は、E4土壌が円径で径1.3mほど、E5土壌が不正円形1.6×2.0mほどである。E4土壌のなかから第103図19の瓦片が、E5土壌からは第103図15の瓦片が出土した。

E6土壌(第23図)は、いわゆる土器留りである。II-G・H区の間、畦畔の下で見つかっている。本来、土壌として掘られたものではなく、なにかの目的で掘られたピットの中に入っていたと思われる土器の出土状況であった。第27図(図版49-8~12)は、この土壌から出土した土器である。E7土壌は、B8建物の柱穴を切って掘られている。II-I区の水田部分が雨水などのくみあげのためやや土壌の形状が変形しているが、一辺2.8mほどの正方形の土壌であった。この土壌より、「管固」銘の瓦など斜ヶ油菜跡で焼かれた瓦(第102図)と黒色土器、土師器(第29、30図、図版50、51-1~3)、緑釉片(図版51-4)などが出土している。

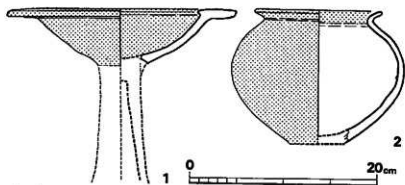
E8土壌(第23図)は、E6土壌同様の土器だまりである。地山のくぼみに第31図(図版51-6~13)の弥生式土器が雑然とちらばっていた。



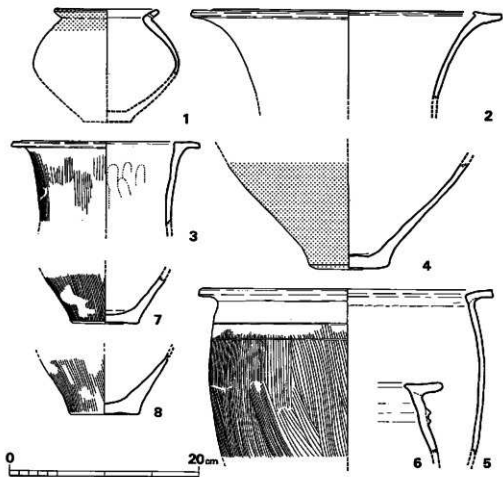
第24図 I-Z E1土壌実測図(縮尺1/40)



第25圖 II-B E 3土坑夾測圖(縮尺1/40)

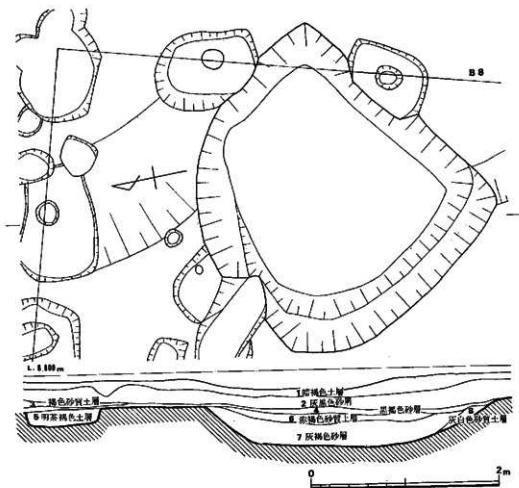


第26图 II-B E 3 上墩出土原始式土器实例图 (船尺1/4)

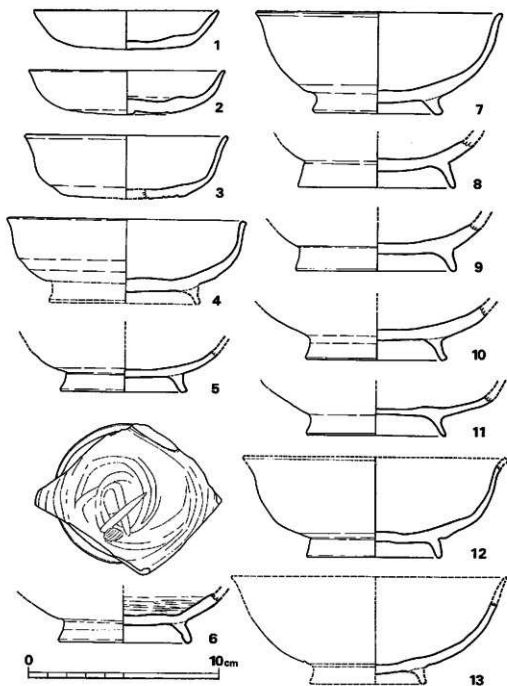


第27图 II-G·H E 6 土墩出土原始式土器实例图 (船尺1/4)

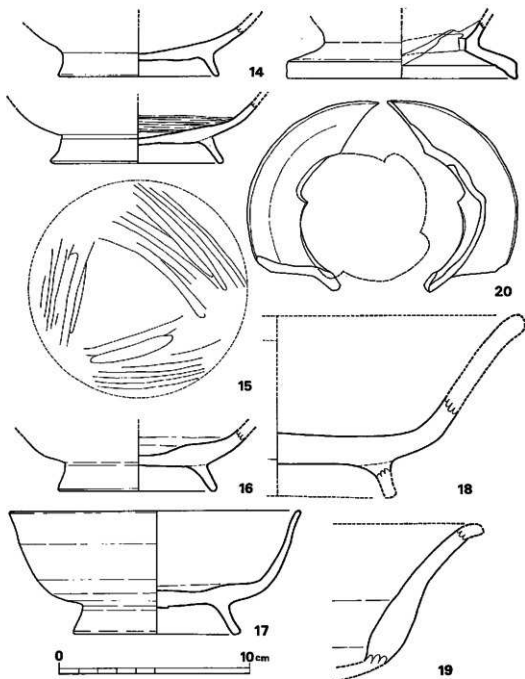
E 9 土坑 (図版36-2) は I-T 区の D10 溝の下層で青灰色土地山面で発見された。不整形の土坑で $2.5 \times 2.2m$ ほどの大きさである。中に杭が 1 本立っていたが、この土坑と、なんらかの関係をもつものと遺構の深さから理解される。この中から第75図1 (図版68-3) の弥生式土器と木製平鍬 (第104図-6) が出土している。



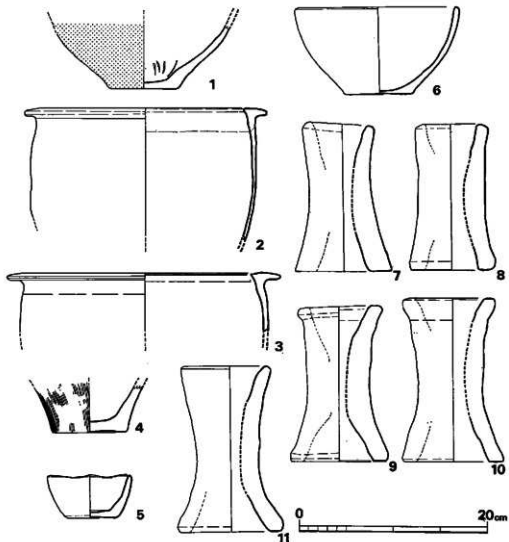
第26図 II-F・I E 7 土坑実測図 (縮尺1/40)



第29図 II-F・I E7土橋出土土器実測図その1 (縮尺1/2)



第30図 II-F・I E7土城出土土器実測図その2 (縮尺1/2)



第31図 II-I E 8土橋出土弥生式土器実測図(縮尺1/4)

(6) 溝道構

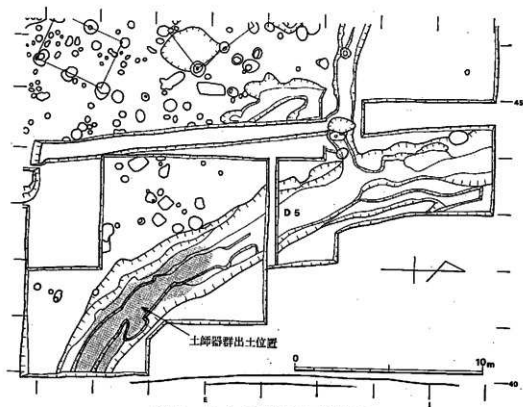
今回の調査では、10数条の溝が検出された。さらに出土遺物の大半は溝道構から発見されたものである。なかでもD5溝は、居住地域に接して流路が滞られているために遺物の出土量が最も多かった。とくにII-A区で出土した土器類は、居住地域の弥生中期～古墳時代にかけての様相をもっともよく示すものであった。そのため、各溝道構の流路、出土遺物などの報告を行うまえに資料を提示して置きたい。

II-A区でのD5溝(第32図)の水源は、III-U区で調査されたD11溝にあることは、D1・D2と同様、疑いのないところである。

D5溝は、II-A区に入った地点、Jラインセクションで、流路は二又に分かれているが、土層は水平堆積を示しているだけで前後の関係はわからない。南下して、D6溝の水がII-B区から合流するが、D6溝の流路でD5溝の西肩にあたる位置に古墳時代の土器が出土した南ピットが掘られているので、D6溝は古墳時代には流れていない。このあたりで溝幅3.0m、深さ0.7mである。また、このあたりから流路を南東方向にかえはじめ、II-AB40区からI-Z区へと続くのである。

出土遺物は、AB40区からAC41区にかけて浅い位置から土師器(挿図38~45、図版8-1・2)がかたままって出土した。この土師器を取り上げた下で青銅鐵先片(図版98-1)が出土した。さらにその下層では、弥生式中期~後期の土器に伴って木製品(図版9-1, 2・10-1, 2)や石製品、植物遺体が多量に出土した。

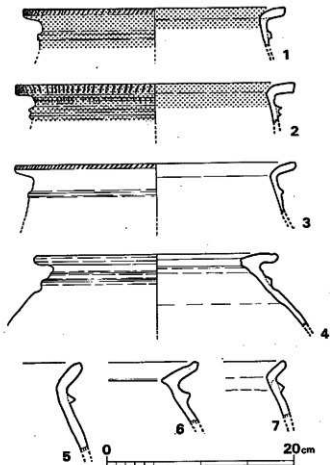
第62図1は、D5溝のII-A区Fラインの土層断面実測図である。この場所は、土師器の出土した地点と重なっていないが、木片の入る砂層より上部の層に対応するものと思われる。



第32図 II-A D5溝平面図(縮尺1/200)

この報告では、土器の説明はすべてはふいてきたが、居住地域の歴史を説明する意味でこの頃に限ってII-A区D5溝から出土した土器類について若干ふれておきたい。

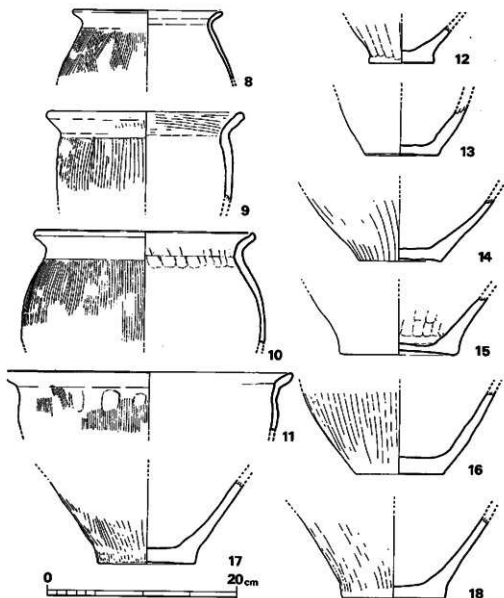
第33図(図版52-1~7)は、甕形土器である。いずれも破片である。1・2は、口縁下に一条の突帯をめぐらせたものでヘラで研磨されている。外面と内面頸部の下まで丹塗彩された痕跡がわずかに残っている。3は口縁の曲折がやや小さい。1・2・3ともに中期の土器である。4は、口縁部が觚形断面を持ち、口縁下に一条の突帯をめぐらしている。弥生中期。5・6・7は後期の土器で口縁はくの字を呈し頸部もしくは、頸



第33図 II-A D5溝出土弥生式土器実測図その1(縮尺1/4)

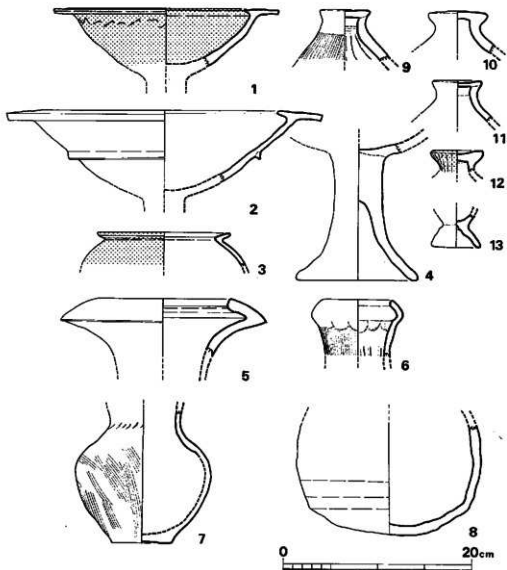
の直下に一条の突帯をめぐらせている。第34図(図版52-8~15)も甕形土器と壺または甕の底部の破片である。8は土師器のようにうすい器壁に仕上げられているがヘラケズリはみられない。ゆるやかに曲る口縁は口唇部でわずかにふくらみをもつ、外面はハケ目で仕上げている。9はやや器肉の厚い土器で頸部は溝状にくびれている。口縁部の外側は横方向のナデ付けである。内側はハケ目仕上げのままである。外側は頸部の直下にハケ目を残している。10の外縁する口縁部は頸部でわずかに立ちあがりを見せる。頸部内側には指でおさえて接合した痕跡が残っている。外面、口縁部は横ナデで仕上げ、頸部からはハケ目のままである。11の器形は、鉢と考えた方がよいのかもしれない。8・9・10・11ともに弥生後期も終末近いものであろう。12は、底部としては、古い形をしている。円盤はりつけされたもので外面に指の痕を残している。13~16の底部は底面から胴部への移行が直線的である。これに対して15・17は曲線的で古

そうだ。底部から時期の判断することはさけるが古い方からから12→15・17→13→16の順になりそうだ。第35図(図版53-1~12)1・2は高杯である。1は胎土のもろい土器である。内外面に丹塗彩された痕跡が残る。鋤先状口縁はわずかに外反している。2も鋤先状の口縁を持ち口縁の外反は1より強い。外面、中ほどに一条の突帯を施している。1・2ともにヘラで研磨されているが内にくらべて外側のは粗い。中期の土器である。3は中期から後期に見られる短瓶

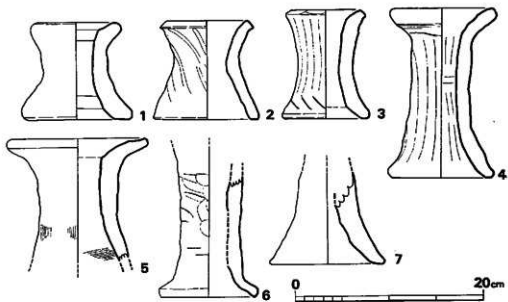


第34図 II-A D5 溝山土弥生式土器実測図その2 (縮尺 1/4)

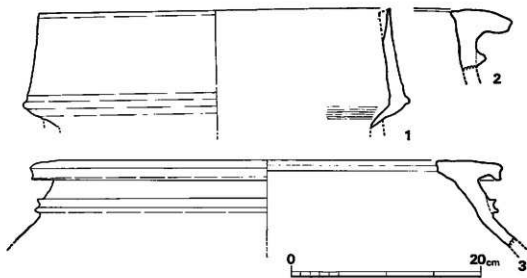
甕である。外面はヘラ磨きし丹塗彩している。5は後期の壺形土器である。開いた口縁端から内彎しながら口唇部へのつながる。厚手である。4は高杯の脚部である。6は口縁を袋状に作る壺形土器である。7の土器と接合されても不自然でない。7は頸の欠損した甕である。外面頸部にヘラのあたりのような痕がめぐる。胴部は粗いハケ日がある。内面は頸部にナデ付けがあり接合部がもりあがっている。6・7は中期後半頃のものである。9～11は蓋形土器である。12には丹塗彩のあとがある。第36図(図版53-13~18)は器台である。大きさや整形などに差



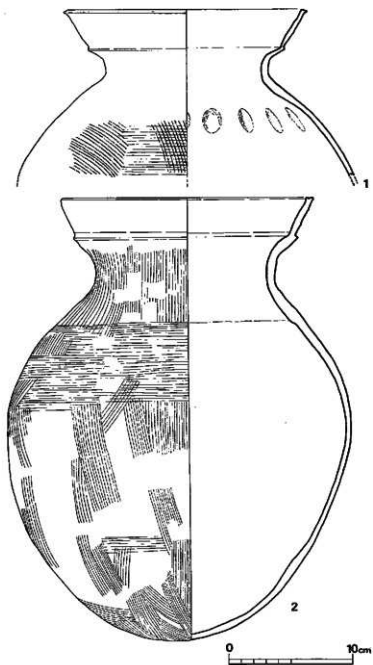
第35図 II-A D5 溝山土器生土器実例図その3 (縮尺 1/4)



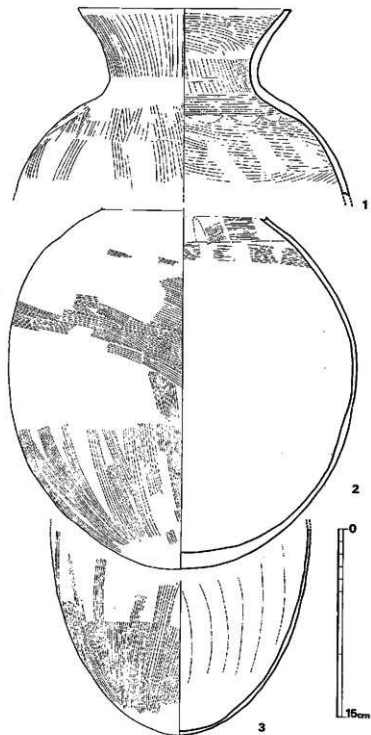
第36図 II-A D5 溝出上張生式土器実測図その4 (縮尺 1/4)



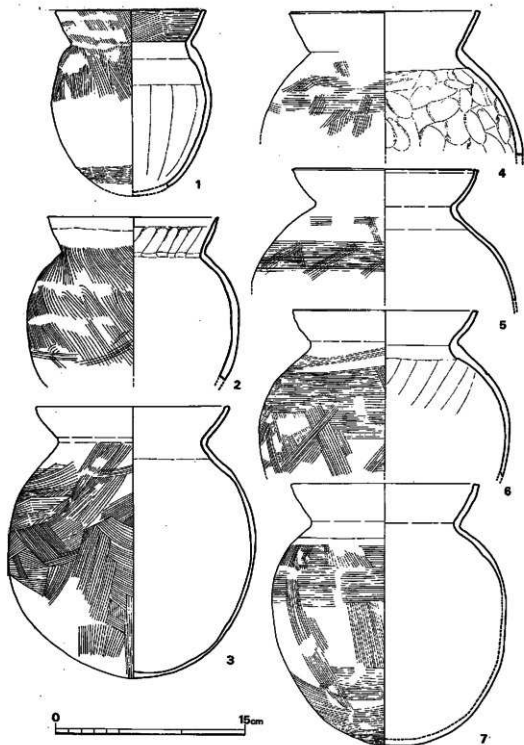
第37図 II-A D5 溝出土壺・甕棺片実測図 (縮尺 1/4)



第38圖 II-A D5 溝出土土師器実測図その1 (縮尺 1/3)



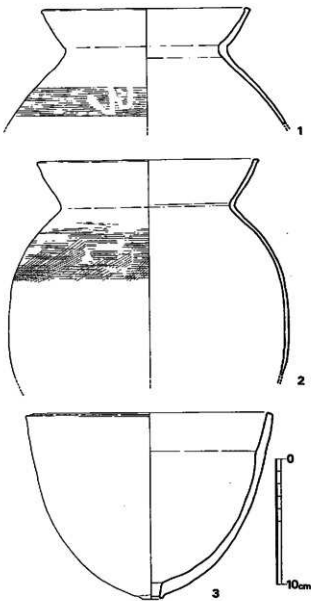
第39圖 Ⅱ-A D5 溝出土土師器実測図その2 (縮尺 1/3)



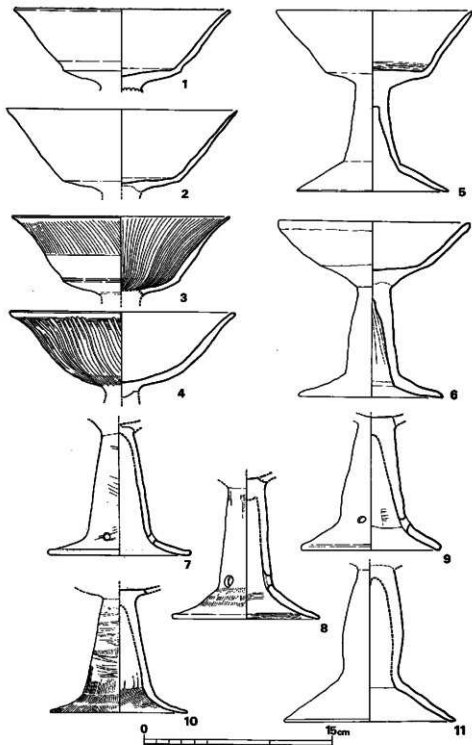
第40图 II-A D5 濠出土土器実測図その3 (縮尺 1/3)

があるが中期後半から後期のものであろう。第37図(図版54-1・2)は土師器の壺棺の口縁である。口唇部がわずかに残っていた。2は弥生中期の甕棺の破片である。鋤先状の口縁で頸部に一条の突帯がある。以上弥生式土器の概略を記述したが、そのほとんどが中期以降のものであった。

上層から出土した土師器は総点数にして100点を越えている。個々の問題や編年的な位置づけは解説編で行うこととして1, 2の点についてのみふれることとした。第38・39・43図(図版55)は壺形土器である。二重口縁のものと同口縁のものがある。二重口縁のものは胴長であり単口縁のものは球形胴であるようだ。第40・41図(図版56, 57-1~3)は壺形土器と甕である。壺形土器はどれもやや胴長でくの字に曲る口縁がつく。甕は鉢形の器形で丸い底部は一孔を穿っている。第42図(図版56-4~8, 59-1~6)は高杯である。杯部は、段をなすものと、段をなさないものの二様がある。脚の開きやふくらみがどれも弱い感じがする。このほかに埴や器台(第44図, 図版58-7~14, 59-1~3)鉢形土器や杯(第45図, 図版59~7~13), 支脚(第46図)などが一括で出土している。これらの土器は形式的に非常に古い感じのするものと、それほど古くはなさそうなものとの二様があるようだ。

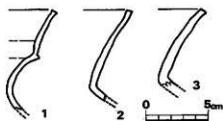


第41図 II-A D5 溝出土土師器実測図その4(縮尺 1/3)

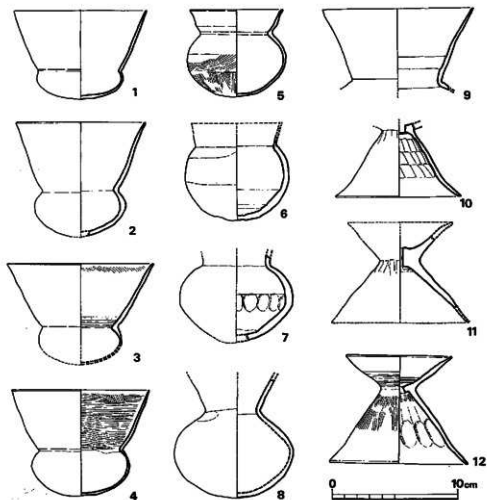


第42図 II-A D 5 溝出土土師器実測図その5 (縮尺 1/3)

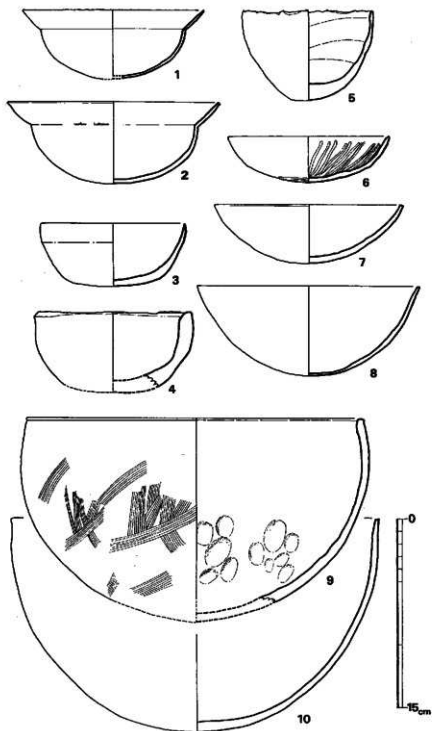
II-A 区での D5 溝の西肩で D6 溝の埋土を掘って径60cm、深さ50cmほどのピットが検出された。また、このピットの北側5mほどで長径1m、短径70cmほどのピットが検出された。これを南ピット・北ピットと呼ぶことにした。南ピットからは、第46図1(図版60-1)と竹籠(第113図)が北ピットからは第46図2・3(図版60-2・3)が出土した。祭祀的なものであろう。



第43図 II-A D5溝出土土師器実測図その6 (縮尺 1/3)



第44図 II-A D5溝出土土師器実測図その7 (縮尺 1/3)



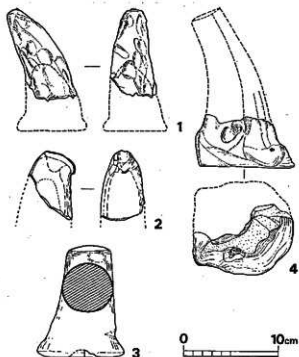
第45図 II-A D5 清出土土師器実測図その8 (縮尺 1/3)

D6溝は、II-B・G区の幅1.1~3.2mほどの東に流路とする溝を呼ぶこととする。D6溝の東端は、D5溝に合流し、古墳時代の前半には消滅したとD5溝の区でよれた。西側は、II-H区に入り流路が狭くなり流れの方向を変えているのでこまをD6溝とした。

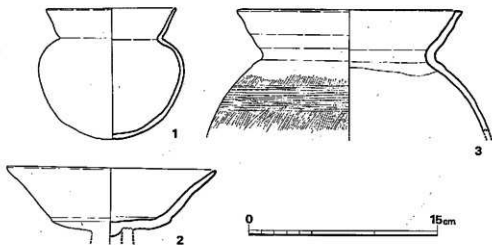
D6溝の深さは、II-G区で50cm、II-B区で30cmほどである。これは、II-B区が開田のさいにII-C・G区側を削平されたためである。

第48図1は、D6溝の土層断面実測図である。

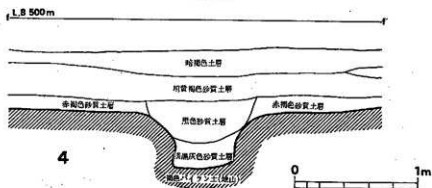
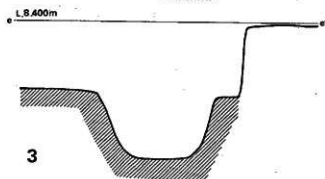
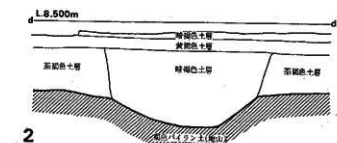
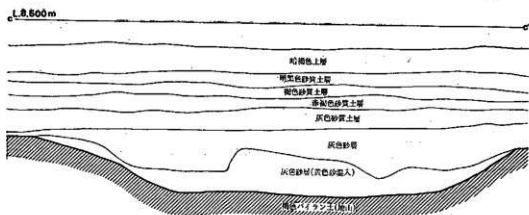
ここでは、D6溝が流路であったときの埋土は第7層・第8



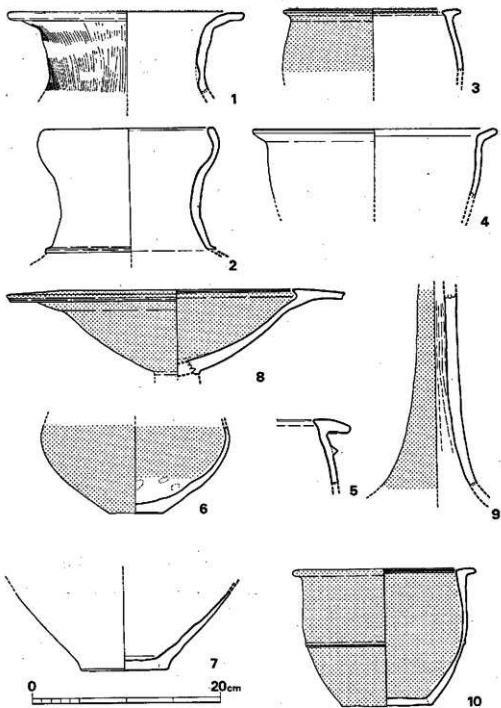
第46図 II-A D6溝出土支脚実測図(縮尺1/4)



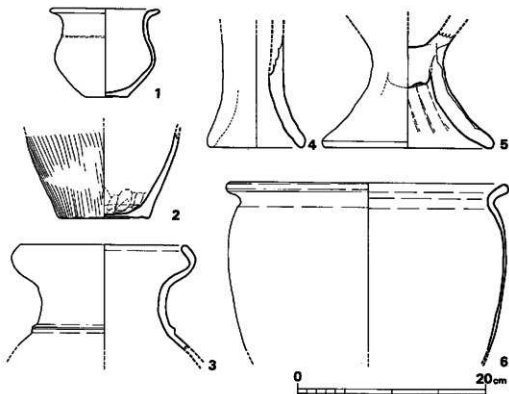
第47図 II-A 南・北ピット出土土師器実測図(縮尺1/3)



第48図 II区 D6・D7・D8・D9 掘土層断面実測図 (縮尺 1/30)



第49圖 II-B D6 講出土弥生式土器尖刺圖 (縮尺 1/4)



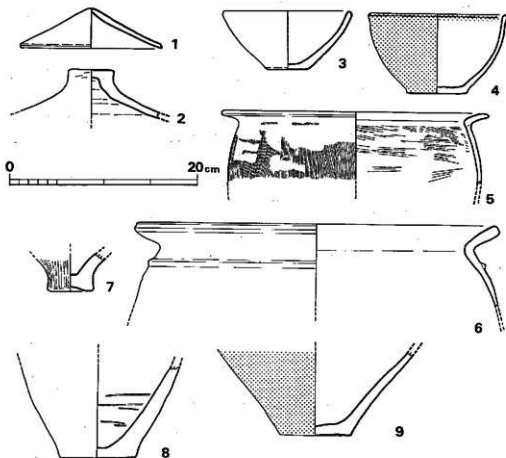
第50図 II-F D7溝出土弥生式土器実測図(縮尺1/4)

層の砂網でしかない。この第7層も地山の低い北側へ流れており、流路としてD6溝の生きていた期間は短かったようである。

第49図(図版54-7~12)の弥生式土器は、この溝から出土した。弥生中期中頃以降の土器である。D7溝、D9溝出土の土器を合せても後期初頭頃までの溝と言えよう。

D7溝は、II-F・B・C区にまたがった東北流する細い溝である。D7溝は、II-B区に於て、D6溝に合流している。II-F区で上流の部分が先細くなって消えているのは地山が削りとられたためである。流路の幅は広いところで1.0m、深さは、深いところで0.6mほどである。第48図2は、II-F区での上層断面実測図である。ここで、この溝も他のII-F区の遺構と同様、整地土層上面から掘り込まれている。第50図(図版61-1~5)は、この溝からの出土した土器である。

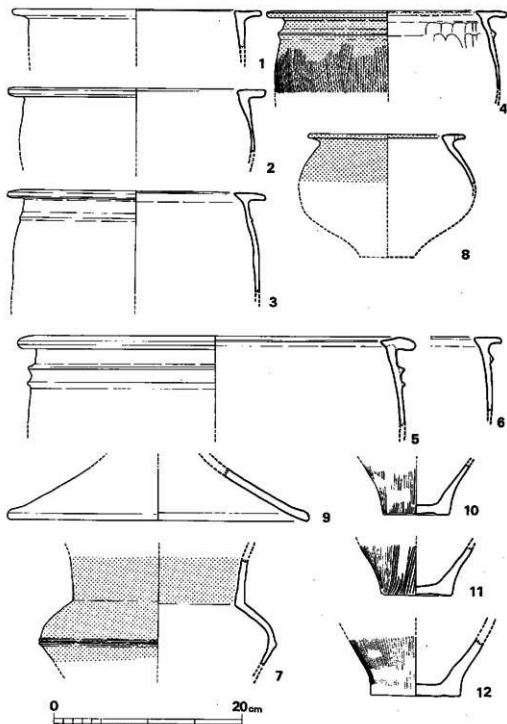
D8溝は、II-H拡張区で検出したが、拡張区の北壁から出て又北壁の中に入ってしまう発掘区のなかでは短い遺構であった。第48図3は、D8溝の断面図である。流路の幅約1.0m深さ0.5mほどであった。この中より第51図(図版61-6~14)の土器が出土した。



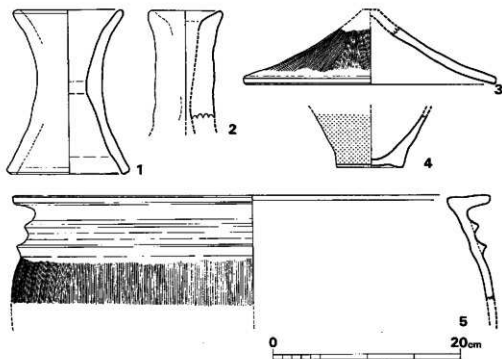
第51図 II-H・D 8溝出土弥生式土器実測図（縮尺 1/4）

D 9 溝は、II-H・I 区の東北流する D 6 溝につながる流路である。D 6 溝の 1 部でありながら、流れる方向の差異があるために図版 15 一下に見えるように下層には土器が留っているが上層では、溝の機能を失って砂流を東北方向の谷へと運ぶ浅い広い流れに変わっている。

第 48 図は II-H・I 区の駐時での D 9 溝土層の実測図である。これによると、整地土から掘り込まれた溝の埋土には 2 層あるが、この土層の灰黒色砂質土層がしだいに下流で拡散する。第 52 図（図版 60-4~10）第 53 図の弥生式土器が出土した。



第52図 II-H D9 溝出上赤生式土器実測図その1 (縮尺 1/4)



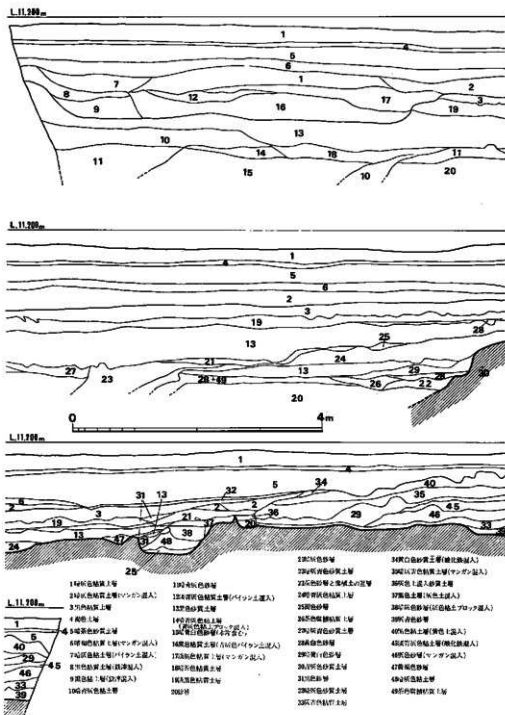
第53図 II-H D9溝出土弥生式土器実測図その2 (縮尺 1/4)

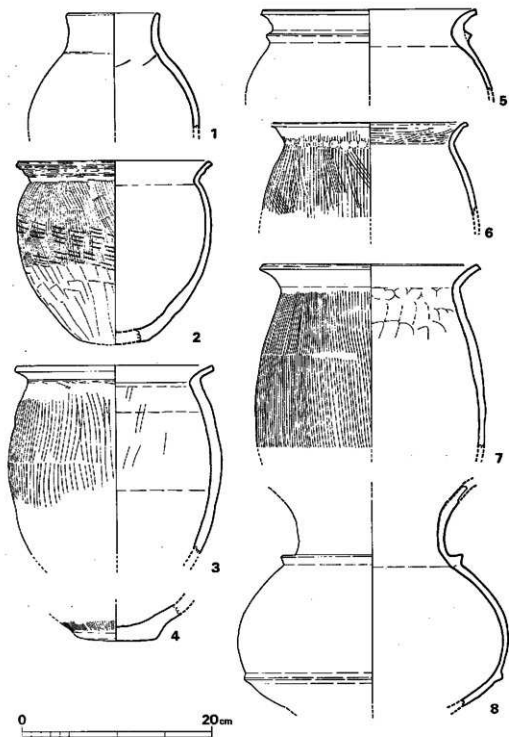
3. 溝遺構の調査

前項で、D5・D6・D7・D8・D9までの溝を含めて居住地域の遺構として記述してきたが、この地域での溝遺構は、すべて小丘陵上の生活の推移を伝えている資料と判断したからである。これに比較して、I区の溝の場合、出土遺物は、居住地域の生活を繁栄するものであるが問題を水田遺構との関係に推移させる必要がある。

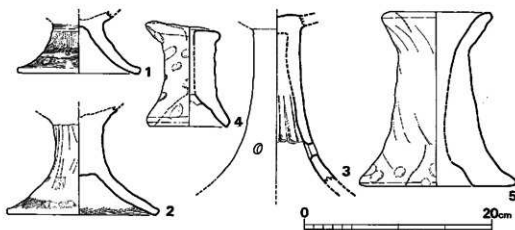
まず、水源に近いⅢ-U区のD11溝の結果を報告し、I区における主要な溝遺構へと報告して行くことにする。

D11溝(図版20一下)は、Ⅲ-U区に幅5m、長さ25mのトレンチを宮ノ前遺跡との間の谷に設定した。調査開始した頭初には、Ⅲ-U・V区をあわせてD11溝の平面的な景観を調査したいものと考えたが、湧水量の多さと排水量の多さとで断念せざるを得なかった。このトレンチは、毎日朝9時に排水ポンプ3台をかけて11時に排水を終了し下層に掘り進むような工程をくりかえしたが、湧水によって壁の崩壊が連日ようになってきたので、深さ2.5mほどのと





第55図 III-U D11溝出土赤生式土器実例図その1 (縮尺 1/4)



第56図 III-U D11溝出土弥生式土器実測図その2 (縮尺 1/4)

ころまで調査を止めざるを得なかった。しかし、このトレンチからは、弥生時代から歴史時代にかけての興味深い資料が得られている。

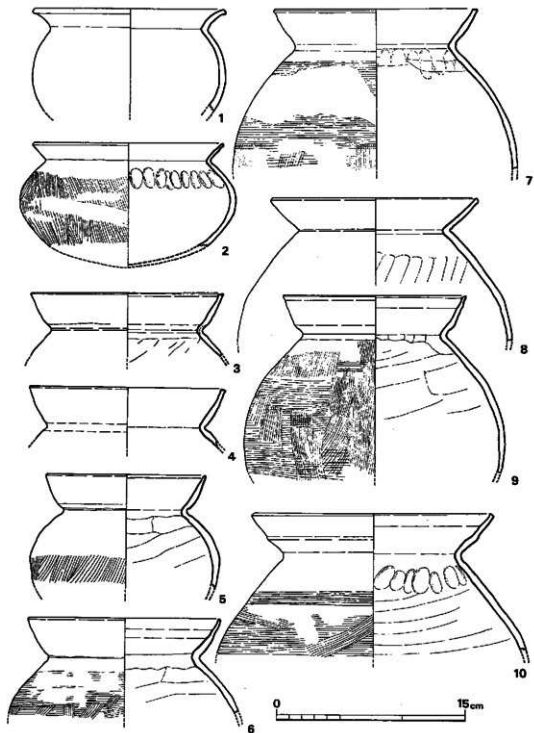
第54図は、このトレンチの上層断面実測図である。この谷の埋められて行く過程を一応理解出来るところまで調査し得たように思う。

まず上層の水平堆積の層下で、歴史時代の溝、 $8 \cdot 9 \cdot 16 \cdot 17$ 層が、幅6mほどの溝であったことを示し、第59図(図版63-5~10)に見える土器が出土した。この溝の上部では、少量ではあったが鉄滓などの出土を見ている。10・13層には、比較的遺物の包含が少なかった。この下部で土師器、弥生式土器や石鏃などが出土したが土層での分離は出来ていない。

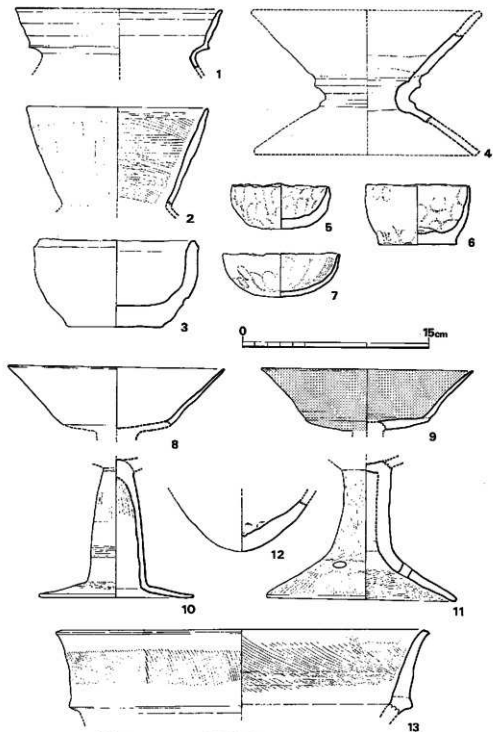
第55・56図(図版62-9~12, 63-1~4)は、弥生後期とくに終末期の宮ノ前Ⅱ式に近い土器である。これとまじって、第57・58図(図版64・65)の土師器が出土した。この土師器は、Ⅱ-A区より出土した土師器よりも1つ古いものと想定される。さらに、第59図は、縮小された溝からの出土した土師器、須恵器ですでに削平の終了した南のつづじヶ丘住宅側か熊野神社の丘腹部に奈良時代の遺構があるであろうことを思わせた。

なおこの谷の横断は有史以前からの運動であって、後に述べるD12溝中につながるものと推定される。

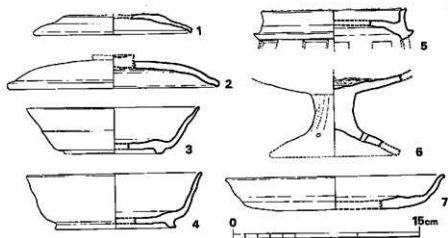
I区には、D11溝の谷水の流路の主要なものが4条ある。D1・D2・D5・D12溝がそれである(第60図)。D5溝については、Ⅱ区についてのみ記したので引きつづきD流路をおうことから始めたい。D5溝は、I-ZA36区に始まる。第62図2の土層断面実測図は、



第57圖 Ⅲ-U D11講出土土師器実例図その1 (縮尺 1/3)



第58圖 III-U D11清山土師窯実測図その2 (縮尺 1/3)



第59図 III-U D11溝出土土器実測図(縮尺1/3)

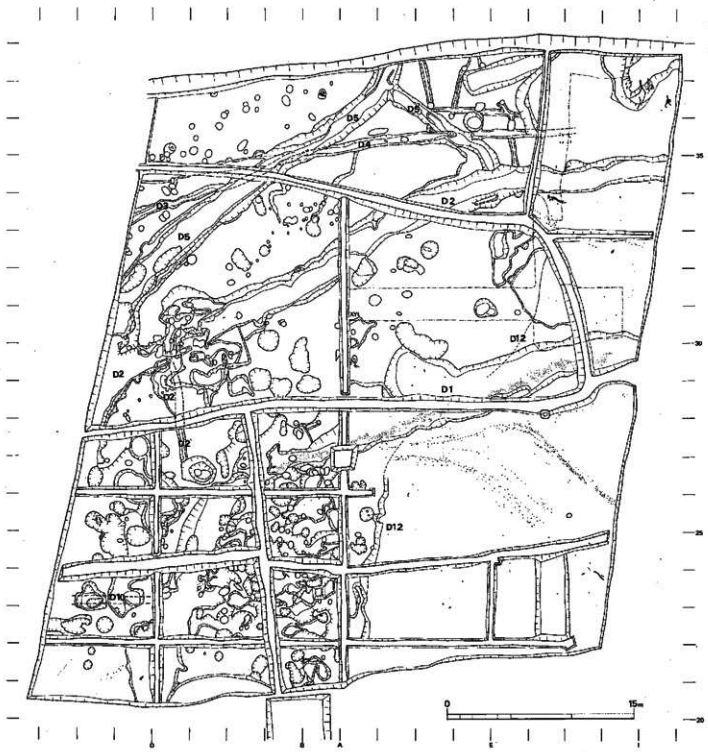
この区での道路側での土層図である。II-A区の土師器層だけが上層にあり、この場所でD5溝と流路を分かっている。これをD5'溝と呼ぶ。D5溝(図版21・29・30)は、南東方向に流路をとりI-Y区で南壁に消えている。第62図3は、I-Y区西畦畔でのこの溝の土層断面実測図である。この地点でD3溝が上層にある。この付近でのD5溝は、地山が南側でひくくなっていて、幅3.2m、深さ0.8mほどとなっている。第62図4は、I-Y区南壁の土層断面実測図であるが、この場所以南では地山より低くなりたれながしの状況になりつつある。第61図(図版66-1, 2)は、この溝から出土した弥生式土器である。中期の弥生式土器が若干まじるが、おおかたは、後期の弥生式土器である。第63図は、D5溝がY区に入ってオーバーフローをしたときの土器である。流砂の広がりから、この溝の土器との判断をした。土師器が主であるが、弥生式土器もまじっている。

なお、この溝のI-Z区の底で木製品が出土した。この部分はたまりのようになっていて第61図1・2は、ここからの出土した土器である。

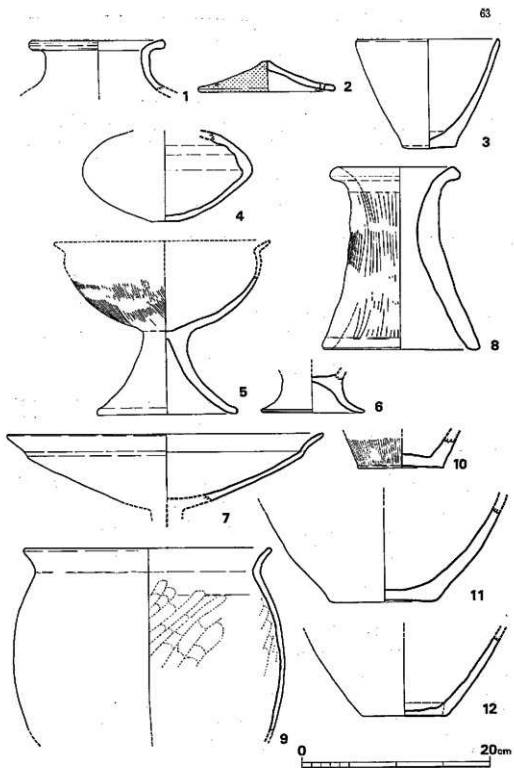
D5'溝は、D5溝と分かれて、北東流しD2溝にI-Z区の網で合流している。溝の幅1.2m、深さ40cmを計る。第64図1はこの溝の断面実測図である。砂によって埋められた溝で土師器片が数点出土したがII-A区でのD5溝の土器と変化はないので除いた。D4溝(第60図、図版13-1上)は、I-X・Z区で検出され流路を南にとる。D5'溝を切りD5溝を切っている。

出土遺物はなにもない。幅80cm、深さ25cmほどである。第64図2のI-Z区北壁の部分では、幅70cm、深さ20cmほどとなる。さらに、I-X区では、堆積土中にこの溝が掘られているため流路の方向をおさえるのに留まっている。

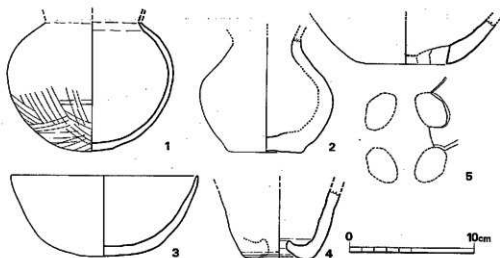
D4溝の時期は、D5'溝を切っていること、D3溝に切られていることから古墳時代の前半以



第 60 图 D1·D2·D3·D4·D5·D5' 沟位置图 (缩尺 1/300)



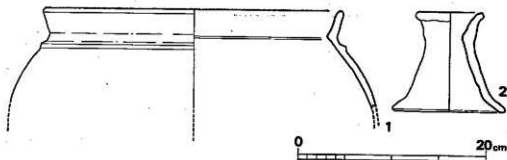
第81圖 I—Y·Z D5 清州土弥生式土器実測圖 (縮尺 1/4)



第63図 I-Y D5溝出土土器実測図(縮尺1/3)

後から、奈良時代の間におさえることが出来る。

D3溝(第60図, 図版21)は、I-X区から、I-Y区に南方向の流路をとる細い溝である。埋土のなかに赤紫色の独特の土層があったために**D5**溝の上でも容易に検出することが出来た。第64図3は、I-Y区南壁でのこの溝の土層断面実測図である。溝幅0.6m、深さ0.3mほどである。このなかから、第65・66図の弥生式土器と須恵器が出土している。**D2**溝(第60図, 図版21・26・27)は、**D5**溝の東側でほぼ南北に流路をとりI-X・Y・Z区を流れている。地山を横ぎる部分I-Z・Y区では、溝を検出しやすかったがI-X区では、溝側に打ちこまれた杭と流路に入っている木質とから、流路であると判断出来た(図版26)。この溝は、I-X区からI-Z区に入る部分まで南流し、古墳時代には、**D5'**溝を合わせている。この合流点付近から流路を東南方向にかえてY030付近で時期により流路を変更する。第67図は、この溝の土層面実測区である。1はI-Z区北壁での状況である。同じ堆積土を流路の肩に持ちながら、西層が良い状況で残っているのに対して東層ではみだれが目だっている。2は、I-Y区西壁での土層断面実測図である。南肩が地山になっていないのは、X・Y区の31ラインに設定したXYトレンチで弥生時代以前の大きな落込みがこの部分にあるためである。3は、I-Y区30ラインでの土層断面実測図である。本来の**D2**溝は、東南に流れている。この流れの中に第69図4の高坪があった。また、この溝が埋って行く過程でなにかの作用によって流路が東へと変化している。この溝を**D2'**溝と呼ぶ。**D2'**溝の中からは、3の付付鉢、9の壺が溝底から見つかっている。**D2'**溝の幅や深さは、計測しにくいがい-Y区東壁で幅3.0m、深さ0.4mほどである。この流路の木質を検出する以前に土師器を含む土層が10~20cmほど部分的であった。この土



第65図 I-Y・Z D3 彌州土弥生式土器実測図 (縮尺 1/4)

層はYD30区付近では、土師器の溝として独立してD2'溝の流れの方向を暗黙して東流しI-W区に続いている。この溝をD2'溝と呼ぶ。D2'溝は東流するさいには幅0.6m、深さ0.2mほどになっている。D2'溝は、Y030付近で砂のたまりとなり、第69図1・2・4の土器と第132・133図の滑石製横造品と玉類を共伴している。第69図(図版67-1~4)はこの溝から出土した土器であり、第70図(図版67-5~12)はYA30・YA31・YB30・YB31区に見られこの溝がオーバーフローしたと判断した土器である。

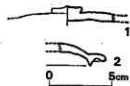
D1溝(第60図、図版23・24・25・26)は、I-Z区東端からはじまりI-Y・V・W・T区を流路としている。この溝は、木質が多量に入っており、土器類は、ほとんどないような状況であった(図版23-上)。木質をとり除くと溝の東壁に沿って径1.0cmほどの竹が無数にさしこまれてあった。抜きとって見ると土中にさし込まれた1端は鋭くとがらせている。非常にもろく変質しているために図版26-2は、8cmほどの長さの割竹を竹痕跡を認めた位置に立てて撮影した。

第71図は、I-Y区北壁でのD1溝の土層断面実測図である。この部分では溝の幅は3.2m、深さ0.6mほどである。堆積土中の溝である。なお、この溝は、I-W区では、青灰色粘土の地山を掘りこんで東流している。

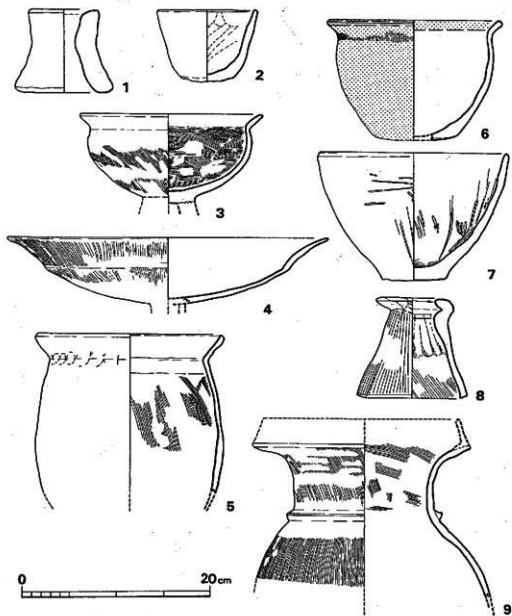
第72図(図版67-13~15)は、この溝から出土した弥生式土器であり、第73図(図版67-16)は、この溝の木質層の上で出土した土師器である。

D10溝(第60図)は、I-T区ではほぼ南北に流路をとる。溝の幅は0.7m、深さ0.2mほどで南流していたものと思われる。第74図(図版68-1)は、この溝から出土した須恵器の皿である。内側を硯として使用しており、裏面には「第公」の墨書銘がある。

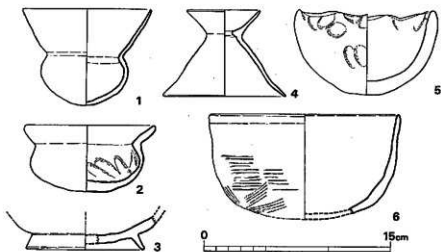
なお、この溝の下層に地山に掘られたE9土壌が検出されて



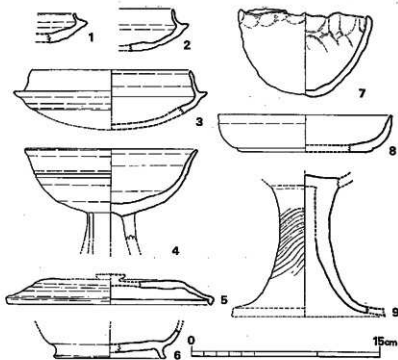
第66図 I-Y・Z D3溝出土須恵器片実測図 (縮尺 1/3)



第68图 I—Y D2 满出土弥生式土器实测图(缩尺 1/4)



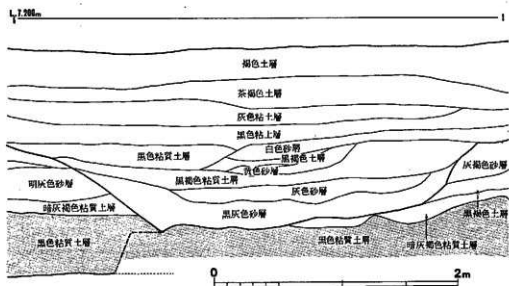
第69圖 下層 I—Y D2 溝出土土器実測図 (縮尺 1/3)



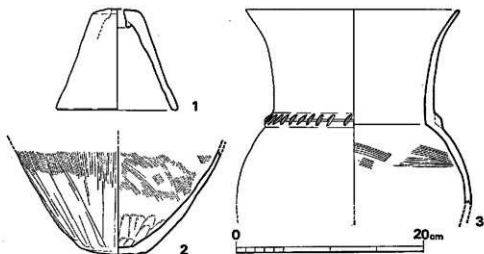
第70圖 I—Y D2 溝出土土器・須恵器実測図 (縮尺 1/3)

いるが、E9土壌については、前に記しているのではよくが第75図は、E9土壌出土の弥生式土器である。

以上が、弥生時代以降の溝の大要であるが、さらに縄文時代の溝が検出されているのでそれをD12溝として報告する。I-Y区の北側では地山が検出されていない。この部分にD1・D2溝などが掘られている堆積土があり第4次調査の実測が終了した後に31ラインを中心にして東西へ1.5mずつ幅3mの南北トレンチを設定した。この結果YB30で西から東北方向にのびる



第71図 I-Y D1溝土層断面実測図 (縮尺 1/30)

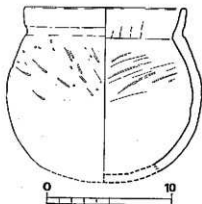


第72図 I-Y D1溝出土弥生式土器実測図 (縮尺 1/4)

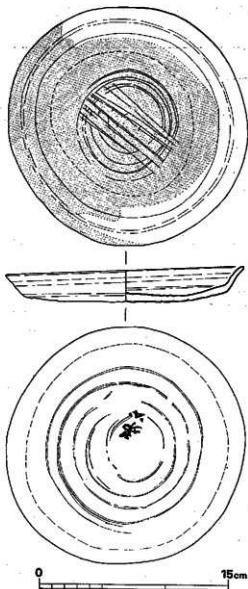
幅3.0m深さ、1.0mほどの落込みとYB30で木質といっしょに北側への落込みが発見された(図版31-1)この落込み以北の土層断面実測図が第76図である。

この部分で腐蝕土層をとり除くと砂層にあたった。腐蝕土の下2層ほどから、第93図の縄文前期の壺式土器が十数片出土した。さらに南側の斜面にドングリのピットが北半分は砂層を利用して掘られているのが見つかった。このドングリは、4〜5合ほどこのピットのなかに入っていた。さらに土層断面に、みなつぶされた

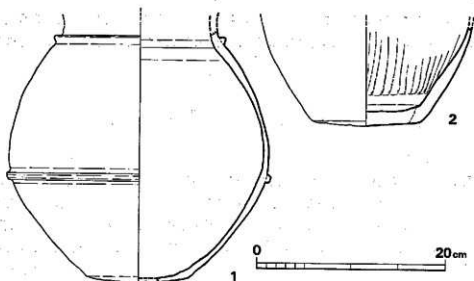
ドングリのピットが砂層をほり込んで作られているのが見つかった。このドングリのピットに南のものをH1、北のものをH2と呼ぶこととした。図版31一下は、H1ピットのドングリの出土状況である。H1ピットは、径0.6m、深さ0.15mほどの大きさであった。H2は、断面だけであるが平面形が円形とすれば、H1ピットとほぼ同じ大きさになる。湧水にさまたげられて2mの深さまでこのトレンチの調査を断念したが北側で地山をつかむことに成功した。この断面の溝をD12溝と呼ぶことにしたが、D12溝は、I-X区北壁では、浅い位置で地山をつかんでいるので第60図の西南すみの立木の根の残された地山部分の東側を遡ってD11溝の水を東流させていたもの



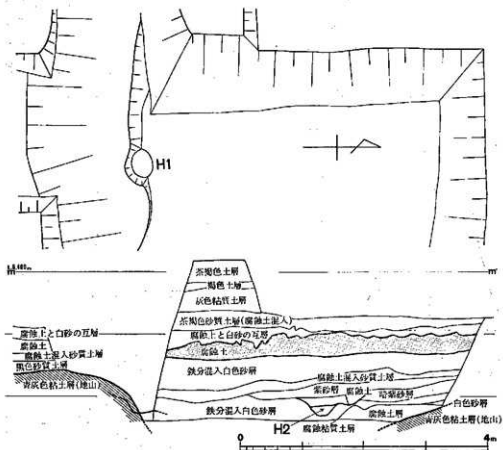
第73図 I-Y D11溝上層出土土器実測図 (縮尺 1/3)



第74図 I-W D10溝山土須恵器実測図 (縮尺 1/3)



第75図 I-T・Y E9土山出土弥生式土器実測図(縮尺1/4)



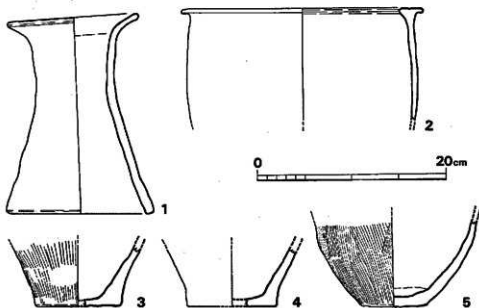
第76図 I-X・Y H1・H2 XYトレンチ縄文時代ピット実測図

思われる。さらに、I-U・V区では、G7杭列の東端で地山が出ており(付図第5図C断面図)、またAラインの北側で南側の肩が出ているので、上辺の幅17mほどの大溝があったこととなる。

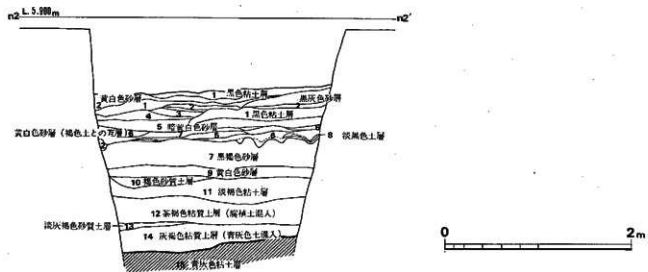
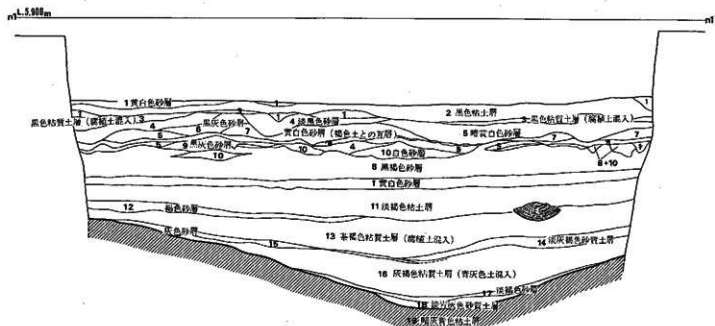
4. 水田地域の調査

(1) 杭列の調査

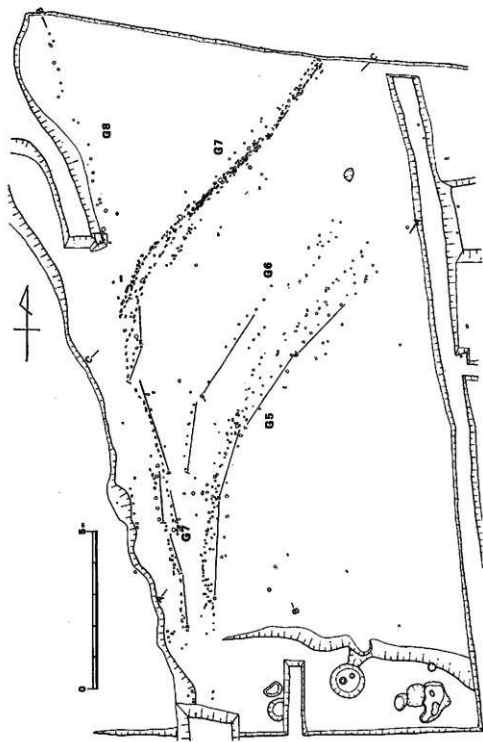
杭列の説明に入る前にI区においての土層の概略から報告する必要がある。付図第1図は、Aラインでの土層断面の模式図である。西からI-Z区では、D5溝、D4溝の断面がかかるがいずれも地山上で遺構が検出されている。畦畔を越えるI-Y区でD2溝がかかるがその西側は、堆積土であり東側は、あふれた状況をしめしている。Y区の東半では、遺構面としてとらえ得るような面は、地山の上の堆積にはない。I-V区では、D1溝も、D2溝同様の状況を示している。D2溝では、地山面に溝底がくい込んでいる部分に木質があったがD1溝では、木質はあふれ出すような状況にあった。D1・D2溝を、この土層図から、判断するとD1溝の方が古く置かれることになるが、出土遺物からその差を言えるほどではないようだ。I-S区あたりから、XYトレンチにみられた腐蝕土層がうすく入りはじめる。XYトレンチでは、阿高式土器が腐蝕土中より出土している。これは九州大学坂田武彦先生の放射性炭素による年代測定B C 3910±120年と測定して頂いたのが遺跡遺跡の場合、この土層までの調査を実施すれば水



第77図 I-S~Z 弥生式土器実測図(縮尺 1/4)



第 78 図 I-S トレンチ上層断面実測図 (縮尺 1/40)



第79图 I-U-V 杭州平面示意图 (比例 1/120)

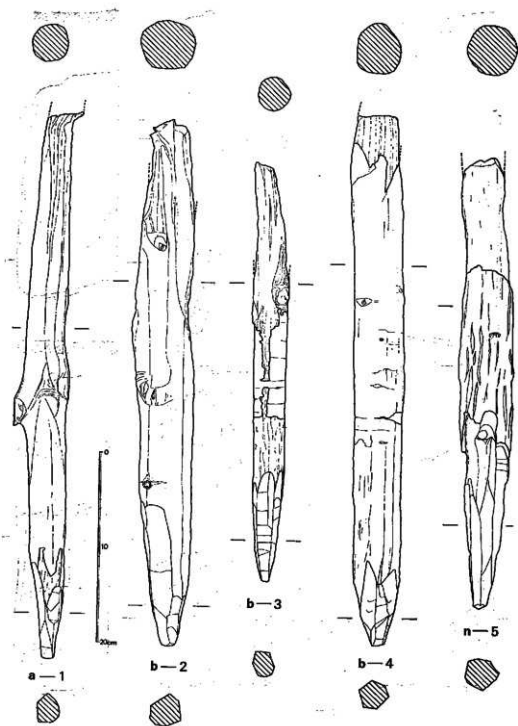
田遺構の問題を一応チェック出来たことになる。S区で地山の東半で地山はつかめなくなるが、1トレンチ・2トレンチとも、この土層までを断ち切ることを主眼に調査を進行した。腐蝕土は一応、うすくなりながらも、このトレンチ全部に行きわたっていた。もう1つこのトレンチの設定したねらいには、十郎川の河床への落込をつかむことであったがI-T区の原点より東115mの地点で腐蝕土層の下でつかむことが出来た。

第78図は、I-S区に設定したトレンチの上層断面の実測図である。D12溝のこの部分での溝底をとらえることが出来た。底の状況から流路を推定することはむずかしいが、南東流しているものと判断してよい。いずれにせよ、I-R・S・U・Vに於ての土壌の大部分は、D12溝の堆積土である。

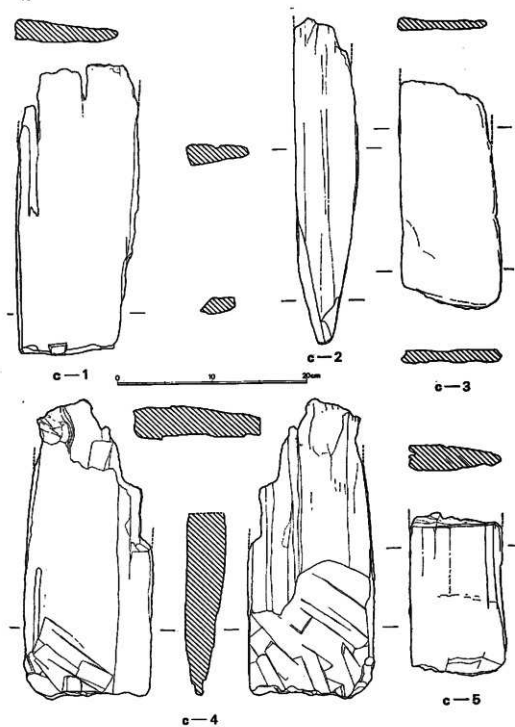
第5次発掘調査で検出された杭列は、G5・G6・G7・G8・G9・G10の杭列である。このうち、G9・G10は、I-T区で検出された丸太材を使用した杭列である。G9杭列は、D1溝の護岸材の役があったように判断される。G10杭列については、たれ流し状態になったD1溝に関連したものかもしれない。

G5・G6・G7・G8杭列(第79図)は、D12溝の埋土部分で土層の一番弱い地点に打ち込まれたものである。時間的な前後の関係もあるものと思われるが調査によってその前後関係はつかめていないが、この地点に約500本もの多くの杭が打ち込まれた理由については次のような推論がなされる。溝遺構を単に排水路として利用するだけならば、この地点で杭を沢山打ち込む必然性はまったくない。D11溝から流れてくる水をD12溝の水路をそのまま利用して東流させることが一番合理的な排水であると地形上判断される。にもかかわらずD1・D2・D5などの溝は、東にはり出している丘陵末端部の地山をわざわざ掘り込んで南から南東方向へ流路変えている。そこでこの杭列は、これらの溝のある丘陵末端部を陸地化しておく必要があり、この陸地化しておくために打ち込まれたものと推定した。この目的の役割を適切にはたしている杭列はG7杭列である。G7杭列は、南側の地山の部分から北側の大林遺跡側の地山のある部分まで強状にならべられている。杭の約半数が使用されている。これが最初の杭列ではなかろうか。また、この杭列の東側は低湿地である。この低湿地が水田耕作するのに適当であったかどうかは問題であるが、潟納遺跡の居住者にとっては、水稲耕作の場所はここであろう。従って杭列は、水田と陸部の境界の役割もはたしていたものと思われる。D11溝に集められた谷水は、なんとなく、この地盤の弱い部分の杭列に向ってあふれ出し、潟納遺跡に居住した人々は、その部度杭列を補強しなければならなかったものと思われる。密集した杭列は、D11溝の谷が歴史時代になって埋まり、I区で潟納遺跡と大林遺跡との間の地盤が安定するまでこの仕事はつづいたものではなかろうか。

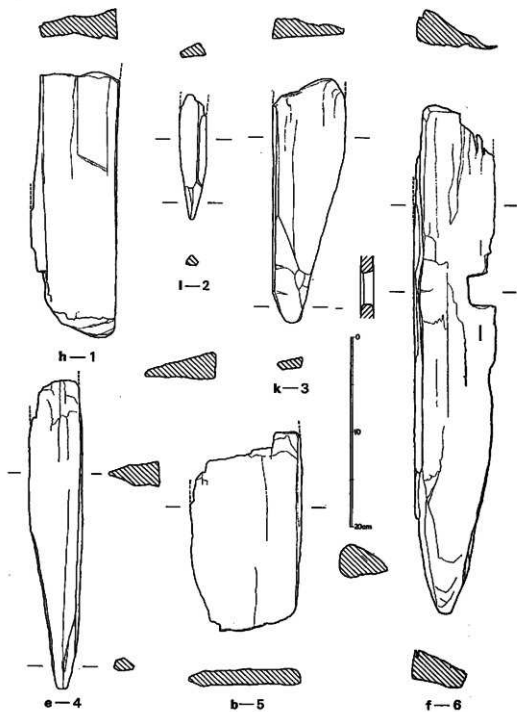
こののち、丘陵部で土師器の出土している溝は、順次やせてきている。D2'溝などは好例



第80圖 I-U・V 丸太材実態図 (縮尺 1/4)



第91圖 I-U・V 矢板・羽材実測図その1 (縮尺 1/4)



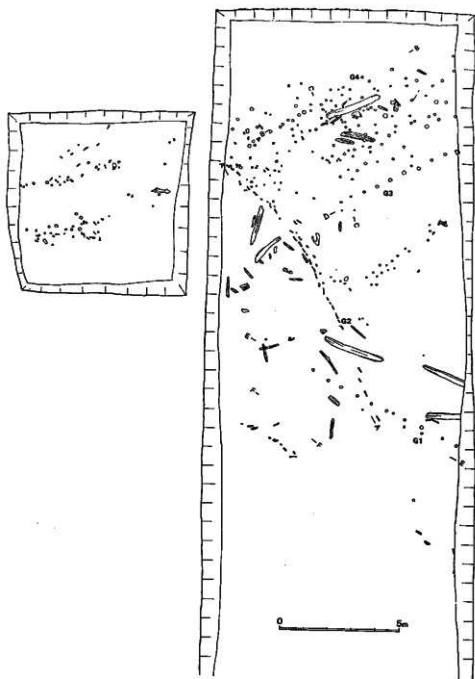
第82圖 I-U・V 矢板・箭材実測図その2 (縮尺 1/4)

第3表 第5次調査出土統計調査表

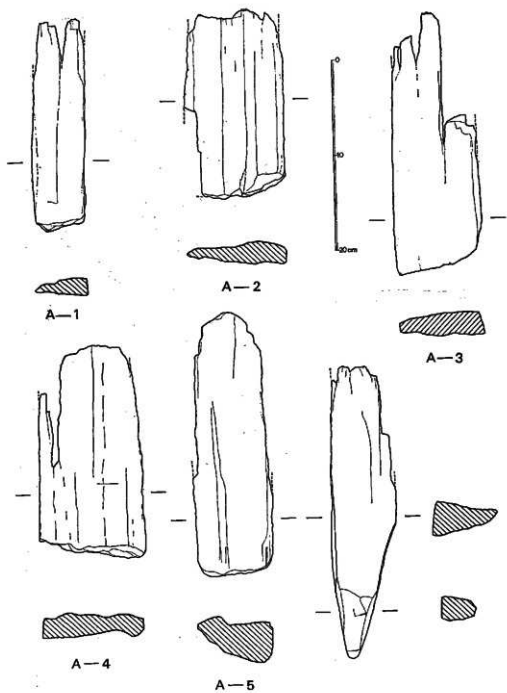
分類	図版番号	現在長	幅	削り幅	根の方向	皮	備 考
丸木杭	a-1	57.8	4.0	10.0	上	有	
	b→2	55.7	5.5	15.2	上	有	
	b-3	44.4	3.2	11.0	上	有	
	b-4	55.9	5.0	9.0	上	有	
	a-5	47.7	5.5	21.0	上	有	
割材1(割材)	C-2	34.6	6.7	12.5	不明	有	面取りをしている。
	e-4	32.7	5.2	16.7	不明	現無	
	k-3	26.0	7.7	17.0	不明	現無	面取りをしている。
	f-6	53.8	8.5	15.0	不明	有	3.0cm×3.0cm程度の狭りがある。
	l-2	13.4	2.5	5.5	不明	有	面取りをしている。
割材2(欠板)	C-1	30.8	13.0	—	—	現無	
	C-3	24.3	11.0	—	—	現無	両面を削って先を少し尖らせている。
	C-4	31.7	13.5	—	—	現無	幅2.1cmの刃物痕がみられる。
	C-5	17.0	10.0	—	—	現無	「両面削り」70°の角度をもって先を尖らせている。
	B-5	21.2	11.8	—	—	現無	両面削って先を少し尖らせている。刃物の痕は不明確。
	h-1	28.0	9.0	—	—	有	

第4表 第7、8次調査出土統計調査表

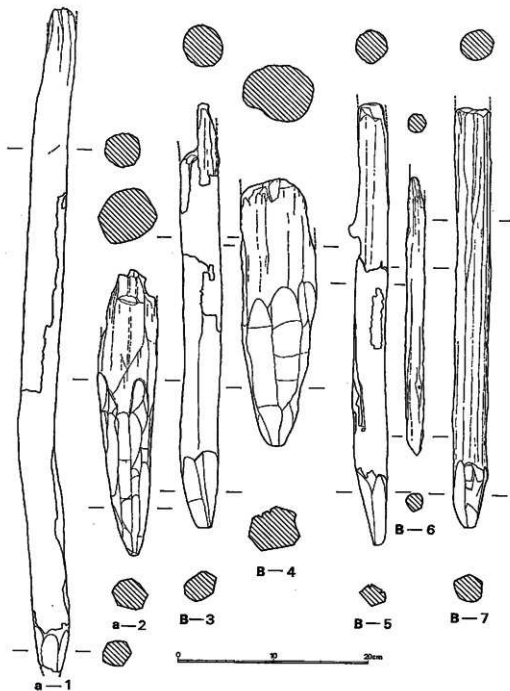
分類	図版番号	現在長	幅	削り幅	根の方向	皮	備 考
丸木杭	A-1	70.0	3.7	4.7	不明	有	全面削り
	A-2	30.5	6.2	15.1	不明	現無	全面削り
	B-3	45.2	4.0	8.2	不明	有	全面削り
	B-4	28.4	10.0	17.5	不明	現無	全面削り
	B-5	46.4	3.4	8.0	上	有	片側を削り一部に自然面を残す。
	B-6	24.7	2.0	3.0	上	有	摩擦がひどく、不明確ではあるが、片側を削る。
	B-7	44.5	3.5	7.0	不明	有	半分削るることによって先を尖らせている。
	E-1	39.3	5.5	20.0	不明	有	半分削るることによって先を尖らせている。丁寧な削り。
	D-2	24.2	4.8	5.7	不明	現無	いたみがひどい。全面削り。
	D-3	32.8	4.8	15.4	上	有	いたみがひどい。全面削り。
	D-4	28.3	4.3	11.5	下	現無	いたみがひどい。全面削り。
	D-5	35.3	4.6	13.0	不明	有	片側を削り一部自然面を残す。
	D-6	32.7	5.5	13.5	不明	現無	全面削り。
	D-7	37.5	4.0	8.0	上	現無	全面削り。
割材1(割材)	209	31.1	7.0	14.2	不明	有	芯部を大きく削り、皮面を少し削りだしている。
割材2(欠板)	A-1	22.5	5.4	—	—	現無	いたみがひどい。
	A-2	19.8	10.6	—	—	現無	一部に刃物痕がみられる。
	A-3	27.7	9.3	—	—	現無	芯部を切断して面取り。
	A-4	22.6	11.0	—	—	現無	芯部を切断して面取り。
	A-5	28.2	8.5	—	—	現無	いたみがひどい。



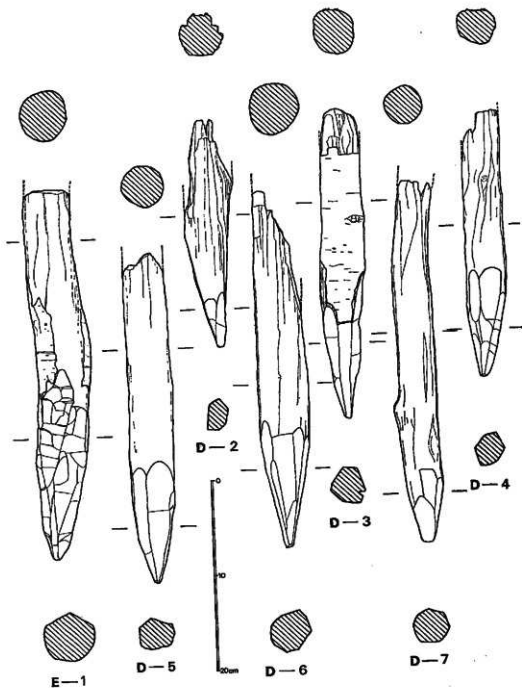
第83図 I区 第4トレンチ 杭列平面実測図(縮尺 1/60)



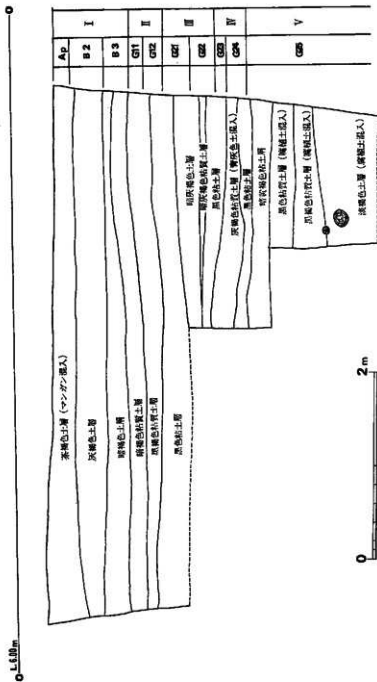
第84図 1区 第4トレンチ出土 矢板羽材実測図 (縮尺 1/4)



第85圖 I区 第4トレンテ丸太杖実測図その1 (縮尺 1/4)



第86回 I区 第4トレンチ丸太杭実測図その2 (縮尺 1/4)



土壤柱状図

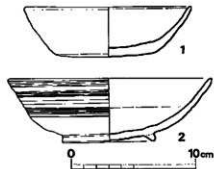
第87図 I区 2 t北レンチ土層断面実測図 (縮尺 1/40)

と言えよう。この時期になってG5・G6の杭列が打ち込まれたのではなからうか。G8杭列は、堆積土が安定した時期、D10層が掘られたところに推定出来ないだろうか。

G5杭列は、その断面図(付図第5図a・b・c・d)から見ても杭の間隔は粗であり、使用されている杭も丸太材を使用している。

G6杭列(付図第5図f・g)は、さらにこの傾向が強い。G8杭列(付図第5図B北半)も同様の傾向がある。これに対して、G7杭列は、矢板割材を利用したもので、G5・G6・G7とは対比的であった。次に打ち込まれた杭のいくつかについて記してみたい。第80図は、丸太材の杭である。直径4~6cm程のものを使用している。a-1, b-2, b-3, b-4は、G5杭列のものである。第81図は、割板の実測図である。割板は、芯から割出しを行っている。割板の幅7~15cmほどのものを使用しているから原料材14~30cmほどのものであったろう。すべてG7杭列である。第82図は、割材の先端を尖らせたものである。大きさなどは、前図の割材と差はない。f-6がG6杭列。b-5がG5杭列のものである。他はすべてG7杭列からのものである。

第7次調査の東西の5つのトレンチを設定した最大の理由は、この場所でも弥生時代の水路なり畦畔なりの遺構をさぐりあてることにあった。結果的には、水田遺構を直接証明する資料の発見は出来ていない。が、九州大学農学部青峰重範先生に調査をしていただいた第2トレンチの北側にあけたトレンチの土壌分析から第II土壌に揚納遺跡の水田の可能性を認めて頂いている。このトレンチの第II土壌の上面で木製鋸と投弾なども検出されており、一つの面をなしていた。第87図は、このトレンチの土層断面実測図である。右側の土壌柱状図は、青峰先生の作成されたものである。第88図2は、第2トレンチの2層で、1は、第5トレンチ東端2層で第117図6と伴出した。



第88図 I区 東トレンチ出土土層実測図
(縮尺 1/3)

G1・G2・G3・G4杭列は、第4トレンチでの杭列である。この場所での杭列は、第8次調査で発見された井堰となんらかの関係をもつものであろうが、第8次調査区と第4トレンチの間を発掘していないのが残念である。第83図は、第4トレンチの平面図である。G1杭列は、丸太材を使用した杭列でかなりの粗さで列をつくっている。G2杭列は、割材の杭列である。G3とG4も丸太材の杭列である。方向がそれぞれまちまちでありどのような目的かも理解しにくい、水田

遺構と井堰との間でなんらかの役割をはたしたものであろう。第84図はG 2 杭列に使用されていた荊板材の実測図である。A-1からA-5のように先端のとがらないもの、A-6のように先端の尖ったものの2とおりがある。幅5~11cmほどである。第85図は、丸太材の杭の実測図である。G 4 杭列に使用されていた。直径2cmほどのものから8cmほどのものまでである。鉄斧による切斷の痕跡を良く残している。第86図も丸太材の実測図である。D-1から、D-4は、G 3 杭列に使用されたものである。

(2) 湯納遺跡の土壌断面の形態

調査地域は西部において高く、東部に向って低くなる緩傾斜地であり、土壌断面の形態は地域内においても位置により著しく異なっているが、第7次調査地の水田における試坑(北緯33°33'57", 東経130°18'36")の一断面について昭和47年11月28日に調査した結果を述べれば次のとおりである。

土壌断面の形態は第5表および第87図に示す如く、深さ205cmまでに4個の埋没土が認められる。即ち現在の地表面から深さ80, 116, 166および205cmに過去の地表面が存在したものと認められ、5土壌が重なっている。これらを上部から第I, II, III, IV, V土壌と呼ぶ。

これらのうち第III, IV, V土壌には多量の泥炭片が見出され、116cm以下は低湿地であったことを示している。他方、土壌無機物の組成は、第2表に示す如く粒径組成は層位によって著しく異なるが、一次鉱物はいずれの層位も石英と長石を主成分とし、少量の雲母片を含んでいる。

また二次鉱物はカオリナイトを主とし、これに少量のイライト、ヴェミキュライト、クロライト、アルミナ質ヴェミキュライト、クロライト・イライト混層鉱物を混じっており、層位間に鉱物組成の相違はほとんど見られない。これらの組成は背後地の花崗岩質土壌の鉱物組成によく類似し、また上層は水成沖積であることから、本土壌は、洪水により背後地から流出した土砂が堆積し、土壌の埋没を繰返して生成したものと想像される。

土壌断面の形態は第5表に示す如く、乾田土壌の形態を示す層位は深さ80cmまでの第1土壌のみであり、それ以下の土壌には乾田の特徴は全く認められない。そして第III土壌以下は低湿地土壌であり、イネを栽培しなかったとは断言できないが、栽培したとしても灌漑する必要は恐らくなかったであろう。これに対して第II土壌の埋没土は現在ではグライ化しているが、泥炭片はなく、有機物の腐植化はよく進んでおり、この土壌が埋没される前、即ち深さ80cmの地面が地表面をなしていた時期には低湿地ではなかったものと推定される。従ってこの土壌でイネを栽培したとすれば、灌漑を要したであろう。灌漑を行なったとすれば土壌断面の形態に特徴が現われたと思われるが、現在の第II土壌にはその特徴は全く認められず、(1)灌漑を行なわなかった。(2)灌漑によって生じた断面形態の特徴が埋没後のグライ化作用によって消失したの二つの可能性がある。

以上要するに、調査した土壌の埋設土において灌漑してイネを栽培した確証は得られなかったが、深さ80cmを地表面とした時期においてその可能性を否定することはできない。

これを追究するためには、土壌の物理、化学的調査よりもこの層位の水平的拡がりを調査し畦畔、水路の有無を調査することが有効であると考ええる。

第5表 土壌断面の形態

(33°33'57" N, 130°18'36" E)

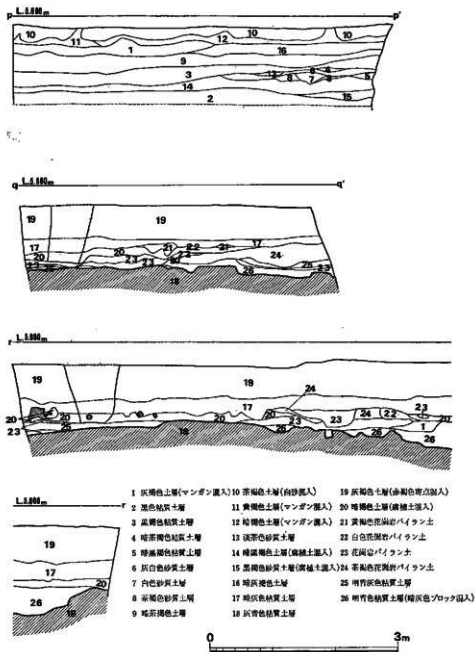
Ap	0-17cm	黄褐灰 (10YR5/2) CL、易砕性、斑鉄僅少、下層位との境界明瞭
B ₂	17-53cm	黄褐灰 (10YR5/1) SCL、発達不十分な大団塊状、斑鉄やや多し、下層位に漸変
B ₃	53-80cm	黄褐灰 (10YR4/1) LiC、発達不十分な大団塊状、斑鉄僅少、粘着性および可塑性あり、下層位との境界明瞭
II G 11	80-94cm	埋設A層位、黒褐 (10YR3/1) LiC、下層位に漸変
II G 12	94-116cm	灰黒 (N3/1) SL、下層位との境界明瞭
III G 21	116-145cm	埋設A層位、黒褐 (10YR3/1) CL、泥炭片あり、下層位に漸変
III G 22	145-166cm	黄褐灰 (10YR5/1) SL、泥炭片あり、下層位との境界明瞭
IV G 23	166-185cm	黄褐 (10YR3/1) LS、泥炭片多し、下層位に漸変
IV G 24	185-205cm	黄褐灰 (10YR5/1) SL、下層位との境界明瞭
V G 25	205cm 以下	黒褐 (10YR3/1) LiC、泥炭片甚だ多し

第6表 土壌の機械組成および粘土鉱物

層位	PH		腐植 (%)	礫 (%)	粗砂 (%)	細砂 (%)	シル ト (%)	粘土 (%)	Kt	II	Vr	Chl	Al-Vr	Chl/II	Qr
	H ₂ O	KCl													
Ap	5.3	4.5	3.6	27.7	44.4	1.8	30.6	23.2	+++	+++	+	?	+	+	
B ₂	5.8	4.9	1.7	20.4	31.0	31.1	16.4	21.5	+++	+	+	+	+	+	
B ₃	5.1	4.1	4.8	10.3	21.2	28.0	23.3	27.5	+++	+	+	+	+	?	
II G 11	5.1	4.2	8.3	3.2	12.9	33.2	26.2	27.7	+++	+	?	++	+	+	
II G 12	5.2	4.4	5.4	24.1	44.5	31.4	11.01	3.1	+++	+	?	++	+	+	
III G 21	5.4	4.7	13.2	0.4	5.5	48.4	22.3	23.8	+++	+	-	++	+	+	
III G 22	5.3	4.7	3.1	22.5	62.1	6.9	17.9	13.1	+++	+	+	++	+	+	
IV G 23	5.5	4.8	13.6	14.3	22.4	67.9	5.1	4.6	+++	+	+	+	?	+	
IV G 24	6.1	4.7	5.2	14.8	24.6	56.9	11.1	7.6	+++	+++	+	++	+	+	
V G 25	5.5	4.6	20.3	0.6	1.7	29.9	34.4	34.0	+++	+++	+	++	+	+	

(乾物中)

Kt: カオリナイト II: イライト Vr: ヴァミキュライト Chl: クロライト Al-Vr: アルミナ質ヴァミキュライト Chl/II: クロライト-イライト混層鉱物 Qr: 石英 +++: 多し ++: やや多し +: 含む ? : 不明 -: なし



第89図 1区第8次調査土層断面実測図(縮尺 1/60)

5. 井堰の調査

第7次調査で出土したG1からG4杭列のだめおし調査を最終時に計画し、杭の方向に従って第4トレンチの南側に新たなトレンチを設定したのが井堰発見のきっかけとなった。井堰には多数の建築用材が転用されていた(付図第5図)。井堰は、小規模なものであるが、ほとんどすべてが、転用材と考えられるものであった。

この井堰は、なんどかの水によって建築材は、散乱しており、上部の構造などをうかがうことは出来ないが、わずかに293・294の杭で267材がまた289の杭で238材が地面に固定されていたように、277・278・279・280・281・282・283・284・285・286・287・288・289・290・291・292・293・294の杭の列(図版45-上)の間には、267材や238材が地面にとじつけられていたことを知ることが出来た。

この建築用材を井堰と考えるのは、次の理由による。

1. 地形上、この部分が一番低くて浅い谷をなしている。
2. D1・D2・D5などの流路は古墳時代になっても南東流していて、畑ケ尾遺跡と湯納遺跡との間の谷水をあわせて、この井堰に貯水されたと考えられる。
3. 建築用材にまじって5つの臼が出土したが、井堰の崩壊をふせぐ重しの役をしたのではないかと考えられそうである。
4. 出土した土師器は、古墳時代の最も古い一群の土師器であるが壺形土器を除いて粗製であり祭祀的な感じがする。

などの点である。

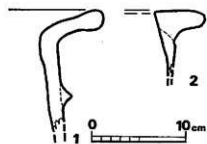
第89図は、この調査での上層断面実測図である。水によって散乱した建築用材の周囲の土層では、井堰のためにつみあげられたと思われる積土はない。

このような積土は、浅い谷には必要なかったのかもしれない。または、流出してしまったのであろう。建築用材の散乱のしかたは、西北方向からの流れによって井堰が崩壊したことをものがっているようだ。

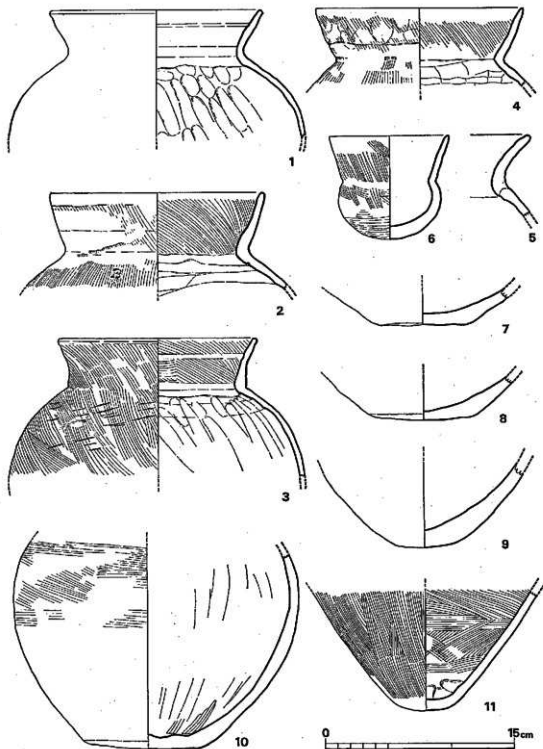
第91・92図(図版69)は、この調査で発見された土師器の実測図である。第90図は赤生式土器の実測図である。

なお、これまでにあまり伝えられている点が2~3あるがこれについて正しておきたい。

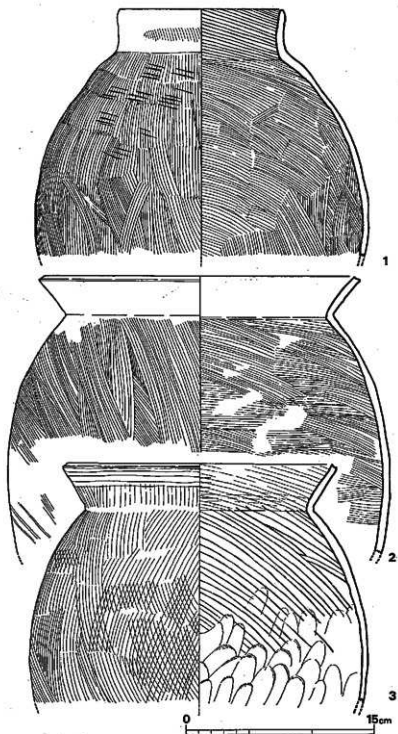
建築部材を発見した当初においては東流する流



第90図 I区 第8次調査出土赤生式土器
実測図 (縮尺 1/4)



第91図 I区 第8次調査出土土師器実測図その1 (縮尺 1/4)



第92図 I区 第8次調査出土土師器実測図その2 (縮尺 1/4)

れで運ばれた土砂の堆積と井堰の杭のならびとから考えて建築部材がこの場所に流れつき溝の側材にひっかかったもののように考えた。調査が進んでみると、溝はこの場所にはなく、土器、木器などが豊富に出土し、この考え方はあやまりであることがわかったのでここに訂正する。

また、出土した土師器について、埴のみをとらえて5世紀前半と報告したことがある。土師器の詳細については、解説篇にゆずるが建築用材の年代を決めるうえで一言ふれておきたい。この土器を、土師器としたのは北部九州で弥生終末期おかれる西新式の器形を残しながらも埴などが同一のセットとして含められそうなこと。器面に畿内庄内式土器に見られるような叩打文が残ること、一部にへう割りらしいものがあることなどにより土師器とした。また、土師器として設定された宮の前皿式などとの検討も必要であるが一応4世紀の前半に位置づけたい。

第3 出土遺物

遺構に伴わない土器や石器、一括した方が良いと考えられた木製品、青銅製品など以下まとめて概要のみを記す。なお、個々の遺物の特徴など詳細については「解説篇」によらねたい。

1. 土 製 品

土製品には縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、瓦器、青白磁類の土器類、ミニチュア土器（手づくね土器、杓子形土製品）、紡錘車、土鍾、支脚が出土している。

A 縄文式土器

第93・94・95図のものと、他に第93図1～16と同様な小破片若干で総数約70点である。

第93図1～16は前期の「縄式土器」で、I-Y区出土がほとんどである。他はその周辺であるI-Z区より6、14・15はI-U区出土である。

I-Y区のものにはI-Y区E30、31、XY tに検出された第76図H1、H2の円形ピット直上層である。8層の腐蝕土混入砂質土層、10層の紫砂層より出土している。6はI-Z区D5溝の上層、14・15は18～22の中期阿高式土器とともにI-UH25区よりで、第78図のG7杭列、付図第5図のC断面の第7層茶褐色粘質土層（腐植土混入）内より出土する。

以上のことより第76図H1、H2のドングリを内蔵する円形ピットは縄文時代前期を下らない時期のものである。また第78図の杭列は縄文時代中期より新しいものである。

第94図、第95図は晩期の夜白式土器で甕、甗、浅鉢、深鉢形土器がみられる。これらはII-A・B・C・D区出土が多く、I区X・Y・Z区でも若干出土している。II-D区に在る第5図C1号竪穴住居跡周辺ではピット内出土のものがある。

B 弥生時代遺物

遺構に伴わないものとして、I区で若干、II区の整地層内、III-U区トレンチよりかなりの量が出土しているが、ここでは特徴的なものを取り扱う。

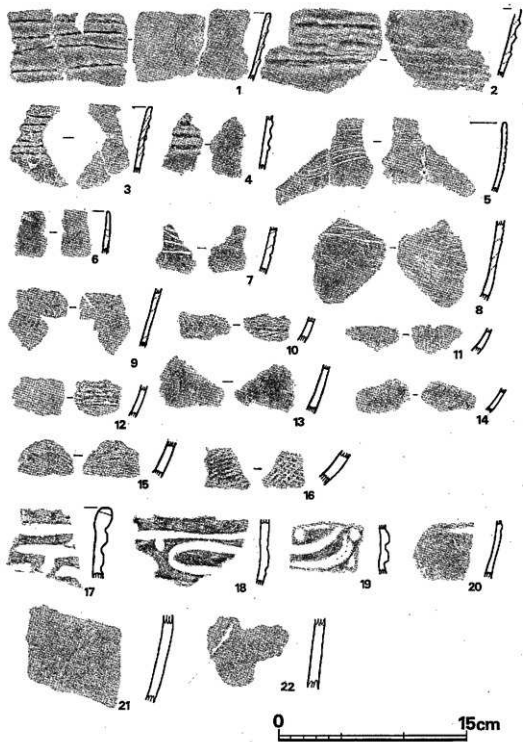
第96図は弥生時代前期の寛・壺形土器で主にI-X・Y区およびその周辺より出土しており、上層の攪乱層に混っている。他に若干図示出来ないものが存在する。

第97図は「ミニチュア土器」で甗、甕、鉢形土器を呈するものと、杓子形土製品とがある。

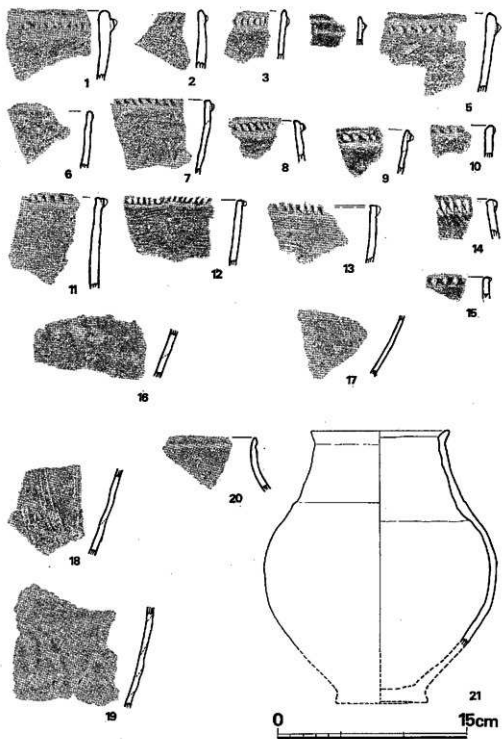
第32図のD5溝より3、5、6、12が出土しておりこれらは弥生時代中期のものと思われる。

第98図は投弾11・紡錘車2・土鍾車11で遺跡出土品としてはすべてである。投弾は、1～10の紡錘形と11の球形があり、11はII-A区D5溝より出土している。紡錘車は12の完成品と13の未完成品とがある。

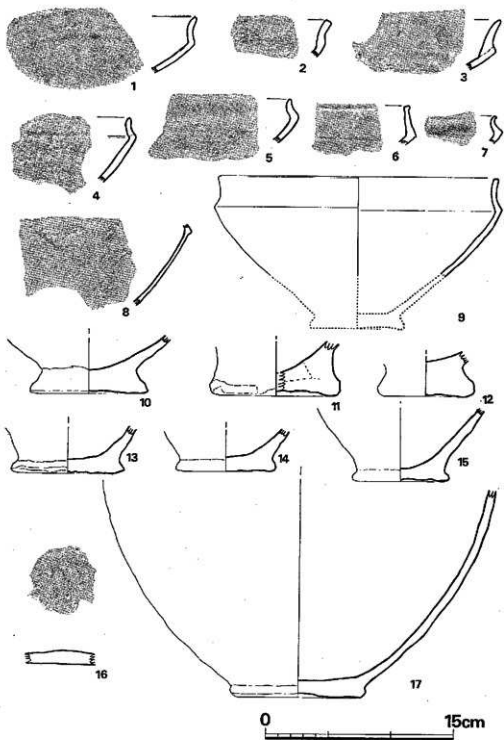
第99図は大型器台の破片で1はII-F区、2はII-B区D6溝出土で、D6溝は弥生時代中期から後期の土器を包含している。



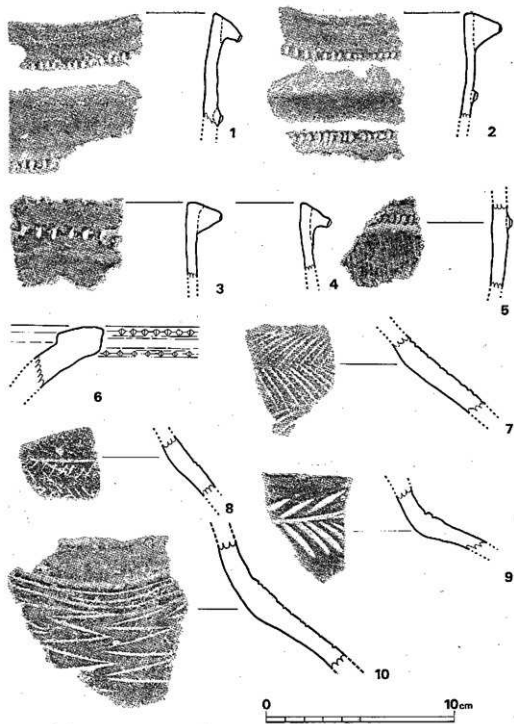
第93図 縄文式土器実測図その1 (縮尺 1/3)



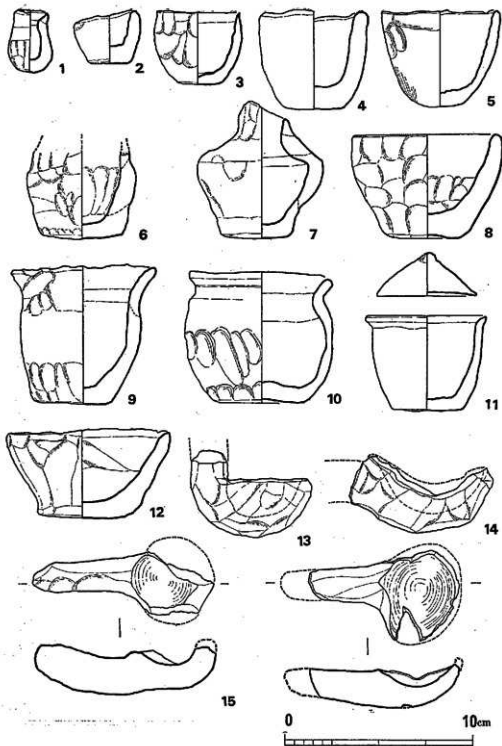
第94回 縄文式土器大綱図その2 (縮尺 1/3)



第95図 縄文式土器実部図その3 (縮尺 1/3)

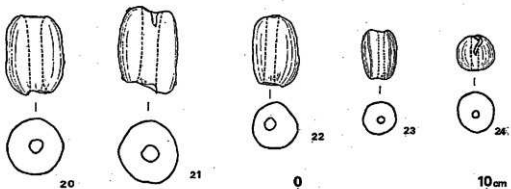
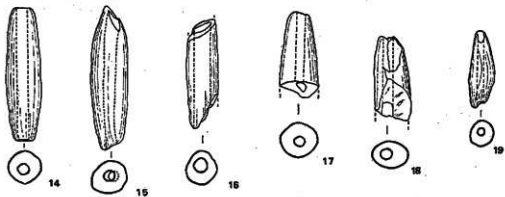
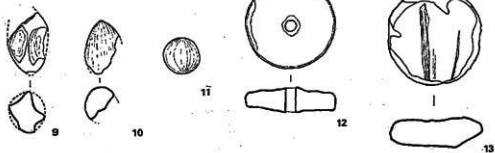
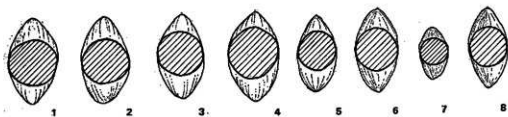


第96图 卵石式土器片类图(缩尺 1/2)

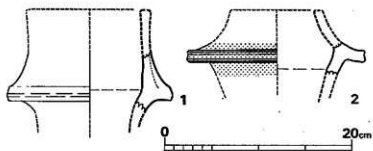


第97圖 ミニチュア土器実測図(縮尺 1/2)

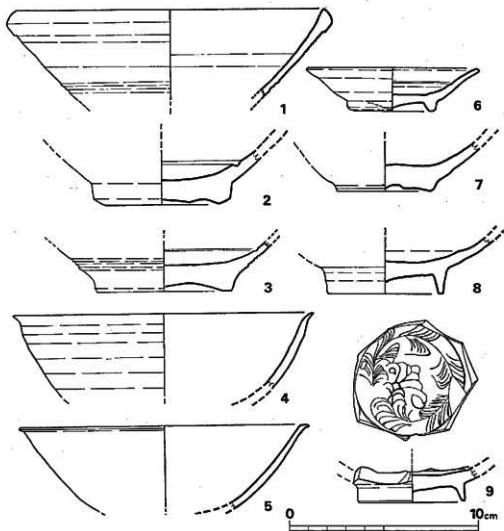
100



第98圖 投弾・紡錘車・土銃尖頭圖 (縮尺 1/2)



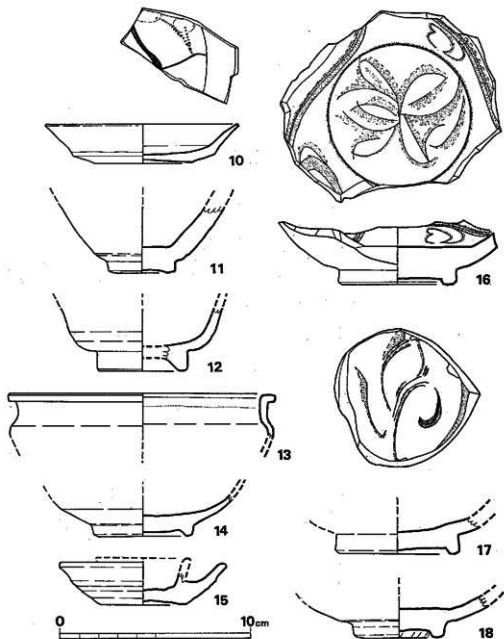
第99図 大型器台 破片実測図 (縮尺 1/4)



第100図 青白磁類実測図その1 (縮尺 1/2)

C 青・白磁

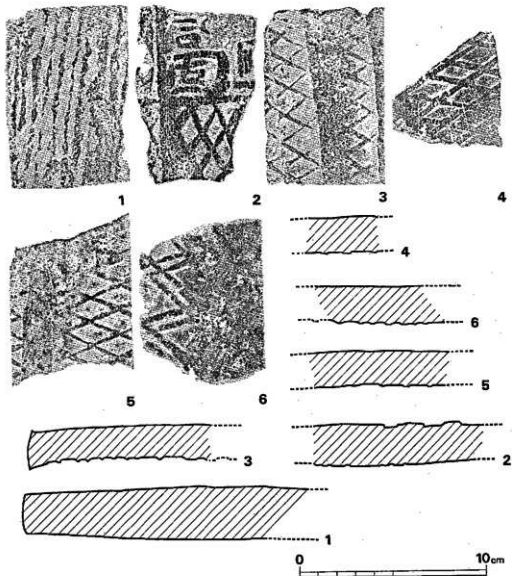
300点以上あり、E 7 土城より緑釉破片・白磁片が出土し、他は遺構に伴ったものはない。古いもので、第100図7・9が越州窯で唐末～五代・宋初頭のもの。他は龍泉窯(第101図16-17)、珠光青磁(第101図10)、白磁(第100図2)などが南宗～元で、第101図11-12は天目である。



第101図 青白磁類火割図その2 (縮尺 1/2)

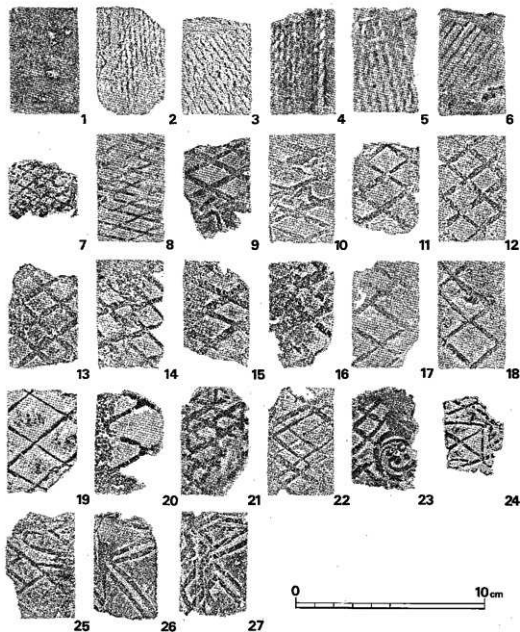
D 瓦

瓦類は、丸瓦、平瓦、埴などあわせて200余点の出上を見た。このうち形状のわかるものは1点としてないが、E4・E5・E7土壌からのものがわずかに遺構に伴った資料であった。このうち、まとまりを示したのはE7土壌からの資料である。第102図は、E7土壌から出土した瓦である。1は縄の叩打文が表面にある。2は、「警園」銘の瓦である。3、4、5は、斜格子文、6は、二重の斜格子文の叩打がある。1を除いた、すべてが福岡市西区大字下山門所在斜ヶ浦瓦窯跡からの供給されたもので、6は警の裏字がともなう瓦である。



第102図 II-F・I E7土壌出土瓦片実測図(縮尺 1/2)

第103図は、18がE 4 土壌、15がE 5 土壌より出土した以外は、遺構に伴うものはない。
 1～5の純目の叩打文のある瓦のうち5は、厚さ4.5cmと厚く竹土城の瓦と供給地を同じにしている。
 6, 7については不明である。この他は、すべて斜ヶ浦窯跡から供給されたものである。
 23は、「弊園」の正字をとまう叩打具の一部で銘はこのうえにくる。



第103図 瓦、叩打文拓影（縮尺 1/2）

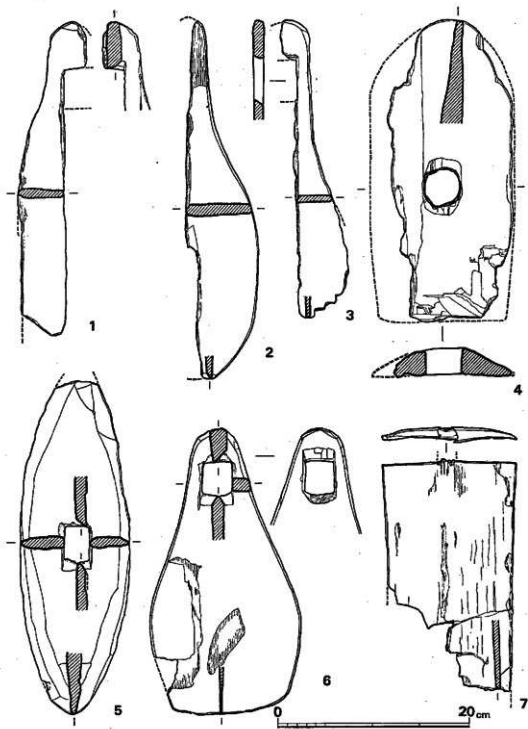
2. 木 製 品

農具、日用品など合せて98点が出土した。第104図1の平鍬はD1溝の多量の木質中からの出土で弥生後期と考えられる。2は、第7次調査2 tで第88図2を伴って出土し平安時代と考えられる。イテイガシ製の平鍬である。3は、I-X区D2溝の東側から出土したカシ類の平鍬である。弥生後期と推定している。5は、D1溝中から第129図の磨製石鏃と伴出していること、溝底の土器とから判断して弥生後期に置ける。6は、E9土城から出土した弥生後期カシ類の平鍬である。7は、D1溝から出土したカシ類の鋤であり、弥生後期、第105図1と3は、II-A区D5溝の底に近く出土し弥生後期と判断している。2は、D1溝からの出土で第104図1の付近からの出土である。

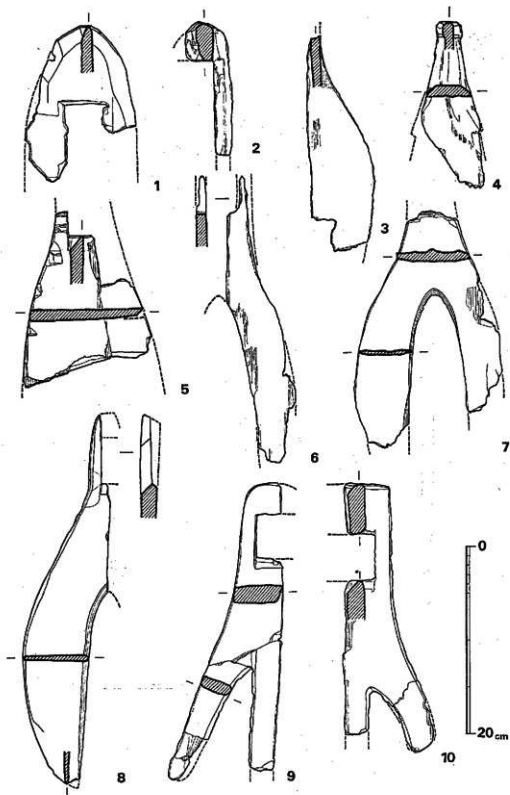
4は、柄を別にする鋤でD1溝からの出土であり、カシ類の硬質材を使用している。6は、第7次5トレンチより出土した又鍬で古墳時と推定される。7は、第7次調査4トレンチからの出土で、材質はカシ類(図版38-F)である。8も又鍬で第8次調査出土である。カシ類の硬質材を使用した古墳時代のもの。9、10は、三本鍬、9は、D1溝東側の地山の上から、10はD1溝の底(図版24-1)からである。106図は、ユズリハ製の合わせ鏃でD2溝からの出土(図版13-下)した。第107図は鋤の実測図である。1は、D1溝のI-X・Yの畦畔の下からの出土(図版23-下)で、アラカシ製。2はD1溝からの出土(図版24-2)である。3は、第7次調査2 t北トレンチからの出土でわずかに投剣と伴出している。4は、D1溝からの出土である。鋤の柄と判断してもよいだろう。

5も、鋤の柄と判断してよいだろう。5は、第7次調査3トレンチの北に設定したトレンチの地山に按じて出土したが伴出遺物はない。

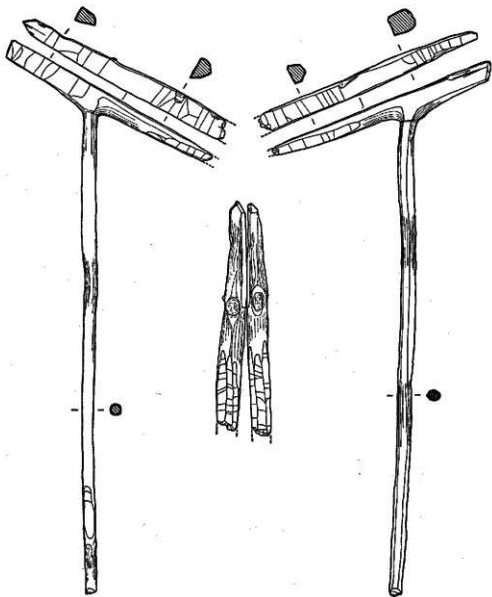
6、7は、II-A区D5溝からの出土でアラカシ製である。1・2・3・4・6は、いずれも弥生後期のものと考えている。第108図は、第8次調査の建築部材と伴出したもので古墳時代のものである。第109図1・2・3は、第8次調査で出土している。4は、I-X区、D1溝からの出土である。3・4は、黒色の硬質材でイスノキの木質に類似している。1・2・3は、古墳時代、4は、弥生中期のものである。第110図の1・2・3は、杵である。1は、第8次調査で建築部材013の梯子の付近から出土している。質はマツ材である。2と3は、D1溝の底から出土している。マツ材であろう。1は古墳時代、2は、弥生後期のものである。4は、浮子と考えられるものである。I-Y区のD1溝の西側からの出土である。この部分はD2溝からのオーバーフローの砂の堆積があり、古墳時代の土師器と伴出した。5と6は、丹塗された杓子である。5は、D1溝から出土。6は、II-A区D5溝からの出土である。弥生後期のものである。7は、皿であろう。スギ材から作っている。II-A区D5溝からの出土である。弥生時代後期。8は、案であろう。硬質の材でイスノキか。D2溝の上層からの出土したものと



第104図 木製農具その1 (縮尺 1/4)

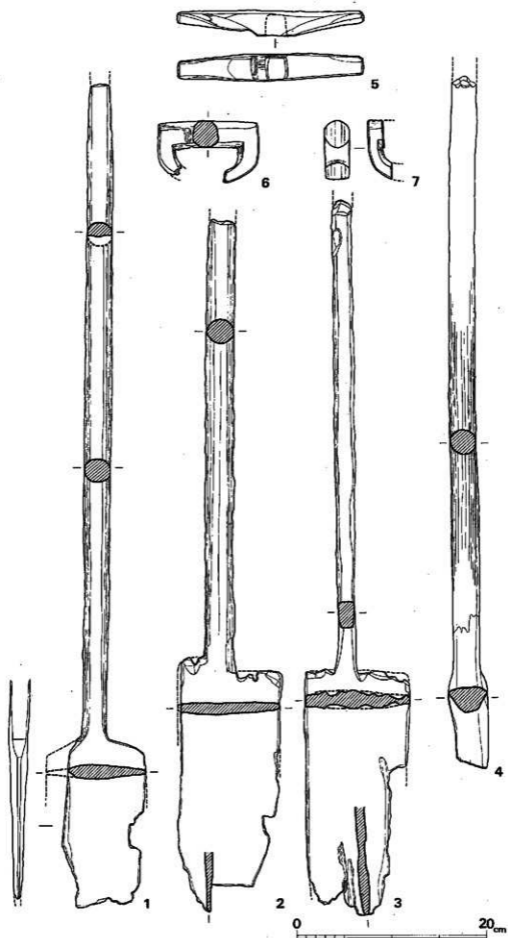


第105圖 木製農具その2 (縮尺 1/4)

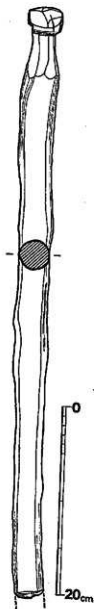


0 30cm

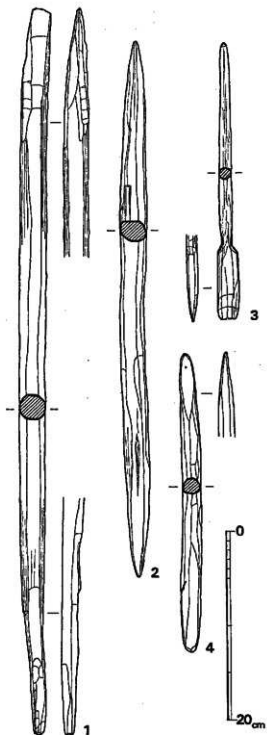
第106図 木製農具その3 (縮尺 1/6)



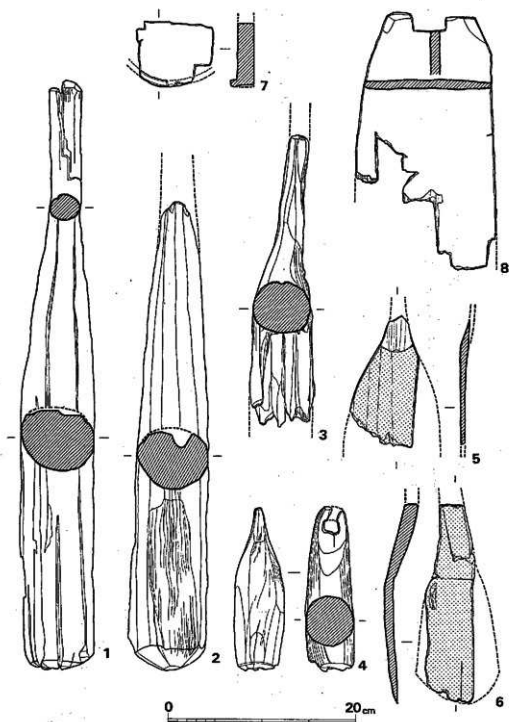
第107圖 木製農具 その4 (縮尺 1/4)



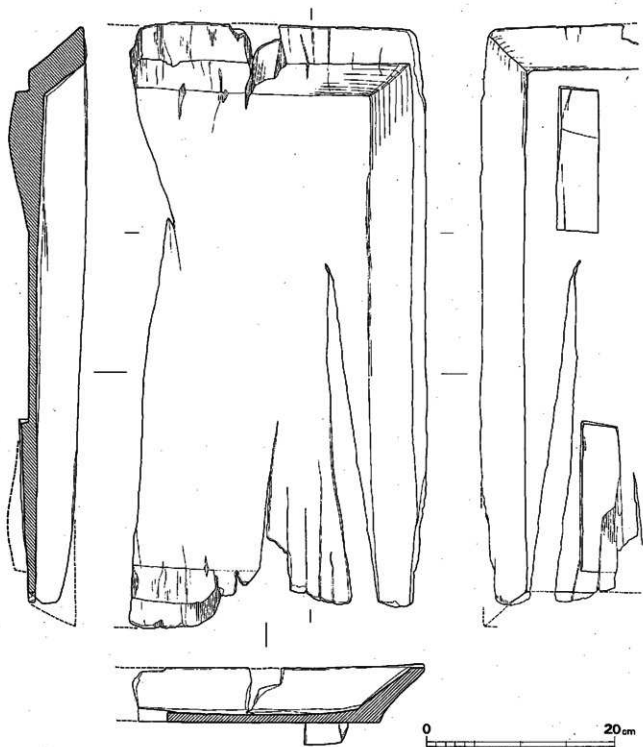
第108圖 布巻具 (縮尺 1/4)



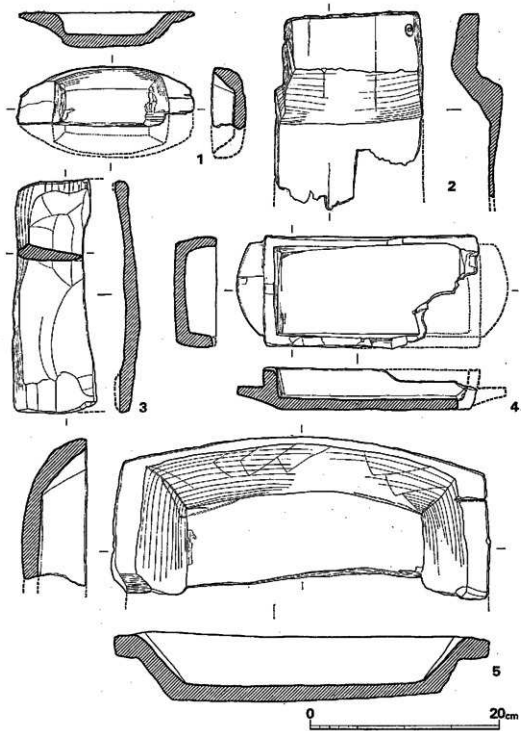
第109圖 木製串・ヘラ (縮尺 1/4)



第110圖 木製日用品(縮尺1/4)

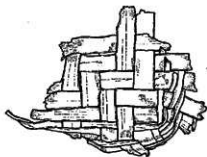


第 111 圖 木 製 棺 その 1 (縮尺 1/4)

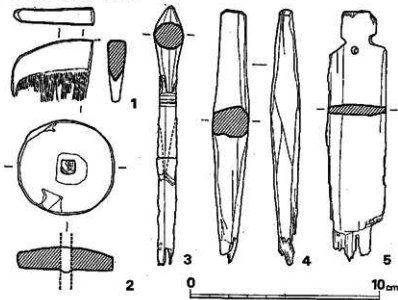


第112図 木製船その2 (縮尺 1/4)

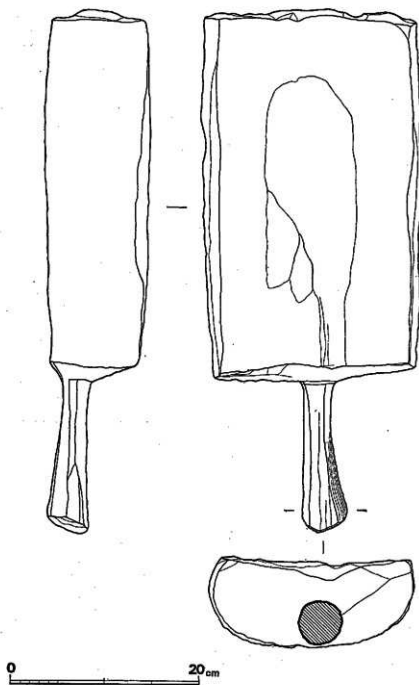
で古墳時代と推定している。第111図は、第8次調査で出土（図版42-上）した。槽で一番大きなものである。古墳時代。第112図1は、D1溝の東岸で出土した槽で、軟質の材から作られている。2は、D1溝からの出土でクリ材であるが腐蝕がはげしい。3は、D5溝からの出土である。槽というより皿に近い感じである。4は、D2溝からの出土で、軟質のスギのような材が使われている。5は、D1溝から出土（図版36-1）した。1と4は、古墳時代。2・3・5は、弥生時代後期である。なお、この他に数点の槽の破片がある。このなかにD1溝から出土したものにスギ材とわかっているものがある。第113図は、II-A区D5溝の西岸の南ピット中より出土した竹籠である。2つの破片となっているが、1個体分では底である。古墳時代のものである。第114図1は横断でIII-V区の歴史時代の溝からの出土である。この紡錘車は、I-Z区D5溝のたまりからの出土で弥生中期にのぼるものである。3の木製の鏃は、矢柄を竹で作りサクラの皮でむすびつけている。木製紡錘車と同地点からの出土である。5・6は、ともに第8次調査で出土した。5は、くさびであろうか。6は、木簡に形が類似している。いずれも古墳時代である。



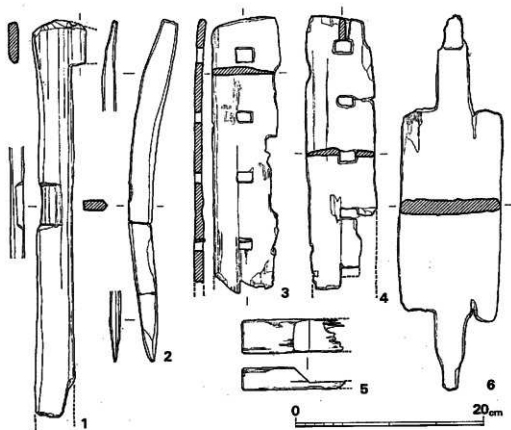
第113図 竹籠 (縮尺 1/1)



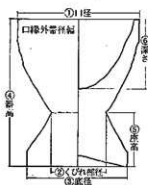
第114図 小型木製品 (縮尺 1/2)



第115圖 用途不明木製品 (縮尺 1/4)



第116図 用途不明木製品 (縮尺 1/4)

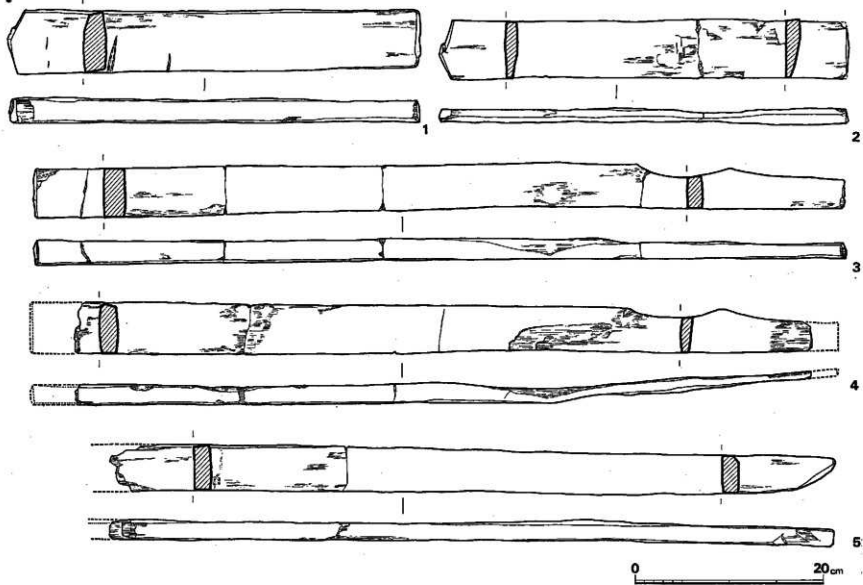


白模式図

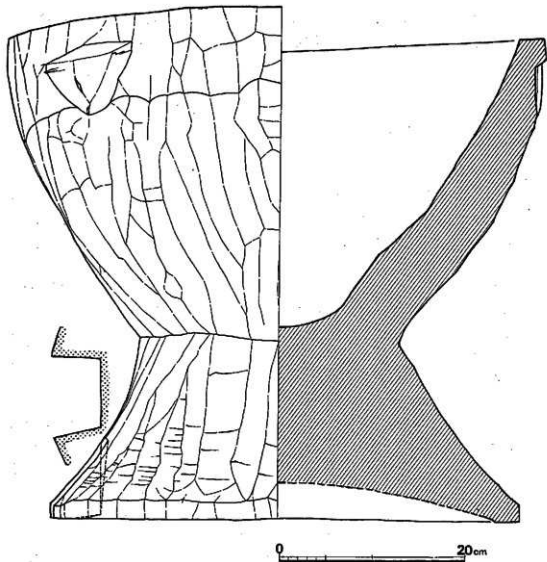
第7表 白計測表 (cm)

白番号	(1)014	(2)069	(3)076	(4)220	(5)252
④器高	52.5	55.0	55.7	54.6	47.4
①口径	41.9	43.2	44.5	56.7	37.9
②くびれ毎径	21.6	26.9	22.6	27.3	17.4
⑥底径	34.0	43.7	35.2	49.8	31.7
⑥深さ	26.4	30.8	24.8	34.2	22.5
⑤座高	18.8	21.5	17.4	19.9	17.1

備考 底部にえぐりのあるものは1号(014)、2号(069)、4号(220)、5号(252)である。



第117圖 用途不明木製品(縮尺1/4)



第118図 220(4号)白夷刺図(縮尺1/4)

第115図は、II-A区D5溝の底から出土(図版10-下)した。材質はイスノキである。かまぼこ状につくり柄を付けている。平坦な面が使用されたようでくぼんでいるので柄付きの工作台的なものであろう。弥生時代後期のものと推定している。第116図は、用途不明の木製品である。1は、D2溝からの出土で弥生時代後期。2はD5溝からの出土で組合せ式の犁の部分に類似する。硬質の材で弥生時代後期。3・4は、第8次調査で出土した。3は、下端の穴に別の木片が挿入されている。古墳時代。5は、D2溝からの出土で、ヒノキ材から作られてい

る。弥生時代。6は、第7次調査5トレンチの端で第88図1の土器と隣り合せて出土したもので材質はスギの類のようである。平安時代。第117図は、合わせ線と同じ位置から重なり合せて発見された(図版13-下)もので用途などについては全く不明である。弥生後期。

以上、木製品の出土した場所と、材質、時期などについて概略を報告した。なお、製作過程、類似品などについては、解説篇で報告したい。また、松本励、林弘也両先生によって分析して頂いた資料についても整理した形であらためて報告する予定である。

漆木片(図版98-3)は、D2溝の上部で出土した古墳時代以降のものであろう。木胎であり、曲物に漆を塗って鉄線描で朱線を引きしている。松田権六先生に見て頂いたところ、朱線はかなり優秀な技術者が引いた線であり、破片からは、筆を入れた位置は判明するが筆の出ているところはわからないので筆の長さは判断出来ないが、長い穂先を必要とし書道史上注目すべき資料であるとの解説を頂いた。

なおこのほかに、木胎が腐蝕し漆だけが残ったものが1点ある。

白は五個体発見された。1個は焼けた残欠である。また他の4個を含めて、出土状態が横転しており、部材の内部を削るという臼の特性からして変形したり腐蝕しており、完存のものはない。現存する民俗例に酷似しており、一概に比較するのは問題があるかも知れないが一瞥に値する。

4号臼

第118図に、図示したものは唯一の全形を知り得る例である。①口縁外径最大56.7cm、最低約40.0cmの楕円形に変形している。②くびれ部径27.3cmを測る。③底部径は最大49.8cm、最低約45.0cmを測る。④器高は最大54.6cm、最低49.7cm。⑤底部からくびれ部までの高さは19.9cm～17.9cm前後。⑥口縁部厚さ約2.7cm。⑦底部は数cmの上げ底であるが、実測時には科学的保存処理を行っていなかったため、水槽に据えたままでは計測不可能であった。⑧縁外帯部(ポケット状切り込みのある外局面)は面取りが施されており、胴部との変換帯が明瞭に付けられており、上下幅約8cm～11cmを測る。なおこの臼のみに使用の機能上、次の二つの切り込みが施されているのが確認された(外の臼では現存部からは確認されず、これらが施されていたかどうかは不明)。口縁部外周面取り帯にポケット状の切り込みが認められ、幅9.0cm、高さ7.6cmを測り、深さは1.0cmで、持ち上げるには若干浅い嫌いがある。対になるものと思われるが反対側は腐蝕しており確認できない。また底部には、踊り止めと思われる幅約8.5cm、口縁から奥行き5.2cmの切り込みが底部から、7.0cmの高さで穿たれている。胴部は完存するが、1ヶ所のみ確認された。外面は工具痕が明瞭に残されており幅約4.0cm～2.0cm前後を測り、内部は使用により底部が若干凹んで磨滅している。その他1号・2号・3号・5号臼の実測値は表7の通りである。

3. 建築部材

a. はじめに

建築部材の報文は、九州大学山本輝雄先生にまとめて頂いた。報告された文章の完成までには、国の文化財専門委員の浅野清先生、九州大学太田静六先生、九州産業大学野村孝文先生、九州芸術工科大学沢村仁先生、奈良国立文化財研究所細見啓三先生、九州大学土田充義先生はじめ多くの先生方のお教を頂いている。また、復原案の作成は、九州芸術工科大学沢村先生にお願いしているので次の報告書に掲載する予定である。

b. 出土建築用部材各説（付図第7・8図、図版40～47・76～81）

湯納遺跡出土木材は多数に上る。そのうち第8次調査で出土した木材は建築用部材と考えられるので、ここにまとめて報告する。総数125本。これら建築用部材は、出土状況から考えて全て同一期のものと考えられ、それ等の推定年代は共相の出土土器の形式編年から4C前半と推定される。発掘によって検出された遺構から、建築物を復元するのは各地に数多く見られるが、あまりに多くの推定を含んでおり、確実性に乏しい。出土の建築用部材をもって復元建築物が想定されたのは、静岡県山木遺跡の出土建築用部材をもって、同県登呂遺跡検出の遺構に建てあげられた高床倉庫が唯一のものであろう。しかし、これも多くの推測を含んでいる。建築物が現存しない先史～原史時代の建築物の復元にあたっては、建築物の構成部材が出土してくれることは、確実な資料を増やすことである。ために、このような出土建築用部材を、着物に報告し集めて行くことによって、より確かな建築物の復元が可能となっていこう。ために、当報告では、繁を厭わず、1本づつ現状を報告した。さらに本報告では、出土の建築用部材が復元建築物のどの部分に使用されていたのかを、報告者の一案として提示していた。なお、建築用部材の実測図に記す寸法数値（単位；mm）は、スチール製の物差しを実物に直接あてて測った数値である。

以下、出土木材を次のように分類して報告する。

- | | |
|-------------------------------------|-----|
| ① 整形された木材 | 21本 |
| ② 表面が調整された丸太材 | 2本 |
| ③ 杭によって地面に固定された横木 | 6本 |
| ④ 杭 | 12本 |
| ⑤ 板材 | 3本 |
| ⑥ 一端に雁首状の造り出しを持つ丸太材 | 7本 |
| ⑦ 端部近くに欠き込みを持つ丸太材 | 9本 |
| ⑧ 一端に雁首状の造り出しを持ち、かつ、端部近くに欠き込みを持つ丸太材 | 2本 |

⑨ 端が鋭く尖っている丸太材	23本
⑩ 端が切斷されている丸太材	10本
⑪ 一端に杓状の工作がしてある丸太材	2本
⑫ 両端とも折れている丸太材	28本

合計 125本

① 整形された木材 21本

115 左端は鉛筆の先端を殺ぐようにして切斷。右端は貫通孔の所で折れ、先は欠失している。断面は、丸太の一面を欠き落とし、さらに両側を削り落した形である。先端より70mm、さらにそれより385mmは入った所2ヶ所に、長さ45mmの図のような、傾斜を持つ切り込みを、両側より鉤状に造る。この2ヶ所の切り込み部分には、上面を平らにした後、27×15mmの方形の貫通孔が材幅の中央に垂直に開いている。当材は、傾斜を持つ切り込みが合掌状である所から、建築用部材とすると棟木の先端であり、傾斜を持つ切り込みは破風板や檼などが掛かるためのものであると考えられる。しかし、切り込みの傾斜が急であることが気になる所であり、このことは次に述べる棟木と考えられる116でも同様なことが言えるが、他部材の観察から分るように、杓にてきっちとかみ合わせる構造でなく、紐にて緊結したものであろう。切り込み部分の2ヶ所の貫通孔は、杓穴と考えられ、先端に近い貫通孔は棟持柱を、さらに引込んだ貫通孔は妻面の束を、それぞれ受ける杓穴とも考えられる。ただし、九州地区で棟持柱のある獨立遺跡は発見されたことがないので、他の用途を考える必要がある。2ヶ所の貫通孔が、檼などを緊縛するための太杓を入れたものかとも考えたが、やはり棟木と考えられる116の切り込み部分に見られず、当材先端2ヶ所のみに見られることから推して、垂木を留めるものではない機能を考えた方が妥当であろう。最先端の杓穴は棟持柱でないとなると、破風板に関連した補助材または化粧材をとりつけるためとも考えられる。先端すぐ近くにある切り込みが、破風板や檼などの掛かる切り込みとすると、この切り込みは棟木に直交して付いており、妻の転びは無かったか、または少なかったと考えられる。先端すぐ近くの切り込みに破風板が付くと、棟木先端が飛び出してしまうが、このような例は、群馬県赤堀村茶臼山古墳出土の切妻屋根の家形埴輪に見られる所である。同古墳出土の主屋と考えられる家形埴輪には、妻面に棟木を支える束が造り出されており、当材の奥の貫通孔の機能を窺わしめる。伊勢神宮内宮正殿は、棟木が先端より少しは入った所で棟持柱に支えられ、破風は屋根上に突き出して千木となり、棟持柱より更に先端に近い位置に掛かっている。同正殿の妻面では、棟木は梁上にある冢又首に支えられている。即ち、今日見る伊勢神宮内宮正殿のあり方も、当棟木材を考える資料となろう。棟木が妻面において冢又首で支えられる構法は、住吉大社木殿の妻においても見られる所である。当材のように、棟持柱が切妻屋根の妻側先端の屋根斜め材（破風、千木、檼、合掌）の位置を支えているのが憶測できる資料としては、香川県出土と伝える銅鐸に描かれた高床家屋の図や、

奈良県唐古遺跡出土の土器片のへら書きの図に見られる所である。181 (シノキ)左右両端ともに折れている。断面台形の材である。側面両側には、ほぼ等間隔に長さ約4~6cmの傾斜する切り込みがある。当材は180と同じ形額をしており、棟木と考えられる。ただし、180は上面が丸太材のままであるのに対して、当材は平らに削ってある。切り込み間の距離は、左より右へ538, 528, 530, 525mmであり、平均530mmである。185同様、榫掛かりの切り込みの傾斜が急であることが気になる所である。しかし、この欠き込みは、榫を紐にて緊結するための欠き込みと考えられるので、切り込みの傾斜が直ちに榫の傾斜とはならないであろう。しかし、径約4cm位の榫が約53cm間隔に掛かるのも少し疎らすぎるようである。また、榫が径4cmとすると細いので、榫より上部の屋根加重を支えるのは不安のような気もするが、例えば181(㊸)のような丸太材が榫に代わるものだと考えれば(その際、細い方を上方にして、千木状に突き出させて組ませ、紐にて縛る)、榫は、棟木部分は細くて軒枅の方へ向かって太くなっているの、さほど不安はあるまいと考えられる。

なお、当材および180は直接にはつながらないが、同一部材と考えてもよからう。

181 (クロマツ又はアカマツ) 全長を残す材である。断面は板材の板幅の中央に台形突起を取り付けたような形をしている。板幅約17cm、板厚約2.5cm、台形の厚さ約10cm。台形の部分は等間距離に長さ約8~10cm切りあげられており、ここに直交する材があたるようになっていゝ。切断した箇所の中心位置は、左端より614mmの位置よりはじまって、右方へ583, 578, 579, 551mmであり、最後に右端まで655mmである。この切り込みには、181(㊸)や180(㊸)のような丸太の根太材が掛かると考えられる。中央に位置する一辺50mmの正方形の貫通孔は柱の納を受ける枅穴であろう。左右両端はともに一辺が欠けているが、やはり柱がかかるように凹みのある形になっていたと考えられる。左右両端と中央貫通孔が柱位置とすると、柱心々間距離は1,742mmと1,730mmとであり、平均1,736mmとなる。台形のつくり出しのある反対の面は平坦な面であるが、この面には枅穴がある。中央の貫通孔のほか、正方形と長方形の形で深さ1~3cmの枅穴が板幅のほぼ中央に並んでいる。枅穴の中には板厚が薄いため、一部通しているものもある。長方形の枅穴と正方形の枅穴とは相互にはあまり関係なく並んでいる。正方形の穴はほぼ等間隔に並んでおり、材左方半文においては、中央の貫通孔より左方へ251, 343, 333, 341, 275mmで、続いて左端まで236mmであり、材右方半文においては、右端より左方へ289, 292, 281mmで、続いていくつもの枅穴が重なり合っている位置の279mmのあたりにも、正方形の枅穴があるものと考えられる。しかし、さらに左方へは中央貫通孔まで640mmと広く開いている。ために、正方形の枅穴の等間隔に並んでいる所は、後述するように、壁の小舞材が立って草壁を構成した所であろうし、枅穴が飛び離れている所は壁の無い所、即ち出入口ではなかろうか。長方形の枅穴は中央貫通孔の左方2コと、中央貫通孔より右方へ640mm離れている1コとさらに右方へ409mmの所へ1コの合計4コである。4コのうち最右の1コを除いた3コは、

出入口部の材ではないかと推定した22の4コの納穴のうち3コと合う位置にある。他に、中央貫通孔のすぐ右隣に小さな長方形の納穴も存在する。

当材の機能は根太材と直角に交わる桁材と考えられる。即ち、台形のつくり出しのある面を、上方に向けるか、下方に向ける場合壁仕口は上面となって都合がよいが21(⑥)や27(⑧)のような丸太の根太材が下で直交することになり、それを支える別材が必要になる。逆に、断面台形のつくり出しのある面を上に向けた場合、丸太の根太材の掛かる板厚部分の厚さが2.5cmと薄く荷重を支えられるかどうか気になる所である。なお、どちらの場合でも、当材の上または下に丸太の根太材が直交して交わり、その上または下に当材と平行して24(①)や25(①)が重なるような構造を考え得る。そうすると、床の上も下も壁の付く建物を考えなければならなくなるが、このように壁が高床の上下階にわたって構成されている建物は、佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡にも描かれている。

21 前記24より長さ、幅ともに小さいが、形態は同じであるため同一機能を有する材と考えられる。板材に幅約4cm、厚さ約4cmの方形のつくり出しを付け加えている事は27のつくり出しが台形であったのと異なっている。左端は、きちんと切断面が残っており、右方は腐蝕が激しいが、右端にもわずかに材端を示す切断面が残っている。方形のつくり出しは、長さ約8cmがほぼ等間隔に切り取られている。その間隔は左端より右方へ434、466、452mmでちょうど中央貫通孔の位置であり、さらに右方へ459、469mmで最後は375mmで右端となっている。中央の貫通孔は88×50mmの長方形である。方形のつくり出しのある面の反対の面は平直な面であるが、板幅中央に浅い納穴があげられている。その納穴も中央より右方には無く、左方に4コある。左端より144mmの位置と、そこからさらに右方へ368mmの位置との2ヶ所には約4×3cmの方形の納穴が、中央貫通孔より左方へ80mmの位置と、その位置からさらに左方へ575mmの位置との2ヶ所には約9～11×3cmの長方形の納穴があいている。貫通孔の位置と両端が柱位置だとすると、柱心々間距離はほぼ $2,655 \div 2 = 1,327.5$ mmであろう。

22 (クロマツ又はアカマツ) 左端は垂直に切断されている。右端は一部垂直の切断面が残るが、弧状に欠けており、これが人工的に欠いたものか、後に折れたものか明確でない。板材であり、表裏両面はきれいに仕上げられているが、両側面は丸太材のように弧状になっており、これは、当板材を作るに際して、丸太材を表裏両面のみ割り取ったからであろう。木取りは年輪をみると、ほとんど中央部分である。板幅は左端において188mmであり、右方へ行くに従って細くなっており、中央において160mm、右端において138mmとなっている。板厚は中心が厚く両側が薄くなっており、左端においては、中心で32mm、両側で28と25mmであり、中央においては、中心で38mm、両側で38と35mmであり、右端においては、中心で30mm、両側で25と20mmである。裏面は平滑な面で、表面仕上げ以外に加工は無い。表面には、左端より2,172mmの位置に50×50mmの正方形の貫通孔があり、この孔より右端までは2,213mmであるので、貫通孔は全長

のほぼ中央に位置する。この貫通孔は柱位置を示すと考えられるが、山木遺跡出土建築用部材にて、登呂遺跡において復元された高床倉庫の柱のように、柱を床桁より下は大きい材で、床桁より上は細く方形にけずられていたことも考えられよう。表面の片側すぐ近くに偏して枘穴10コがほぼ等間隔に並んであり、各枘穴の大きさ、深さはほぼ一様で、大きさは一辺20~30mmの正方形、深さは18~30mmである。各枘穴間の間隔は、左端より103mmの位置からはじまり、右方へそれぞれ447, 446, 436, 428, 449, 443, 443, 445, 510mmである。これら枘穴は壁の小舞穴と考えられるが、あまりに片方に偏していることから、草壁と考えられる。長さが18(④)より長いが、貫通孔もほぼ同じ大きさである所から、18のような形態の材と平行に重ね合わせて壁を作る材として、側回りに置かれた材とも考えられよう。

板の表裏面に施された工具痕のうち、裏面にあるものはウロコ状をしており、チョウナと考えられるが、表面には幅20~35mm、長さ15cm位の長い、そして浅く削り取ったような薄状の工具痕が平行についている。ヤリガンナの仕上げであろうか。

256 (スダジイ) 18と同じ形態をした板材であるが、当材の長さは18に比べて少し短かいようである。左端は両面から削られるようにして切断されておるが、右端は腐れて欠失している。貫通孔が完全長の中央にあったと仮定すれば、復元の完全長は3,674mmとなる。板の厚さは、中心部分において、左端では35mm、中央では28mmであるが、中心で厚くて両側で薄くなっているのは18の場合と同様である。板の幅は、左端で150mm、中央で146mmである。貫通孔は、左端より1,837mmの所、板幅のほぼ中心に位置し、大きさは54×45mmの方形である。枘穴は板幅の片側に偏してあり、大きさは1コのみ33×16mmの長方形のものがあるが、他の8コは約2cmの正方形であり、深さは全て10~20mmである。枘穴の位置は左端より右へ127mmの位置からはじまり、右方へそれぞれ307, 288, 300, 320, 376, 300, 294mmであり、さらに右方は材が腐蝕して傷んでいるために枘穴があったかどうか不明である。枘穴間隔の距離の中で、376mmと特に長い距離が一つだけ存在するのは、貫通孔の位置に立つ柱が補助の役目を果たすからであろうか。枘穴は草壁の小舞穴と考え、側回りに置かれる材として機能したものと考えられる。当材は18の長さとはほぼ等しい。

212 (シイノキ) 完形の材である。板材であり、板幅は最大で185mm、最少で160mmである。両端は弧状に丸く切断している。表面2ヶ所に、厚さ28と38mmの造り出しを片側につくる。この造り出しは幅約12.5cm、長さ約22cmであり、長手方向の一辺の中央に長さ約7cm、奥行約2cmの長方形の切り込みをつくり、この切り込みの底は板材表面と同じ面である。左右両端近くには、対称的な位置に、長さ約7cm、幅約2cmの2ヶ所の長方形の貫通孔があいている。この2コの貫通孔と、造り出しの長辺中央にある切り込み2コは、大きさもほぼ等しく、4コは同一線上に並ぶ。両端2コの貫通孔には、すぐ近くから出した24, 24の枘がぴったり合う。裏面は平滑な面である。当材の切り込み2コと貫通孔1コの合計3コの位置が、18の枘穴の位置と

ほぼ合い、さらに当材の中央部分の造り出しの切り込み2コの位置が、壁の無い出入口に想定される位置に合う所から考えて、その構造は不明であるけれども、当材は、出入口の上、あるいは下に置き、扉材を受ける機能を果たした材とも考えられる。

17 (シイノキ)は、14とまったく同じ形態の板材である。共に、大ききもほぼ同じであり、ほんの一部欠けている以外、ほぼ完形である。幅は約8.5cm。厚さは中央で25mm、左端で15mm、右端で10mmである。左端に、長さ75mm、幅63mm、厚さが板厚と同じ納を造り出し、その先端近くに15×14mmのほぼ正方形の貫通孔をあける。この納、および貫通孔は込み栓の技術の既に存在したことの確かな証拠となろう。他方、右端は長さ33mm、幅60mmの納をつくっている。この納は、左端の納に比べて、幅においては同じ、長さにおいては短い。当材両端の納は、12にある貫通孔にぴったり合う。

18 (シイノキ)は、17と同じ形態であるが、各部の大きさがわずかに違う。幅は中央付近で92mm。厚さは中央で20mm、左端で8mm、右端で12mmである。左端に長さ86mm、幅62mm、厚さが板厚と同じ納を造り出し、その先端近くに17×14mmの方形の貫通孔をあける。他方、右端は、長さ35mm、幅62mmの短い納を造り出している。

19 左端に長い納を造り出すが、右端は腐れて欠失している。丸太材の両面を割り落とし、断面は太鼓形をしている。太さは左端近くで90×48mmで、右へ向かって細くなっている。細っている右端の近くで材が彎曲しているが、他の出土部材の変形状態と比較して、材放棄後の加圧による彎曲とは考えられず、当初より曲がった立木を利用したと考えられる。左端の納は、長さが155mmで幅が根元で34mmであり先端へ細くなっており、厚さが材厚と同じである。丸太材を削ぎ落した一面には、大きき約3cmの正方形で、深さ15mmの納穴が、材幅の中央に位置したり偏ったりして並んでいる。納穴の間隔は、納の根本から90mmの位置からはじまって、右方へ380, 378, 368, 402, 412, 390mmであり、平均388mmである。納穴のある面と反対の面はきれいに平滑に仕上げられている。また納の配置された面には、丸太板を割った際のクサビの工具痕と思われるものが、両側から向い合って残っている。正方形の納穴は、壁の小舞穴と考えられる。当材の用途の一案として、小舞穴のあることから、柱か桁であろうが、納の長いことから床上の柱と考えることもできようか。20 左端は納をつくり出しており、右端は折れて欠失している。材はまっすぐでしっかりしている。丸太の両面を落し、断面を太鼓形とした材である。落した平坦な両面はウロコ状の工具痕を残しており、丁寧に仕上げ加工が施されている。ウロコ状の工具は、左端近くのみ、この図で見て、左から右へ動いているが、それ以外の所ではすべて右から左へ動いている。落していない両面は、樹皮は付いていないが、樹幹面状を呈している。断面は薄い材としたため、長方形断面の材のようになっている。太さは中央付近で78×47mmである。左端の納は、幅40mm、厚さ38mm、長さ90mmの大ききである。このような納は、ノミによるものと考えたい。当材のような角材に近い材は他には見えず、建築用部材としては

重要な機能を持つものであろうが、全長が不明であり、推測できない。敢えて憶測するならば 211と同じように柱材とすることもできよう。

211 傷みが激しく、保存があまり良くないが、丸太材であろう。左端は切断面を持つが右端は折れて欠失している。左端より 880mm の位置に長さ約 6cm、深さ約 6cm の切り欠きがあり、その位置よりさらに右方へ 3,079mm の位置に、同じ大きさの切り欠きが同一面上にある。右端は折れているが、枘穴が対称の位置にあるとして、右端近くの枘穴から復元の右端までを 680mm と仮定すれば、復元の完全長は 4,439mm となるだろう。当材は枘穴間の距離から考えて、梁材や桁材として考えることもできよう。

211 (広葉樹、環孔材) 一部傷んでいる所もあるが、全長の分る材である。中央付近で厚さ 27mm の板材である。上辺は右端を除いて直線であるが、下辺は曲線の欠き取り部分がある。下辺では、左端において長さ 136mm だけ弧状に欠き取り、右方へは直線部分長さ 60mm を残して、さらに右方へは深さ 15mm、これも弧状に欠き取る。右端においては、上辺では 4 分の 1 弧状に切り落とし、下辺では先端より長さ 130mm の位置まで直線で、さらに左方へは深さ約 2cm 弧状に欠き取り、左端の欠き取りの所と直線で結ばれる。板幅は左端において 72mm、左端近くの最大幅の所で 102mm、中央付近で 92mm、右端近くの最大幅の所で 98mm である。板材の表面は、かなり丁寧に仕上げられている。当材と同じ規格、同じ形態、同じ樹種のもが出土しているが (221・211)、建築用部材としても、対となって機能するものであろう。

建築用部材の用途としては、一案として、妻側の破風板と考えることも出来よう。即ち一端を棟の方に、他端を桁の方に置き、上方を直線部分とし、断面が山形の棟木、例えば 115 や 116 のような材が、端近くの下の欠き取り部分にあたることも考えることができよう。そして、他端の欠き取り部分付近に、軒桁が掛かるように考えることもできよう。その際、どちらが棟側か問題がある。図の右端を棟側とすると見た目の納まりはよいが、縄で固着しにくいし、左端の仕上の不揃いが破風尻にみえてしまう。逆にするとの二点はよいが、上端の形は中途半端になる。いずれにせよ、棟木、軒桁、破風板の関係は、群馬県赤穂村茶臼山古墳出土の主屋と考えられる家形埴輪とよく似てくる。その際、板の合わさる部分には、相欠きも何も施して無いため重ね合わせとなり、やはり縄などで緊結したものであろうか。

221・211 (211と同じか) 211との形態比較から見て、221と211とは同一部材と思われる。出土状態は、211の左端の風蝕の激しい所には白ののって出土した所であり、その先の延長上に211と同様の形態を見せて221は出土した。これは当初221と211が連なって一つの材として完形であったものが、白の重圧によって白ののっている途中の部分のみ齧れてしまったためであろうと考えられる。現在の長さは211が2,230mmであり、221が590mmであり、合計2,820mmであるが、完形となれば211と同じく約3m近くあったものであろう。

211 両端ともに切断されている面があり、完形である。丸太材の一面をわずかに割り落し、

その面には納穴をあけ、反対面に切り込み二ヶ所とわずかな欠き込み一ヶ所を持つ材である。太さは左端近くで90×80mmであり、右端へ向かって太くなっている。納穴には二種類あり、小さな正方形のものと、長方形のものとである。小さな正方形の納穴は、大きさが約3cm四方で深さが15mmであり、材幅の中央に並んで位置し、納穴間隔は左端より120mmの位置よりはじまり、右の方へ483, 580, 590, 551, 620, 600mmであり、最後の納穴より右端まで220mmである。長方形の納穴は、大きさが約5×3cmで深さが20mmであり、小さな正方形の納穴間のはほぼ中央にあるが、材幅の片側に偏して位置している。納穴間隔は左端より40mmの位置よりはじまり、右の方へ313, 565, 563, 585, 558, 605, 455mmであり、最後の納穴よりも右端まで80mmである。納穴のある反対面には2ヶ所に切り込みがある。1つは、左端より375mmの位置に大きさが66×30mm、深さが15mmであり、他の1つは、右端より510mmの位置に、大きさが60×26mm、深さが浅い切り込みがある。二者の間隔は2,879mmである。この2ヶ所の切り込みは、この位置において、当材と直角に他材が結合されることを示すと考えられる。この面には、中央付近にもう1ヶ所、工具のあたって欠き込みがある。納穴はほぼ等間隔に並ぶし、これまで述べてきたように壁の小舞穴と考えられる。二種類の納穴は、大きさが違って、同時期使用のものではないとも考えられるが、ちょうど千鳥状に並ぶし、当材も草壁のものとする、長方形の納穴の方は、正方形の納穴につくられた草壁の押えとしての小舞穴の役目を果たしていると考えられる。当材の機能を考えるに、小舞穴のある長い材であるので、柱か桁かのいずれかと考えられるのが、柱材とすると、水平材との結びつき方法が不明なため、桁材と考える方が妥当ではないだろうか。もし軒桁と考えれば、納穴の存在する面は下方を向き、反対面の2ヶ所の切り込みの位置が、梁材や合掌、極木材等の掛かる位置を示すものであろうか。

⑩ (広葉樹、散孔材) 削り出しの梯子である(全長1,622mm)。静岡県山木遺跡および登呂遺跡等の弥生時代遺跡で出土している梯子と規模、形態ともにほぼ同じである。かなり傷んでおり、踏み込み部分が剥げてとれてしまっている。段上げは下端(右端)より263, 227, 285, 240, 280mmで、最上段から上端(左端)まで327mmである。最上部の長さが327mmと長いのは、上部において、他材と結びつけられるからであろう。幅は中央付近で107mm、厚さは28~20mmである。下端(右端)はきちんと切断されている。

⑪ (クスノキ) 小判形の板材で、中央に方形の貫通孔を持つものである。板材はかなりひどく彎曲しているが、当初は平坦な板材であったと考えられる。大きさは、長手方向580mm、短手方向550mmであり、中央の方形の貫通孔の大きさは75×70mmである。厚さは中央付近で25mm、周辺部で10mmである。当材は、静岡県山木遺跡出土の鼠返しと呼ばれる材と同じく、柱の位置の桁の下に置かれるものと考えられる。ただし、彼此的違いは、山木遺跡山上のそれには中央貫通孔周辺が一段高くなっているが、これにはそのようなものは無く、平坦な板材である。建築物復元の資料を見出すべく、この板材に痕跡がないかと探したが、柱および桁などの当

たり痕は、まったく見出し無かった。

103 完形の板材である。左端は垂直にまっすぐ切断されているが、右端は凹弧状に削り出されている。両側面の、一面は垂直に削られており、他面は凹弧状の面を呈しており、この面は丸太の面そのままの面と思われる。側面の中央に、長さが入口部で43mm、奥部で36mm、奥行が53mmの方形の欠き込みがある。この欠き込みを中央に嵌んで、お互いに239mm離れて、大きさ約2cm四方の方形の貫通孔が存在する。このような小さな貫通孔は、他材と緊縛する際の組越しの孔とも考えられる。板の厚さは、中央付近が一番厚くて20mm、両端に近づくに従って薄くなっており、両端近くでは18mm。板の表面には、仕上げと見られるウロコ状の工具痕が見られる。当材の機能としては、当材と同じような材あるいは他材と突き合わせて、101と同じような、鼠返しとして機能させることを考えることもできよう。

104 現在は細かく破断されているが、全て繋ぎ合わせる事ができ、全長(2,270mm)のわかる材である。中央付近の太さ42×37mmの、円形断面の材である。両端には、柎および断面の大きな部分が対称的につくり出されている。柎をのぞいた有効長さは2,208mmである。両端の柎はほぼ同じ大きさで、断面はともに長方形であり、右端においては断面40×30mm、長さ30mmである。柎に続く断面の大きい部分は、断面径約5cm、長さ4cmの円形であり、断面の小さい中央部には、なだらかに続いている。中央部の断面円形部分はきれいに仕上げられている。当材の両端の柎に合う柎穴を探すと、その深さに関しては、今回の湯納遺跡出土建築用部材には見当たらないが、その形に関しては、草壁の小舞穴として考えた長方形の柎穴に合う。ただし当材を壁の小舞材とするのは全長にわたって仕上げた化粧材なので不適当であろう。

105 (スダジイ) 建築用部材であるかどうか不明である。両端とも揃い、丸太材の両端を残して、中央部のみ約89cmの長さ、深さ約3cmを削り取り、削り取った底面を平らにした材である。この削り取った底面には数多くの刃物の打ち傷があり、何かに使用したと考えられる。削り取った面と反対の面の左端近くには、他材が直角に当たるための欠き込みがある。全体的に固くてしっかりした材である。

② 表面が調整された丸太 2本

③は表面が整形された主要建築用部材と考えられる丸太材である。

104 左端は切断面があるが折れている。右端は折れて欠失している。かなりまっすぐな材である。左端より約48cmの所までは、断面形十一角形で、それ以後右端までは、断面十二角形になるよう丸太材を整形している。太さは左端近くで72×66mmであり、ここで十一面の面幅は10～23mmである。十一面が途中から十二面となることでも分るように、各面の幅はきちんと一定したものでなくて、工具の当たるに従って爪割きした幅であろう。各面には、同じ方向に、ウロコ状の工具痕が見えるが、これはチョウナによる仕上げと考えられる。湯納遺跡出土の建築用部材の中には、方形断面の角材はほとんど見られず当材のように、丸太材の周囲全面を整形

した材が、角材にあたる役目を果たしたと考えられる。丸太の面を取った材は今次の調査でも、杭として打ち込まれたまま見つかった（280, 281, 282が、当初から杭とは考えられず、他からの転用と考えられること、次に述べる258も同じ機能の材と考えると同じ形態の材にかなり長い材も存在すること、の二点から、柱としての機能を持たせることも可能であろう。

259 両端ともに折れて欠失している。大きく彎曲している。断面円形の丸太材の半面のみは、ウロコ状の工具痕を残し、チョウナと考えられる工具による面取りが施されている。他の面は樹皮こそ剥がれているが、丸太のままである。ただし、当材が当初より大きく彎曲していたかどうか、疑問である。太さは左端近くで81×80mm、中央あたりで75×72mmであり、右端の方は腐れがひどく測れない。当材のように、丸太の表面が一面のみ面取りされているのは、面取りを途中で放棄したと考える以外には、面取りした面を見付けの方に掘えて外から見えないようにし、丸太の面は見えないように使用したと考えることもできる。

③ 杭によって地面に固定された横木 6本

第8次調査の発掘区で、東南より西北へ一列に並ぶ杭（④を参照）によって、地面に打ちつけられていたと考えられる横木がある。このため、ほとんどのものが元位置を動いていないが、わずかに動いているものもある。同一形態のものは、溝渡岸用横木と考えて本項に記した。ただし、いずれも本来は建築用材だったものを転用したと考えられる。恐らく梁、大引などにあたると思われるものである。以下、杭によって、地面に固定されていた出土材で実測し得たものを、西北の方から東南の方へ出土した順に列記すると257, 276, 278, 148, 878, 812である。

257 両端に杭が打ち付けられた状態で出土したので、この実測図は出土時点で実測したものである。左側の杭が291にあたり、右側の杭が293にあたる。腐蝕が激しいが、丸太材のようである。左端は折れて欠失している。右の方は283の打ち込んである所が折れているが、さらに右方へ続く部分があり、右端は切断面を残している。右端より左方約65cmの所に、一辺約10cm近くの方形の貫通孔をあけ、ここに丸太杭を打ち込んでいる。左端の方も、恐らくさらに伸びていたものだろう。281と294との間隔は2,560mmである。当材の下面のレベルは294の方が281よりも約13cm高い。他の杭によって地面に止められていた材でも同様であるが、ほぼ正方形の貫通孔があげられている。

288 左端は切断した面が残り、右端は折れて欠失している（現在長1,088mm）。丸太材を半割りしたものであり、断面は半円形である。半割りした面は、割ったままの状態です、さらに工具は加わっていない。太さは中央付近で111×71mm。左端より240mmの位置に89×29mmの長方形の貫通孔があいている。当材も、半割りした面を地面に付けて据え、左端近くの貫通孔に杭を打ち込んで止めたと考えられるが、元位置を動いて出土した。左端の切断は垂直に切っても構わない所であるが、垂直に切り落してないのは、従来言われているように、鋸のような切断する工具を使用しなかったからであろう。また、貫通孔の側壁には、穴をあけるために使用したノ

ミの使用痕が明瞭は残るが、この工具痕跡より見て、ノミの刃幅が9mm程度だったことが分る。

27 出土地点では24杭に打ち込まれて元位置をほとんど動いていなかった。左端は切断面が明瞭であり、右端は杭が打ち込まれていた方形貫通孔の所で折れて欠失している。残存長661mm。丸太材を半割りした材であり、半割りした面を地面に付けている。太さは左端近くで133×98mm。左端より570mmの位置に約5cm四方の貫通孔があり、ここに杭が打ち込まれていた。左端が先端を尖らしたようになっているが、これは28の所で述べたように、切断する方法による痕跡であろう。

28 左端は完存するが、右端は折れて欠失している（現存長636mm）。丸太を半割りにした材である。折れている右端の所には、即ち左端より約60cmの位置に、55×45mmの貫通孔があげられ、半割りした平たい面を地面に据えて、24杭が打ち込まれていた。太さは138×55mm。半割りする際のクサビの痕跡ではないかと思われるものが、平たい面の片側に残っており、その際のクサビの幅は約7cmであろう。これがクサビ痕とすると、丸太を割る場合にはクサビを使ったとする従来の考えを実証することになる。また、左端のような切断は、立木をオノにて斜めに切ったあと、残りの部分を押し倒したままの状態であるとも考えられる。湯船遺跡出土の建築用部材の切断面の中には、このように、立木を切り倒した際のままのものもあると考えられる。

29 (ツバキ) 貫通孔に杭は打ち込まれていず、溝の岸より離れて出土したため、元位置は動いていると見られる。左端は垂直な切断面が残るが、右端は腐れて欠失している。丸太を半割りしたものであり、他の護岸用横木と同様、半割りした平坦面を地面に据えたであろうが、当材はそうした際、上面となる丸太の面も、所々削り落としている。半割りした面にも、半割りしたままでなく平行線状にオノのような工具の打ち込み傷がある所から、表面の調整が行なわれたことが分る。太さは、左右にてほぼ同じであり、左端で131×83mm、右端近くで138×59mmであり、右端では腐れがひどい。左端より530mmの所に78×68mmの方形貫通孔を穿っている。貫通孔は垂直によく切れており、他の溝護岸用横木に穿っている。貫通孔は垂直によく切れており、他の溝護岸用横木に穿たれた貫通孔に窺えると同様、ノミによる工作と考えられる。

30 元位置を動いている。現状は傷みが激しく、中央付近で148×55mmの板状をしているが、当初は他の地面に杭とめられた材と同じく、丸太を半割りしたものであったろう。そして半割りした平坦な面はまだ残っている。傷みがひどく両端とも腐れて欠失しているが、左端より342mmの位置に、復元の大ききで85×72mmの方形の貫通孔がある。

④ 杭 12本

杭は、溝の前項の材に打ち込まれたまま出土した以外に、単独に打ち込まれて出土したのものもある。この項で記述するものは、打ち込まれたまま出土した杭であるが、ここで述べる以外の出土材で、杭として使用されたものもあるかも知れない。杭の主要なものは、前項の材をとめるために使用されたもので、8次の発掘調査区の、東南より西北に向けて、一列に並んで出

土した。その杭に、東南より西北へ番号を付し、215より214まで順に番号を付けると全てで20本であるが、このうち取り上げて実測し得たのは、9本のみである。次に各杭間の距離を、215から216まで、216から217まで……213から214まで、という具合に列記すると、104, 274, 118, 266, 100, 10, 296, 120, 204, 108, 312, 18, 316, 124, 230, 124, 232, 102, 252 cmである。20本の杭のうち、直線上に並ぶ杭群があり、それは215, 216, 217, 218と214, 210, 211, 212と213, 217, 218, 219, 211と211, 211, 212と214である。他の211から213の杭は3本かたまって、別の所から出土したものである。

211 ほぼ垂直に打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は折れて欠失しているが、左端（下端）は尖っている。断面は十二面柱になるように仕上げられている。一面のみ幅が広く53 mmで、他の面幅は小さく15~26 mmである。太さは中央付近で91×89 mm。各面の仕上げは、ウロコ状の工具痕であるが、さらに先端が尖っている部分にも、ウロコ状の工具痕が見える。

211 ほぼ鉛直に打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は折れて欠失しているが、左端（下端）は尖っている。残存長776 mm。断面は、十二面柱になるように仕上げられている。一面のみ幅が広く35 mmで、他の十一面の幅は9~29 mmである。太さは中央付近で83×80 mm。各面には、ウロコ状の工具痕がきれいに残っている。一番広い面全てに、ウロコ状の工具の刃幅痕があたっている所から見て、刃幅が35 mm以上の工具があったことが分る。このウロコ状の工具痕は、チョウナの工具痕と考えられる。先端を尖らせる工具は、切断面を持つ工具痕より見て、オノと考えられる。

211 地面に置かれた半割丸太材を止めるような状態で、ほぼ鉛直に打ち込まれたまま出土した。右端（上端）は折れて欠失しているが、左端（下端）は尖っている。断面は十三面柱になるよう仕上げられている。一面のみ幅が広く、53 mmで、他の十二面の幅は16~27 mmである。太さは中央付近で89×82 mm。各面の仕上げは、ウロコ状の工具痕であるが、一番幅広い面が、一列の刃幅で仕上げられて無く、二列のウロコ状に工具痕が並んでいるのは、刃幅がこの面の幅(53 mm)がなかったからだとも考えられる。前記211の刃幅の検討と併せ考えて、チョウナの刃幅は、35 mm以上53 mm以下のものもあったと考えられる。先端が尖っている部分は、ウロコ状の工具痕では無い。

211 鉛直に打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は腐れによって欠失しているが、左端（下端）は尖っている。樹皮付き丸太材の両面を縦割りに落して、断面を太鼓状にしている。縦割りにした面には、ウロコ状の工具痕が残っており、表面の調整が行われたことが分る。太さは中央付近で75×55 mm。材の断面を太鼓状にした後、オノのような工具で、先端を尖らせている。

211 打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は折れて欠失しているが、左端（下端）は尖っている。丸太を半割りにしたものであるため、断面は半円形である。円形の面にはまだ樹

皮が付着している。側面には削っている工具痕が見られるが、これは太さを調整するための作業であろう。丸太を半割りした面には、その後の調整した仕上げの工具痕は見えない。

201 200とほとんど接するような位置に、打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は腐れて欠失しているが、左端（下端）は尖っている。丸太材で、小枝の飛び出している所だけ削り落としていて、表面にはまだ樹皮が付いている。

202 ほぼ鉛直に打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は腐れて欠失しているが、左端（下端）は尖っている。樹皮付きの丸太材である。太さは78×70mm。先端は片面方向からのみ尖らしている。

211 ほぼ鉛直に打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は欠失しているが、左端（下端）は尖っている。一部にまだ樹皮の残っている丸太材である。先端は片面方向からのみ尖らしている。

200 211のすぐ横の位置で、ほぼ鉛直に打ち込まれた状態で出土した。右端（上端）は欠失しているが、左端（下端）は尖っている。樹皮付き丸太材である。

211, 212, 213 3本は1ヵ所にかたまって、打ち込まれたまま出土した。先端部分のみである。3本とも右端（上端）は折れて欠失しているが、左端（下端）は鋭く尖っている。樹皮が付いている丸太材である。木質は非常に固い。

以上の、杭における観察より、先端を尖らすのは当然であるが、杭の断面形に、丸太を面取りをするもの、丸太の両側を落して太鼓形にするもの、丸太の片面を落して半円形とするもの、樹皮付き丸太のままのものがあることが分った。このうち、丸太を面取りするもののみ、仕上げが立派であるので、当材（201, 211, 213）は当初より杭として作成されたものではなく、254同様、柱材であった可能性がある。

⑥ 板材 3本

以下の3コは、板材と考えられる材である。板材の数は非常に少ない。

032 両端ともに欠失しているが、最大幅124mm、厚さ約16mmの板材である。板材の表面は割り取られたままではなく、長く削り取られた溝状の工具痕があり、表面の調整を行なったものと考えられる。しかし、きちんと平滑に仕上げはされていない。

100 両端ともに欠失しているが、最大幅95mm、厚さ約22mmの板材と考えられる材である。板材の表面はかなり傷んでいるが、長く削り取られた溝状の工具痕がわずかに見え、板材として割り剥いた後も、表面の調整が行なわれたようである。

214 最大幅93mm、板状の材。両端折れている。片側が薄くなっていて、断面三角形である。厚い方は厚さ12mmである。割り剥いたのみの材である。

以下⑥～⑫は丸太材である。丸太材は、その材の建築用部材としての機能を考えるために、

端部の形状と太さによって分類した。分類の仕方は次のようである。

- ⑥、一端に雁首状の造り出しを持つもの
- ⑦、端部近くに欠き込みを持つもの
- ⑧、⑥の造り出しと⑦の欠き込みを、ともに持つもの
- ⑨a、両端ともに鋭く尖っているもの
- ⑨b、一端が鋭く尖っており、他端は欠失しているものうち、太さが大なるもの
- ⑨c、一端が鋭く尖っており、他端は欠失しているものうち、太さが中なるもの
- ⑨d、一端が鋭く尖っており、他端は欠失しているものうち、太さが小なるもの
- ⑩a、両端ともに切断されているもの
- ⑩b、一端が切断されており、他端は欠失しているものうち、太さが大なるもの
- ⑩c、一端が切断されており、他端は欠失しているものうち、太さが小なるもの
- ⑪、一端に柄状の工作がしてあるもの
- ⑫a、両端ともに折れているものうち、太さが大なるもの
- ⑫b、両端ともに折れているものうち、太さが中なるもの
- ⑫c、両端ともに折れているものうち、太さが小なるもの

今回報告の出土部材125本中、⑥～⑩の丸太材が81本あり、全体の65%の多きを数えている。出土部材の数量が、建築部の部材の数量と比例するとは限らないが、建築用部材の中で、非常に多くの丸太材が使用されたことは言えるであろう。

⑥ 一端に雁首状の造り出しを持つ丸太材 7本

81 左端に雁首状の造り出しをつくり、右端は折れて欠失している。中央付近で88×78mmの太さの丸太材である(現存長1,680mm)。左端は長さ32mmの造り出しをつくり、この造り出しの根元から約21cmの中までは断面を幅70mm、高さ約4～6cmの四角形とし、造り出しの根元から63mmの所に、一辺43mmの正方形の貫通孔をあけている。それ以外には丸太材表面には、小枝を払い落した以外には工具痕は見えない。貫通孔を上方から見た面の当材は彎曲しているが、貫通孔を側方から見た面においては、まっすぐな材である。当材の貫通孔の大きさは、床板を支える桁材と考えられる85 (D) の、中央にある貫通孔の大きさ50mm四方とほぼ等しい。以上推測したように、当材は、あるいは、81に組みあう床材を支える大引材の可能性があると考えられるが、全長が無いのが残念である。

82 (アカマツ又はクロマツ) 左端は雁首につくり、右端は先端を一面からのみ尖らせている。右端先端がわずかに折れているが、ほぼ完形である(現存長3,324mm)。太さは、ほぼ中央付近で98×71mmで、丸太材であるが、やや扁平である。左端近くは特に扁平であり、造り出しの根元では68×29mmである。右端の削りのある面の反対面に、長さ206mm、深さ約5mmの浅い欠き込みがある。この欠き込みの位置は、左端の造り出しの根元より2,882mmである。当材のよう

に、一端に雁首状の造り出しを持つ丸太材は他にもあり、垂木かとみられるものも多い。

154 左端は欠失しているが、右端にはわずかに切断面が残るため、先はさほど長くなかっただろうと考えられる。腐蝕がかなり激しいが、丸太材と考えられる。右端より410mmの位置に、長さ195mm、深さ約1cmの浅い欠き込みがある。太さは左端近くで101×87mm、右端に向かって細くなっており、右端近くで93×69mm。当材の形態は、前記107の右端近くの形態、寸法とほぼ同じである。当材は一端に雁首は見えないが、類似の機能を有すると考えられるので、ここに記した。

170 (ミズキ科ミズキ属) 左端は雁首をつくり、右端は折れて欠失している。丸太材であるが、表面が削り取られている所があり、丸太表面を機能に合うように調整したようである。太さは、左端近くで、偏平であり68×43mm、中央付近で71×62mm、右端では61×59mmである。左端の造り出しは、151や171と似ている。造り出しの根元から780mmの位置の相対する面に、欠き込みが2ヶ所ある。

171 丸太材では、最長の、完形の材である(全長4,440mm)。太さは左端で70×60mm、中央付近で98×98mm、右端では随分細くなっており40×15mmである。左端は垂直にきれいに切断されているが、右端では、切断は途中までで、あとは折れたようになっている。左端より70mmを残して、その部分を削ぎ出すように周囲より抉られており、更に750mm奥に入った位置に、長さ140mmのうすい欠き込み傷がある。その他には材表面には、小枝を払い落した以外には、加工を施していない。左端の造り出しは、やはり紐かけの役目と、直交する材との接合の役目と考えられ、非常に長いことと、左端と右端との太さがかなり違うので、垂木のようなものとみられる。

175 (アカメガシワ) は、左端は造り出しが削り出されてあり、右端は折れて欠失している。ただし発掘時の全長は約4.4mと確認している。まっすぐな丸太材であるが、全長のほぼ中央、即ち左端より2,140mmの所に、大きさ50×25mm、深さ50mmの納穴をあける。今次調査出土材のなかで、この納穴に入る納を持つものは188、189および191(1)である。左端より2.2mあたりより右方は、表面のみ工具をあてて削っている。他の部分の断面はほぼ円形である。

184 当材は太さが小さいが、端部の形態が同様であるのでここに掲げた。右端は折れている。太さは左端近くで36×33mmであり、右端に向かって細くなっており、右端では30×28mmである。左端は周囲八面より抉り取って、最先端25mm分のみ残している。そのまま残した最先端の一面のみ斜めに削ぎ落している。他の加工は、小枝の払い落しである。

⑨ 端部近くに欠き込みを持つ丸太材 9本

183 完形の丸太材である(全長3,775mm)。表面には樹皮は見当たらない。小枝は払い落されている。太さは、左端近くで110×108mmで、右端へ向かっている。両端の切断は、左端では周囲から削ぎ落して丸く切断しているが、右端では一方向からのみ切断している。欠き込みを二ヶ所に設けている。一つは、左端のすぐ近くで先端より120mmの位置に、長さ87mm、深さ約3

cmの欠き込みである。他の一つの欠き込みは、その欠き込みから、1,620mm離れた位置にあり、長さ107mm、深さ15mmであり、この欠き込みは、材の軸方向に対して直角方向では無く、斜めに取り付けられている。さらに、左端より40~80cmの間の一面には、工具の打ち込み傷があり、これはここに平たい材があたるために、丸太の面を調整したためであろう。当材を扇根材と考えてみて、又首構造の合掌材とすると、あまりに長大に過ぎるため、極材と考えてみよう。右端の細い方を上方として、他の同様の材と斜めに組合わせて干木状に突き出させて緊結し、左端近くの欠き込みは、茅葺を繋ぎ止めるためのものと考えられることもできよう。

82 (アカマツ又はクロマツ) 左端は周囲から切り落して切断しているが、右端は折れて欠失している。残存長2,492mm。右端へ向かって次第に腐蝕が激しくなり、断面形さえ定かでない。丸太材であるが、太さは左端近くでは116×112mmである。左端より210mmの位置に、長さ約11cm、深さ約1cmの欠き込みがある。左端近くの形體と、右方へ向かって細くなっている丸太材であるということから、当材も前記81と同様な機能を持つ材と考えられる。

83 左端は完全だが、右端は、切断面のわずか一部が折れていると思われるので、ほぼ全長を残す(2,229mm)。樹皮付きの丸太材である。左端先端は垂直に切断されず、周囲から丸く削り落とされている。太さは左端近くで62×62mmであり、右端へ向かって細くなっており、右端近くでは36×35mmと約半分になっている。図に見るように、かなり曲がっているが、これは平面上での彎曲であり、立体的な彎曲では無いので、屋根材などに使用するには一向差し支えない。左端から175mmの位置に、長さ110mmのわずかな欠き込みらしきひのがある。

85 かなり傷んでいるが、心持材であることが分る。当初は丸太材と思われるが、現在はかなり扁平であり、腐蝕も激しい。左端は切断面を残すが、右端は腐れて欠失している。太さは左端近くで46×45mmである。左端のすぐ横に、長さ79mm、深さ約2.0mmの欠き込みがある。この欠き込みは丁寧に削られている。

86 (スタジイ) 左端は周囲より削ぎ落とすようにして切断し、右端は折れて欠失している。所々に割れが生じている。太さは中央付近で43×21mmである。左端先端より90mmの位置に、長さ79mm、深さ16mmの欠き込みがある。断面形は、左端は丸太であるが、欠き込みより右方は、丸太を半割りした形である。その他、材表面には、枝を払い落とした工具痕のみが見える。

87 左端は削ぎ落とすようにして切断し、右端は折れて欠失している。丸太材であり、太さは左端近くで42×40mmであり、右端へ向かって次第に太くなっており、右端近くでは48×48mmである。左端先端より70mmの位置に、長さ98mm、深さ23mmの欠き込みがある。この欠き込みの右側壁は垂直に切られており、ここに55が直交して接合したまま出上した。丸太の材表面には特に加工を施した痕跡は見えない。

88 左端は鋭く尖っていたものと思われるが、先端部分がわずかに欠けている。右端は折れて欠失している。左端より166mmの位置には、長さ104mm、深さ25mmの欠き込みがある。彎曲し

た丸太材であり、太さは左端近くで56×43mmであり、右端へ右端へ向って細くなっており、右端近くでは36×34mmである。かなり太い枝を払い落として、表面を調整した痕跡も窺える。

111 左端は鋭く尖っていたと考えられるが、わずかに折損している。右端は折れて欠失している。左端より135mmの位置に、長さ115mm、深さ約25mmの欠き込みがある。太さは中央付近で56×45mmである。枝を払い落とし樹皮を削いだ丸太材である。

111 樹皮を残す、かなり曲がった丸太材である。左端は周囲から削ぎ落とすようにして切断され、右端は鋭く尖っている。太さは、左端近くで32×31mmであり、中央付近で最小であり29×22mm、右端で最大であり46×42mmである。非常に細長い材である。左端より82mm入った所で、長さ43mm、深さ約2cmの欠き込みがある。

以上9本の丸太材は、一端に欠き込みがあることで、ここに一括して記述したのであるが、太さと完全長について大きな違いがあり、全てが建築用部材として同一の機能を果たしているとは考えられない。左端の欠き込みは、他材と接合する際、他材の掘わりを良くするためや縄がらみの機能を持つものと考えられる。

各材の機能としては、太さの大きな151、122は柱とも考えられるし、さらに、太さの小さな丸太材は、床構造の材、壁の小舞材、屋根の材等と考えられよう。

⑥ 一端に雁首状の造り出しを持ち、かつ、端部近くに欠き込みを持つ丸太材 2本

111 (ナシ科、ビワ属) 左端に雁首をつくり、右端は折れて欠失している。平面的に彎曲した材である。樹皮付きの丸太材である。左端は、先端より長さ50mmの造り出しの根元より、140mmの位置に、長さ158mm、深さ24mmの欠き込みがある。この欠き込みの深さは深く、材自身のこの位置での厚さは30mmであり、あと残りはわずか6mmとなっている。太さは左端、右端でさほど変わらず、左端近くで52×43mm、右端近くで47×47mmである。

111 左端は雁首を削り出し、右端は先端一部に削りの工具痕があるが折れて欠失している。太さは、左端近くで60×57mmであり、右端でもほぼ同じ大きさである。まっすぐな丸太材である。左端先端より約180mmの位置に、長さ128mm、深さ35mmの欠き込みがある。この欠き込みの右側壁はかなり垂直に切断されており、その右側壁の方向は、当材の方向と直角ではなく斜行している。

以上2本の丸太材は、ともに完全長が不明であるが、左端の形態が⑥、⑦の形態を併せたものである。ために機能も⑥、⑦併せたことが考えられる。欠き込み部分は、接合する材の掘わりを良くし、雁首は、造り出しの根元の位置で接する別の材と組んで緊結する役目を果たすことが可能であろう。これら2本の丸太材も⑥の所に記述したように、根太、火引などの床構造を考える資料となろう。

⑥ 端が鋭く尖っている丸太材 23本

115 平面上で弧状に大きく彎曲している丸太材である。両端とも、先端は同じ面からのみ尖

らせている。弦の長さで測って、完全長3,158mm。丸太の表面は所々削ってあり、これは材表面を平坦にするためであろう。太さは左端近くで80×70mmであり、右方へ向かって細くなっており、中央付近で64×62mmであり、右端近くで52×50mmである。

24 左端は鋭く尖っており、右端も先端の一部が折れているが、尖っていたと考えられる切断面を残しているので、ほぼ完全長を残存している。樹皮付きの丸太材である。太さは左端近くで44×30mmであり、右端へ向かって細くなっており、右端では22×20mmである。

186 (ブナ科エナラ属) 両端とも尖っていたと考えられるが、右端がわずかに欠失している(現存長1,556mm)。右端の近く、左端より1,130mmの位置に、長さが上部において131mm、底部において77mm、深さ25mmの欠き込みがある。材表面には、上記以外には加工は施されておらず、樹皮付きの丸太材である。太さは左端近くで82×71mm、中央付近で83×72mmである。出土時上面となっていた面(下図)は傷みがひどいが、出土時下面となっていた面(上図)は保存が良い。

242 両端とも鋭く尖っており、全長(1,530mm)のわかる丸太材である。太さは、左端より右端にかけて細くなっており、中央付近で31×31mmである。表面には特に工具は加わっていない。

144 18と接合できることが分り、完形となった材である(全長1,132mm)。彎曲している丸太材である。太さは、左端から右端までほとんど変わらない太さであり、中央付近で23×23mmである。両端とも鋭く尖っている。丸太材の表面には、工具痕は見当たらない。

218 左端は尖っている。右端も殺いでいる(全長768mm)。中央付近での太さ25×18mm。断面は小さく、丸太材の表面には加工を加えず、両端のみを尖らした材である。

231 両端の鋭く尖った、偏平な断面方形の完形の材である。全長575mm。堅木であり全体につやのある黒色をしている。太さは中央付近で20×18mmである。建築用部材では無かろう。中央付近が、使用しているためかやせている。

以上7本は、両端とも鋭く尖っている材で、完全長の分る丸太材である。丸太材の出土量は非常に多いが、両端ともに鋭く尖っている材は、わずか7本である。以下⑨a、⑨b、⑨cで述べる。一端が鋭く尖っている材の中には、両端ともに鋭く尖っていた材も多く含まれると思われる。両端ともに鋭く尖っている材は、上記6本にても分るように約2～1mと比較的短い材が多い。このような短い両端の鋭く尖った丸太材は、屋根または草壁の小舞材として使用されたものと考えられよう。

⑨a 2本

212 左端は一面からのみ先端を尖らしており、右端は折れて欠失している。大きく彎曲している。枝を払い落したのみの丸太材である。樹皮は付いていない。太さは左端近くで72×72mmであり、右方へ向かって細くなっており、中央付近で67×66mm、右端近くで55×54mmである。

㉒ 左端は長く鋭く尖るが、先端がわずかに折れている。右端は折れて欠失している。樹皮付きの丸太材である。太さは中央付近で78×72mm。

④⑩ 4本

㉓ 左端は尖っており、右端は折れて欠失している。太さは、左端近くで40×37mmであり、右端へ向かって細くなっており、右端近くでは26×24mmとなっており、かなり細くなっている。右端へ続くはずの欠失部分もさほど長くはないであろう。材表面は枝を払い落とした以外には工具痕は見当たらない。彎曲している。樹皮が付いていない丸太材である。

㉔ ㉓の左端近くの欠き込み部分に直交してのった状態で出土した。ただし緊結した縄などはなかったので使用状態ををしめすものではなかろう。左端は先端が折れているが、当初は尖っていたと考えられる。右端は折れて欠失している。太さは中央付近で48×43mm。枝を払い落したのみの丸太材である。

㉕ 右端は折れて欠失している。左端は先端に削りの部分があり、左端が尖っていたと考えれば、わずかしこ欠失していないことになる。樹皮付きの丸太材であり、枝のみ払い落している。太さは中央付近で37×32mm。

㉖ 左端は鋭く尖っている。右端は折れて欠失している。太さは中央付近で49×43mmであり、右端に向かって細くなっている。樹皮の付かない丸太材である。

④⑪ 10本

㉗ 左端は尖っていたと考えられるが、現在は先端が折れている。右端は折損している。表面に工具は加えられていない丸太材で、彎曲している。太さは中央付近で42×30mm。

㉘ 左端は尖っている。右端は折れた痕か、切断した痕か、明瞭でない。太さは、左端より右端にかけて細くなっており、中央付近で31×19mmである。表面に工具痕の見えない丸太材である。

㉙ 左端は尖っており、右端は折れて欠失している。断面形は、丸太を中心から3分割した1つの形をしている。丸太面にはウロコ状の工具痕があり、表面の丁寧な調整が行われたことが分る。断面が3分の1円であることと、材が彎曲していることが当初からの形であるかどうか、明確でない。

㉚ 左端は一部削れているが、当初は尖っていたと考えられる。右端は折れて欠失している。極端に彎曲した丸太材である。

㉛ 左端は鋭く尖り、右端は折れて欠失している。断面形は4分の1円の形状をしている。当材は、当初よりこの形状に割って使用されたと考えられる。

㉜ 左端は鋭く尖り、右端は折れて欠失している。樹皮は見当たらない丸太材である。

㉝ 左端は尖っており、右端は折れて欠失している。断面形は六角形をしており、六角形の一辺のみ長さが大きい。材はきちんとした六角柱状をしておらず、場所によって、六角柱の各

面の幅が異なる。彼の一部には樹皮を止めており、樹皮付き丸太を縦割りし六角柱状とした後、先端を尖らしたものである。

237 左端は尖っているが、右端は折れて欠失している。樹皮付き丸太材である。

118 左端は尖っており、右端は折れて欠失している。樹皮付き丸太材である。

225 左端は尖っているが、右端は折れて欠失している。樹皮付き丸太材である。

㊦ 端が切断されている丸太材 10本

㊦① 1本

218 両端ともに切断している（全長1,308mm）。丸太の3分の1を剝り取った断面をしている。左端より520mmの位置に、長さが、上部において125mm、底部において74mm、深さ約4cmの欠き込みがある。

㊦② 4本

227 左端は斜めに削り落とすようにして切断している。右端は折れて欠失している。材表面にも傷みがなく、全体にしっかりしていて太い丸太材である。左端から右端まであまり太さは変わらず、中央付近での太さが118×111mmである。左端先端から約80cmの所まで両面が削られており、この部分のみ太鼓状の断面である。その他、材表面には、小枝を払い落した以外、到る所に小さな削り痕があり、できるだけ、表面がまっすぐな丸太材にしようとしたことが分る。重量もあり、まっすぐな太い丸太材である所から、主要な構造材と考えられる。

238 左端は切断している面を残している。右端は両面のみ、工具による削り痕があるが、折れている。樹皮の付かない丸太材である。丸太の一面のみ削って、カマボコ形の断面としている。非常に堅くて重量のある材である。

101（シラカシ）左端は切断している。右端は折れて欠失している。彎曲している。非常に堅くて重量のある材である。樹皮付きの丸太材である。左端近くのみは樹皮が付いていない。太さは中央付近で126×124mm。

239 左端は垂直に切断し、右端は折れて欠失している。腐れが激しい。材表面には一部ウロコ状の工具痕がみえ、丁寧な加工がしてある。当材は、表面の調整の工具痕から見て、丸太材では無さそうでもある。

㊦③ 5本

67 左端は両面より削り落とすようにして切断する。右端は折れているが、非常に細くなっており、削りの工具痕が見えているので、これより先はわずかな長さであろう。左端近くから、右端へ向かって細くなっている。所々樹皮が残っている。枝のみを払い落した丸太材である。

102 左端は両面より削り落とすようにして切断する。右端は腐れて欠失している。枝のみを払い落した。かなり曲がった丸太材である。

101 左端は両面より削り落とすようにして切断する。右端は折れて欠失している。

以上3本は、左端の加工が同じであり、少し尖っていて、⑨より太さが少し小さいものである。これらの材端は尖っているが、⑨の材端が鋭く尖っているのとは、尖り方が違う。ここに記した⑨の先端は、材を切断するために周より削り取った結果、幾分尖ったのであり、他の⑨の材端は尖らせるために工具をあてており、その尖り方は鋭い。

25、12 丸太材の端部と考えられ、工具痕が見られる。

⑩ 一端に杓状の工作がしてある丸太材 2本

11 腐蝕が激しく、本来の形は明瞭でない。左端は簡単に杓状につくられており、右端は尖っている。ただし、幾片にも折れていたのを繋ぎ合わせたものなので、正確な全長とは言えない。太さは、左方から右方へ行くに従って細くなっている。当初は丸太材であり、断面は円形であろうと考えられる。左端の杓状のものも、きちんとしたものでは無く、簡単に削り折ってつくったものである。

12 非常にばらばらになってしまっているが、出土時の実測により、残存長は約140cm位である。表面に樹皮の付いている丸太材であるが、小枝のみは払い落とされている。左端先端が簡単な杓状となって折れており、あるいは11の左端と同様のものとも考えられるので、ここに記した。

丸太材で両端ともに鋭く尖る材は⑨で記した通りである。一端に杓状のものがあることで、ここに別に記したが、この杓状のものも、きちんとつくっている訳ではないので、先端が尖ったものと同じ機能を果たすものとも考えられる。これら2本の丸太材も、屋根や、草壁の小舞としても使用できよう。

⑪ 両端とも折れている丸太材 28本

⑫ 13本

13 両端とも折れて欠失している。腐蝕が激しいが、心持材であり、丸太の表面が残存している部分があり、そこには何らの加工が施して無いので、当初は丸太材であったと考えられる。材はかなりやせており、当初はもっと大きかったであろう。

14 両端とも折れている。ただし、右端の一部には削りの面がある。かなり彎曲した丸太材である。樹皮がまだ残っており、立木を切り倒したまま、枝を払い落としたのみの材である。太さは左から右端へ向かって細くなっており、中央付近で73×71mm、右端では58×42mmである。彎曲は平面上での曲がりである。

15 両端ともに折れて欠失している。腐蝕によって割れたりしている部分もあるが、丸太材である。左端より470mmの位置に長さ約19cmの平坦面をつくる。この平坦面は、欠き込みと同じく、当材と交叉する材とを接合するための装置と考えられる。この平坦面より右方1mの間には、この平坦面と同じ面に、丸太の表面を平坦にするための工具の打ち込み傷がある。火きな、しっかりした丸太材であるので、根太材などにも使用できよう。

104 両端ともに折れている。腐蝕が激しく、断面形さえ正確につかめない。たぶん丸太材であったのだろう。

105 両端ともに折れている。腐蝕のため傷みが激しい。かなり平面上で彎曲している。丸太材を半割りした断面形をしている。丸太面の左端近くに、長さ170mmの浅い欠き込みがあり、当材と他材との接合のための欠き込みと考えられる。

106 左端は破損が著しいが、枝が二つに分かれる分枝点となっているので、このあたりが左端で、又木となっていたのであろう。右端は欠失している。かなりあちこち曲がっている丸太材である。小枝のみは払い落としている。

107 両端ともに折れている。腐蝕が著しく、右端に近い方は割れている。丸太材であるが、材表面の工具痕は明瞭でない。

108 両端ともに欠失している。丸太の一面を割り取った断面形をしている。丸太の表面にはまだ樹皮が付着している。表面には工具痕は見当たらない。

109 両端ともに折れて欠失している。樹皮付きの丸太材である。材表面には枝を払い落とした工具痕のみ見える。

110 両端ともに折れて欠失している。左端は材表面が削られている。わずかに樹皮の付いた丸太材である。

111 腐蝕がひどい。出土時は長さ約2.5mが残存した。断面現状は円形の殆ど無いか。これが果して当初からの断面形であるかどうか不明である。あまりにひどい傷み方であり、当初の断面形は円形の丸太材であったかも知れない。

112 両端とはもに欠失している。傷みが激しいが、恐らく丸太材であろう。

113 左端は腐れて欠失しているが、残る切断面より見て、先はさほど長く伸びてはいなかっただろう。右端は折れて欠失している。樹皮がわずかに残るが、枝のみ払い落とした丸太材である。

④ 12木

114 左端はわずかに削り、先端を細くしている。右端は折れて欠失しているが、出土時はさらに約10cmほど延びていた。風化が激しく、節の部分のみ残して、他の部分は非常にやせ細っている。太さは中央付近で55×36mmで、断面形は不整形である。当初は丸太材であったのだろう。

115 両端ともに折れている。右端部分約20cmのみ、断面円形の丸太材の形をとどめるが、あとは傷みが激しく、残存状態が悪く、断面が不整形である。丸太材であったのだろう。

116 両端が折れ、保存状態が著しく悪い。丸太材である。

117 両端ともに折れて、傷みが激しく、原形をとどめない。

118 両端ともに折れている。樹皮付きの丸太材である。丸太は右から左端へ向かって細くな

っている。材表面では枝のみ払い落としている。材質は堅い。

116 両端ともに折れている。腐蝕が激しく、材表面には割れが生じている。丸太材であったのだろう。

117 両端ともに折れている。出土時は長さ約1.1mであった。傷みが激しく、原形をとどめない。工具痕等も見付からない。

118 両端ともに折れて欠失している。丸太材を割っているので、断面は不整形である。丸太を削った後、材表面には加工を施さない。硬材なので稜角などが良く残存する。

119 両端ともに折れて欠失している。樹皮を持つ丸太材であり、材表面には枝を払い落とした工具痕のみがある。

120 両端ともに折れて欠失している。樹皮の付いている丸太材である。材表面には枝を払い落とした工具痕のみがある。

121 両端ともに折れて欠失している。出土時は約1.2mの長さであり、右端の方が尖っていた。断面形は3分の1円の形状をしている。割った面はそのまま、何ら加工が施されていない。材は左端から右端へ向かって細くなっている。材表面に樹皮は見当たらない。

122 両端ともに折れて欠失している。かなり彎曲した材である。断面形は2分の1の円形状であるが、腐蝕等も考えられ、当初からの断面形状であるかどうか明確が無い。材表面に樹皮の付いている部分も見られる。

④ 3本

123 両端は折れて、先はともに欠失している。彎曲した材であり、樹皮を残す丸太材である。材表面には枝を払い落とした以外の工具痕は見えない。

124 両端ともに折れて欠失している。樹皮は見当たらないが、丸太材である。

125 両端ともに折れて欠失している。樹皮を残している丸太材である。堅い木質である。

以上、125本を報告したが、他に葦と思われる長い草がかたままって出土している。聚結用の縄・紐の出土はない。

4. 加工木材について

湯納遺跡出土木材は非常に多く、自然木そのままのものから、種々加工されたものまで広範囲にわたっている。しかし、これらの木材は長年地下水中に埋まっていたため、かなり軟化し、またセルロースが劣化したものが多く、顕微鏡による観察が不可能なものが相当数あったことは残念であった。

顕微鏡用資料薄片を得るために、重合度の異った数種のポリエチレングライコールによって包埋し、ミクロトームにより、横断面、径目面、板目面の3断面薄片を製作して検鏡した。

土木建築用材

柱根 チシャノキ (弥生後期), 不明広葉樹材

礎板 不明広葉樹材 (弥生後期)

杭 ユズリハ, シナノガキ, マツ (以上弥生後期), イヌエンジュ, ユズリハ, イイギリ
(以上古墳)

農具材 すき, アラカシ (弥生後期), アカガシ (弥生後期) 合せくわ, ユズリハ (弥生後期) 平くわ, アオダモ, イチイガシ (弥生後期) イチイガシ (弥生後期) イチイガシ (平安)

日用品材

きね マツ (弥生後期)

臼 (220, 014) マツ (古墳)

槽 スギ, クスノキ (弥生後期) クリ (古墳)

不明木製品 加工品

ウバメガシ, ウバメガシ, アラカシ, クスノキ, ヒノキ, スギ (弥生後期)

不明板材 カシワ, クリ, ヒノキ (弥生後期)

不明加工品 アワブキ, クリ (古墳)

柄付台 イスノキ (弥生後期)

その他

縄文時代 スダジイ, ユズリハ, ヤマモモ

弥生中期 マンサク, カジノキ

弥生終期 コジイ, カナメモチ, シキミ

古墳時代 シナノガキ, アラカシ, アラカシ, アラカシ, チシャノキ, ユズリハ, ヒサカキ,
マツヒメコマツ

土木、建築用材として、弥生時代から古墳時代にかけて特定の樹種が使用されたとは考えられない。多分、附近に自生している、または伐開跡地に自生した手頃のものを使用したものであろう。弥生後期にマツ杭が使用されているが、これは後世使用されるようになったマツ杭とは直接的な関係はないであろう。

マツを除いて他はすべて広葉樹種木である。

農具のすき材として、アラカシ、アカガシ (弥生後期) が出土しているが、これは長い間の経験によるものと思われ、カシ類特にアカガシの繊維の錯雑さによる割れ難さとともに強さや弾性を利用した合理的な使用である。

合せくわとしてユズリハ材の使用は、幹と枝の角度がくわとしての適当さから使用されたものであろう。くわの材としては適当ではない。

平くわ、くわにはアオダモ材のものもあるが、イチイガシのくわが多く、平安時代までも続

いており、くわ材としての最適材質の知識が固定したためであろう。

臼(220)、臼(014)ともにマツ材(古墳)、きねもマツ材(弥生後期)で、古墳時代において既に臼、きね材としての適材の知識が固まったものであろう。

後世明治時代の臼にはケヤキ材とマツ材のものがあり、米つきには主としてマツ臼にマツきねである。これは、広葉樹材にくらべてマツ材のある程度のやわらかさが、米つきに最適であるからであり、古墳時代に既にこの知識が得られていたことは面白い。

槽としては、スギ、クスノキ材(弥生後期)のものが出土し、これは、日本書紀の中にスギ、クスノキは舟材として用う。とあるのと偶然であるのか一致する。当時の舟はスギやクスノキ材の内部をくり抜いたくり舟と考えられるが、この様に考えると、スギやクスノキが槽として使用されたことも考えられる。古墳時代のものとしてクリ材のものが出土しているのは、驚らくにくいというクリ材の特性を知った経験的知識によるものであろうか。

以上の他に、木製品あるいは加工されたものと推定される多くのカシ類、クスノキ材に混って僅かにヒノキ、スギの針葉樹材小片が出土している。建築用材としてヒノキ、スギ材が湯納遺跡に全く見られないのに、小片として特にヒノキ材が出土したことは面白い。

用途不明の柄付き台の様なものが、イスノキ材であることは、イスノキがわが国産木材中で最も重く、堅い材である事から考えて、叩き台として用途が考えられそうである。

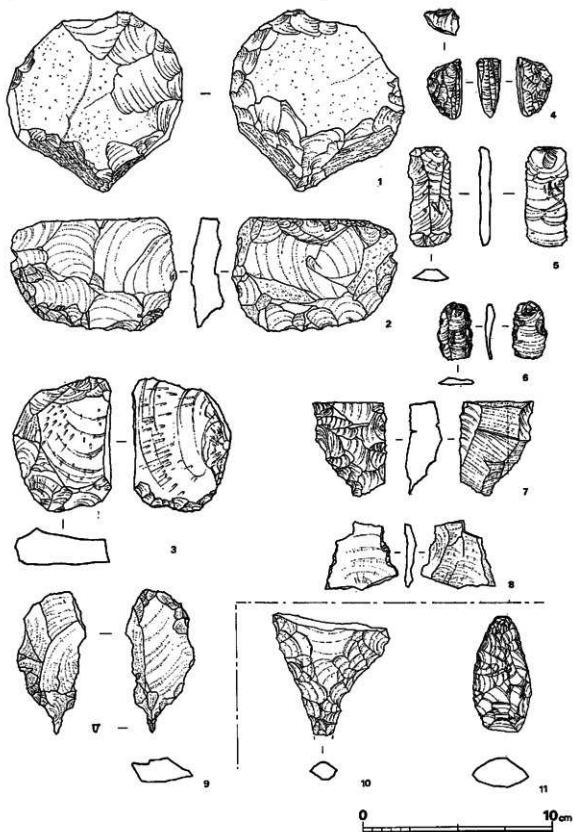
古墳時代の山上木片としてヒメコマツ材があるが、その当時においてもこの附近にヒメコマツがあったとは考えられず、多分他の地域から持参したものであろう。

なお、日本古代文化の探究「家」大林良太郎社会思想社発行のなかで嶋倉巳三郎先生が「家と木材」という論文を掲載しておられますが、これは、「弥生時代の水田遺構と農具」という題で九州大学、福岡市教育委員会、福岡県教育委員会の共催で1973年に発掘調査の報告会を行いました。そのときのパンフレット中に、湯納遺跡の木材について松本昂、林弘也先生の分析結果を収録させていただいたもので、この中には、第8次調査で発見された建築部材の分析結果は1点も含まれておりません。報文のいたらなきから嶋倉先生の誤解をうけたものと思いますが、ここにおことわり申し上げます。

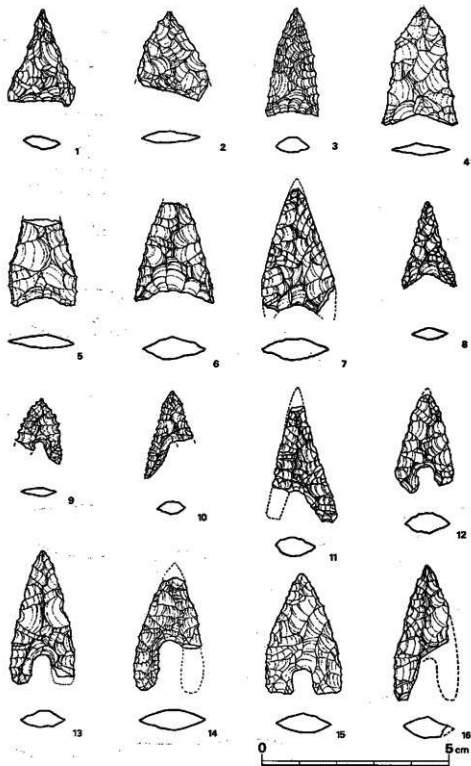
5. 石 製 品

石製品には礫器、割器4、剥片石器8、石刃3、フレーク256、コア、ハンマーストーン57、凹石23、磨石16、石鏃2、石槍1、石皿2、石鏃16、磨製石鏃2、石匙5、砥石81、磨製石剣2、柱状片刃石斧2、扁平片刃石斧2、磨製石斧47、石磨丁16、石鏃1、紡錘車2、石鏃28、錠石2、浮子7、工作台6、有孔円盤2、剣形品4、石帯1、石鏃13がある。

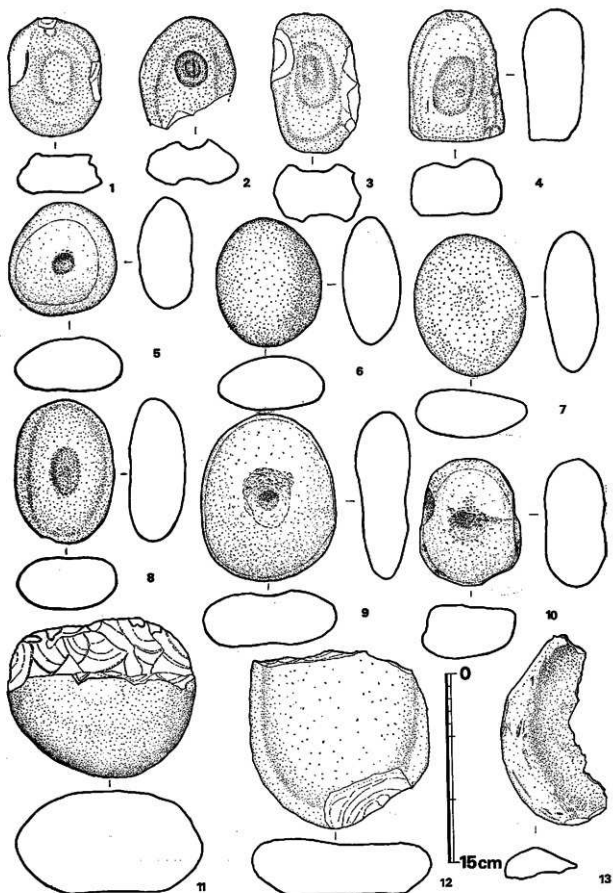
(A) 礫器・割器・石刃・石鏃・石槍類



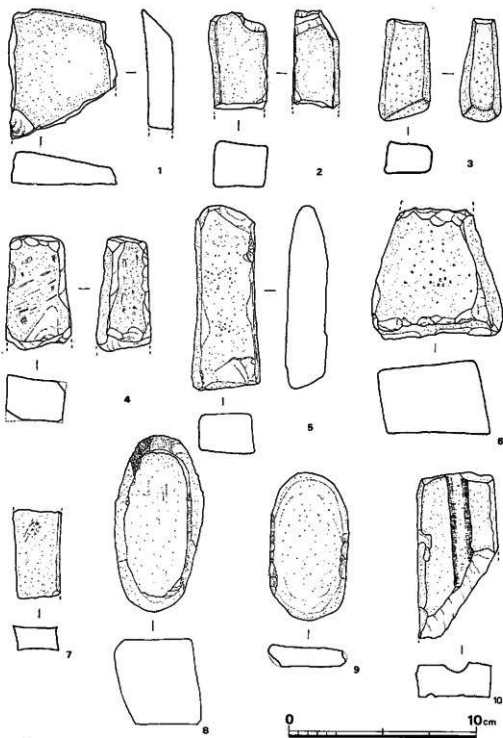
第119圖 打製石器尖側圖(縮尺1/2 10, 11是1/1)



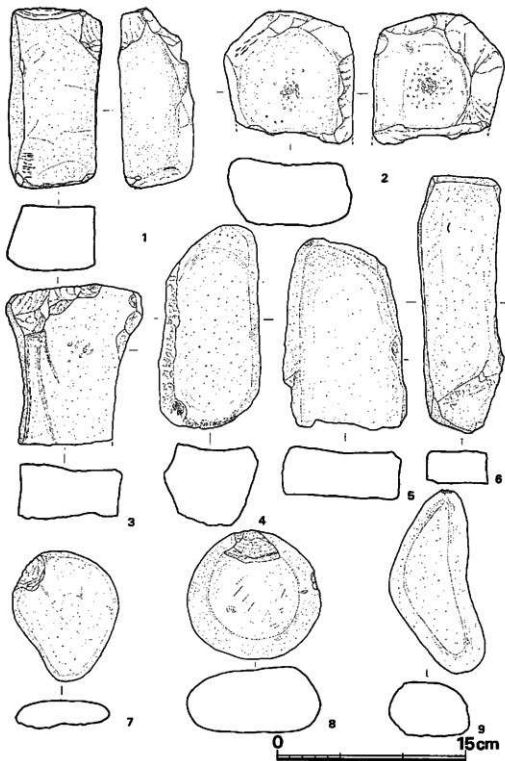
第120圖 石鏃 圖 (縮尺 1/1)



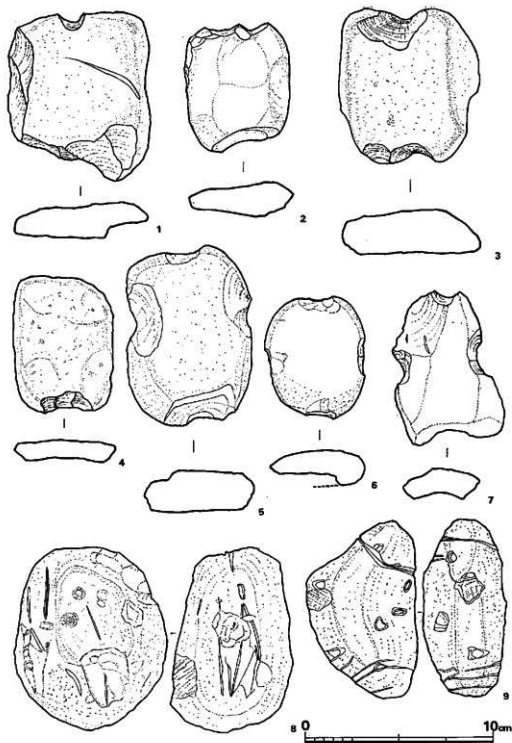
第121圖 くぼみ石・石皿実測図 (縮尺 1/3)



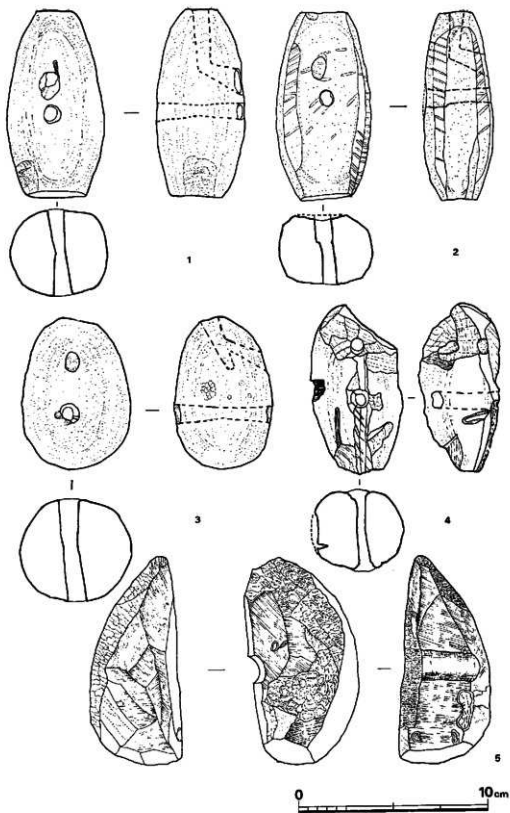
第122圖 磁石実測図(縮尺1/2)



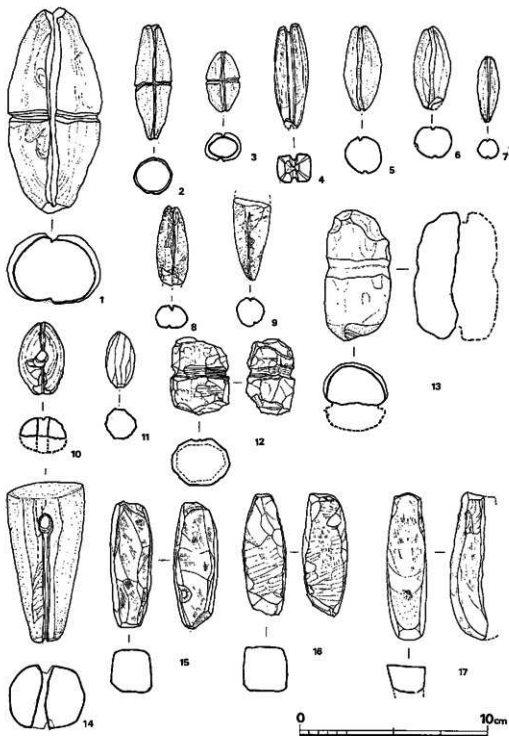
第123圖 砥石・敲石尖剝圖(縮尺 1/3)



第124図 石鏝実例図その1 (縮尺 1/2)



第125図 石鏃実利図その2 (縮尺 1/2)



第126図 石縄突刺図その3 (縮尺 1/2)

第119図のもので4, 7は石核であろう。いずれも弥生式土器や土師器・須恵器と同層において出土している。

B 打製石鏃

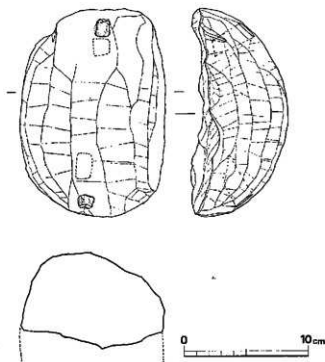
第120図で、平茎無茎式と、凹茎無茎式とがあり、完形品は少ない。

C 凹石・磨石・石皿

第121図で、凹石にはやや長方形と、円形のものがあり、磨石は球状のものはない。

D 砥石

第122図は小形の砥石で、第123図1～6は大形の砥石である。砥石には荒砥、中砥、仕上げ砥があり第122図10は溝状のものである。



第127図 半球形有孔滑石製品実測図(縮尺 1/3)

E ハンマー・ストーン

第123図7, 8, 9で三角形, 円形, 長方形とがある。

F 石鏃

第124・125・126図で未製品も含まれる。形態は打欠, 切目, 穿孔無溝緊縛, 穿孔有溝緊縛型とがある。なお第124図8, 9は礫石製で浮子と思われる。

G 旋石

第127図で欠損品の滑石製である。

H 石匙

第128図1～5で楕形とたて形とがあり, 3は黒曜石, 他はサヌカイト製である。

I 磨製石剣

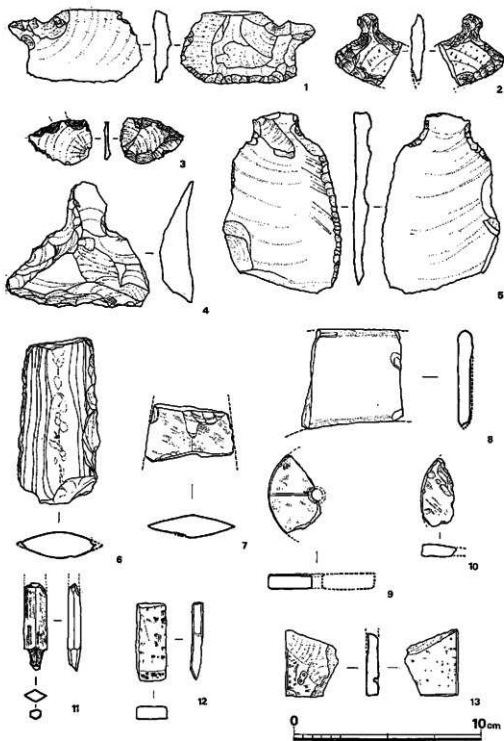
第128図6, 7で, ともに欠損品である。

J 石鏃

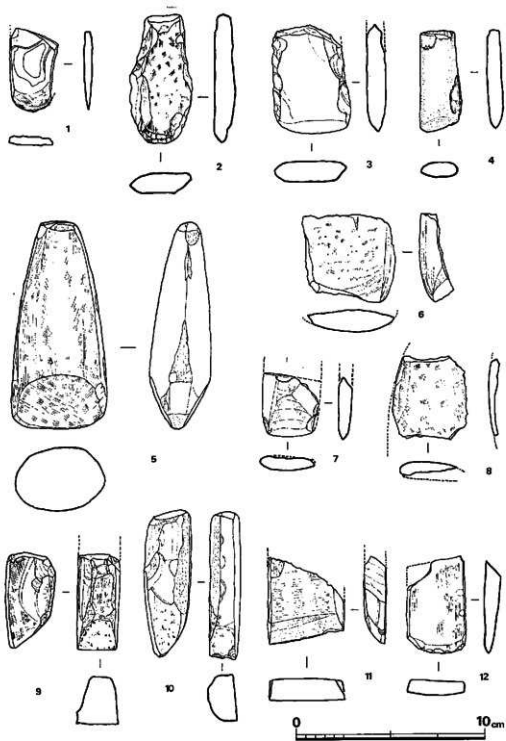
第128図8で欠損がいちじるしい未完成品である。安山岩質の石材を利用している。

K 紡錘車

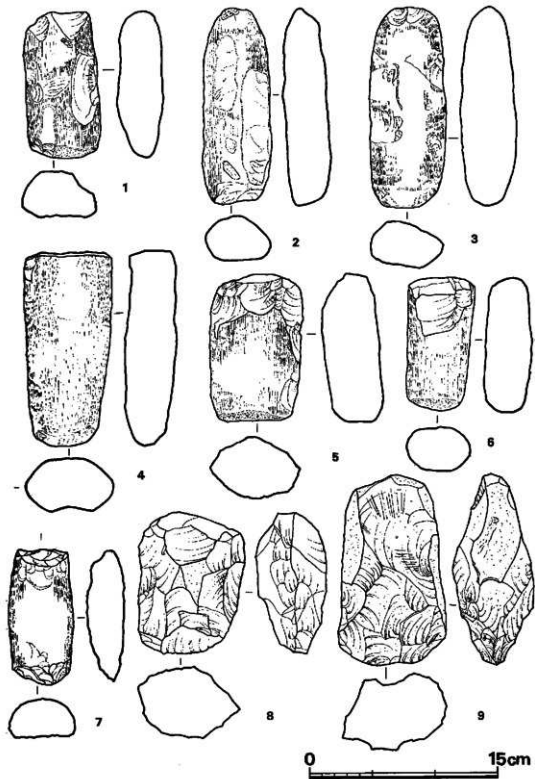
第128図9, 10で, 9は浅い一条の溝を有している。10は有孔円盤の可能性もある。



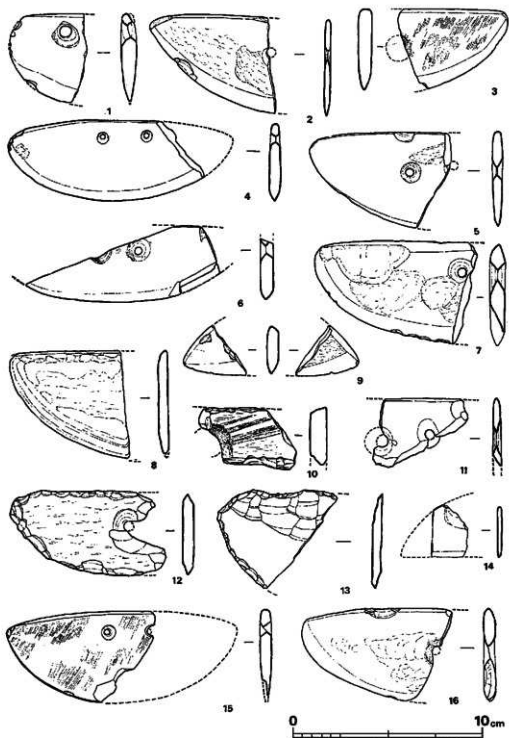
第128回 石器・磨製石器類実測図(縮尺 1/2)



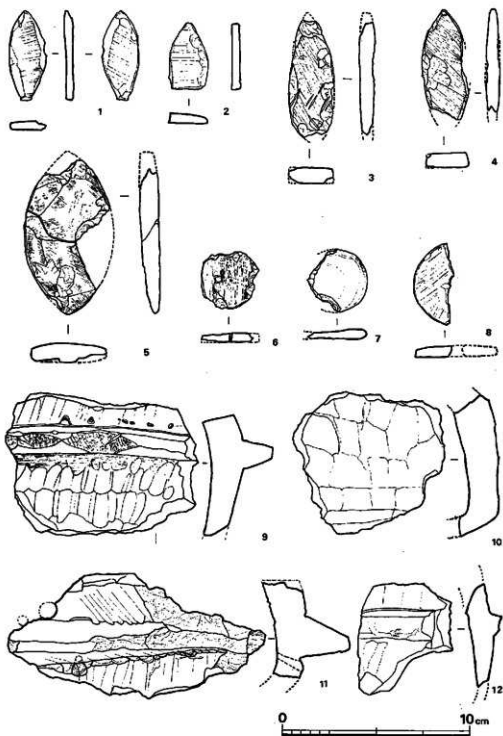
第129图 磨製石斧類実例图 (縮尺 1/2)



第130圖 石斧尖測圖(縮尺1/3)



第131圖 石磨丁類圖(縮尺 1/2)



第132圖 滑石製模造品・石槌尖側図(縮尺 1/2)



第133図 D2・D5 溝出土玉類実測図
(縮尺 1/1)

L 磨製石鏃

第128図11で先端部を欠くが、断面菱形で輝緑凝灰岩製である。

M 石鏃

第128図12の完形品で材質は粘板岩製である。

N 磨製石斧

第129図1～8で、完形品は2, 5のみであり、5はC1住居跡内ピットからの出土である。

O 柱状片刃石斧

第129図9, 10で、10は完形品と思われるが未完成の部分を残している。

P 扁平片刃石斧

第129図11, 12で共に欠損品であるが、完成品であろう。

Q 大形始刃石斧

第130図で、玄武岩製の未完成品石器であり総数47のうち完形品は1個もなく、また完成品も少ない。所謂「今山石斧」といわれるもので、今山石斧製作遺跡は直線距離で北西約6kmにある。

R 石廬丁

第131図で完形品はなく、未完成品も存在する。外灣刃半月形、直線刃半月形があり外灣刃半月形がほとんどである。石材は粘板岩、凝灰岩を利用している。

S 石製模造品

第132図1～4は剣形模造品、5は玉葉伏ともいふべき模造品、6～8は有孔円盤形模造品である。1は基部に若干の挟りがある。これらはいずれも滑石製品である。剣形品はI-Y区D2^溝 溝出土で第69図1, 2, 4の土師器と共存している。また有孔円盤はI-Y区D5溝上層出土で第63図の土師器と共存関係にある。

T 石鍋

第132図9～12で完形品はない。10は底部で部分的にススが付着している。

U 石帯

第128図13で、欠損品である。

以上で石製品の概要を記したが、石製品で遺構に伴うものは少なく、石斧類、石製模造品、石鏃、砥石の各一部分であり、大部分が整地層や流土層である。

6. そ の 他

A ガラス

第133図1～5で、1～4はI-YのD2^溝 溝出土で1は勾玉で明るいブルーを呈し、2～

4は小玉で濃いブルーである。5はⅡ-A区D5溝出土でブルーである。

B 青銅製品

図示出来なかったが、Ⅱ-A区D5溝より錐先の欠損品1。その他銅碗1が出土している。

第 4 お わ り に

以上、各項目にわたって湯納遺跡の調査概要をのべてきた。行政調査にしては、一応の整理期間をとれた調査であったが、調査員が一時に集まることは出来ず、最後まで年度内に出版が出来るかあやうい状況であった。最終的には、各人の分担分を全て収録することをあきらめてこのような報告の形になった。この報告では、出土遺物の解説はのせていないが、「今宵パイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集」として次年度に他の遺跡の報告と合わせて収録する予定である。

湯納遺跡の調査は、1年半にわたる長い調査であったが、弥生後期から古墳時代、さらに歴史時代にわたっていくつかの成果をあげることが出来た。

1. 縄文時代前期葬式に伴うと見られるH1、H2ピットは、標高4.4mの位置で発見された。これは、よく縄文時代の海進、海退について論議されているところであるが、この時期にここまでは海水は進入していないことの証明となる。また同層からの木質は坂田武彦先生によって放射性炭素の年代測定をうけ、 $6125 \pm 95BP$ と測定された。これは山鹿貝塚の縄文土器の年代と一致している。また、この上層での甕甌土の年代が 5860 ± 120 と測定され、この層から出土した阿高式土器の年代をしめした。

2. 福岡平野での水田耕作のあり方の1例としてこの発掘調査をとらえることが出来よう。青峰先生の土壌分析では、第II土層に乾田である可能性が認められた。一方、第8次調査で見つかっているのは井堰であり、単純な灌漑であろう。また、丘陵末端の南から南東に水路をとる水路は地山を人工的に掘って作られた水路と判断された。この井堰の水源であったと判断される。ただし、水田そのものについては、畦畔や水路などが無いから、じかに水田面にまいたものと判断するよりないが、第5集では花粉分析などの結果とあわせて検討を加えたい。さらに、北部九州での木製農具の出土例は、大分県安国寺、佐賀県土生、福岡県立屋敷、埴田地、鹿部山、下山門、板付、免、四箇、原新田、長崎県里田原などからの出土例が知られるが、量的にも多く、また質的にも鍔、又鍔、三本鍔、合わせ鍔、鋤などが出土した。

3. 弥生後期から古墳時代にかけての農具以外の木製品も、臼、杵、槽などに材質を選ぶ経験的な知識が蓄積されていることが証明された。一方、非常に細かい細工が施されている事実は鉄製工具類の普及を想定しないわけにはいかない。鉄製工具類については、古代火発掘4「稲作のはじまり」（講談社、75年刊）以後、福岡県では、新幹線、縦貫道などの遺跡から資料の増加が知られている。建築部材に使用された工具類と合わせてもう一度次回に考えて見たい。

4. 第8次調査で発見された井堰は、建築部材を転用して作られたものであった。この建築

用材は丘陵上の遺構との関連もある程度想定されるものである。また転用材は、鉄製工具によって加工されたものであって、建築技術の水準が従来考えられていたものより高いものであることが知られた。また、ある程度のもさし的なものがあるようだが次の機会にゆずることにした。

5. 歴史時代の掘立柱の建築遺構は、その配置から、A2、A3種別より東南側のものが同一時期と考えられた。飛躍のしすぎではあるが、10世紀頃の早良郡野方郷の一隅で、城ノ原廃寺との関係がなにかのかたちであるものと思われる。官衙的というより荘園関係の建物と見ることは出来ないであろうか。出土遺物から言えば、墨書された須恵器の皿で破に転用されたもの、凹面碗の破片、緑釉の陶片、横帯、石椀、瓦などの品物にこれを感じる。

6. 出土した瓦類の多くは、斜ヶ補窯跡からのものである。この窯跡からは「警固」銘の瓦が出土している。「警固」銘の瓦については中山平次郎博士が1915年に考古学雑誌に福岡市拾六町与（湯か）納で発見した資料を報告されて以後、高野孤鹿氏によってこの窯跡がつきとめられた。「警固」は、文字どおり鴻臚館に併置された警固所設置にともなうのものであろう。貞観11年（869年）に那ノ津が海賊におそわれたため貞観12年（870年）に設置を見たようだ。とすれば、「警固」銘の瓦をともなったE7土壇の一拵の土器は、この年代以降という位置に於かれる。報文中では、10世紀としたがこれについては解説篇にゆずりたい。

以上、重要と思われる点についていくつかふれたが解説篇でこの欠を補いたい。

圖 版



湯納遺跡全景



陽明郡藤原温泉 第1次調査終了時点

(東側から)



湯村遺跡 第一次調査の状況

(東から)



1 十郎川の土堤から湯納遺跡を望む

(東から)



2 I区第1次調査のトレンチ設定状況

(西から)



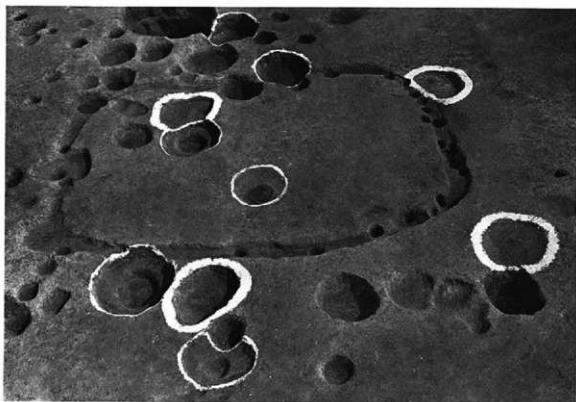
1 II-F 遺構の状況 (第1次調査)

(西北から)



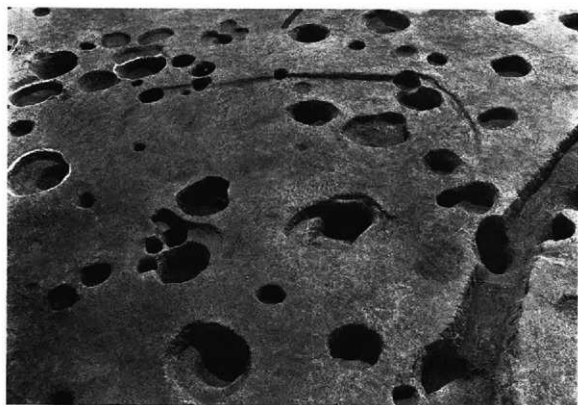
2 II-F 遺構の状況 (第1次調査)

(南東から)



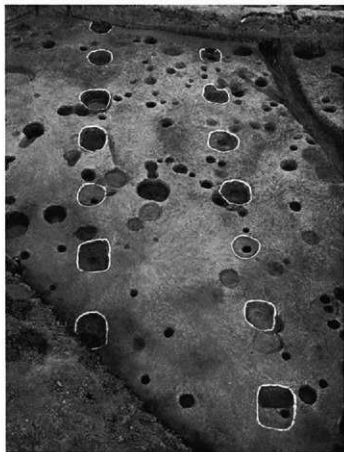
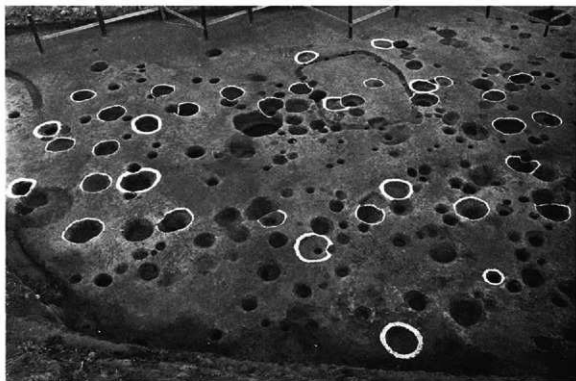
1 II-F C2 竪穴住居跡とB7建物 (第1次調査)

(西から)



2 II-F C3 竪穴住居跡 (第1次調査)

(西から)



右 II-F A2・A3 欄列 (第1次調査) (東北から)
 上 II-F A1 欄列・B4・B5・B6・B7 建物 (東北から)
 (第1次調査)



1 II-A D5 溝土師器の出土状況 (第1次調査)

(南東から)



2 II-A D5 溝土師器出土状況近接 (第1次調査)

(南東から)



1 II-A D5 溝検出状況 (第1次調査)

(東から)



2 II-A D5 溝出土遺物近接 (第1次調査)

(北から)



1 II-A D5 溝打欠きのある木材 (第1次調査)

(西から)



2 II-A D5 溝木製品の出土状況 (第1次調査)

(南から)



右 II-A D5溝と溝右岸の南・北ピット
(第1次調査)
下 II-A 北ピットの状況 (第1次調査)

(北から)





1 II-A 南ピットの検出状況 (第1次調査)

(南から)



2 II-A 南ピット近接, 左下に竹籠 (第1次調査)

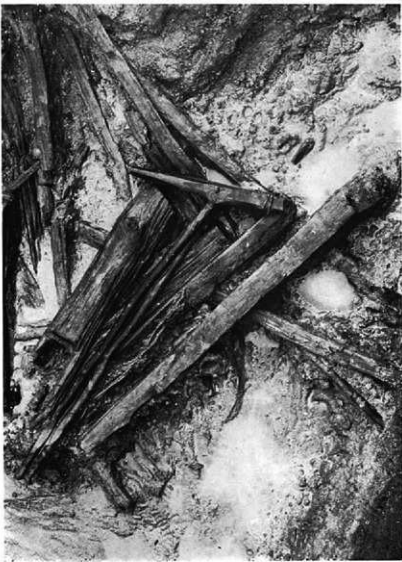
(南から)



上 I—Z 北半遺構の状況(第1次調査)

下 I—Z D5 溝出土の合わせ桧(第1次調査)

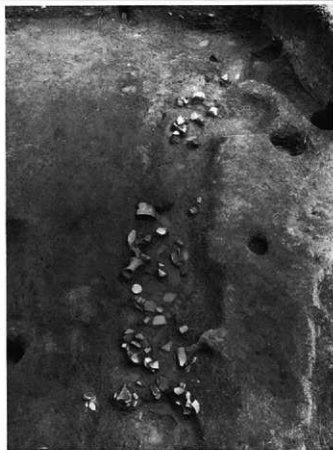
(南から)





右 II 区
上 II 区
第 3 次調査全景
第 2 次調査全景





右 II—H D9溝の弥生式土器の出土状況
(第2次調査)

上 II—G・H・I 第2次調査全景

(北から)
(東から)



右 Ⅱ—H B9建物(第2次調査)
上 Ⅱ—G 遺構の検出状況(第2次調査)

(東から)
(南から)



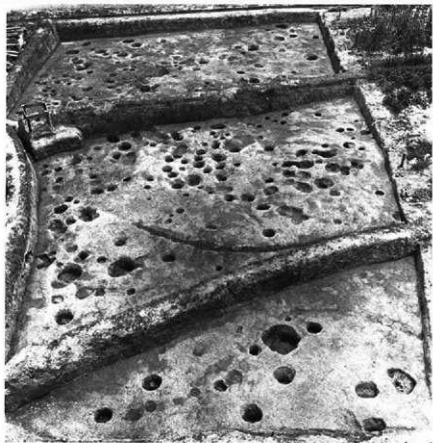
1 II-F・I E6土壙遺物の出土状況(第2次調査)

(北から)



2 II-F・I E6土壙とB8建物(第2次調査)

(北から)



右 II-D・E・F 遺構の状況(第3次調査)
上 II-B・C・D・E 遺構の状況(第3次調査)

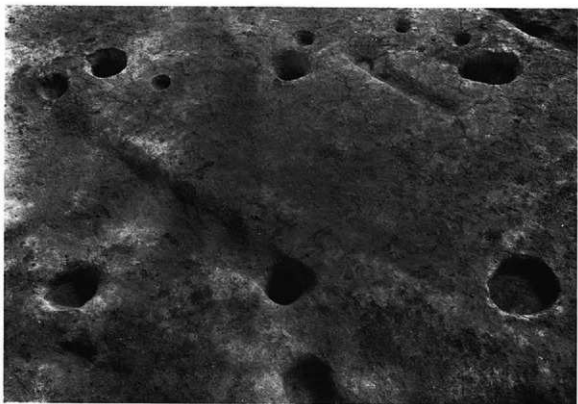
(西から)

(南東から)



1 II-B・C 遺構の状況 (第3次調査)

(西北から)



2 II-B B1建物 (第3次調査)

(東北から)



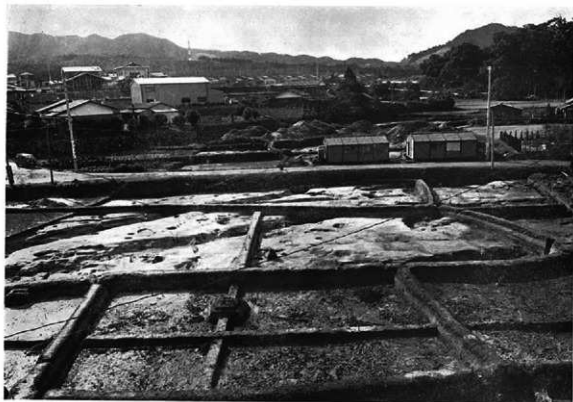
右 III-U 第6次調査全景(南東から)
上 II-B E3土塙全景(第3次調査)



(西南から)



I-X・Y・Z 第4次調査全景



1 I-X-Y-Z 第4次調査全景

(東から)



2 I-Y-Z D2・D5溝の状況(第4次調査)

(南東から)

右 I-Y D1 溝木質の出土状況 (第4次調査)
下 I-Y D1 溝木製鋤の出土状況 (第4次調査)

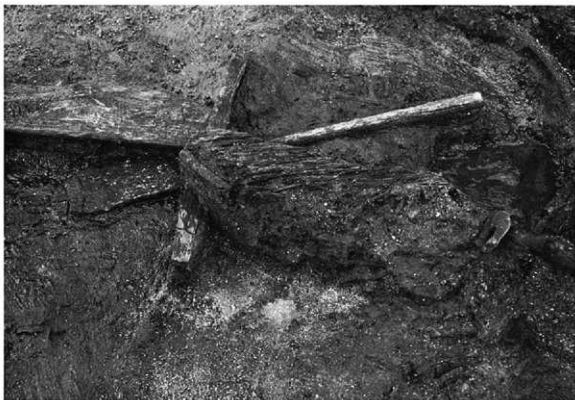
(南から)
(西から)





1 I-Y D1溝より三本鉄の出土状況(第4次調査)

(西から)



2 I-Y D1溝より銅の出土状況(第4次調査)

(西から)



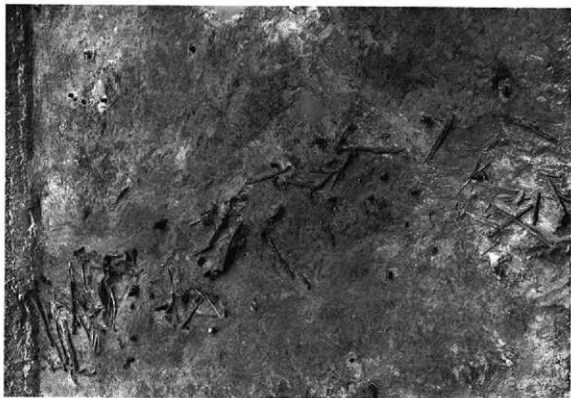
1 I-U-V-Y D I 階と杭列 (第4・5次調査)

(南から)



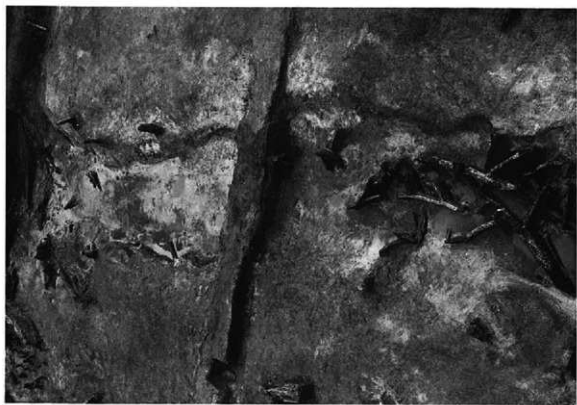
2 I-Y D I 階内より発見された竹をきした遺構 (第4次調査)

(南から)



1 I-X D₂ 溝の横出状況 (第4次調査)

(北から)



2 I-X D₂ 溝の木質の出土状況 (第4次調査)

(北から)



右 I-X D2 講出土建築部材 (第4次調査)
下 I-X D2 左岸出土木製平織 (第4次調査)

(東から)
(北から)





右 I—Y D2 溝木質の出土状況 (第4次調査) (南から)
 上 I—Y・Z D2・D4・D5・D6 溝の検出状況 (第4次調査)
 (東南から)



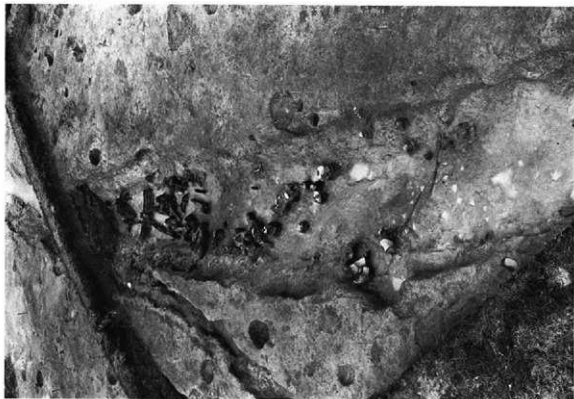
1 I-Y D5 溝の検出状況 1 (第 4 次調査)

(南東から)



2 I-Y D5 溝の検出状況 2 (第 4 次調査)

(南東から)



1 I-Y D5溝検出状況3 (第4次調査)

(南東から)



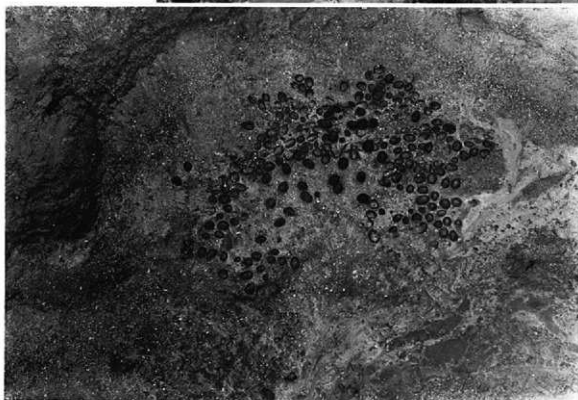
2 I-Y D5溝掘り上がり状況交差しているのは、D6溝 (第4次調査) (南東から)



右 I-X・Y XYトレンチ下層遺構(第4次調査)

下 I-Y H1ドングリの貯蔵穴(第4次調査)

(北から)





1 I-R・S・T・V・W 第5次発掘調査全景



2 I-R・S・T・V・W 第5次発掘調査全景

(南から)



1 I-U・V 杭列平面全景 (第5次調査)



2 I-U・V 杭列全景 (第5次調査)

(東から)



1 I-U-V 杭列の状況 (第5次調査)

(南から)



2 I-U-V 杭列近接 (第5次調査)

(南から)



右 I-T G9・G10 杭列 (第5次調査)
上 I-U・V G5・G6・G7 杭列 (第5次調査)

(南から)





1 I-V D1溝より槽の出土状況(第5次調査)

(東から)



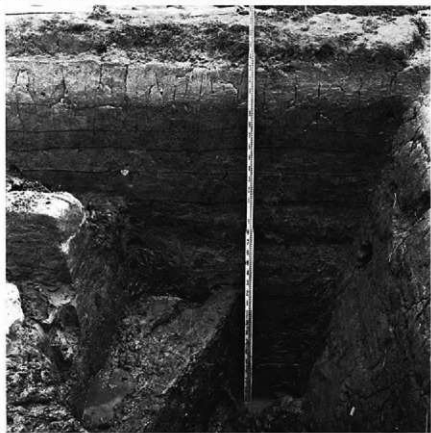
2 I-T E9土壇より木製椀の出土状況(第5次調査)

(北から)



右 I 区 土層の状況 (第7次調査)
上 I 区 土層調査のためのピットの状況 (第7次調査)

(北から
北から)



右 I 区 第4トレンチ発見の杭列(第7校調査)
下 I 区 杭列と木製二又蹴(第7次調査)

(東から)
(西から)





1 I区 第4トレンチ横断断面(第7次調査)

(東から)



2 I区 第4トレンチ横断断面(第7次調査)

(南から)



1 I区 建築部材の出土状況(第8次調査)

(東から)



2 I区 建築部材の出土状況(第8次調査)

(西北から)



1 I区 建築部材の出土状況(第8次調査)

(西北から)

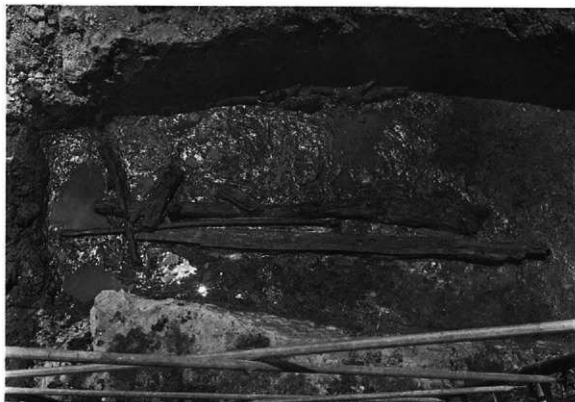


2 I区 建築部材近接(第8次調査)

(西北から)



1 I区 木製檣と106・102・270・089の建築部材出土状況(第8次調査) (北から)



2 I区 256・261・291の建築部材出土状況(第8次調査) (北から)



右 I 区 壁材と思われる植物遺体 (第 8 次調査)
上 I 区 014 臼と 013 梯子の出土状況 (第 8 次調査)



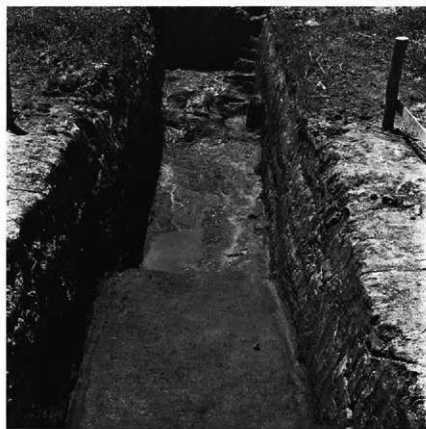
(南西から)



1 I区 058・070・053 建築部材と白の出土状況 (第8次調査) (西から)



2 I区 058 建築部材の出土状況 (第8次調査) (南から)



右 I 区 建築部材出土箇所確認トレンチ (第 8 次調査)
(北から)

上 I 区 建築部材とりあげ後の状況 (第 8 次調査)
(東から)



上段 I区 西拉張区での建築部材
の出土状況(第8次調査)
(北から)

右 I区 232・247・235・227など
の建築部材(第8次調査)
(西北から)

上 I区 232・247建築部材の部分
(第8次調査)

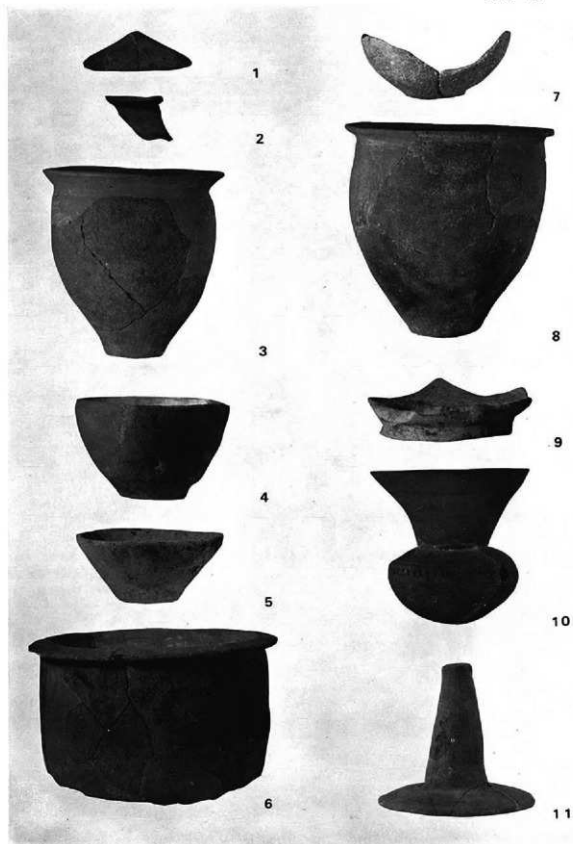


右 I 区 293 杭に調査された 267 材 (第 8 次調査)

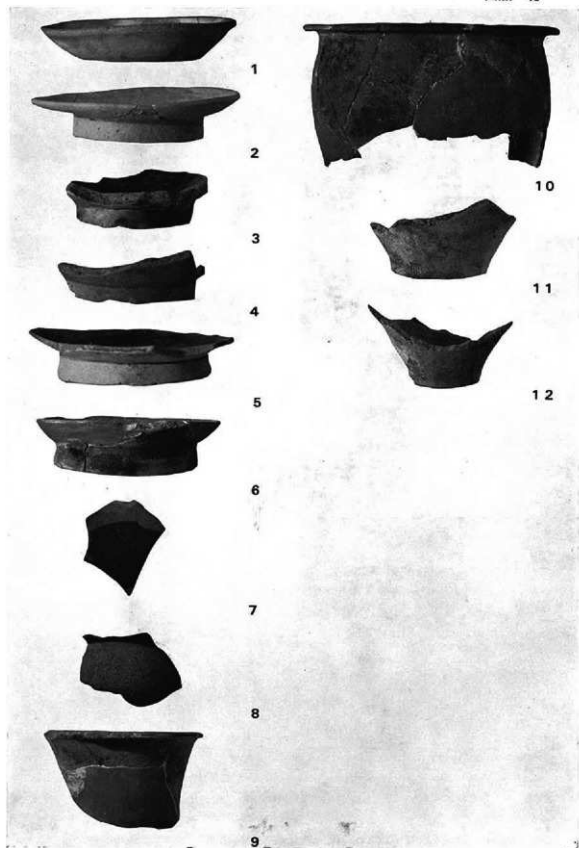
(南から)

上 I 区 293・294 杭に調査された 267 材 (第 8 次調査)

(南から)

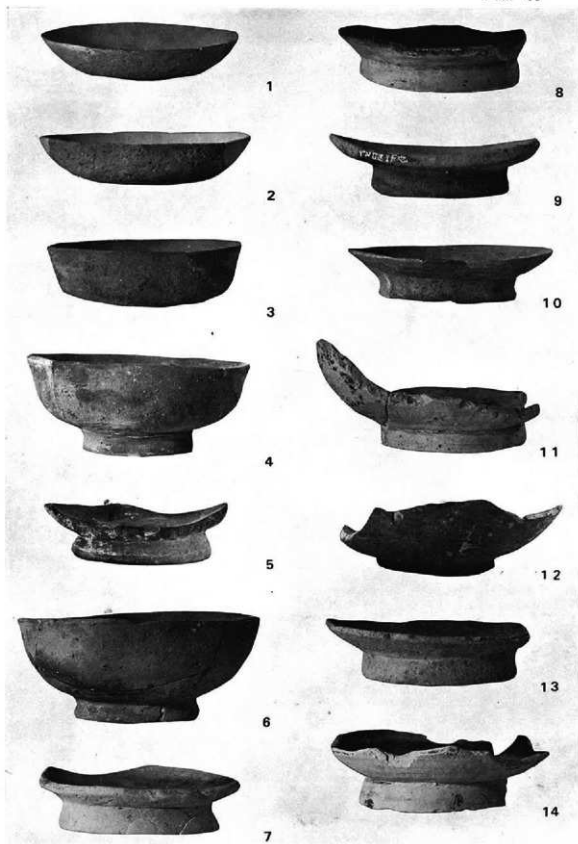


Ⅱ区出土の土器 弥生式土器1～8(1/4) 土師器11・須恵器10(1/3)



F 1 出土土器 1~7 (1/2)

E 6 土壇出土弥生式土器 (1/3)

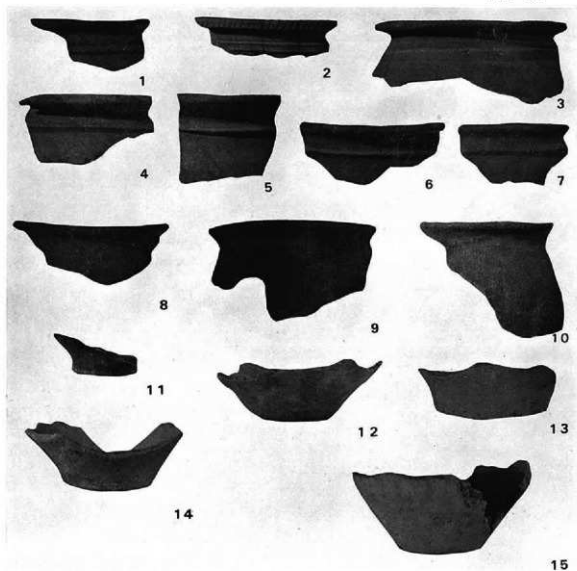


E 7 土城出土土器 (1/2)

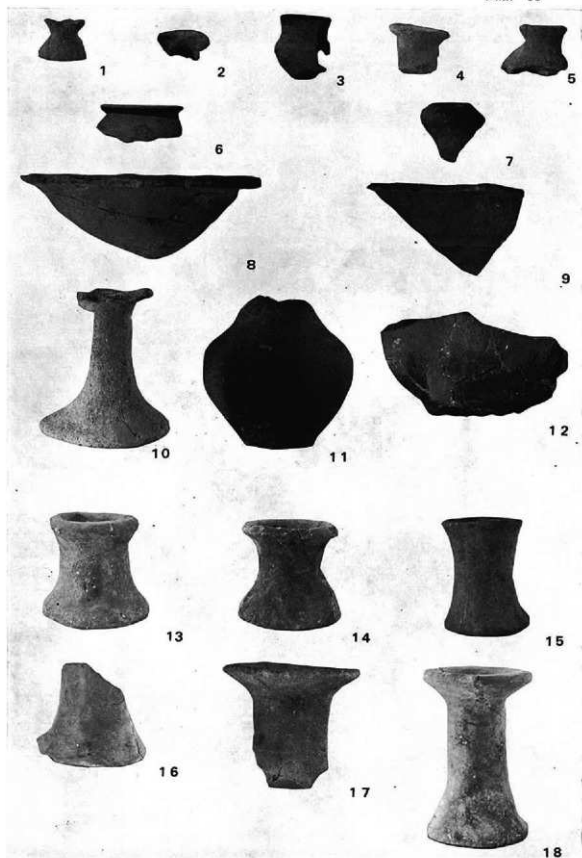


E 7 土城出土土器 1~5 (1/2)

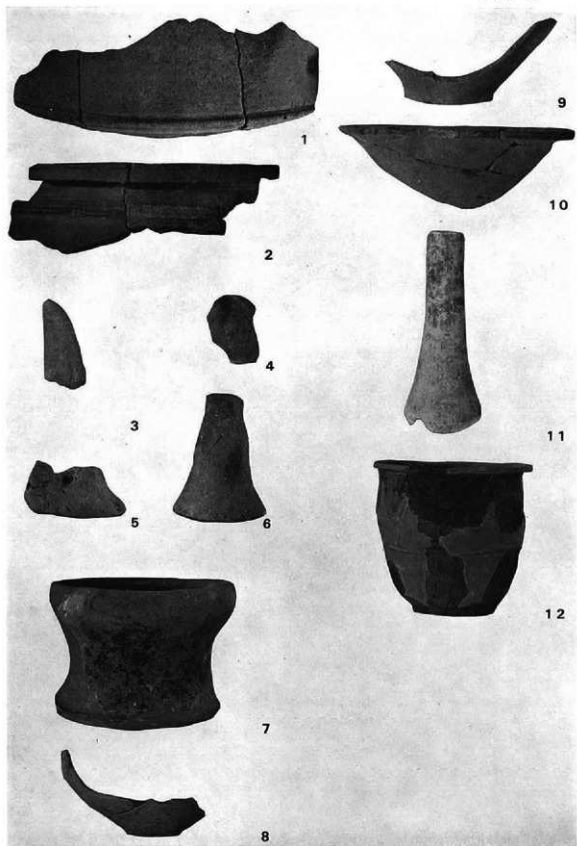
E 8 土城出土弥生式土器 8~13 (1/4)



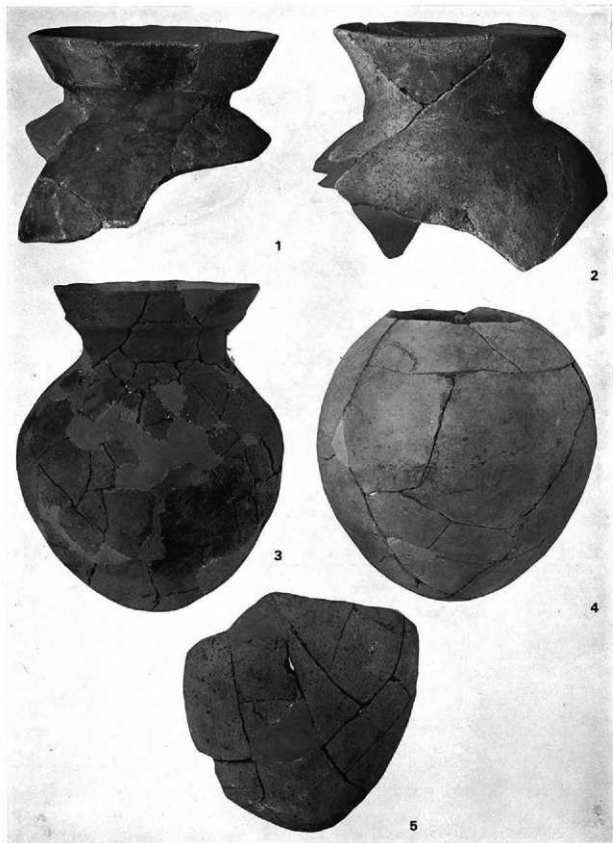
D 5 溝出土弥生式土器 (1/4)



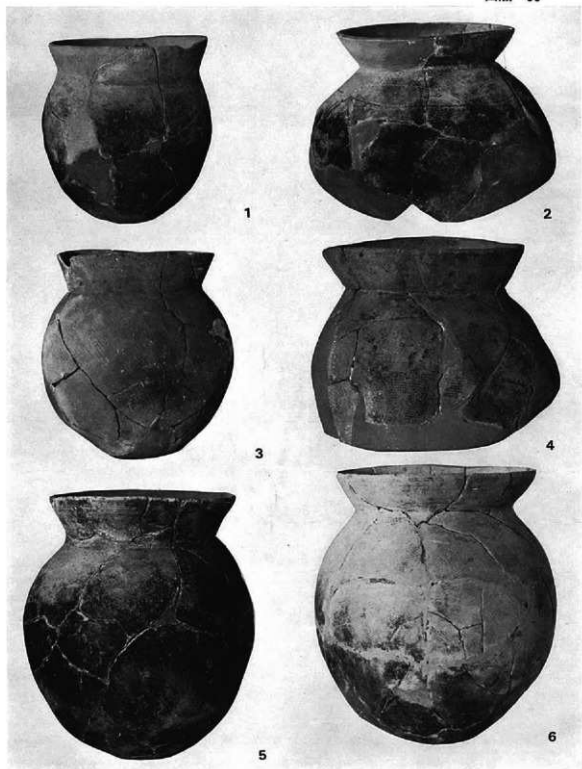
D 5 溝出土弥生式土器 (1/4)



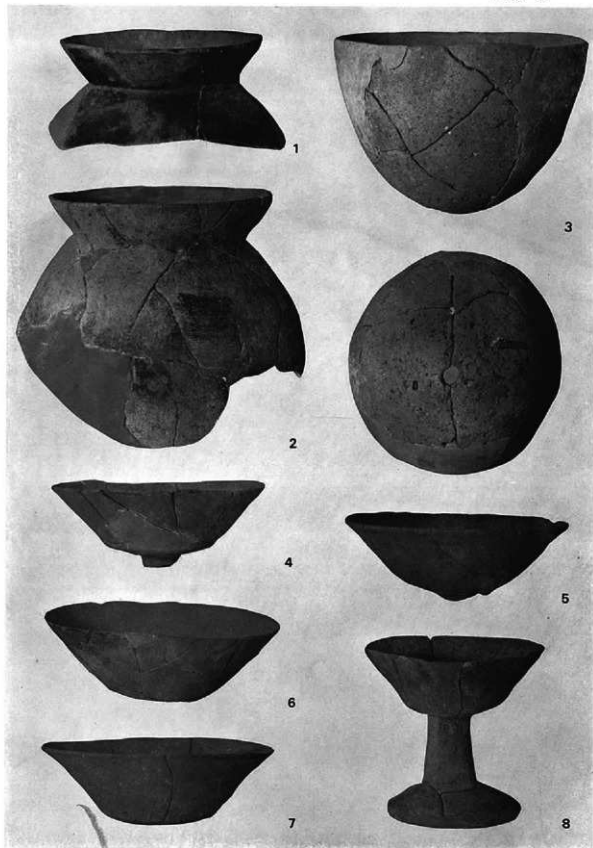
D 5 溝出土壺棺 1 (1/4)・甕棺 2 (1/4)・支脚 3~6 (1/4) E 6 溝出土弥生式土器 7~12(1/4)



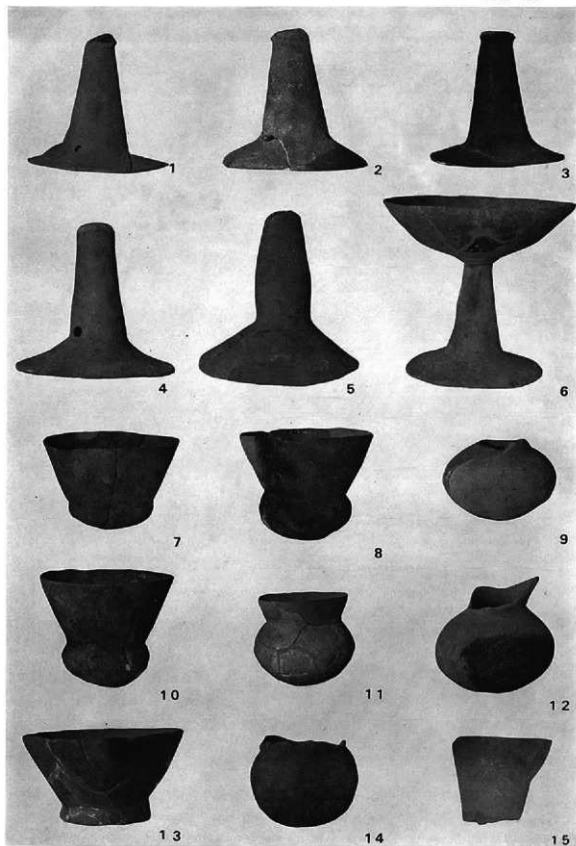
D 5 溝出土土師器その1 (1/3)



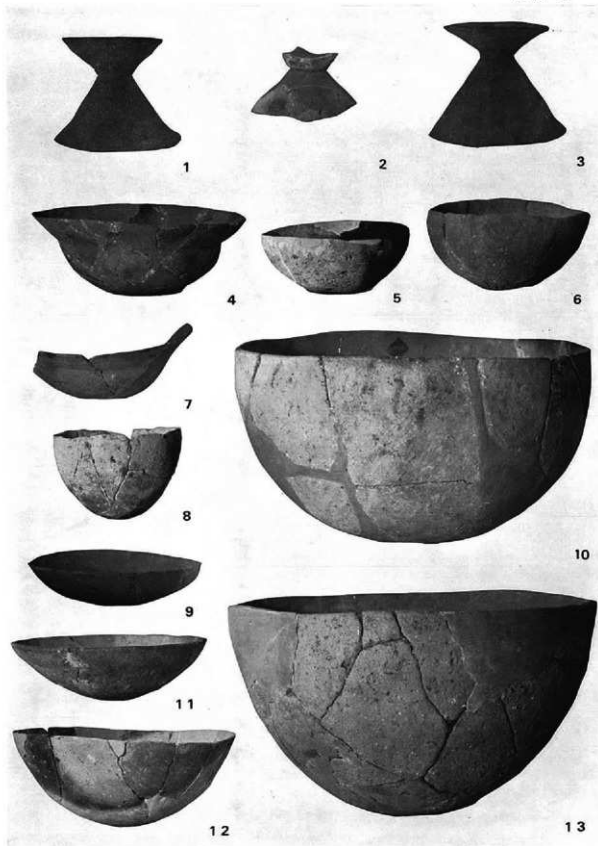
D 5 溝出土土師器その2 (1/3)



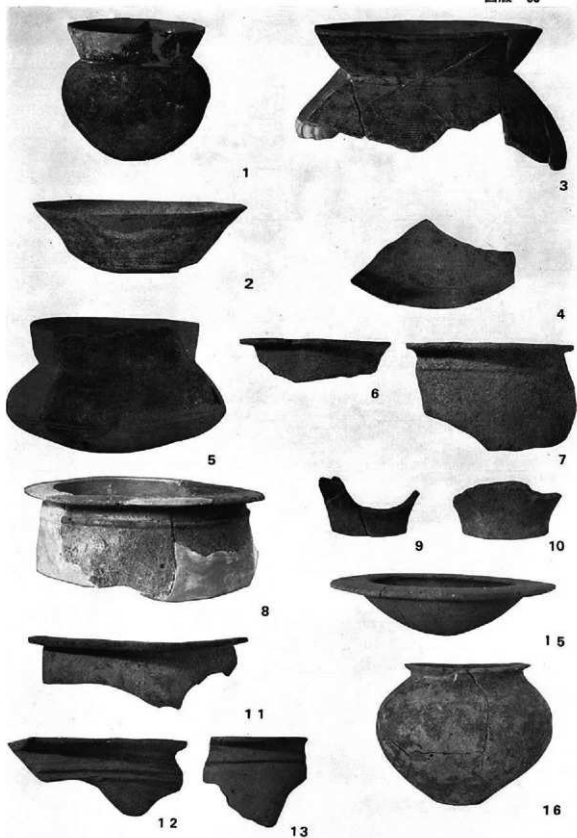
D5 溝出土土師器その3 (1/3)



D5 溝出土土師器その4 (1/3)

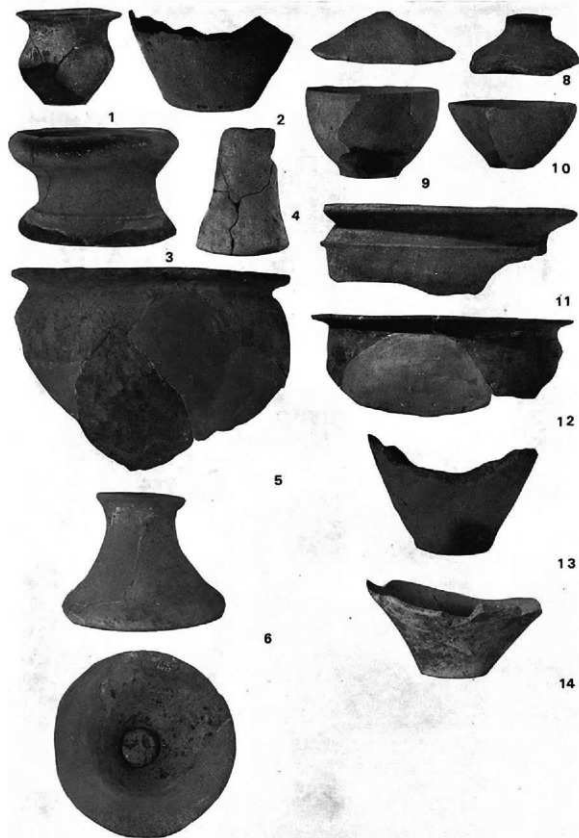


D 5 溝山土師器その5 (1/3)

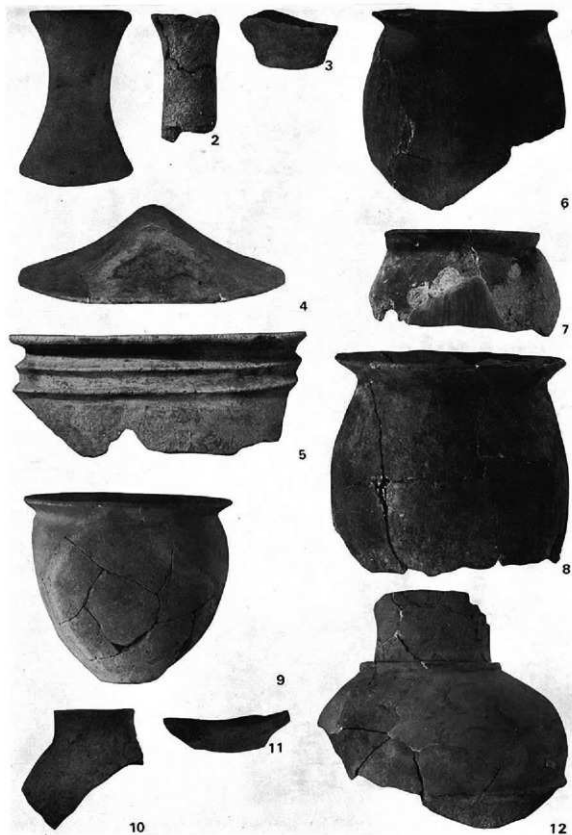


南北・ビット出土土師器1~3 (1/3)
E 3 土壇出土弥生式土器15・16 (1/4)

D 9 溝出土弥生式土器5~13 (1/4)

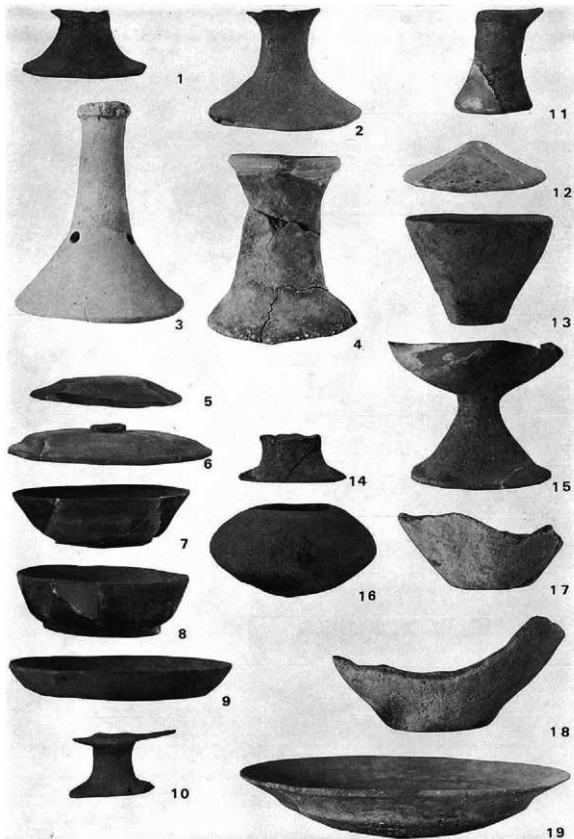


D 7 溝出土弥生式土器 1~6 (1/4) D 8 溝出土弥生式土器(1/4)

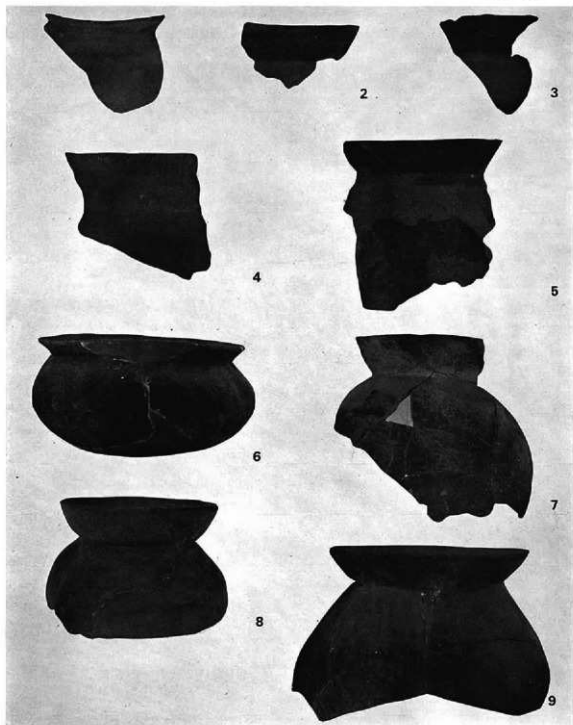


D 9 溝出土弥生式土器 1~5 (1/4)

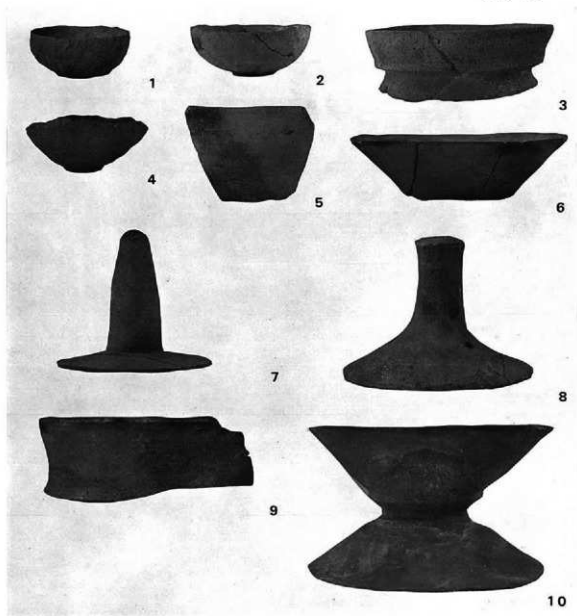
D11 溝出土弥生式土器 6~12 (1/4)



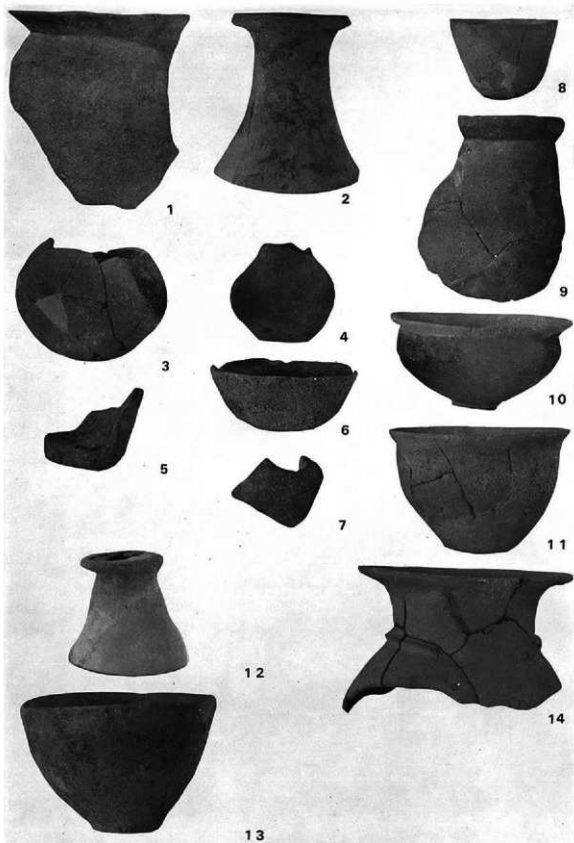
D11溝出土弥生式土器1~4 (1/4) 土師器・須恵器5~10 (1/3) D5溝出土弥生式土器11~19 (1/4)



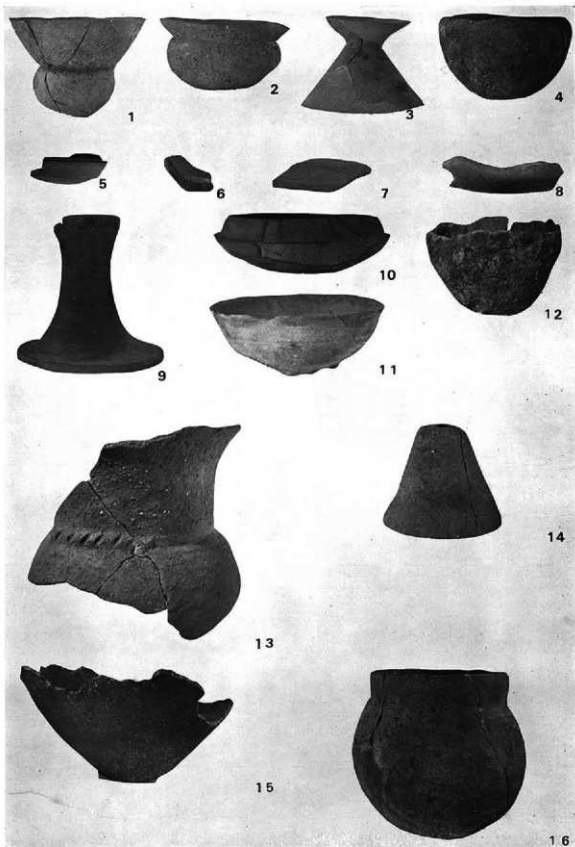
D11溝出土土師器その1 (1/3)



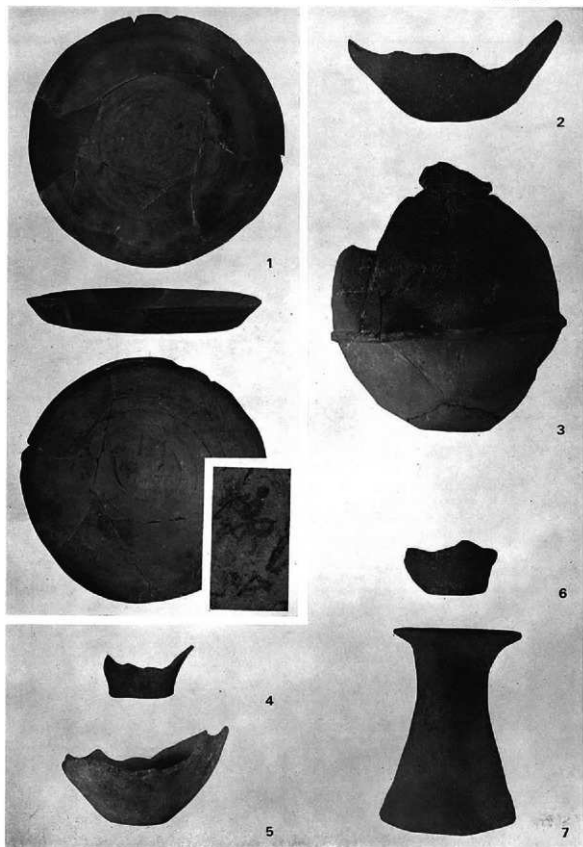
D11溝出土土師器その2 (1/3)



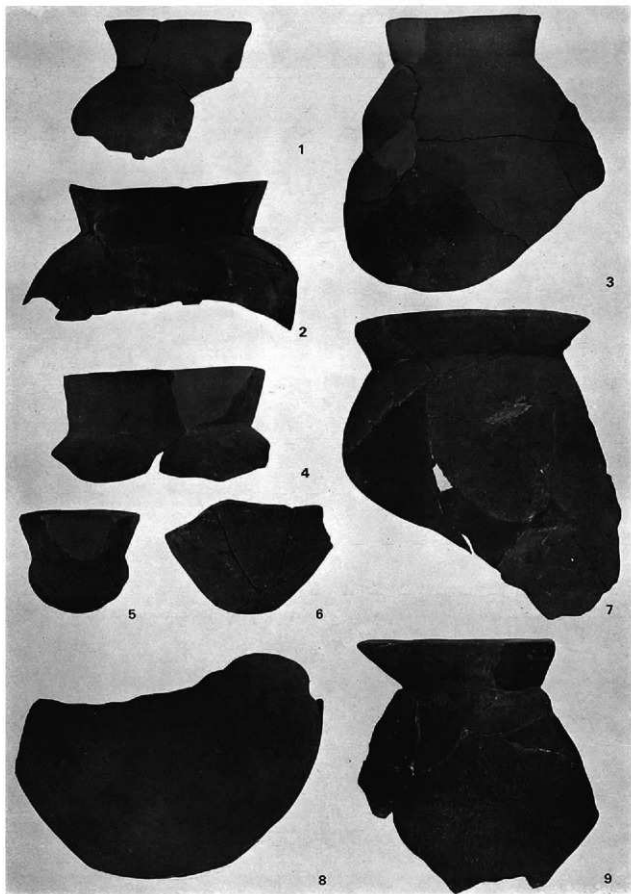
Y区 D5溝出土弥生式土器1~2(1/4) D5溝出土土師器3~7(1/3) D2溝出土弥生式土器12~14(1/4)

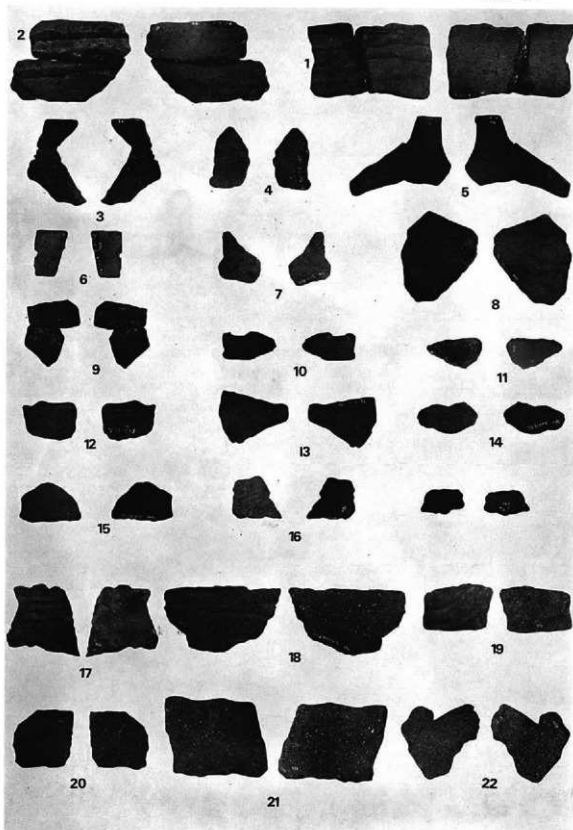


D 2 溝出土土師器・須恵器 1~12 (1/3) D 1 溝出土弥生式土器 13~15 (1/4)・土師器 16 (1/3)

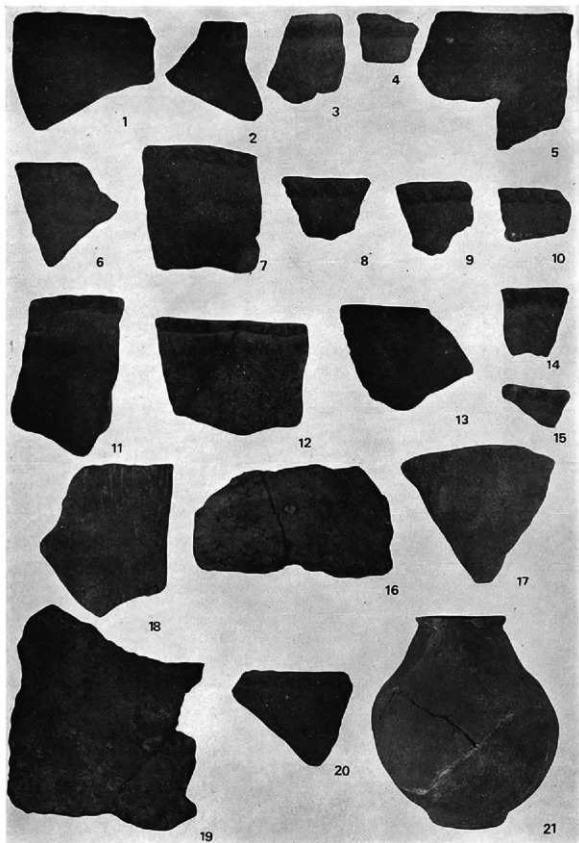


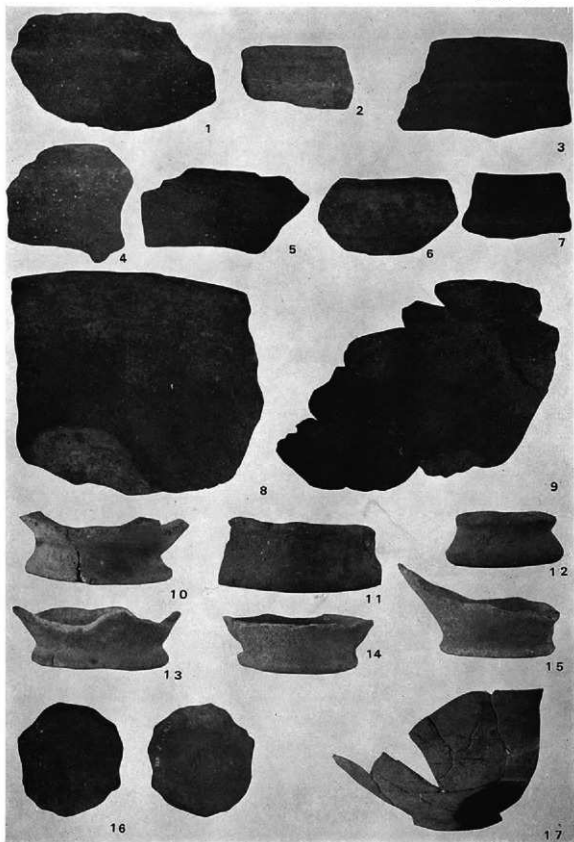
D10溝出土黒書土器1 (1/3) 第5次調査出土の弥生式土器2~7 (1/4)



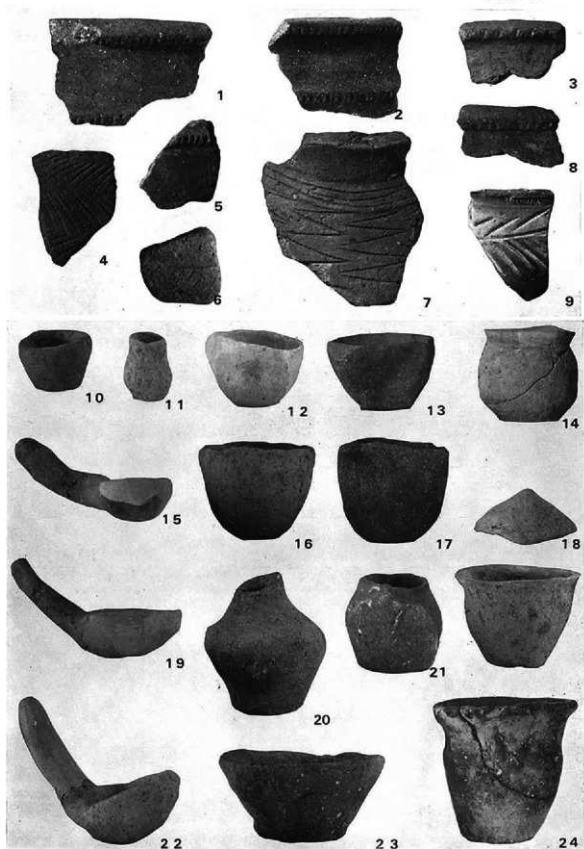


縄文式土器その1

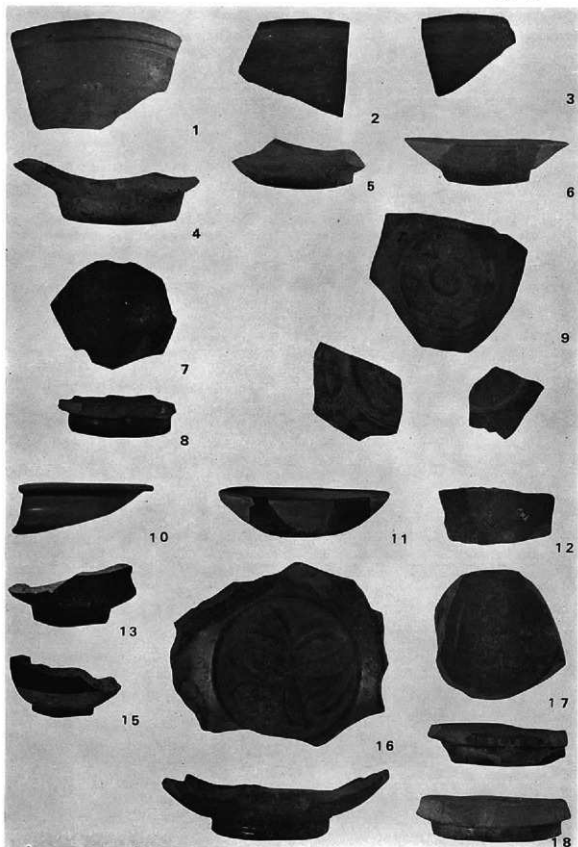




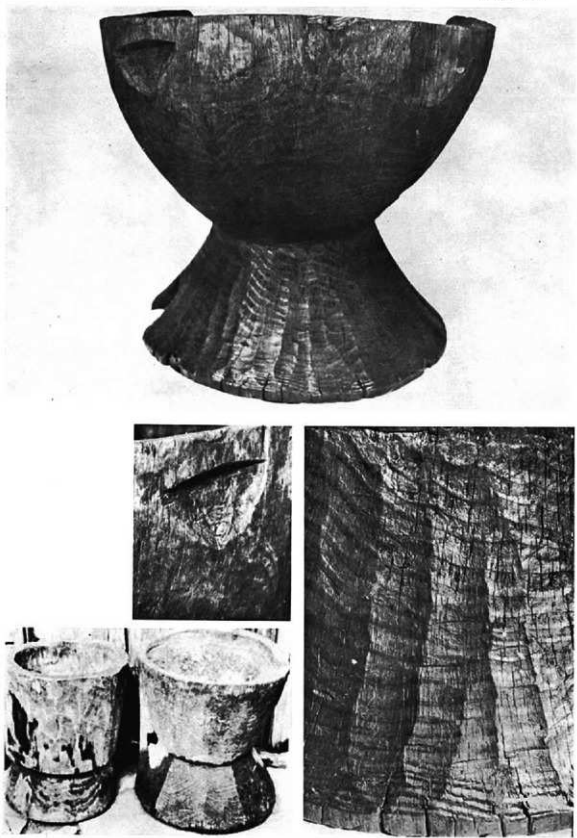
縄文式土器その3



弥生式土器片1~9 (1/2) ミニチュア土器11~24 (1/2)

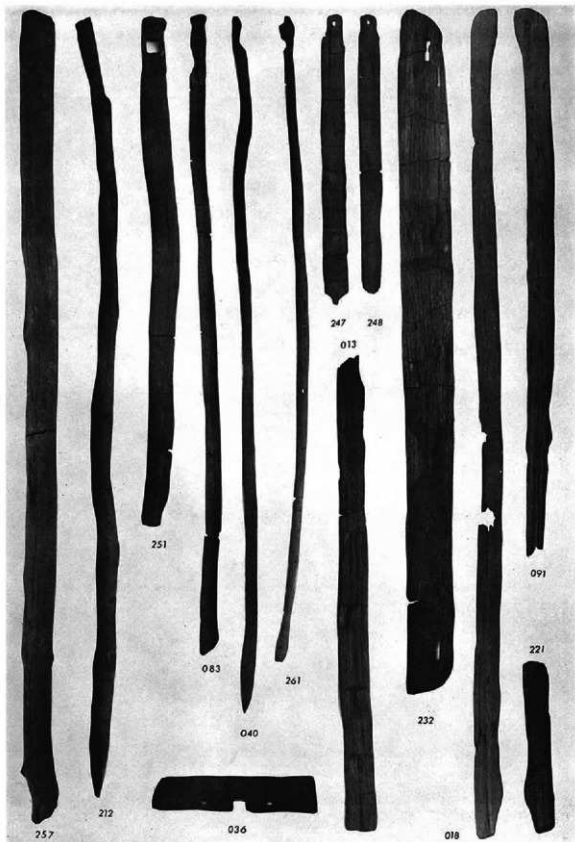


青磁・白磁類 (1/2)



4号 (220) 白とその部分と沖繩の民俗例





建築部材その2 (縮尺1/13)



089



232



036

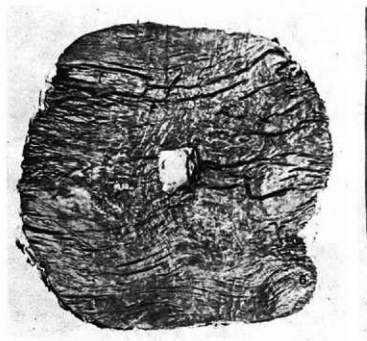


上下 058



下 003

下 001

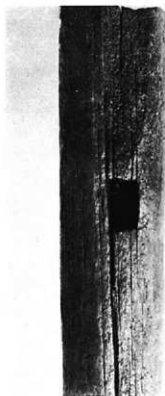


建築部材細部その1



5

7



015



2



3

左右 084

256



232



5

091

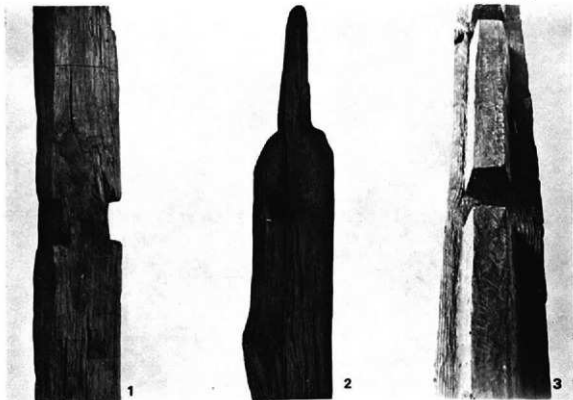


6

221



7



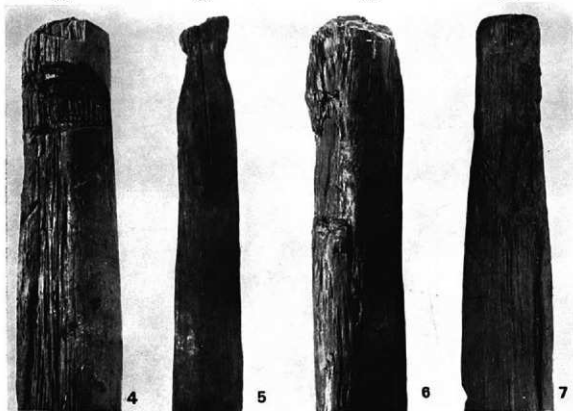
106
053

078

088

022

058
073

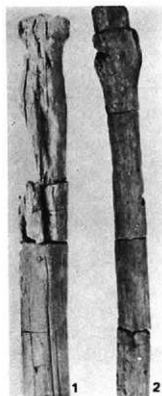


4

5

6

7

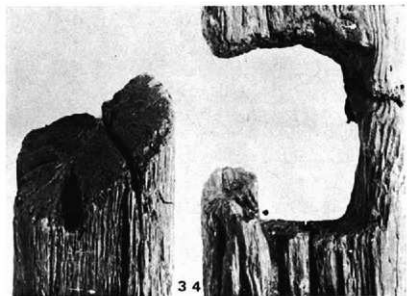


083

1

261

254



109

3 4

257

291



5

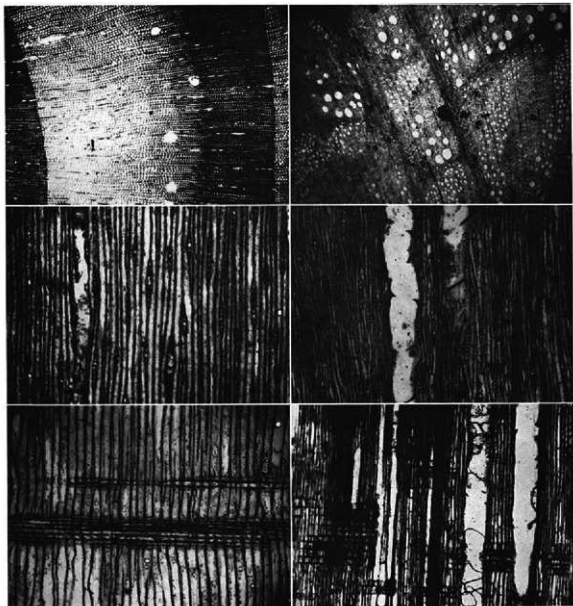


6



003

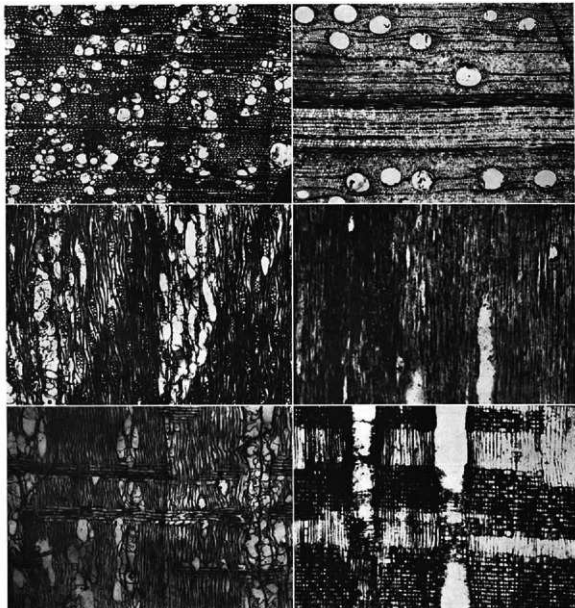
7



マツ属
Pinus spp.
 上 横断面
 中 接線断面
 下 半径断面

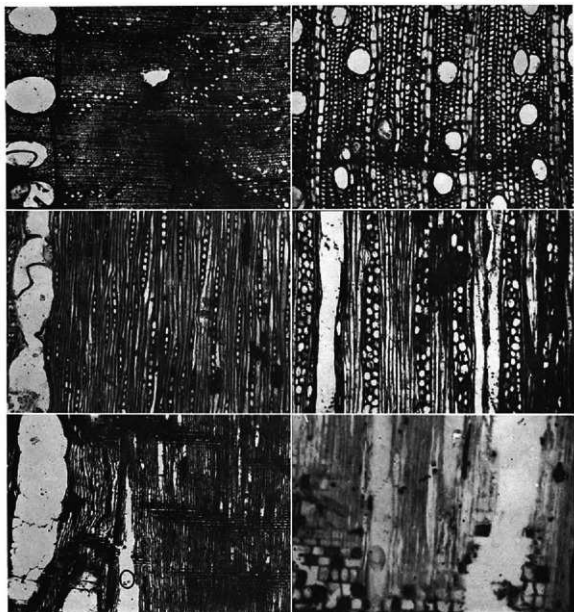
シイノキ属
Castanopsis spp.
 上 横断面
 中 接線断面
 下 半径断面

木材断面顕微鏡写真その1



クスノキ
Cinnamoum Camphora
 上 横断面
 中 接線断面
 下 半径断面

シラカシ
Ouescus myrsinaefolia
 上 横断面
 中 接線断面
 下 半径断面



クワ
Castanea crenata
 上 横断面
 中 接線断面
 下 半徑断面

ミズキ属
Cornus spp.
 上 横断面
 中 接線断面
 下 半徑断面



1



4



5



2



6



3



7



9



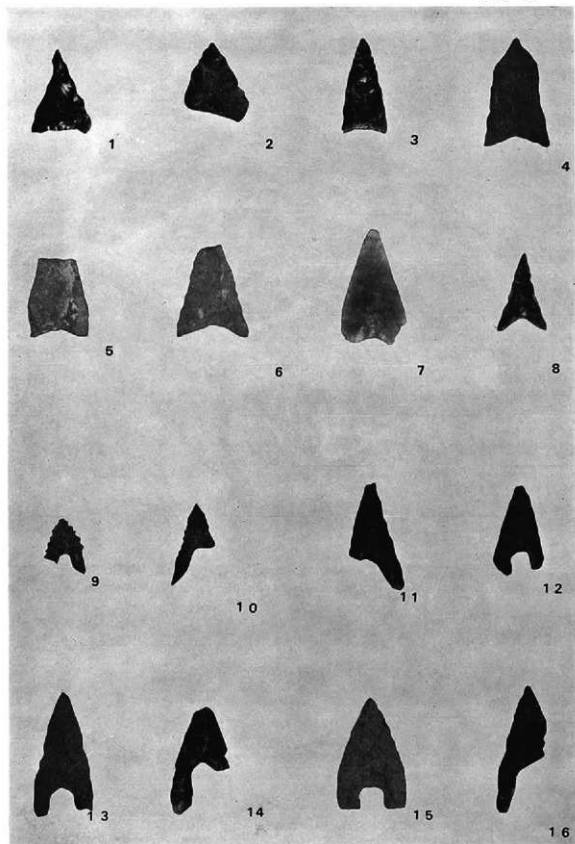
8



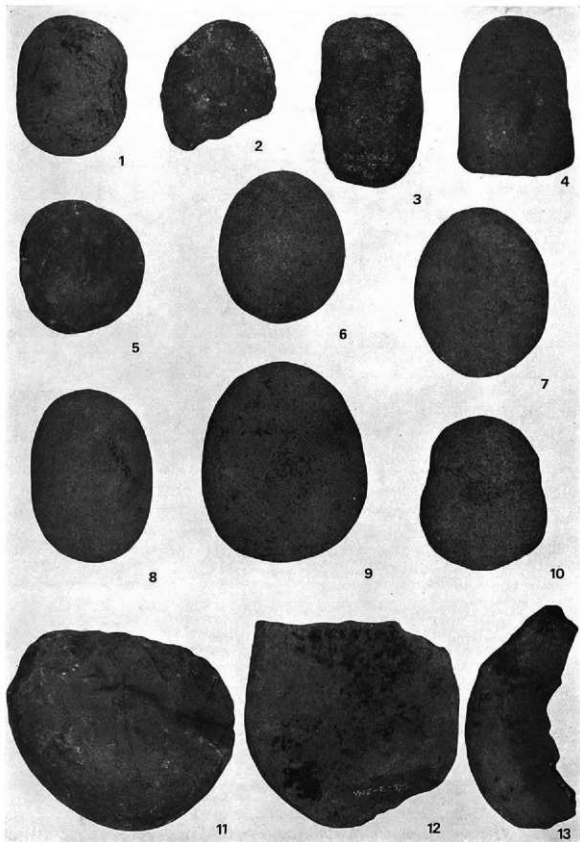
10



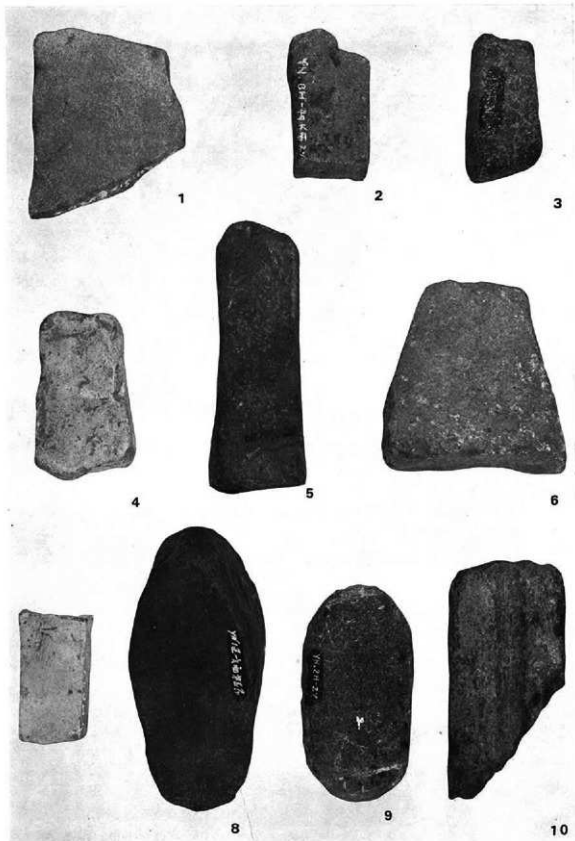
11



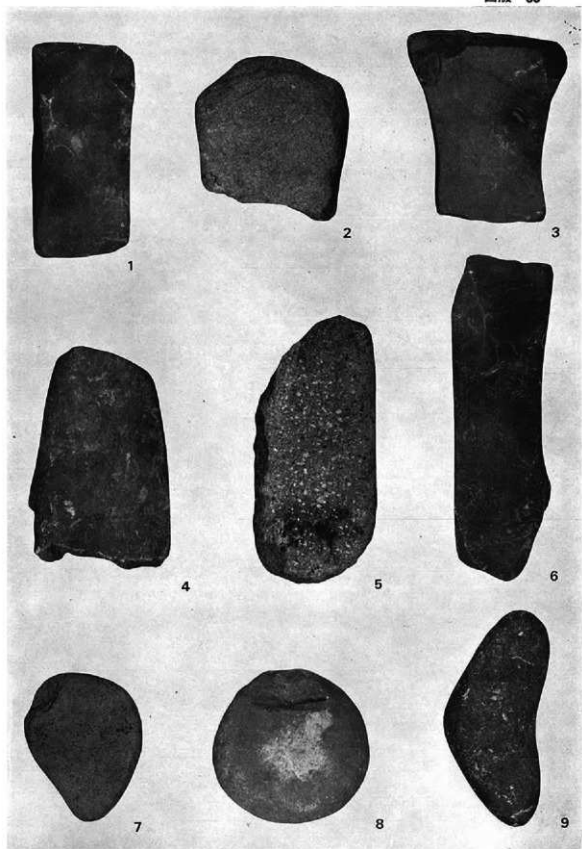
打製石鏃



ほみ石1~11 石皿12・13



砥石類



磁石・燧石類



1



2



3



4



5



6



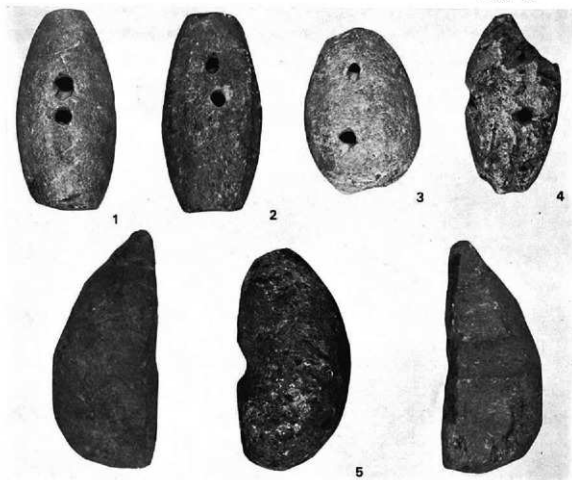
7



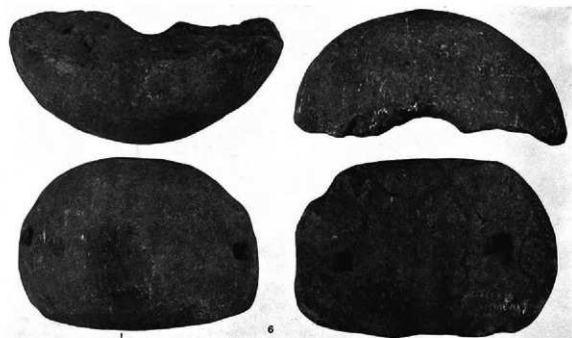
8



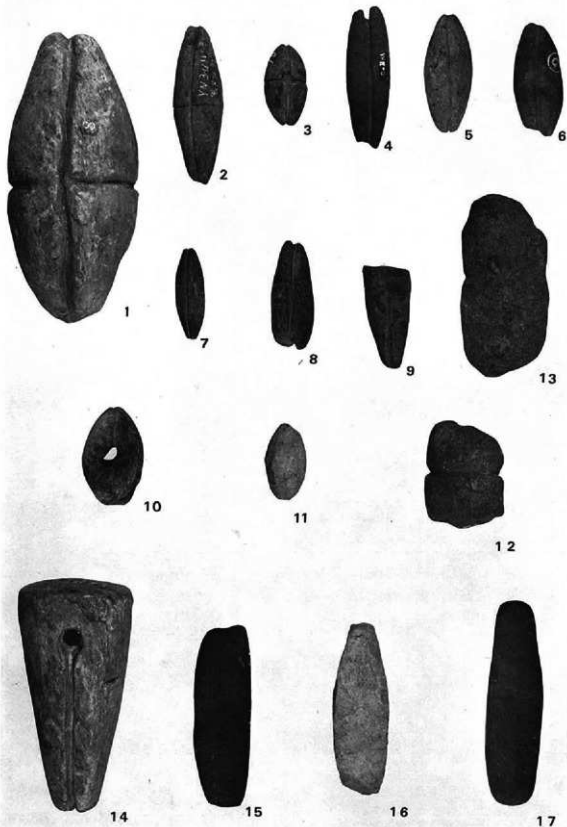
9



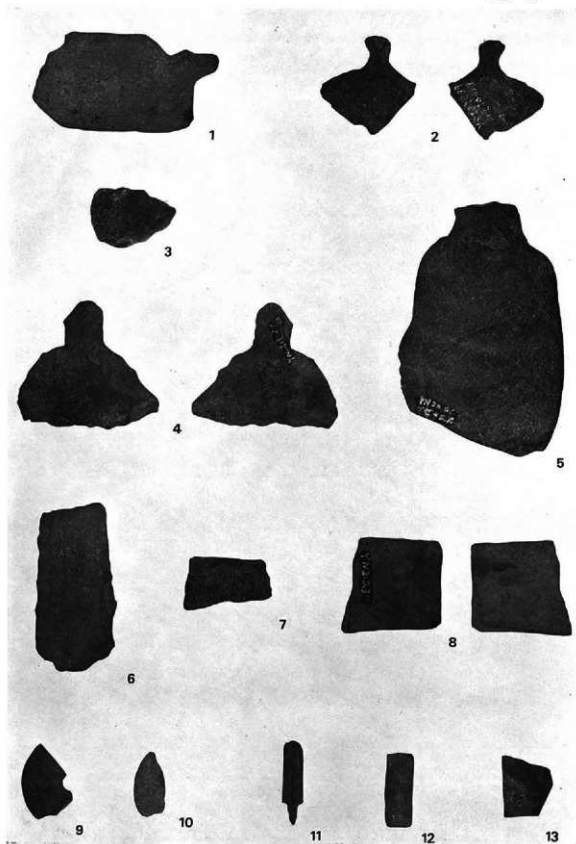
1 石錘その2



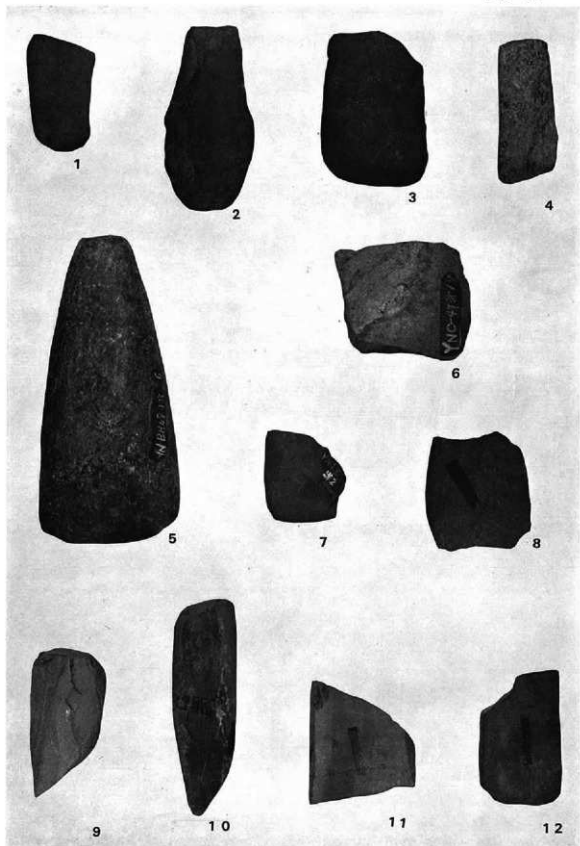
2 半球形有孔滑石製石



石鏝その3



石匙・磨製石器類



磨製石斧類



1



2



3



5



6



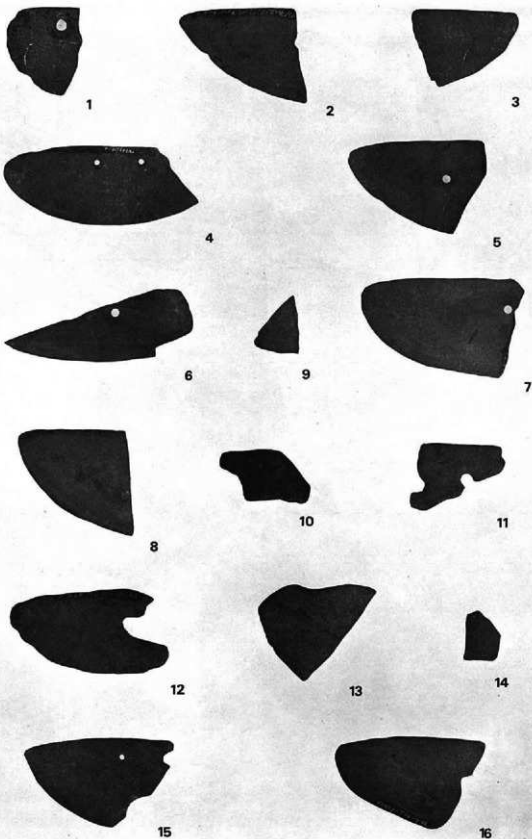
7



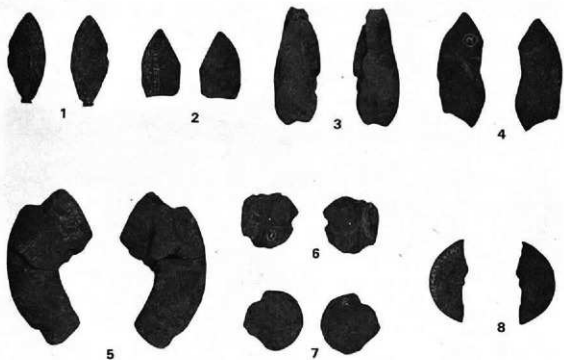
8



9



石磨丁



1 滑石製模造品



9



10



11

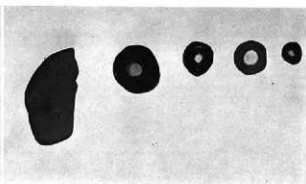


12

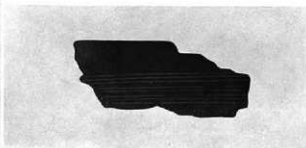
2 石鎗



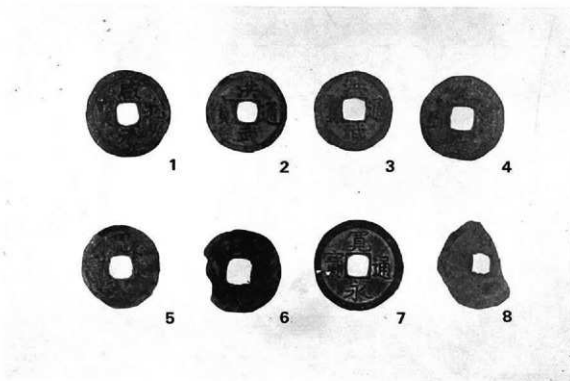
1 青銅製鏃先 (縮尺1/1)



2 玉類 (縮尺2.5/1)



3 漆器片 (縮尺1/1)



4 錢貨

— 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告— 第4集 —

昭和51年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区大字那珂142

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告

福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査

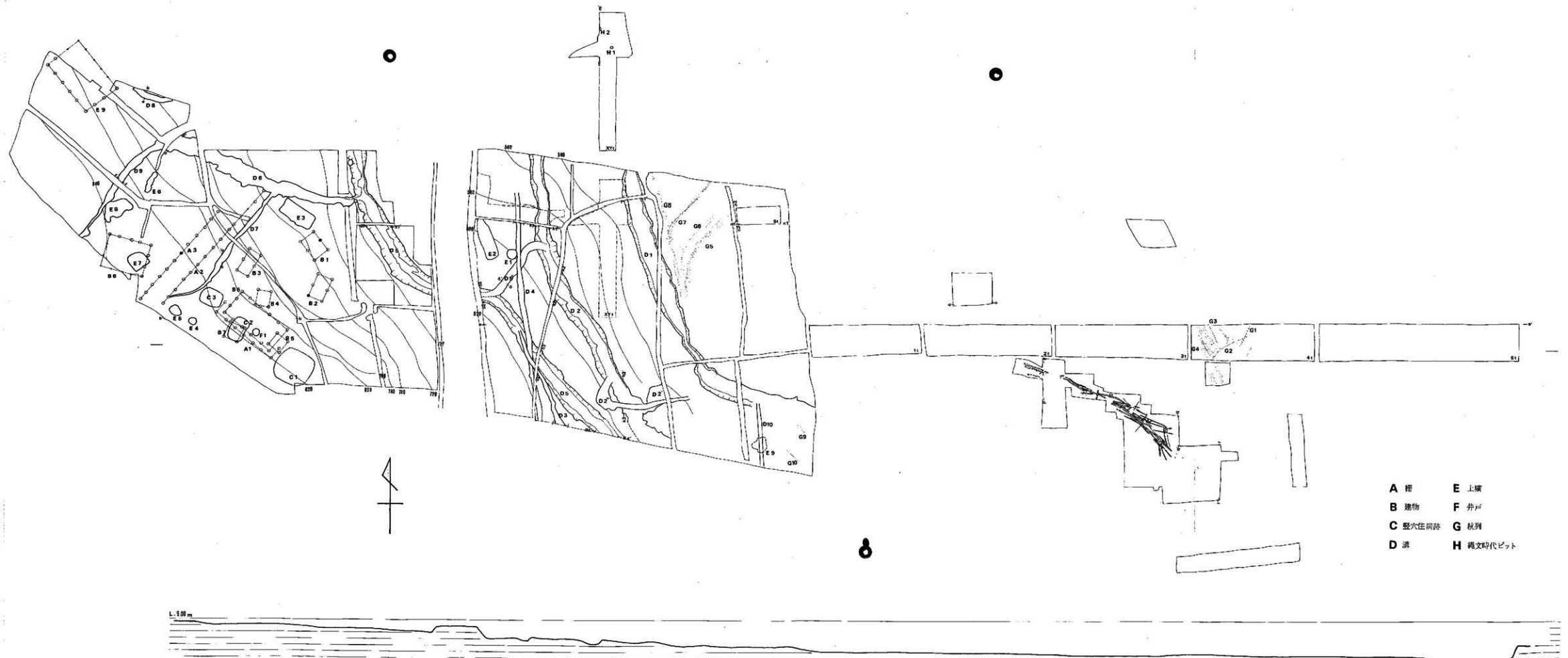
第 4 集

付 図

- 付図第1図 宮ノ前・湯納遺跡位置関係図
- 付図第2図 湯納遺跡遺構配置図
- 付図第3図 湯納遺跡第1区土層模式図
- 付図第4図 第5次調査U区杭列断面図
- 付図第5図 第7次調査第4トレンチ断面図
- 付図第6図 湯納遺跡第8次調査出土建築部材出土状況図
- 付図第7図 建築部材実測図その1
- 付図第8図 建築部材実測図その2

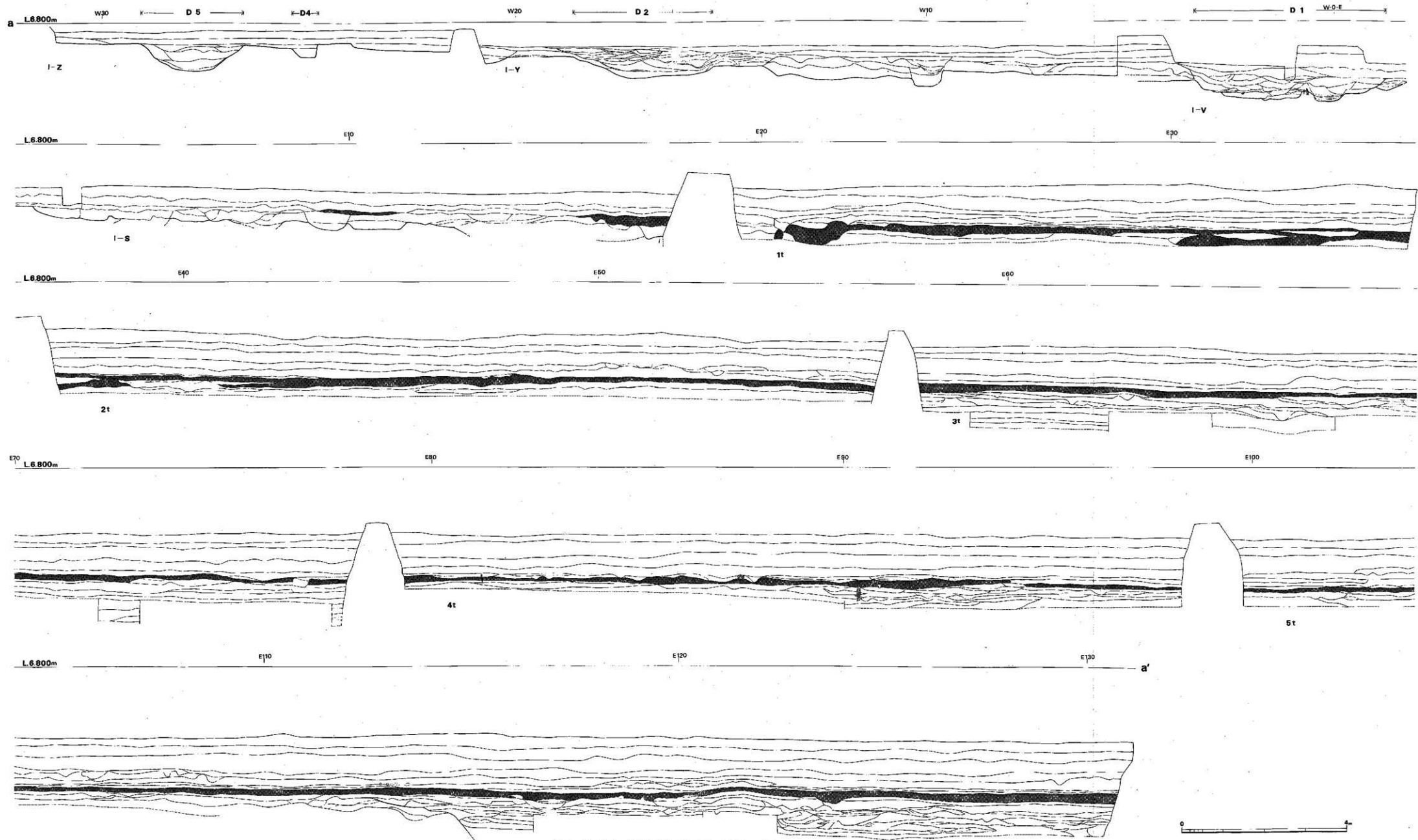


付図 第1図 宮ノ前・湯納遺跡位置関係図(縮尺 1/1000)

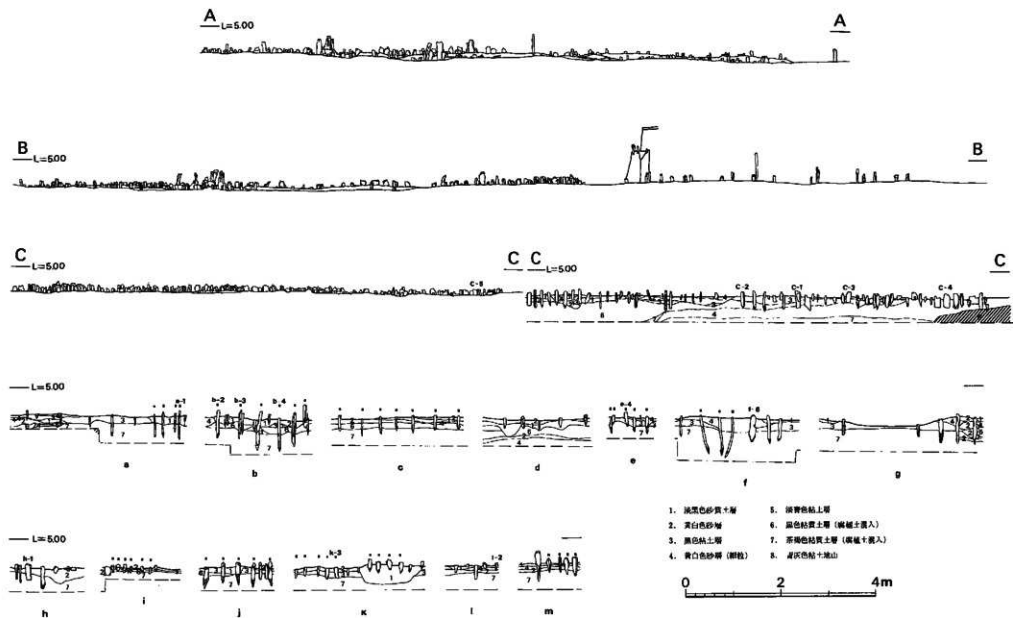


付図 第2図 湯納遺跡遺構配置図 (縮尺 1/400)
(区中のアキアベットの小さな文字は本文挿図の所属位置を示す)

0 20m

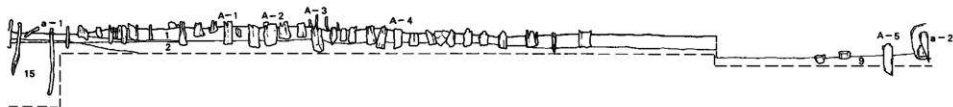


付圖 第 3 圖 滑納遺跡第 1 區土層模式圖 (縮尺 1/60)

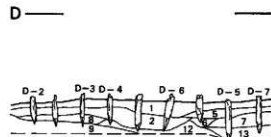
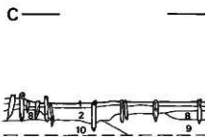
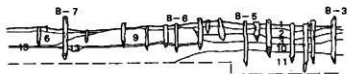


付图 第 4 图 第 5 次調查U区枕列断面图 (縮尺 1/80)

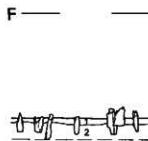
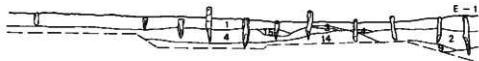
A — L = 5.00



B — L = 5.00

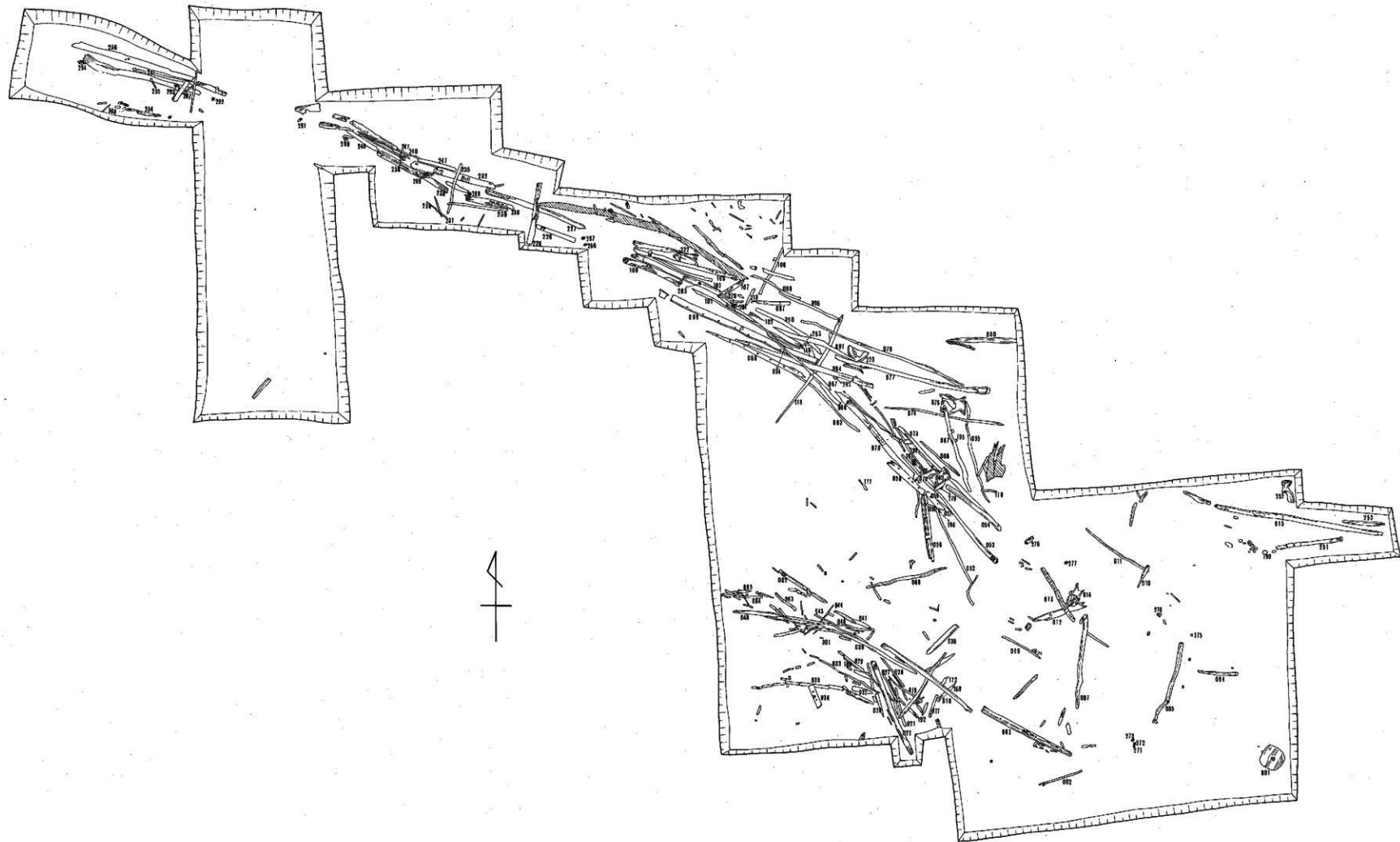


E — L = 5.00



1. 黑色粘質土層
2. 茶灰色粘質土
3. 茶灰色粘質土
4. 茶灰色粘質土(腐蝕土混入)
5. 暗紫色砂層
6. 暗紫色粘質土
7. 暗紫色粘質土
8. 灰色砂質土層 (粘土混り)
9. 暗灰色粘質土
10. 暗灰色粘質土
11. 灰青色粘質土
12. 灰青色粘質土
13. 茶褐色粘質土
14. 茶褐色粘質土 (砂混り)
15. 茶褐色粘質土

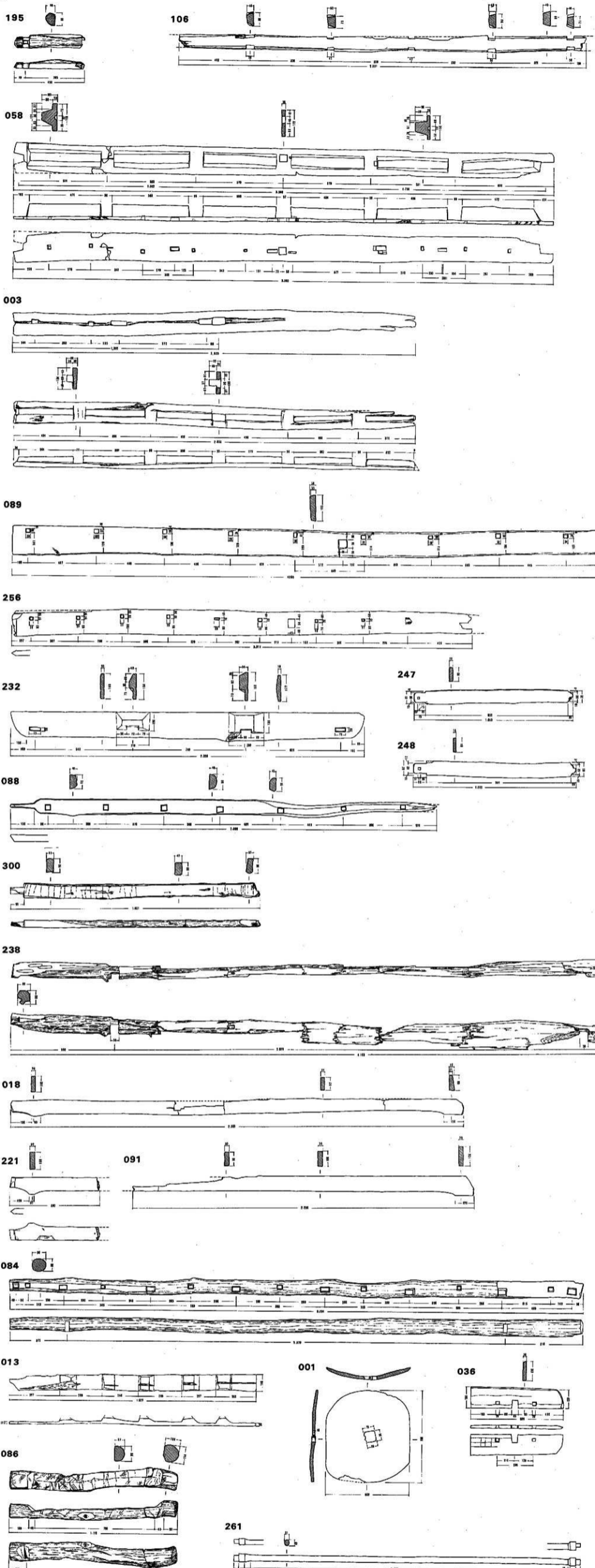
付図 第 5 圖 第 7 次調査第 4 トレンナ杭列断面図 (縮尺 1/40)



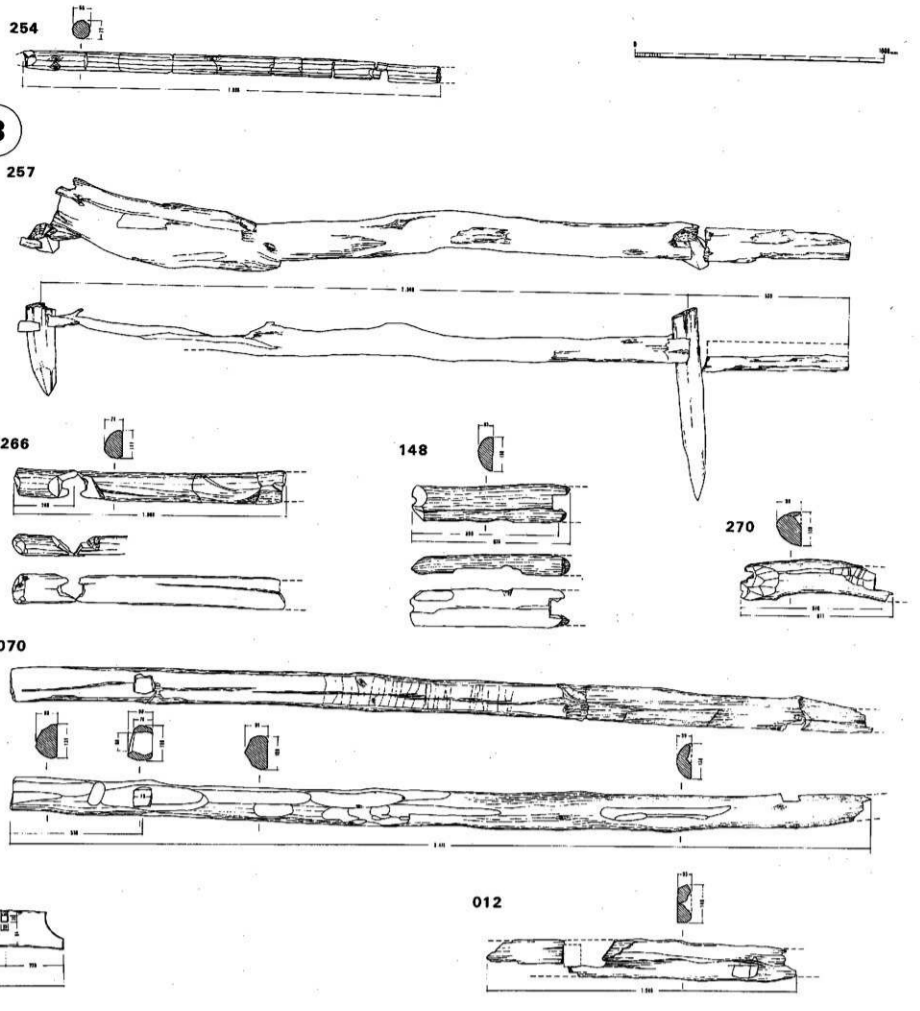
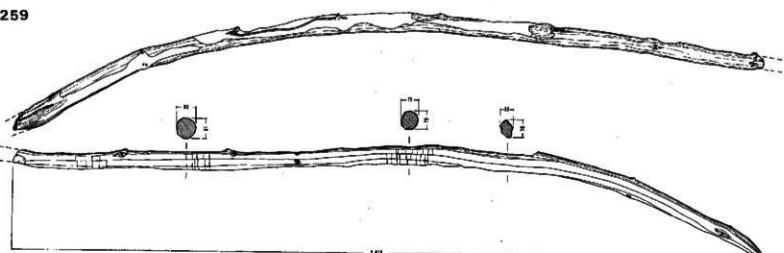
0 5m

付図 第 6 圖 漢代遺跡第 8 次調査建築部材出土状況圖 (縮尺 1/80)

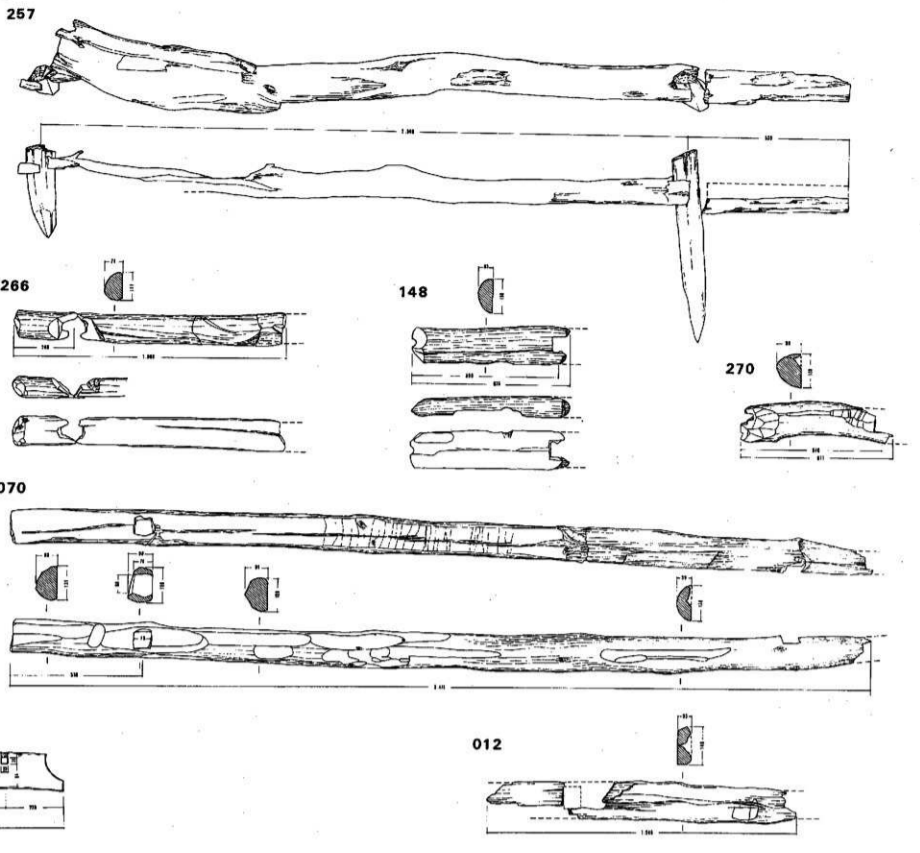
1



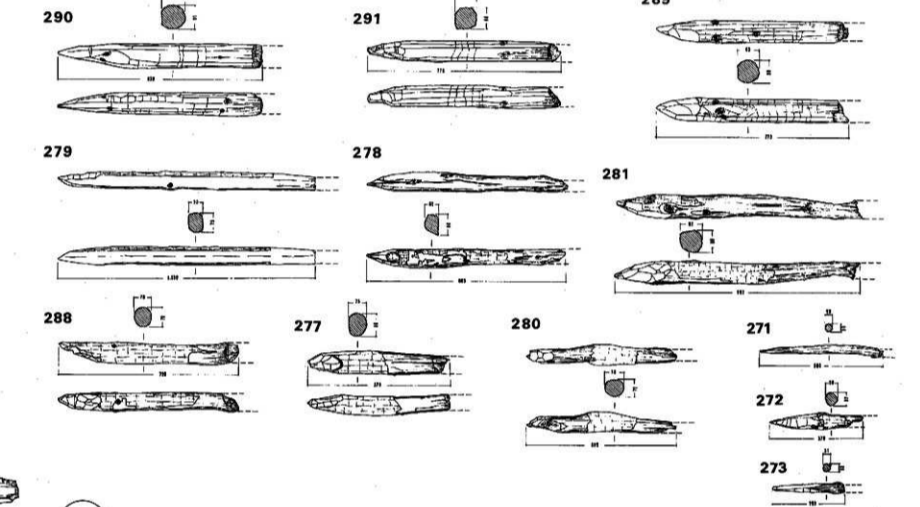
2



3



4



5



6

